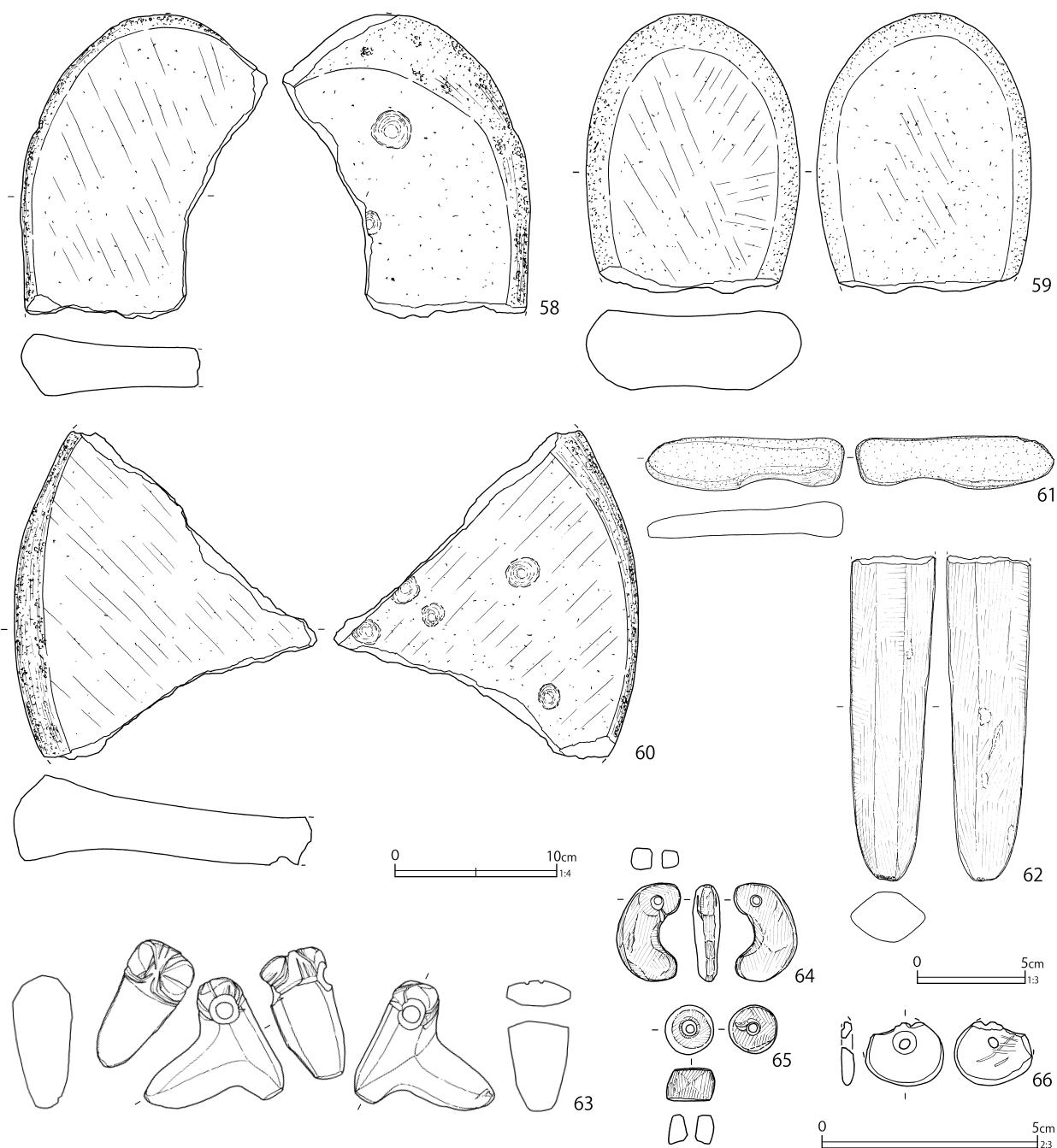


第131図 グリッド出土遺物(39)

47～52は磨石である。47と48は石礫形と呼ばれるものである。平坦面は使用により摩耗している。47は上下端部が使用により摩耗している。49も47と同様に周縁部を整形し、平面形は円形に作られる。周縁部も部分的に光沢が見られることから、使用痕跡と考えられる。50は円礫を整形せずに使用している。51と52も自然礫を整形せずに使用し

たもので、楕円礫を用いている。平坦面は使用により摩耗している。51の上下端部と52の周縁部は敲打で潰れ、敲石としても使用したと考えられる。51は右側縁部も使用により摩耗している。

53～57は凹石である。53と56は礫の形状を利用しておらず、平坦面すべてに摩耗と敲打による凹みが見られる。53の上下端部と56の下端部がそれぞ



第132図 グリッド出土遺物(40)

第27表 グリッド出土遺物観察表（2）(第128～130図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考・出土位置	図版
1	石鏃	チャート	2.1	1.5	0.4	0.8	VI層 P12G ②	75-1
2	石鏃	頁岩	2.1	1.6	0.3	0.7	V層 Q12G ④	75-2
3	石鏃	黒曜石	2.0	1.6	0.3	0.8	VI層 T14・15G	75-3
4	石鏃	チャート	2.0	1.5	0.3	0.8	U16G	75-4
5	石鏃	チャート	1.7	1.7	0.5	1.1	V層 Q12G №110	75-5
6	石鏃	チャート	2.5	1.5	0.6	1.5	VII層上 U11G	75-6
7	石鏃	チャート	2.2	1.9	0.5	1.6	VI層 T14・15G	75-7
8	石鏃	チャート	3.5	1.8	0.5	2.0	VII層上 R13G	75-8
9	石鏃	チャート	[3.1]	2.0	0.5	2.3	VI層 O11G ⑫	75-9
10	石鏃	チャート	2.8	2.0	0.7	2.9	Q11G №1010	75-10
11	石鏃	安山岩	[2.7]	1.2	0.5	1.3	Q12G №55	75-11
12	石鏃	チャート	[3.0]	1.6	0.4	1.8	V層 Q12G ⑯	75-12
13	石鏃	チャート	[3.1]	2.1	1.1	2.9	V層 Q13G ⑬	75-13
14	石鏃	黒曜石	2.7	2.1	0.9	3.4	V層 Q12G №124	75-14
15	石鏃	チャート	3.7	2.2	0.9	5.2	V層 Q12G ⑳	75-15
16	石錐	チャート	[4.2]	2.0	0.7	3.2	VI層 T14・15	75-16
17	石錐	黒色頁岩	[3.4]	2.5	0.6	3.3	S14G P31G	75-17
18	石錐	安山岩	3.1	0.9	0.5	1.5	VII層上 S14G	75-18
19	石錐	チャート	1.7	0.6	0.4	0.3	VI層 Q12G ③	75-19
20	搔・削器	珪質頁岩	4.8	2.0	1.9	10.5	V層 Q12G ②	75-20
21	搔・削器	チャート	[4.3]	4.6	1.8	23.2	V層 S15G	75-21
22	搔・削器	ホルンフェルス	3.9	4.4	1.0	19.9	VII層上 S14G №2	75-22
23	搔・削器	チャート	2.9	4.5	1.2	14.5	V層 Q11G ⑦	75-23
24	搔・削器	頁岩	[9.1]	3.5	2.1	37.7	V層 Q12G ⑬	75-24
25	搔・削器	ホルンフェルス	5.4	7.1	2.1	71.7	V層 V16G	75-25
26	磨製石斧	火成岩	15.1	7.5	3.7	612.8	V層 P12G №7	75-26
27	磨製石斧	火成岩	17.4	6.5	3.7	629.1	VI層 Q11G ⑪	75-27
28	磨製石斧	砂岩	5.2	3.9	1.0	27.0	VI層 T15G 局部磨製石斧	75-28
29	打製石斧	ホルンフェルス	7.6	4.3	2.0	71.7	V層 V16G	75-29
30	打製石斧	安山岩	7.0	3.7	1.5	42.0	V層 V16G	75-30
31	打製石斧	ホルンフェルス	7.8	4.3	2.2	74.4	V層 U15G	75-31
32	打製石斧	安山岩	10.0	5.2	1.3	76.8	VI層 P11G ②	75-32
33	打製石斧	黒色頁岩	10.7	6.6	2.6	167.3	V層 O11G №28 被熱	75-33
34	打製石斧	ホルンフェルス	[13.3]	8.5	4.1	525.0	V層 Q11G №54	75-34
35	礫器	砂岩	6.9	9.9	2.3	192.8	VI層 T14G ④	76-35
36	礫器	ホルンフェルス	6.8	10.3	2.5	172.4	VI層 O10G ⑯	76-36
37	礫器	チャート	6.5	13.8	3.7	435.3	VII層上 S14G №10	76-37
38	礫器	ホルンフェルス	7.6	8.6	2.7	212.1	O11G SK52	76-38
39	砥石	砂岩	[3.5]	[3.6]	1.3	18.8	V層 P11G ⑦ 被熱	76-39
40	石錐	安山岩	5.8	6.3	5.8	196.2	V層 S14G	76-40
41	石錐	安山岩	3.9	3.1	2.2	27.8	VI層 Q12G ⑭	76-41
42	石錐	砂岩	4.6	3.2	1.5	30.5	VIII層	76-42
43	スタンプ型石器	砂岩	[10.3]	8.8	5.7	648.2		76-43
44	スタンプ型石器	砂岩	11.7	9.1	6.0	645.7	V層 T15G	76-44
45	スタンプ型石器	安山岩	[6.9]	[5.9]	4.6	209.7	V層 V16G	76-45
46	敲石	泥岩	8.0	3.5	1.5	58.4	V層 Q11G №69	76-46

第28表 グリッド出土遺物観察表（3）（第131、132図）

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考・出土位置	図版
47	磨石	安山岩	7.7	5.7	3.1	229.0	V層 Q12G ⑩	76-47
48	磨石	安山岩	10.4	7.8	4.1	549.9	VI層 T14G ④	76-48
49	磨石	安山岩	6.6	6.1	4.6	283.4	V層 Q12G ⑩	76-49
50	磨石	砂岩？	7.8	7.7	5.4	388.7	VI層 T15G	76-50
51	磨石	砂岩	11.1	7.5	5.4	553.7	V層 P11G ⑭	76-51
52	磨石	安山岩	11.0	8.4	3.1	410.6	V層 V16G	76-52
53	凹石	安山岩	8.5	5.3	4.4	347.5	表採	76-53
54	凹石	安山岩	11.4	7.1	4.3	388.2	VI層 T14G	76-54
55	凹石	安山岩	9.6	8.4	4.8	463.6	V層 P11G №35	76-55
56	凹石	安山岩	8.5	5.1	4.6	246.3	表採	76-56
57	凹石	軽石	7.2	6.0	4.8	80.0	V層 ⑭	76-57
58	石皿	安山岩	[18.6]	[15.2]	4.4	1283.3	V層 Q12G ⑯ ⑰ №24	76-58
59	石皿	安山岩	[17.2]	13.1	5.4	1847.4	VI層上 Q13G	76-59
60	石皿	安山岩	[20.2]	[18.7]	5.5	1532.7	表採	76-60
61	石刀	泥岩	2.5	9.2	1.6	42.7	V層 P12G ⑮	76-61
62	石剣	緑泥片岩	[15.0]	3.9	2.4	215.8	縄文トレンチ3 Q11G	76-62
63	垂飾	不明	3.2	3.0	1.5	8.6	V層 P12G №6 被熱	76-63
64	垂飾	滑石	2.2	1.5	0.6	2.5	P12G №9	76-64
65	垂飾	滑石	1.1	1.1	0.8	1.5	VI層 P12G ㉙	76-65
66	垂飾	不明	[1.6]	[2.0]	0.3	1.5	SJ21	76-66

れ敲打で潰れ、敲石としても使用されたと考えられる。54は楕円礫を使用し、両側縁を敲打で潰して持ち手を作っている。55は周縁部を敲打で整形する。上下端部は敲打で潰れ、敲石としても使用されている。57は軽石質の円礫の中央に深い凹穴があいている。

58～60は石皿である。58は風化が進んでいるが、周縁部に整形の痕跡が見られる。59は大型の楕円礫を使用する。皿部はゆるやかに凹んでいる。下半部を欠損する。60は周縁部が敲打と研磨によって整形されている。皿部は表裏両面を用い、ゆるやかに凹んでいる。漏斗状の凹穴が数箇所見える。破片のため全体の大きさ、形状は不明である。

（6）石製品（第132図）

61は石刀である。小型の棒状礫の形状を利用し、敲打と研磨で整形している。刃部はほとんど整形されていないため、どちらの側縁にも明確な稜は作られない。礫の一部をわずかに整形し、握り部

を作り出している。

62は石剣である。両側縁が平行に、先端部が丸みを持ちつつ尖るように、敲打と研磨で全面を入念に整形する。器体の中央から両側面に向かって刃部を作るよう整形する。両側縁に稜を持ち、横断面形は菱形に近い。上半部を欠損する。

63～66は垂飾である。63は右側面を平坦にして置くと、サメの歯状となる装飾品である。全体的に白く、整形時に加熱処理をしたと考えられる。頭部に表裏両面から穿孔している。穿孔部周辺に直線と曲線の刻みが施される。64は勾玉状の垂飾である。頭部を穿孔している。その隣にV字状の刻みも認められる。65は臼玉状の垂飾である。面取り後に研磨している。両面から穿孔している。66は扁平なもので中央に孔を穿っている。上端の一部が欠損しているが、平面形は楕円形と考えられる。片面から穿孔している。非常に薄手に作られたようであるが、風化のため製作の痕跡はほとんど見られなかった。

V 古墳時代以降の遺構と遺物

1. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は住居跡4軒、竪穴状遺構2基、畝状遺構2箇所である。

古墳時代の遺構検出面は地表下1.20m、標高13.80m前後である。奈良・平安時代の遺構検出面(第一面)から約0.25~0.70m下がった面にあたる。古墳時代の遺構検出面を覆う上面の土層は水平堆積(第4図基本土層A区ⅠC~ⅡA層)だが、この土層は氾濫による水性堆積土であるものの、前代の傾斜を残している。

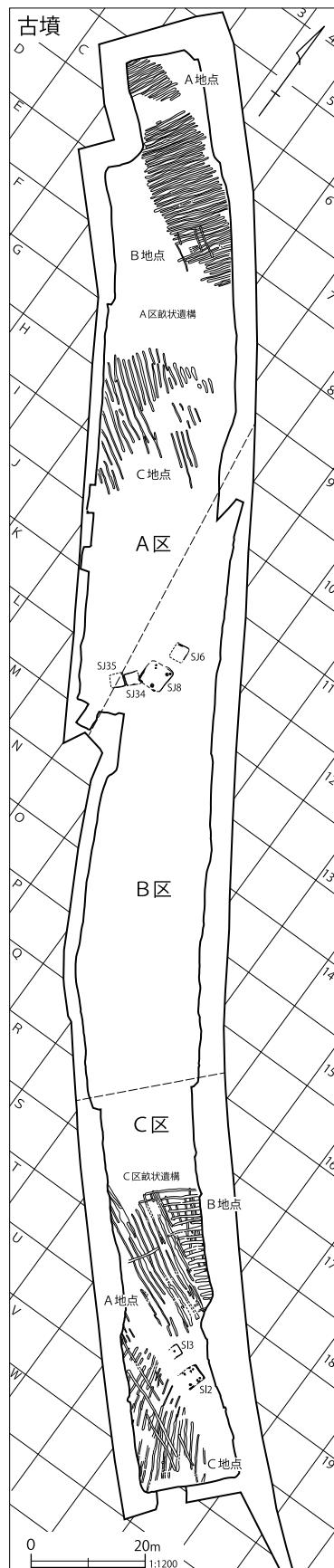
古墳時代後期の遺構は基本土層A区ⅡC、ⅡD層から検出され、ⅡB層は畝状遺構の覆土堆積層である。

第133図に示したように調査区北側と南側の2箇所で畝状遺構が検出され、その中間にあたる調査区中央部のK、L-8グリッドに第6、8、34、35号住居跡の4軒、南側の畝状遺構に囲まれたU-15、16グリッドに第2、3号竪穴状遺構の2基が検出された。住居跡と竪穴状遺構、畝状遺構は、出土した遺物等から古墳時代後葉の所産で、ほぼ同時期であると考えられる。居住域に隣接して耕作地が広がっていた景観が復元される。

住居跡の位置する調査区中央部は、南西方向に傾斜する緩斜面にあたり、古墳時代の遺構検出面の中でもやや標高の高い場所である。A区北側と南側には、縄文時代後晚期の盛土が厚く堆積しており、この上部から畝状遺構が検出された。これは縄文時代後晚期の地形の起伏が、古墳時代まで残存していたことを物語っている。

出土遺物には、土師器の有段口縁壺を主体的に伴うことから6世紀後半から7世紀前半の所産と考えられる。

調査区北側A区から畝状遺構と推定される溝跡



が107条検出された。位置関係や歓状遺構の方向、覆土、地山の特徴等から、いくつかのグループに分けることが可能であった。グループは検出された位置から大きく3箇所に分けることができ、調査区の北側よりA地点、B地点、C地点と呼称する。

A地点は、1～15号歓（以下、号歓と略す）で構成される。遺構は、標高13.60mから13.90mの間で確認され、北東方向から南西方向に延びると思われるが、調査区域外にかかるため全長は不明である。

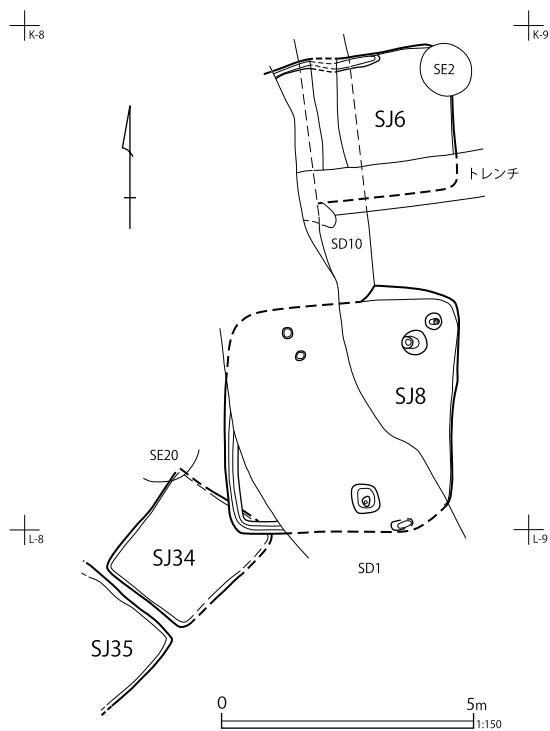
B地点は、A地点より南東側に2.50mの間隔をあけて確認された16～67号歓及び縦方向に延びる68～71号歓によって構成される。最も遺構の密度が高い地点であり、標高13.30mから13.90mの範囲に確認された。A地点同様、北東方向から南西方向に延び、全長は7.50mから13.00mである。幅にはらつきが見られるが、40cmを超えるものもあることから、歓が重複している可能性もある。また、覆土と地山の観察からも細分が可能であったが、多くの部分が削平されていたため、数条の歓のまとまりの中で、その特徴を記すこととする。

なお、68～71号歓状遺構は、他の遺構と走向方位に違いが見られることから、構築時期あるいは耕作物の違いを反映しているものと考えられる。このようにB地点では2つの異なる歓の存在を想定することができる。

C地点は、標高13.70mから14.10mの範囲に72～107号歓状遺構によって構成されていた。

さらに、調査区南側C区からも歓間溝と推定される溝跡が83条検出された。位置関係や歓状遺構の方向性等から、北側よりA地点、B地点、C地点と呼称する。

今回の調査で確認した歓状遺構は、その位置と重複関係から時期差があることは確実であるが、いずれの歓状遺構でも覆土は基本土層A区ⅡB層に対応する黄褐色系のシルト質粘土であり、南北



第134図 K、L-8 グリッド周辺の住居跡

方向の歓状遺構と東西方向のそれとの間には長期間にわたる時期差はないものと判断した。

住居跡は調査区中央部から、第6、8、34、35号住居跡が検出された。後世の搅乱を受けており、全体を捉えることはできなかったが、いずれも近接した位置にある。このうち第6、8号住居跡は、長軸方位をほぼ同じくしている。同様に第34、35号住居跡も長軸方位を揃えている。このことから、第6、8号住居跡と第34、35号住居跡の二つのグループが存在していたと見られる。各グループの一軒の住居跡が同時期に存在し、北側に広がる歓状遺構を耕作していた可能性もある。

第6、8号住居跡は、近世の第10号溝跡の断面観察により確認された。第6号住居跡は標高14.30mから覆土の堆積が、第8号住居跡は標高14.00mから覆土の堆積が確認されたが、平面的には覆土と地山の違いは不明瞭であった。

同様に第34、35号住居跡も標高14.00mから覆土の堆積が確認された。

(1) 住居跡

第6号住居跡（第135図）

調査区中央部のK-8グリッドに位置する。住居跡西側が中世の第1号溝跡に壊され、北東コーナー部は第2号井戸跡によって壊されていた。

南側は調査時のトレーニングに壊され、南壁を確認することができなかった。さらに、住居跡中央やや西寄りの部分については南北方向に走る第10号溝跡が重複していたため、住居跡の全体を捉えることができず、平面形態が検出できたのは、北壁と東壁の一部にとどまった。

本住居跡の南側5mには長軸方位をほぼ同じくする第8号住居跡があり、両住居跡は、第10号溝跡の調査時の断面観察によって所在を確認することができた。

住居跡の残存規模は、長軸長3.16m、短軸長2.22m、掘り込みはやや深く、確認面からの深さは0.37mである。平面形態は長方形と推定され、

長軸方位はN-83°-Eである。

覆土は3層に分層され、概ね自然堆積の状況を示していた。第1層は粘質土で、炭化物粒子を含むにぶい黄褐色土である。床面直上の第2層は、焼土粒子と炭化物粒子が混在するにぶい黄褐色土である。第3層は地山の灰色粘土を多く含む壁際の三角堆積土である。

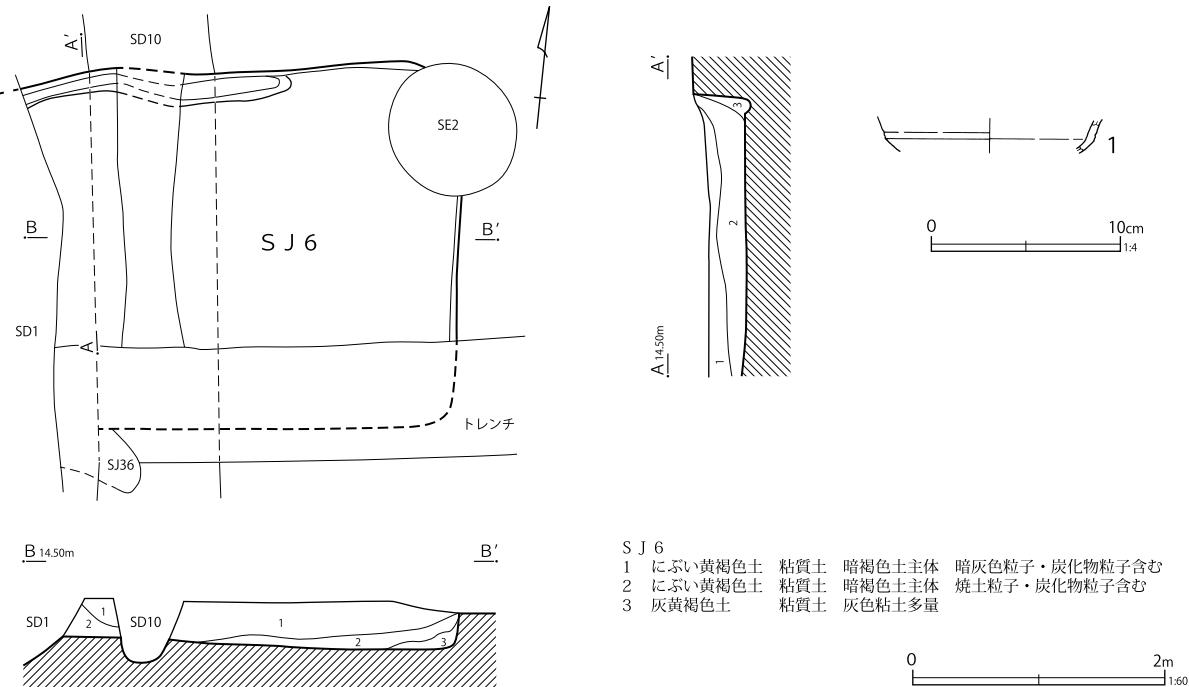
床面はほぼ平坦で、地山のローム面が利用され、壁溝は北壁西半分に巡っている。規模は最大幅24cm、最小幅14cm、深さ7~10cmである。掘り方や貼床は確認できなかった。

出土遺物は少なく、覆土中から土師器片が数点出土したに過ぎない。

第135図1は、模倣壺の口縁部下端から体部にかけての破片である。口縁部ヨコナデ、体部外面にヘラケズリを施す。時期は6世紀後半から7世紀前半である。

第29表 第6号住居跡出土遺物観察表（第135図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	土師器	壺	-	[1.8]	-	ACE	5	普通	灰褐	模倣壺 カマド	



第135図 第6号住居跡・出土遺物

第8号住居跡（第136、137図）

調査区中央部のK-8グリッドに位置する。住居跡中央から西側にかけて中世の第1号溝跡に壊されていた。このため、住居跡の平面形態が検出できたのは、北東コーナー部から東壁にかけてと、南西コーナー部から西壁にかけてであった。

本住居跡の北側には、長軸方位をほぼ同じくする第6号住居跡が位置する。また、南西側には第34号住居跡が重複し、この住居跡と長軸方位を同じくする第35号住居跡がその南西側から検出された。このように本住居跡の周辺には3軒の住居跡が近接して位置している。いずれの住居跡からも土師器の有段口縁坏が出土していることから古墳時代後期の住居跡である。

小規模な集落のように見えるが、地形に沿って、調査区の北東側及び、南西側に居住域が延びている可能性も考えられる。検出された住居跡の中で、本住居跡は最も規模が大きく、住居跡群の中では中心的な住居跡と考えられる。

平面形態は南西及び北東コーナー部が確認できたことから、ほぼ方形であると推定される。残存規模は、長軸長4.10m、短軸長2.30m、深さ0.22mで、復元される住居跡の規模は長軸長4.90m、短軸長4.50mである。長軸方位はN-2°-Wである。

住居跡の床面は第1号溝跡によって中央部分が壊されていた。残存する床面は緩やかな凹凸があり、中央部分が高く、壁際に向かってわずかに傾斜していた。壁溝は西壁から南壁にかけて認められ、幅20cm、深さ12cmである。

床面からは6本の柱穴が検出された。北東コーナー部分にP1、P2、南壁の中央やや東寄りにP3、北西コーナーにP4、P5、南壁中央にP6が確認された。各柱穴の規模は、P1は長径33cm、短径32cm、深さ31cm、P2は長径49cm、短径47cm、深さ44cm、P3は長径42cm、短径20cm、深さ36cm、P4は長径19cm、短径18cm、深さ38cm、P5は長径21cm、短径20cm、深

さ27cm、P6は長径57cm、短径52cm、深さ24cmである。

P2は掘り方が明確であり、第3層の柱痕が確認されたことから住居跡の主柱穴と考えられる。P4は第1号溝跡に上部が削平されているが、主柱穴の一部と考えられる。P2とP4の柱間距離は2.15mである。南側の主柱穴は検出されなかった。P6は隅丸長方形で貯蔵穴の可能性も考えたが、第1号溝跡に上部を壊されているため、その性格を明らかにすることはできなかった。

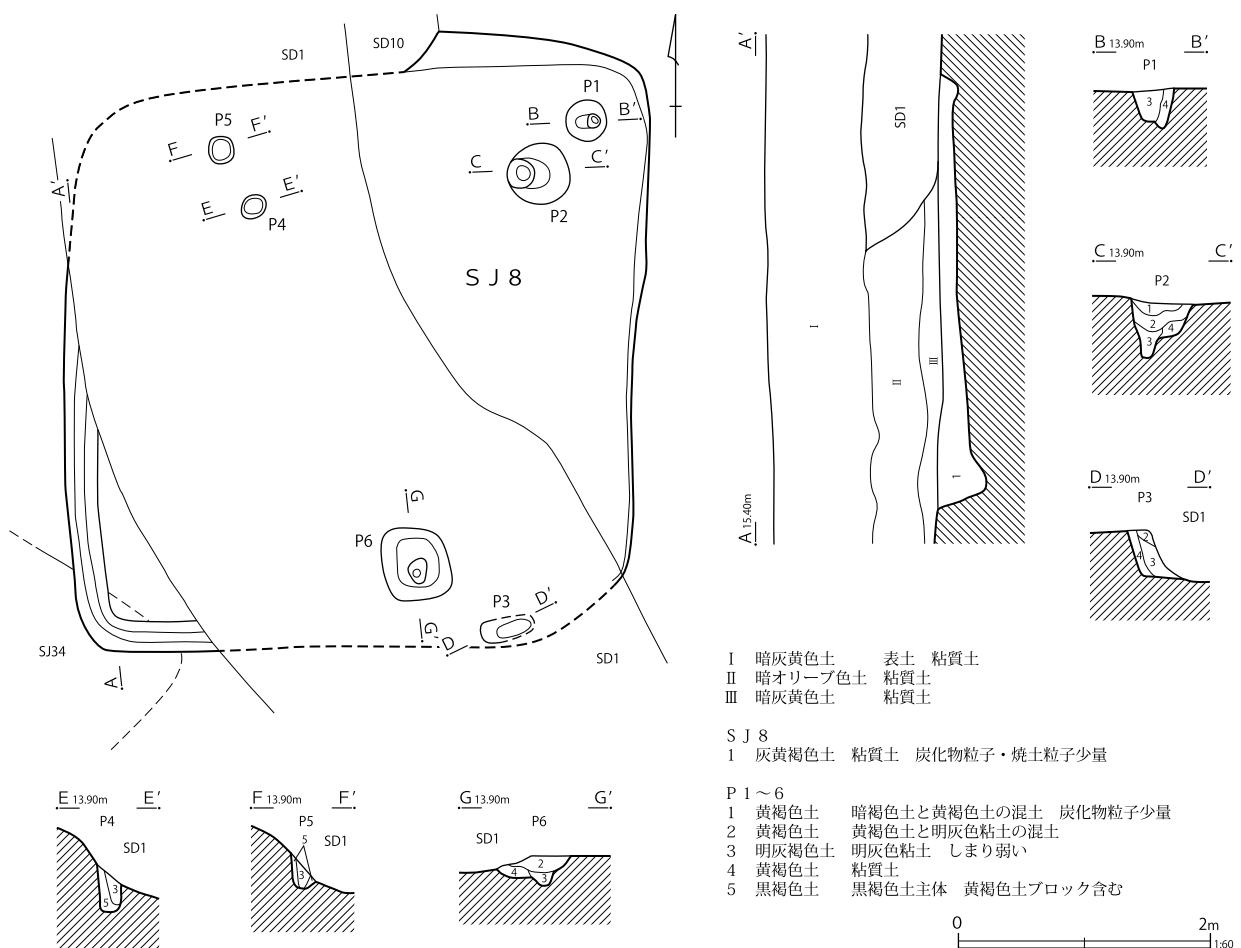
断面観察により本住居跡は、基本土層Ⅲ層の下面で確認された。覆土は灰黄褐色の粘質土で、炭化物粒子を少量含んでいる。

出土遺物は土師器坏・甕がある。第137図1～6に図示した。

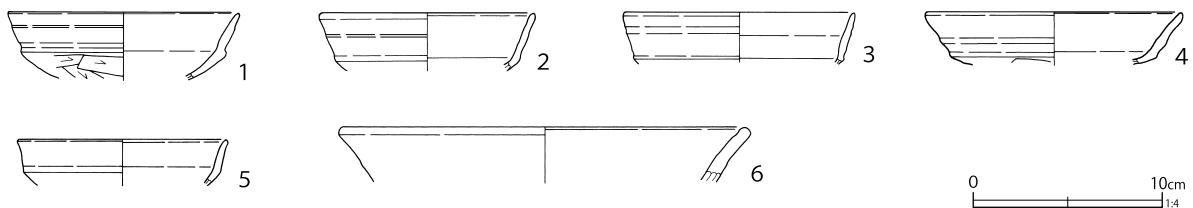
1～5は土師器坏である。1～4は有段口縁坏で、口縁部がやや外反気味に外傾し、口縁部中位に弱い段を持つ。底部は丸底でやや扁平である。5は模倣坏である。やや小型で推定口径11.0cm。口縁部と体部の境に稜を持ち、口縁部はやや膨らみ口唇部で外反する。6は甕の口縁部破片である。やや器壁が厚く、口縁部はヨコナデが施され、口唇部端部に面を持つ。

土師器坏は有段口縁坏が主体を占めており、この地域の特徴として捉えられる。口径11.0～12.0cmの口縁部が上方に立ち上がるやや小型の坏と、口縁部が開いた口径13.3cmの坏がある。また、一点ではあるが模倣坏が伴うことから、利根川流域の低地に広く分布する有段口縁坏と、武藏地域の模倣坏が共伴することになる。これらの坏の特徴から住居跡の時期は7世紀前半と考えられる。

この時期をもって、集落は一時断絶するようである。7世紀後半から8世紀中葉までの約100年間長竹遺跡からは住居跡が見られなくなる。再び集落が形成されるのは、8世紀中葉の第9b号住居跡の出現を待たねばならなかった。その後は継続的に集落が営まれ、10世紀中葉から後半の第3号住居跡まで営まれていた。



第136図 第8号住居跡



第137図 第8号住居跡出土遺物

第30表 第8号住居跡出土遺物観察表（第137図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	土師器	壺	(12.0)	[3.5]	—	CHIK	20	普通	にぶい黄橙	有段口縁壺	
2	土師器	壺	(11.0)	[3.0]	—	ACHI	5	普通	橙	有段口縁壺	
3	土師器	壺	(12.0)	[2.7]	—	HIK	5	普通	橙	有段口縁壺	
4	土師器	壺	(13.3)	[2.8]	—	HIK	10	普通	橙	有段口縁壺	
5	土師器	壺	(11.0)	[2.4]	—	ACHI	10	普通	橙	模倣壺	
6	土師器	甕	(21.0)	[2.9]	—	BCEHI	5	普通	橙		

第34号住居跡（第138～140図）

調査区中央部のK、L-8グリッドに位置する。住居跡北側コーナー部が中世の第20号井戸跡によって壊されていた。

周辺から土師器の有段口縁壺が出土する古墳時代後期の住居跡3軒が近接して検出された。南側には長軸方位をほぼ同じくする第35号住居跡が、北東側には第8号住居跡が、さらに北側には第6号住居跡が位置している。

住居跡の確認は非常に難しく、平面形態が確認できたのは、西壁から南壁にかけてと、北壁、東壁の一部であった。住居跡の東側は覆土と地山の違いを明瞭に認識することができず、南北方向にトレンチを入れ、断面による覆土の観察を行った。その結果、床面及び、北壁と東壁を確認することができた。

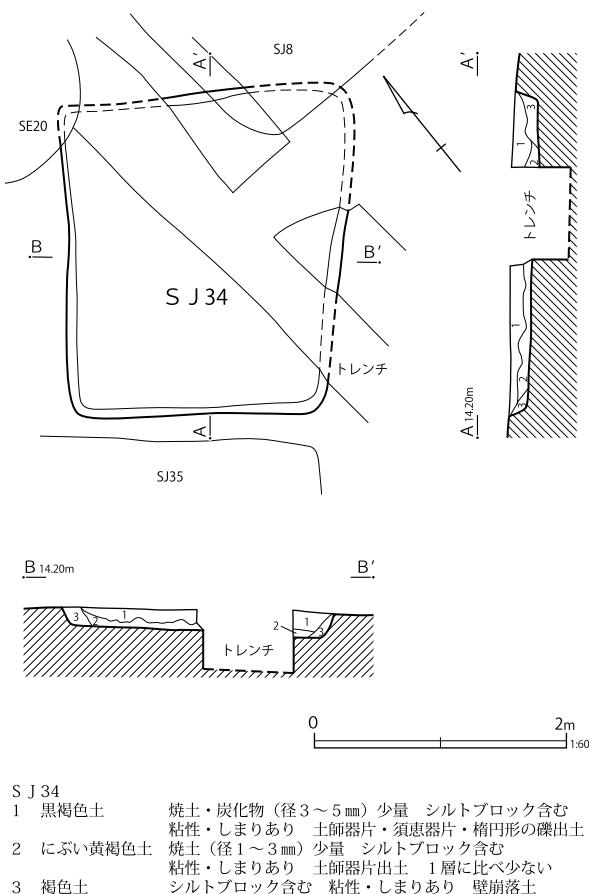
平面形態は長方形である。規模は長軸長2.54m、短軸長2.18m、深さ0.18mである。長軸方位はN-40°-Eである。床面は平坦で、柱穴、壁溝等は検出されなかった。

遺物は須恵器壺蓋・甕・壺の破片、土師器壺・甕・瓶、石製品等が出土し、第140図1～8に図示した。1は須恵器壺蓋である。形態の特徴は天井部の器壁が厚く、口縁部外面に沈線が巡る。体部外面に回転ヘラケズリが施される。天井部内面には指ナデの痕跡が明瞭に残る。胎土には白色針状物質が含まれず、南比企産とは異なるもので、産地は不明である。2～4は土師器有段口縁壺である。2は口縁部が長く外面中位に明瞭な段を持つ。体部は丸底で器高が深い形態である。3は2より口縁部がやや外反する特徴を持つ。4は口縁部がやや短く外反する。5は模倣壺で、口縁部が短く段が不明瞭である。6は鉢形の土師器甕である。7は須恵器甕の胴部破片である。外面は平行叩きの後、横位のカキ目が施されている。内面は青海波文が残る。胎土から末野産の可能性がある。8は砥石の破片である。

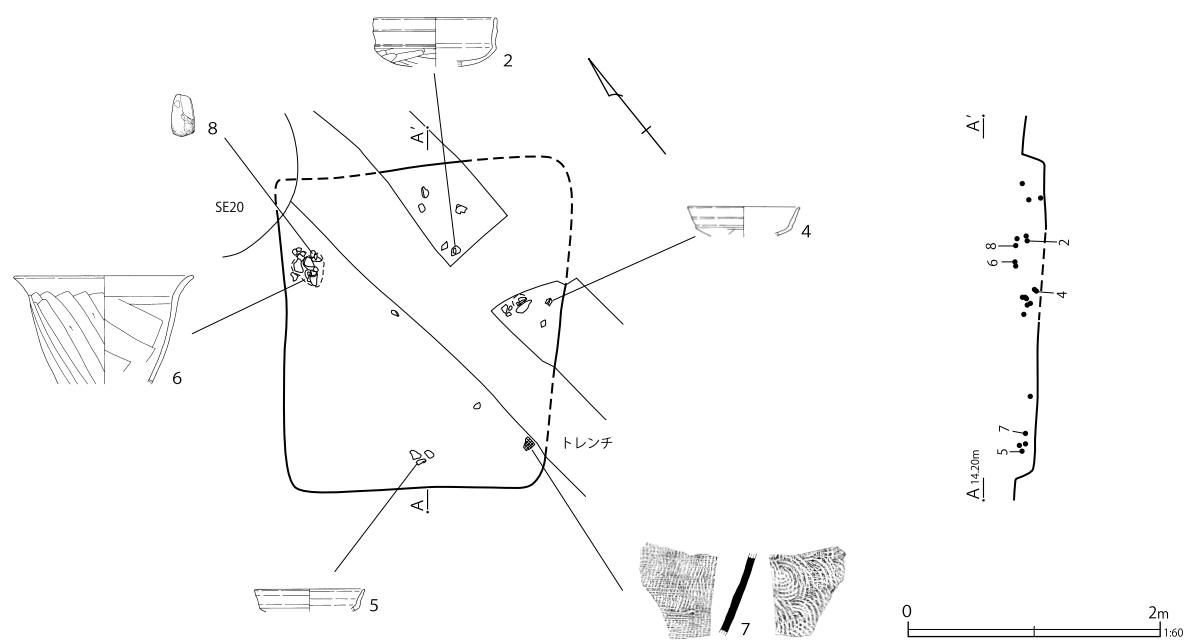
住居跡の時期は、出土した第140図1の須恵器壺蓋からTK217型式併行と考えておきたい。また2の土師器の有段口縁壺は口縁部の立ち上がりが長く、体部がやや深身であることから、古い様相を残す。3～5の壺を基本に7世紀前半の所産と考えられる。

住居跡から出土した土師器壺は、須恵器蓋模倣の有段口縁壺が主体を占めている。一般的には、蓋模倣壺や身模倣壺が存在する時期であるが、本住居跡のみならず他の住居跡でも有段口縁壺がほとんどで、模倣壺は少量である。こうした傾向はこの地域の特徴であると考えられる。

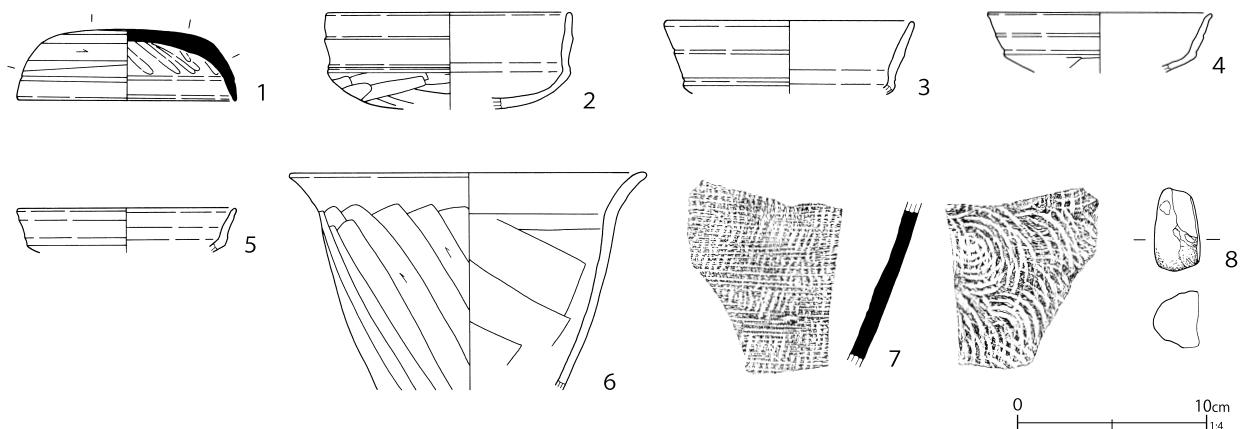
有段口縁壺は主に加須低地、妻沼低地、荒川低地に分布しているのに対し、模倣壺は本庄台地、大宮台地を中心とし、比企型壺は比企丘陵から入間台地を中心に分布しており、6世紀後半以降地域色が顕在化している。



第138図 第34号住居跡



第139図 第34号住居跡遺物出土状況



第140図 第34号住居跡出土遺物

第31表 第34号住居跡出土遺物観察表（第140図）

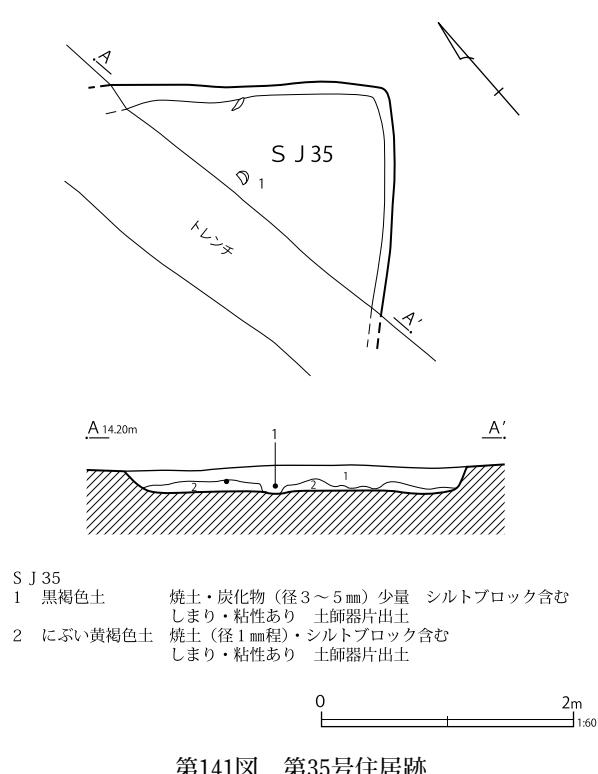
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	壺蓋	11.6	3.7	—	EIK	75	良好	灰オリーブ	L8G SJ8	77-1
2	土師器	壺	(12.8)	[5.1]	—	CIK	20	普通	にぶい黄橙	有段口縁壺 No.15	77-2
3	土師器	壺	(13.0)	[3.8]	—	CI	10	普通	灰褐	有段口縁壺	
4	土師器	壺	(11.6)	[3.2]	—	HIK	10	普通	にぶい橙	有段口縁壺 No.21	
5	土師器	壺	(11.5)	[2.3]	—	HI	20	普通	橙	模倣壺 No.10	
6	土師器	甌	(18.4)	[11.5]	—	ACDHIK	25	普通	灰褐	No.2	77-3
7	須恵器	甌	—	[8.7]	—	EHIK	5	普通	灰	未野産か No.12	
8	石製品	砥石	長さ 4.4 cm 幅 2.4 cm 厚さ 3.0 cm 重さ 20.9g				No.3				

第35号住居跡（第141、142図）

調査区中央部のK、L-8グリッドに位置する。住居跡西側は確認できなかった。

周辺には、土師器壺を伴う古墳時代後期の住居跡が3軒近接して検出された。北側には、長軸方位をほぼ同じくする第34号住居跡が、北東側には第8号住居跡と第6号住居跡がある。

住居跡の確認が難しく、平面プランが検出できたのは、北東壁から南東壁にかけての東側半分であった。住居跡の西側は覆土と地山の違いを明瞭に確認することができず、南北方向にトレンチを入れ、断面による覆土の観察を行った。その結果、床面及び、北壁と南壁を辛うじて確認することが



第141図 第35号住居跡

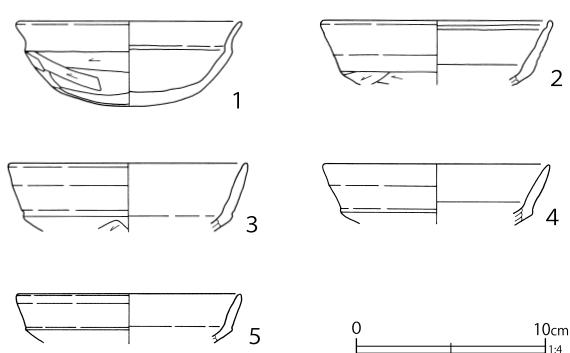
できた。

平面形態は方形と推定される。残存規模は、長軸長2.23m、短軸長1.75m、深さ0.20mである。長軸方位はN-42°-Eである。

床面は平坦で、壁溝は検出されなかった。住居跡の覆土上層は黒褐色土で、床面直上には地山の黄褐色シルトのブロックを含む粘質土が堆積していた。住居跡覆土の堆積状況は自然堆積と考えられる。

遺物は土師器壺が出土し、第142図1～5に図示した。1は壺蓋模倣壺である。口縁部がやや短く、深さを体部で表現している。2～4は有段口縁壺である。2、3は口縁部がやや長く立ち上がり、直線的に開く。2の口唇部内面には沈線が見られる。4は口縁部がやや短い。5は模倣壺で口縁部が短く外に開いている。周辺の住居跡同様、本住居跡でも有段口縁壺が主体を占め、深身で体部が丸く口縁部の短い壺蓋模倣壺が伴う。

これらの出土遺物から、本住居跡の時期は6世紀後半から末葉である。また、隣接する第34号住居跡よりもやや先行する時期の所産と考えられる。



第142図 第35号住居跡出土遺物

第32表 第35号住居跡出土遺物観察表（第142図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	土師器	壺	(12.0)	4.5	—	ACHIK	45	普通	橙	模倣壺 No.2	77-4
2	土師器	壺	(12.0)	[3.4]	—	CHI	10	普通	橙	有段口縁壺	
3	土師器	壺	(12.5)	[3.6]	—	CHI	5	普通	にぶい黄橙	有段口縁壺	
4	土師器	壺	(12.0)	[3.3]	—	CEHIK	10	普通	褐灰	有段口縁壺	
5	土師器	壺	(11.9)	[2.6]	—	AHK	5	普通	にぶい赤褐	模倣壺	

(2) 壇穴状遺構

第2号壇穴状遺構 (第143~145図)

C区U-16グリッドに位置する。東西方向に延びる第21、27、29号溝跡に壊されている。北壁は検出されたが、南側の壁は第21号溝跡で壊されていて検出できなかった。残存する部分から平面形態は長方形であると考えられる。残存規模は、長軸長3.42m、短軸長3.21m、深さ0.13mである。長軸方位はN-19° -Eである。

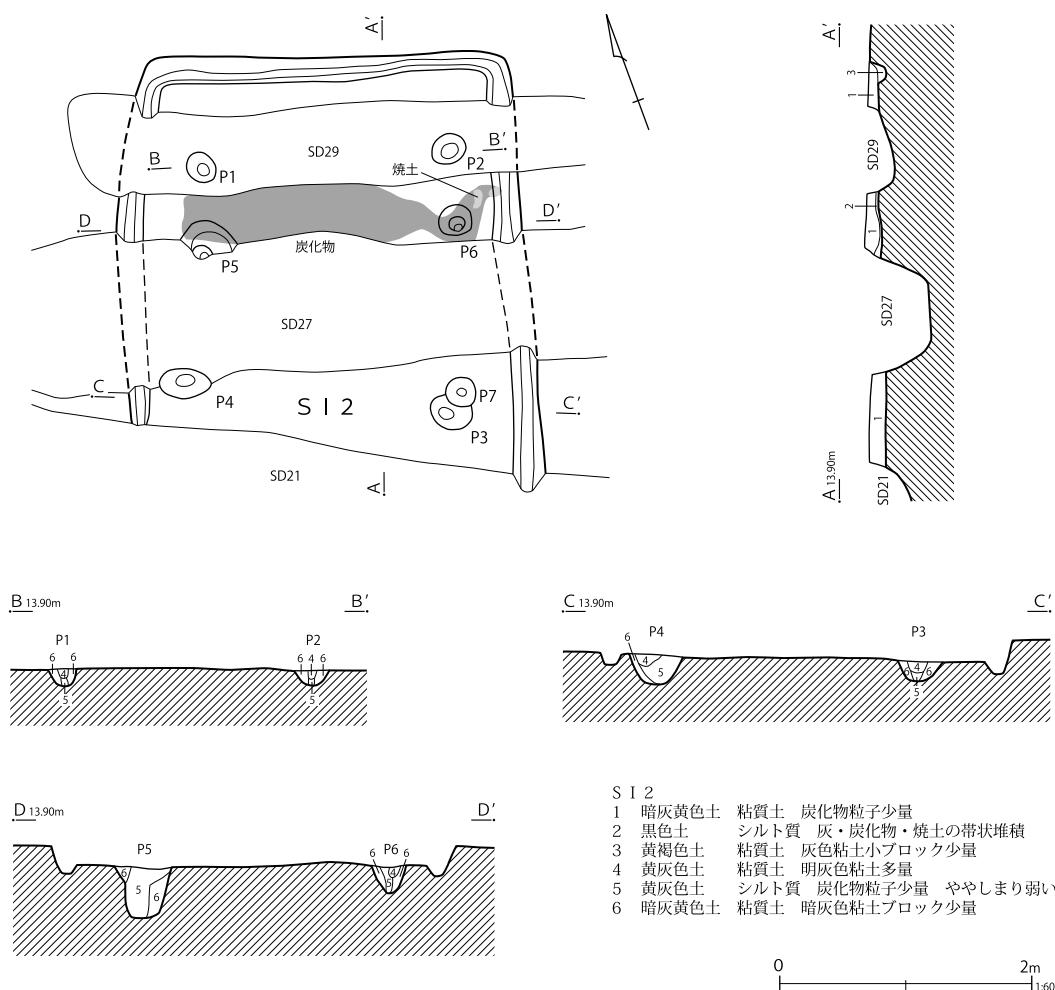
カマドが検出されなかつたため壇穴状遺構としたが、本来は住居跡であった可能性が高い。

壁溝は北壁のすべてと第27、29号溝跡によって壊された東西壁の一部において検出された。最大幅は22cm、最小幅は18cm、深さは7~9cmである。床面は平坦であり、残存する部分には薄い焼土、

炭の堆積層が検出された。

柱穴は7本検出された。P1は長径25cm、短径21cm、深さ14cmである。P2は長径29cm、短径23cm、深さ12cmである。P3は長径34cm、短径28cm、深さ15cmである。P4は長径40cm、短径23cm、深さ23cmである。P5、P6は床面上に堆積した焼土、炭化物を取り除いた下面で検出された。断面観察では第4、5層が柱痕部分と考えられる。

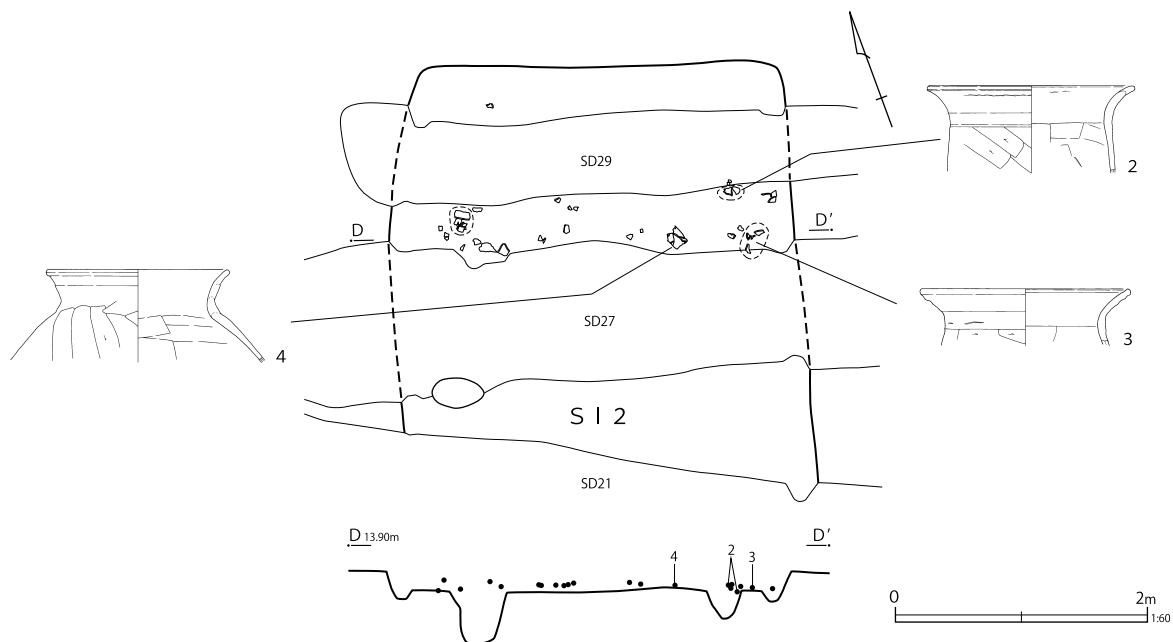
遺物は、住居跡の床面に堆積していた焼土、炭化物層の中から土師器壊・甕が出土した。図化できるものを第145図1~4に示した。1は土師器の壊蓋模倣壊である。内面には放射状の暗文が施されている。体部外面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデが施されている。口縁部中位に輪積痕が明



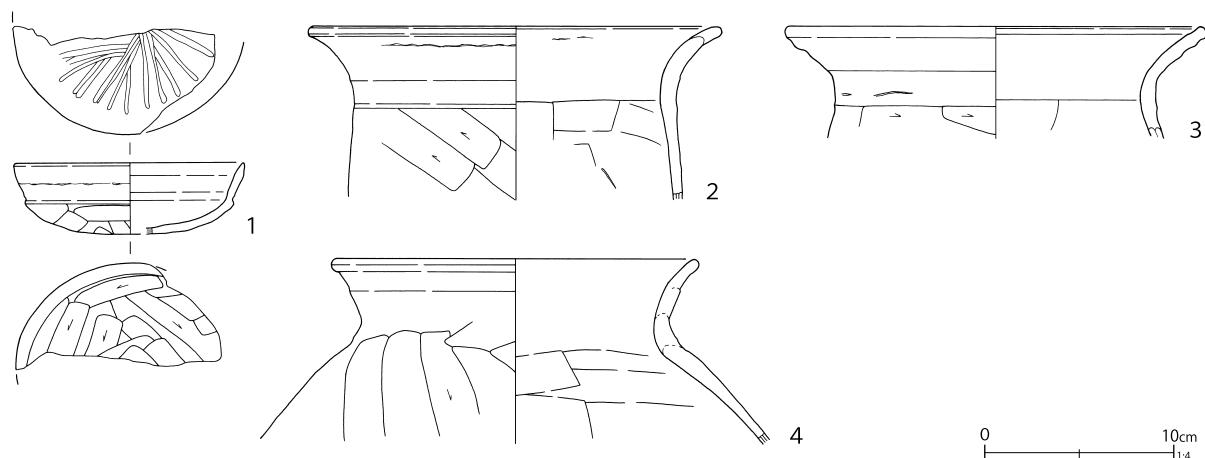
第143図 第2号壇穴状遺構

瞭に残されている。2、3は土師器甕である。器壁はやや厚く口縁部が大きく外反する。4は丸甕である。口縁部が上方に立ち上がり、口唇部でやや外反気味に開く。胴部は肩部にやや張りを持ち

丸く膨らむ。住居跡の時期は、1の壺蓋模倣壺は口径12cmで内面にやや不規則な放射状暗文を施していることから、6世紀後半から7世紀前半と考えられる。



第144図 第2号竪穴状遺構遺物出土状況



第145図 第2号竪穴状遺構出土遺物

第33表 第2号竪穴状遺構出土遺物観察表（第145図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	土師器	壺	12.0	[3.8]	—	ACHIK	25	普通	にぶい黄橙	模倣壺 内面に放射状暗文	77-5
2	土師器	甕	(21.6)	[9.2]	—	CHIK	15	普通	にぶい褐	No 15, 16	
3	土師器	甕	(21.8)	[5.9]	—	ACHI	35	普通	にぶい橙	No 19	77-6
4	土師器	甕	(19.0)	[9.7]	—	ACEK	30	普通	にぶい橙	器面磨滅著しい No 13	77-7

第3号竪穴状遺構（第146図）

C区U-15グリッドに位置する。南側を第21号溝跡、第96号土壙によって壊されている。本遺構の南東側に第2号竪穴状遺構が位置する。両遺構の規模は異なるが、ほぼ同じ長軸方位を持つことから、関連性があると考えられる。

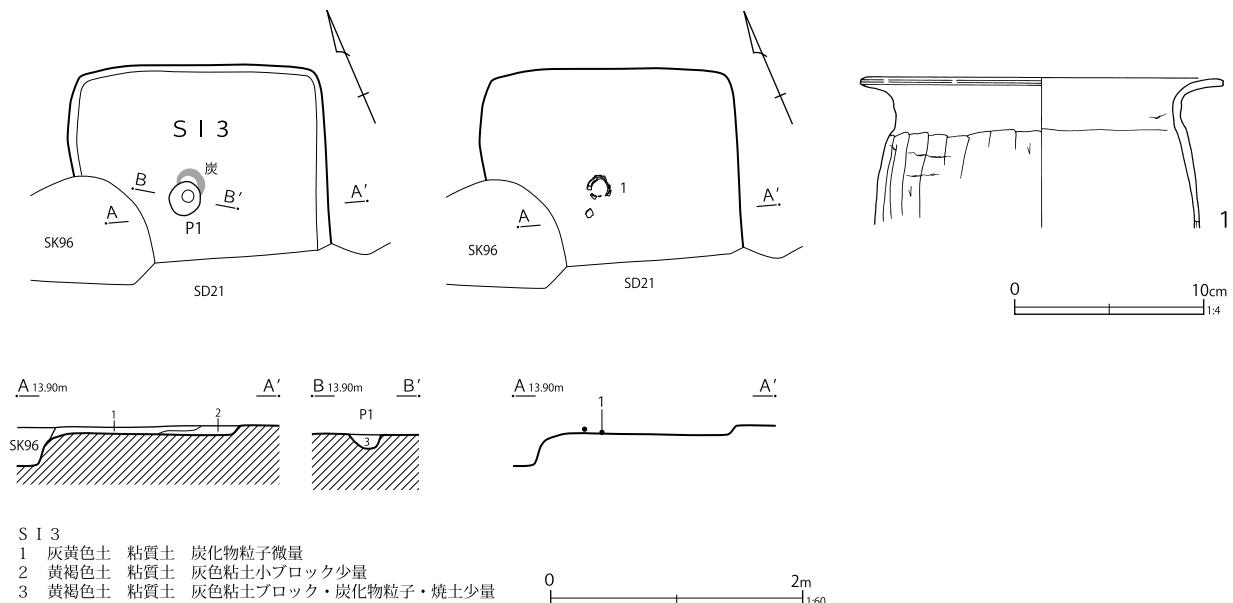
平面形態は東西壁及び、北壁が検出されたことから、方形もしくは長方形と推定される。規模は検出された範囲で長軸長2.02m、短軸長1.54m、深さ0.07mである。長軸方位はN-66°-Wである。

確認面からの掘り込みは浅く、壁面はやや垂直に立ち上がっている。床面は平坦であるが、中央部に高まりが見られる。全体的に軟質で硬化面は見られなかった。壁溝は検出されなかった。柱穴は竪穴状遺構の中央部分から1本検出された。柱穴の規模は長径27cm、短径25cm、深さ12cmである。柱穴は床面から出土した炭化材を一部切り込んで壊していることから、本遺構に伴わない可能性がある。

ある。遺構中央部は、炭化物粒子を微量に含む粘質の灰黄褐色土で覆われていた。壁際は、灰色粘土ブロックを少量含む粘質の黄褐色土が三角堆積状に覆っていた。覆土の状況は第2号竪穴状遺構に近似している。

遺物は第146図1に図示した土師器甕が出土した。甕は、竪穴状遺構の中央部の床面直上から、口縁部を上に向けた正位の状態で出土した。甕の周囲には炭化材が集中して検出された。甕は器壁がやや薄く胴部に緩やかな膨らみを持つ。胴部外面は縦方向のヘラケズリが丁寧に施されているが、器面には輪積痕が残り、やや波打つようになっている。胴部内面は丁寧なヨコナデが施され輪積痕は見られなかった。口縁部はヨコナデが施され、口唇部はほぼ水平に開き、口縁部に最大径を持つ。胎土には角閃石が多く見られ、在地産の土師器である。

時期は古墳時代後期と考えられる。



第146図 第3号竪穴状遺構・出土遺物

第34表 第3号竪穴状遺構出土遺物観察表（第146図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	土師器	甕	18.5	[7.9]	—	ACEHI	30	普通	灰黄褐	No.1	77-8

(3) 畝状遺構

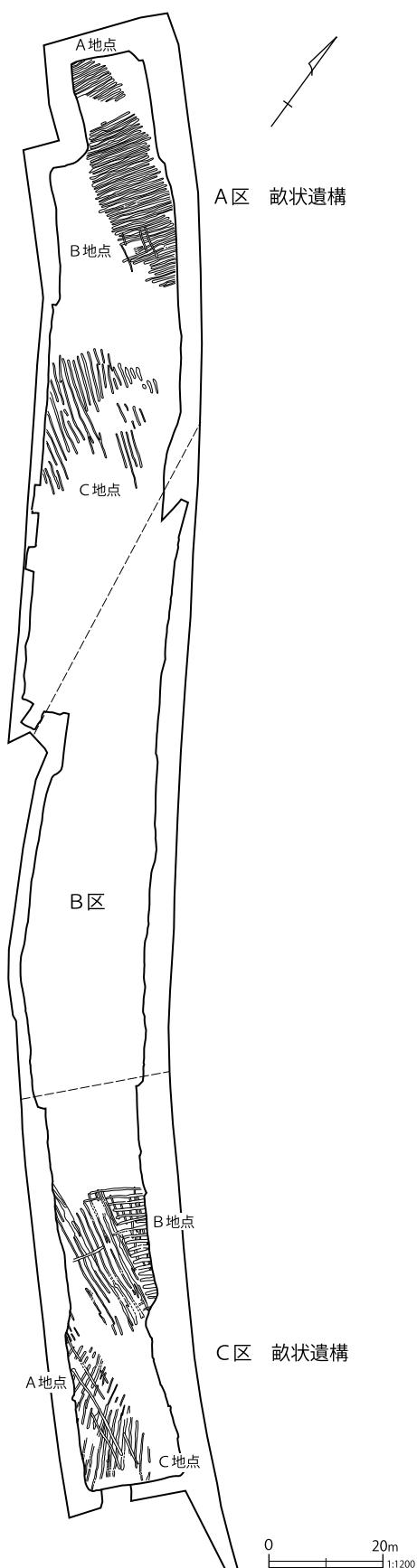
畝状遺構は、調査区北側のA区と南側のC区から検出された。幅0.20~0.70m、長さ1.30~23.00m、深さ0.03~0.14mの細長い溝跡で、畠の痕跡と考えられる。A区は下層に縄文時代後晩期の環状盛土遺構が存在し、その影響が残り起伏のある地形を形成している。このため、畝状遺構は緩斜面に直交する方向に延びている。

A区 畝状遺構（第149、150図、第35、36表）

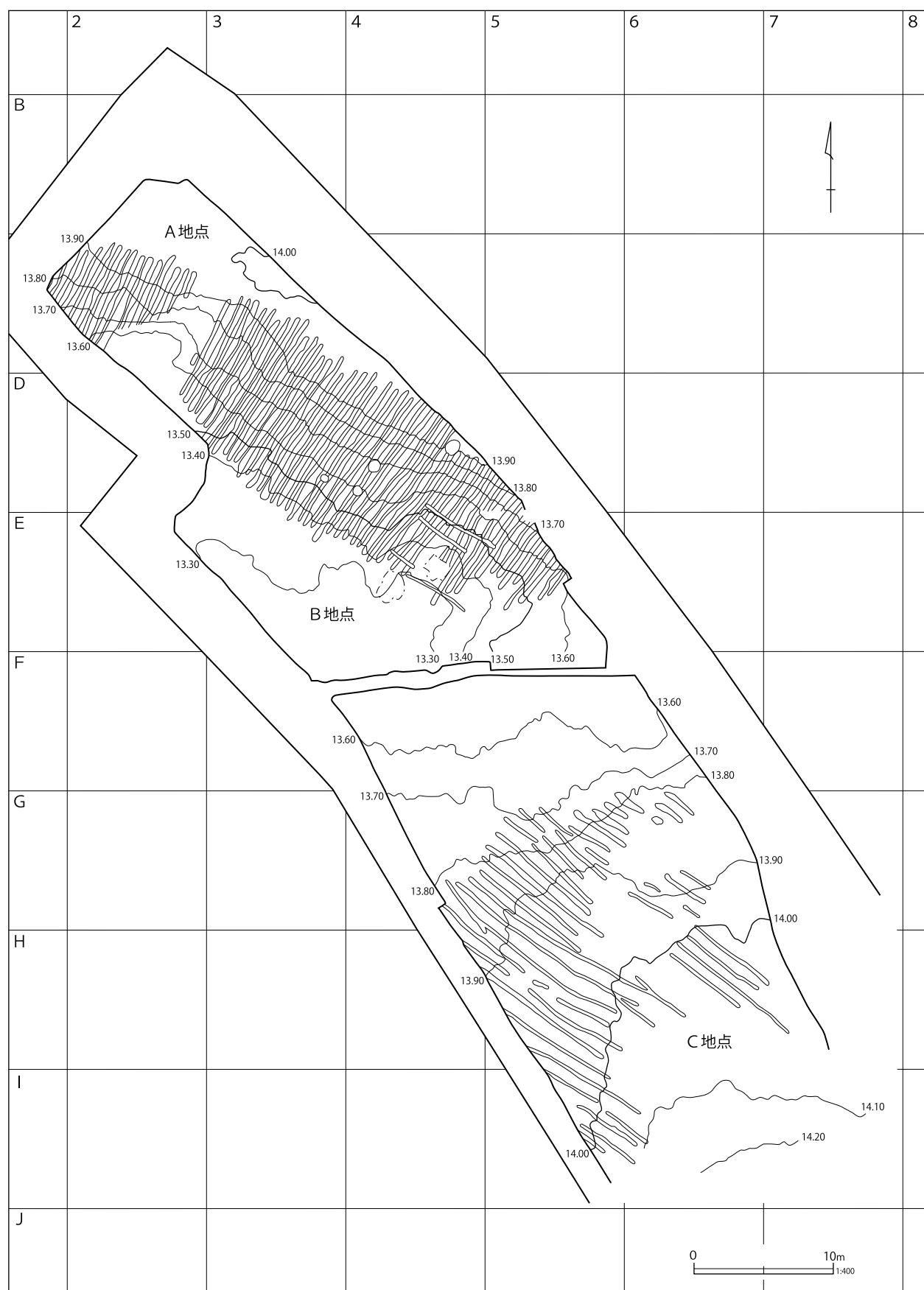
調査区北側のA区畝状遺構は、北東側に高まりを持ち、南西側に向かって緩やかに低くなる緩斜面地に形成されている。畝間と思われる溝の総数は107条である。構築箇所や、畝状遺構の方向、また覆土や地山の特徴等から大きく3グループに分けられる。それぞれ調査区の北側よりA地点、B地点、C地点と呼称する。

A地点は、1~15号畝状遺構で構成される。C-1、2グリッドに位置する。南北に広がり、走行方向はN-22°-Eである。遺構は、標高13.60mから13.90mの間で確認され、北東方向から南西方向に延びると思われるが、調査区域外のため全長は不明である。覆土については、灰黄色(2.5YR6/2)のシルト質粘土が主体であり、炭化物を粒子状に含み、黒褐色粘土(10YR3/1)を10~15cmのブロック状に、明黄褐色(10YR7/6)のシルトブロックも含んでいる。灰黄色系の堆積土は、基本土層A区ⅡB層に関連する土と思われる。また10~15号畝状遺構は、13.60mの等高線より南西側では確認できなくなっている。

B地点は、A地点より南東に2.5mの間隔をあけ確認された16~67号畝状遺構及び、それに直交する68~71号畝状遺構によって構成される。C-2、3、D-2~5、E-3~5グリッドから検出された。南北に広がり、走行方向はN-33°-Eである。最も畝状遺構の密度が高い地点であり、標高13.30mから13.90mの範囲で検出した。A地点同様、北東方向から南西方向に延びている。



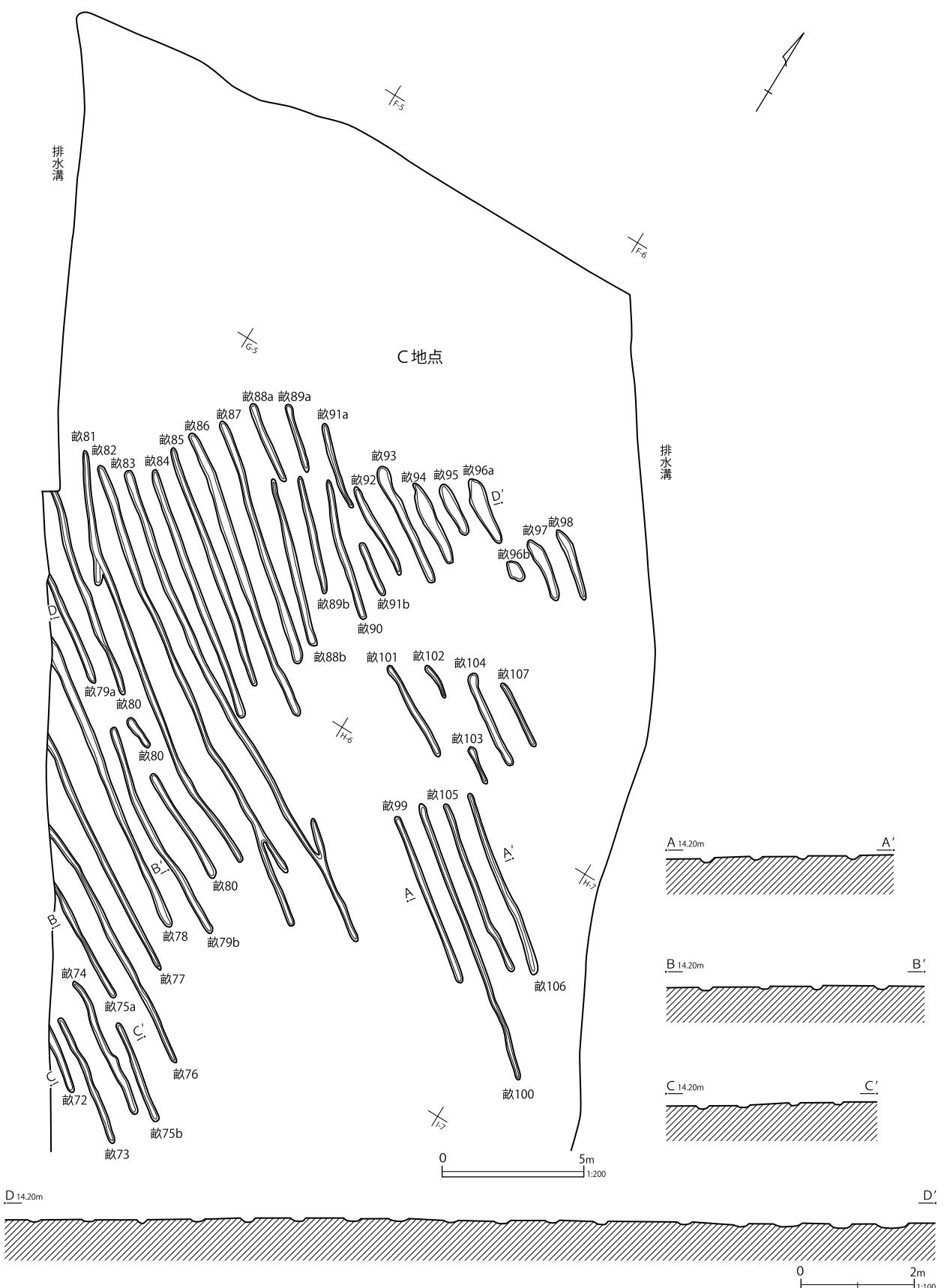
第147図 畝状遺構分布図



第148図 A区畝状遺構と地形



第149図 A区畝状遺構 A、B地点



第150図 A区畝状遺構 C地点

第35表 A区畝状遺構一覧表(第149図)

番号	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)
1	C-1	(1.82)	0.38	0.11
2	C-1,2	(4.04)	0.46	0.06
3	C-1,2	(4.38)	0.36	0.05
4	C-1,2	(5.48)	0.32	0.05
5	C-2	(6.42)	0.32	0.10
6	C-2	(6.78)	0.22	0.08
7	C-2	(7.08)	0.36	0.09
8	C-2	(7.32)	0.34	0.07
9	C-2	(7.34)	0.38	0.05
10	C-2	(5.56)	0.31	0.06
11	C-2	(5.02)	0.28	0.06
12	C-2	(5.52)	0.29	0.06
13	C-2	(4.18)	0.32	0.04
14	C-2	3.46	0.31	0.09
15	C-2	1.97	0.28	0.07
16	C-2	0.88	0.29	0.04
17	C-2,3 D-2	7.78	0.12	0.04
18	C-2,3 D-2	8.72	0.36	0.06
19	C-2,3 D-2	9.18	0.28	0.04
20	C-2,3 D-2	9.36	0.22	0.04
21	C-2,3 D-2	9.59	0.24	0.04
22	C-2,3 D-2	9.88	0.33	0.04
23	C-2,3 D-2	(10.21)	0.33	0.06
24	C,D-3	(11.04)	0.17	0.04
25	C,D-3	11.58	0.27	0.04
26	C,D-3	11.41	0.26	0.06
27	C,D-3	10.55	0.43	0.06
28	C,D-3	10.75	0.29	0.05
29	C,D-3	11.27	0.43	0.07
30	C,D-3	10.17	0.24	0.04
31	C,D-3	10.92	0.23	0.06
32	C,D-3	11.38	0.23	0.04
33	C,D-3	10.58	0.28	0.05
34	D-3,4	11.34	0.21	0.05
35	D-3,4	11.42	0.24	0.04
36	D-3,4	11.78	0.31	0.05

番号	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)
37	D-3,4 E-3	11.35	0.28	0.05
38	D-3,4 E-3	11.85	0.24	0.05
39	D-3,4 E-3	11.76	0.26	0.04
40	D-3,4 E-3	11.90	0.35	0.04
41	D-3,4 E-3	12.41	0.36	0.06
42	D-3,4 E-3	(11.68)	0.35	0.04
43	D-4 E-3,4	(11.48)	0.24	0.06
44	D-4 E-3,4	(11.22)	0.44	0.06
45	D,E-4	(11.12)	0.32	0.03
46	D,E-4	(11.02)	0.46	0.05
47	D,E-4	(11.00)	0.41	0.03
48	D,E-4	(9.57)	0.36	0.05
49	D,E-4	9.81	0.21	0.04
50	D,E-4	9.32	0.21	0.05
51	D,E-4	10.05	0.26	0.03
52	D,E-4	9.75	0.28	0.04
53	D-4,5 E-4	(5.77)	0.28	0.03
54	D-4,5 E-4	(7.21)	0.23	0.04
55	D-4,5 E-4	(10.02)	0.18	0.03
56	D-5 E-4,5	(8.19)	0.21	0.03
57	D-4,5 E-5	(8.02)	0.27	0.02
58	D-5 E-4,6	(5.78)	0.36	0.04
59	E-5	(4.81)	0.37	0.03
60	E-5	(4.55)	0.38	0.03
61	E-5	(4.83)	0.36	0.02
62	E-5	(3.71)	0.31	0.03
63	E-5	5.37	0.18	0.03
64	E-5	(4.10)	0.29	0.04
65	E-5	(2.90)	0.28	0.03
66	E-5	(2.21)	0.17	0.04
67	E-4	(1.11)	0.21	0.02
68	D,E-4 E-5	(5.80)	0.21	0.03
69	E-4	(4.01)	0.23	0.04
70	E-4	2.12	0.15	0.03
71	E-4	4.92	0.17	0.04

全長は、7.50mから13.00mの中に集約される。幅にはばらつきがあるが、40cmを超えるものも確認されており、畝が重複した可能性も考えられる。また覆土、地山の検討から細分することが可能であるが、大部分が削平されているため、今回は数条の畝のまとまりの中で、その特徴を記したい。68~71号畝状遺構は、他の畝との方向性の違いか

ら耕作時期あるいは耕作物の相違が考えられ、2つの異なる畝の存在を想定しておきたい。

16~67号畝状遺構の覆土は、褐灰色(10YR4/1)の粘質土が主体で、灰黄色系のシルト質粘土を含み、基本土層A区ⅡB層の土と判断される。南側に向かうほど黄色みが増し、炭化物を多く含む。しまりは強く、シルトブロック(10YR7/3)を

第36表 A区畝状遺構一覧表(第150図)

番号	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)
72	I-5	(2.37)	0.21	0.03
73	I-5、6	4.76	0.20	0.04
74	I-5、6	5.12	0.21	0.04
75	I-5、6	(10.76)	0.19	0.03
76	H、I-5、6	(9.22)	0.19	0.03
77	H、I-5	(9.12)	0.17	0.03
78	H、I-4、5	(10.89)	0.29	0.03
79	H、I-4、5	(12.02)	0.22	0.02
80	G-4 H-4、5	(12.88)	0.24	0.03
81	G-4、5 H-5	15.48	0.21	0.03
82	G、H-4~6	20.32	0.23	0.03
83	G、H-4~6	18.21	0.24	0.03
84	G-4、5 H-5	9.21	0.27	0.03
85	G-4、5 H-5	8.81	0.29	0.02
86	G-4、5 H-5	10.54	0.34	0.02
87	G-5	8.88	0.24	0.03
88	G-5	8.96	0.27	0.02
89	G-5	6.54	0.24	0.03

番号	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)
90	G-5	5.02	0.23	0.03
91	G-5	5.08	0.22	0.03
92	G-5	3.40	0.24	0.02
93	G-5、6	4.41	0.27	0.03
94	G-5、6	3.09	0.51	0.03
95	G-5、6	1.91	0.41	0.03
96	G-5、6	3.30	0.53	0.04
97	G-6	2.29	0.34	0.04
98	G-6	2.56	0.29	0.03
99	H-6	6.19	0.22	0.02
100	H-6	10.22	0.21	0.03
101	G-6	3.60	0.23	0.02
102	G-6	1.32	0.15	0.03
103	G-6	1.41	0.15	0.03
104	G-6	3.43	0.29	0.02
105	H-6	6.29	0.21	0.02
106	G、H-6	6.71	0.21	0.02
107	G-6	2.48	0.17	0.02

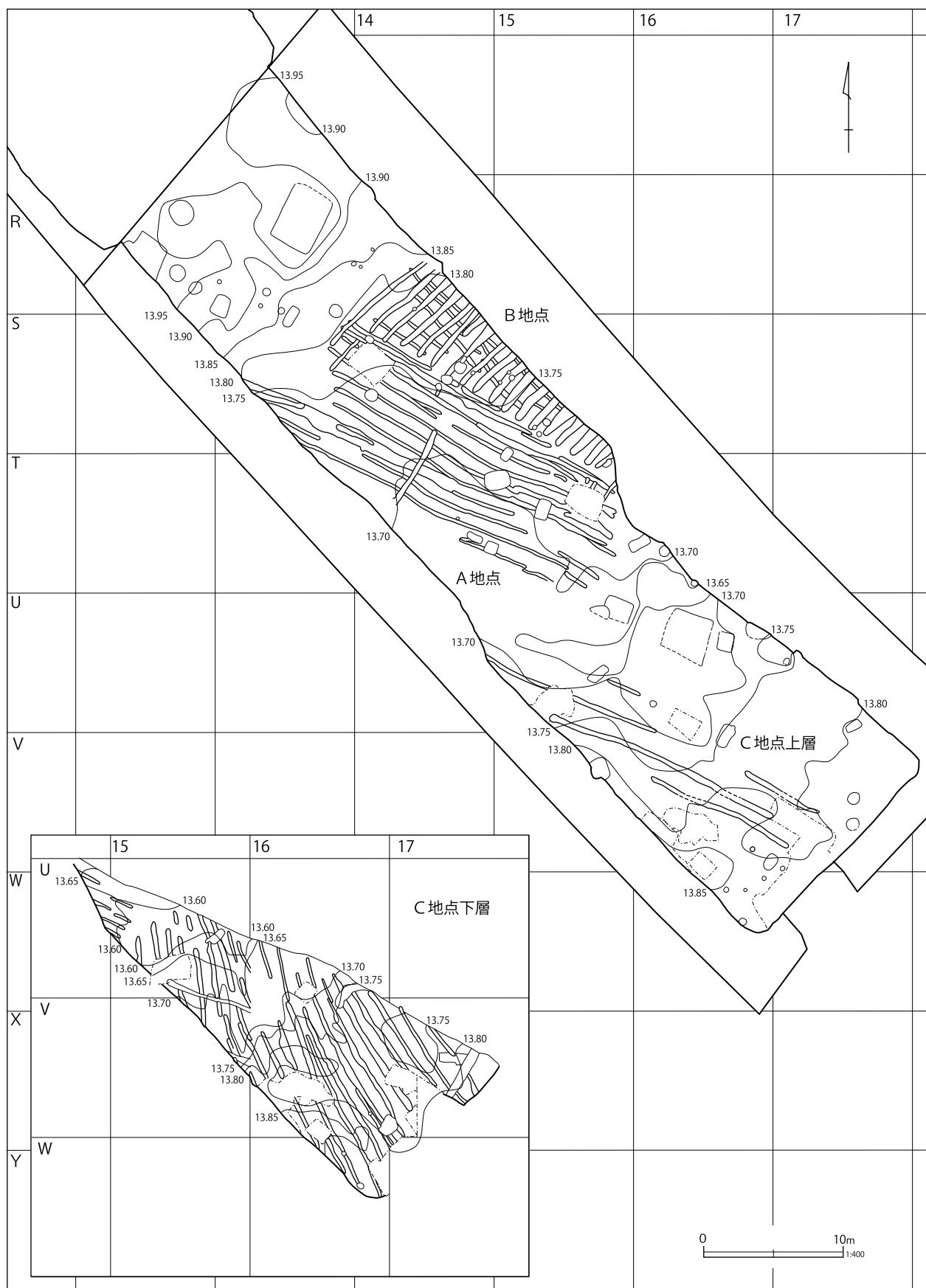
含んでいる。耕作時の高低差もあるが、北側と南側で覆土及び地山に若干の差異が認められている。

B地点では、北東から南西方向に延びる畝状遺構の覆土、地山の特徴を概観すると、覆土は黄褐色系のシルト質粘土が主体であり、基本土層A区ⅡB層に対比される。地山には、東西方向の高低差もあるが、概ね黒褐色～褐灰色の粘土で、黄褐色系のシルトブロックを主体とし、炭化物を含み、しまりはかなり強いことがわかる。また、地山に残る楕円形の耕作痕は、耕作時の鍬の痕跡ではないかと考えられる。

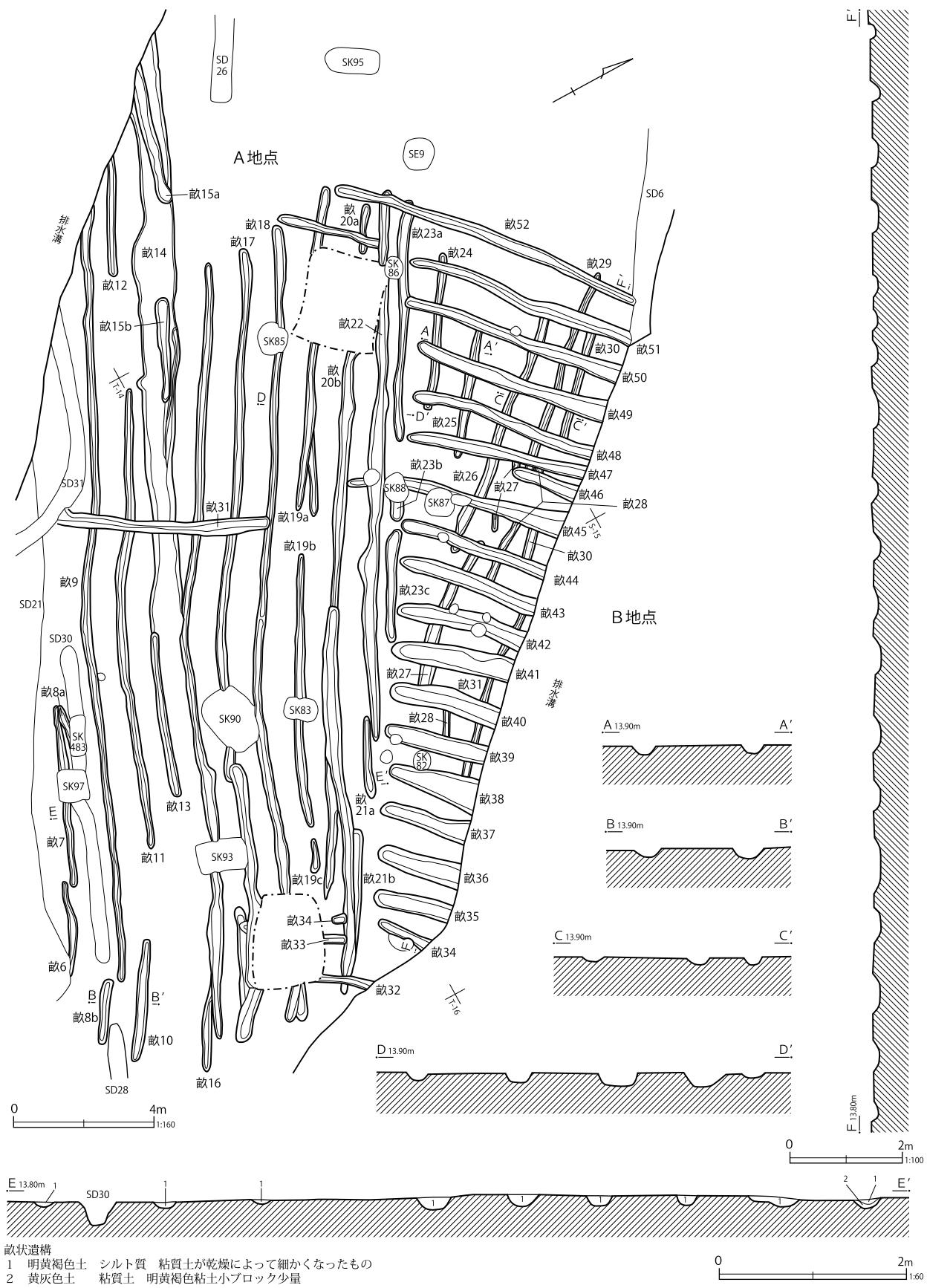
次に、東西方向に延びる68～71号の4条の畝状遺構は、南北方向に延びる畝状遺構を切るような形で検出された。これらは褐灰色の粘質土が主体で炭化物を少量含んでいる。また南北方向、東西方向の畝の新旧関係は、東西方向の畝状遺構の地山が、南北方向の畝状遺構の地山を切るような形で掘削されていることが確認された。このことから新旧関係は、南北方向の畝状遺構が古く、東西方向の畝状遺構が新しいと判断した。

C地点は、B地点より南に12.50mの間隔をあけて確認された。溝の総数は36条で、72～107号畝状遺構によって構成される。G-4～6、H-4～7、I-5～6グリッドから検出され、標高13.70mから14.10mの範囲に掘削されている。長いものでは20.32mの畝が確認された。短いものは1.3m程度で、こうした畝は上下方向にも畝状遺構が確認できることから、本来1つの畝として把握すべきであるが、調査の都合上、個別に番号を付した。C地点の覆土の特徴は、基本土層B区Ⅲ層上に構築され、上部にⅡ層を巻き込む形で堆積していることが確認できた。

以上のことから、今回の調査で確認された畝状遺構は、その掘削箇所から、2ないしは3つのグループに分けられる。さらに畝状遺構の掘削方向からも、2ないしは3つのグループに分けられると考えられる。C地点に見られる東西方向の畝状遺構は、B地点でも同様の方向の畝状遺構が検出されている。しかし、南北方向と東西方向の畝状遺構には長期にわたる時期差はなかったものと判



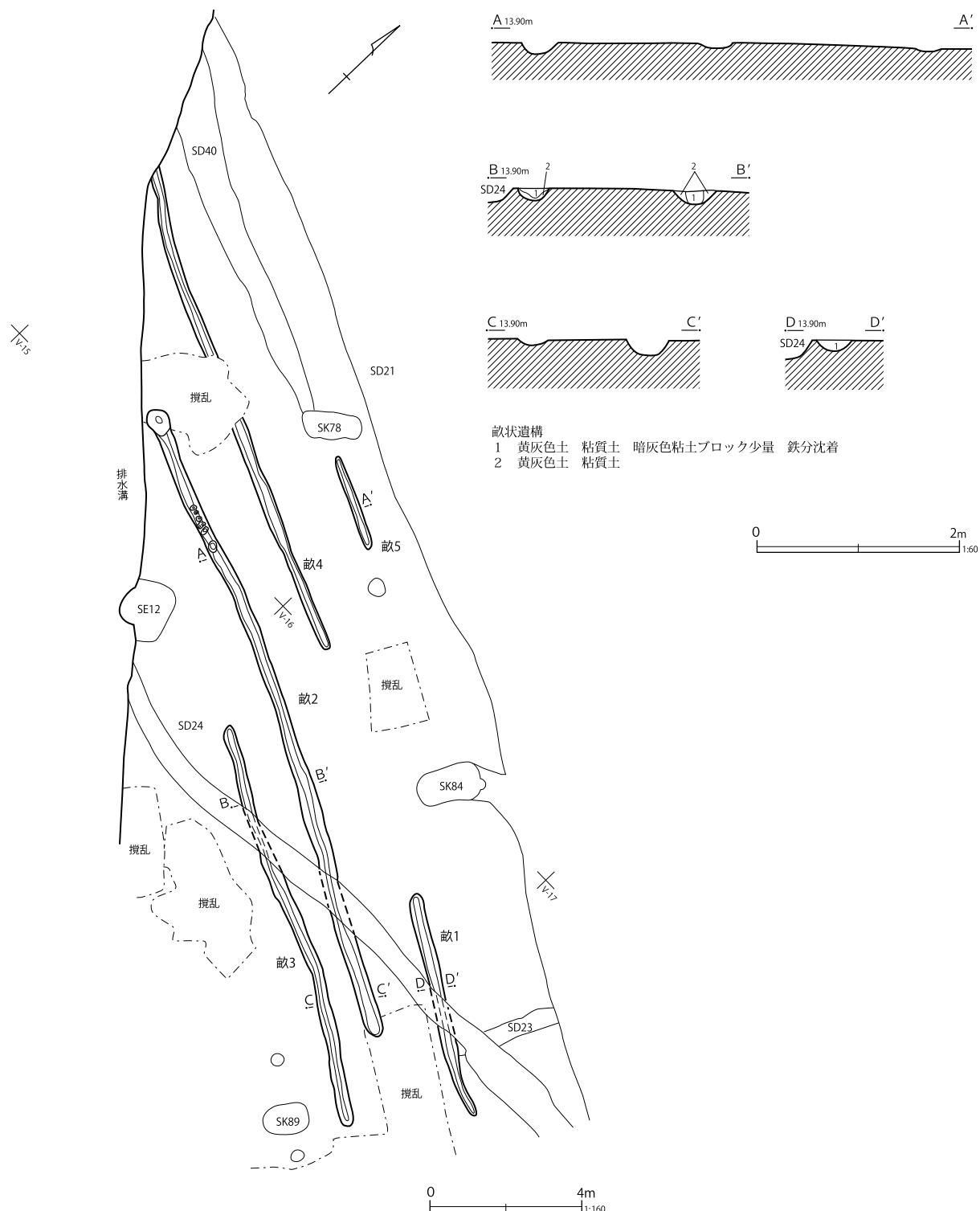
第151図 C区畝状遺構と地形



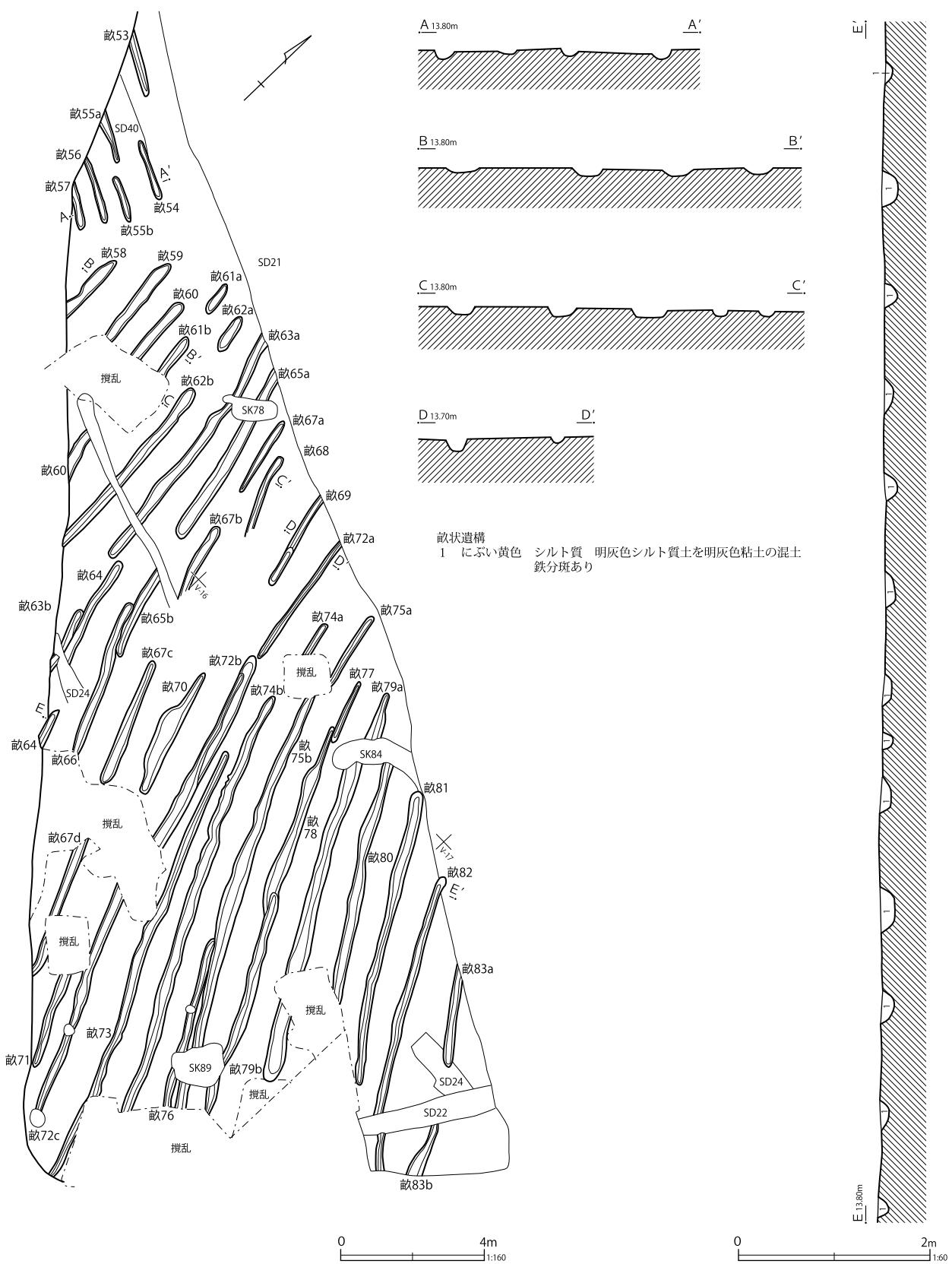
第152図 C区畝状遺構 A、B地点

断できる。畝状遺構は、6世紀後半から7世紀前半にかけて耕作された畠跡と考えられる。

なお、B区MグリッドからRグリッドにかけては、畝状遺構が検出されなかった。これはA区が



第153図 C区畝状遺構 C地点上層



第154図 C区縫状遺構 C地点下層

第37表 C区畝状遺構一覧表(第151～154図)

番号	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)
1	V-16,17	6.03	0.35	0.07
2	U-15 V-15,16	(16.83)	0.41	0.07
3	V-15,16	10.99	0.33	0.08
4	U-14~16	(11.47)	0.47	0.05
5	U-15,16	2.53	0.21	0.02
6	T-15	(2.61)	0.23	0.03
7	T-14,15	5.13	0.22	0.04
8	T-15	2.80	0.29	0.08
9	S-13 T-13~15	(21.94)	0.22	0.06
10	T-15	3.50	0.32	0.08
11	T-14,15	13.02	0.22	0.05
12	S-13	(3.40)	0.23	0.04
13	S-14,15	4.69	0.24	0.07
14	S-13,14 T-14	(16.80)	0.73	0.10
15	S-13,14	(7.12)	0.39	0.03
16	S,T-13~15	22.92	0.36	0.10
17	S,T-13~15	22.59	0.35	0.10
18	S,T-13~15	22.60	0.26	0.11
19	S-13~15 T-15	22.93	0.28	0.10
20	S-13~15 T-15	16.90	0.43	0.10
21	S,T-15	7.00	0.29	0.07
22	S-13~15	15.60	0.25	0.06
23	S-13~15	(10.46)	0.26	0.05
24	S-14	4.42	0.23	0.06
25	S-14	3.70	0.22	0.05
26	R,S-14	(7.12)	0.20	0.06
27	S-14,15	(5.26)	0.24	0.05
28	S-14,15	(3.06)	0.20	0.05
29	R,S-14	6.07	0.21	0.07
30	R,S-14,15	(9.10)	0.20	0.05
31	S,T-14	(5.92)	0.38	0.06
32	T-15	(1.44)	0.26	0.06
33	T-15	(0.62)	0.24	0.09
34	S,T-15	(1.61)	0.32	0.07
35	S,T-15	(2.30)	0.52	0.05
36	S-15	(2.50)	0.68	0.06
37	S-15	(2.66)	0.48	0.08
38	S-15	(2.68)	0.73	0.07
39	S-15	(3.10)	0.57	0.06
40	S-15	(3.27)	0.62	0.10
41	S-15	(3.50)	0.68	0.09
42	S-14,15	(3.75)	0.52	0.08

番号	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)
43	S-14,15	(4.10)	0.45	0.09
44	S-14,15	(4.35)	0.40	0.08
45	S-14,15	(6.46)	0.45	0.09
46	S-14	(2.07)	0.41	0.08
47	R,S-14	(5.18)	0.38	0.06
48	R,S-14	(5.42)	0.39	0.07
49	R,S-14	(5.73)	0.59	0.08
50	R,S-14	(6.52)	0.51	0.09
51	R-14 S-13,14	(10.12)	0.38	0.14
52	R-14 S-13,14	(9.12)	0.32	0.10
53	U-14	(1.80)	0.26	0.07
54	U-15	1.67	0.18	0.02
55	U-15	1.28	0.18	0.05
56	U-15	(1.16)	0.20	0.02
57	U-15	(0.82)	0.21	0.06
58	U-15	(2.06)	0.33	0.04
59	U-15	(2.66)	0.30	0.02
60	U,V-15	(5.62)	0.32	0.06
61	U-15	(2.14)	0.30	0.05
62	U,V-15	(6.86)	0.30	0.08
63	U,V-15	(9.81)	0.32	0.08
64	V-15,16	(6.68)	0.25	0.12
65	U,V-15	(7.88)	0.41	0.07
66	V-15,16	(4.40)	0.29	0.06
67	U,V,W-15,16	(12.35)	0.32	0.06
68	U-15	2.48	0.15	0.04
69	U-16	(2.78)	0.19	0.10
70	V-16	3.73	0.48	0.12
71	W-16	(2.72)	0.23	0.10
72	U,V,W-16	(17.78)	0.38	0.07
73	V,W-16	(12.76)	0.25	0.07
74	U,V,W-16	(13.25)	0.36	0.07
75	V,W-16	(12.20)	0.21	0.05
76	V,W-16	(4.80)	0.21	0.05
77	U,V-16	(1.85)	0.14	0.06
78	V-16	(11.20)	0.28	0.14
79	U,V-16	11.27	0.38	0.12
80	U,V-16	(6.78)	0.40	0.10
81	U,V-16,17	8.28	0.37	0.10
82	V-17	(7.98)	0.26	0.08
83	V-17	(4.25)	0.26	0.08

縄文時代後晩期の環状盛土遺構の盛土の影響を受けて、地山面が高くなっているのに対し、B区MグリッドからRグリッドにかけては浅い谷状地形

を形成しているため、畠地が造られなかったものと考えられる。

C区畝状遺構（第151～155図）

調査区南側のC区は、度重なる河川の氾濫によって土砂が厚く堆積し、北側に湾入する谷状地形のB区よりも微高地の発達が顕著であった。この高まりを中心に畝状遺構が認められた。畝状遺構は範囲と方向性から、大きくA、B、C地点の三つのグループに分けられ、更にC地点では上、下層の二面で重層的に検出された。C区で検出された畝状遺構の総数は83条である。

A地点は、6～31号畝状遺構の26条によって構成される。

6～31号畝状遺構は、R-14、S-13～15、T-13～15グリッドから検出された。東西方向に広がり、走行方向はN-60°-Wである。遺構は標高13.70mから13.80mの間にあり、北西方向から南東方向に延びると思われる。

B地点は、A地点の19～31号畝状遺構を壊して掘り込まれた32～52号畝状遺構の21条によって構成されている。A地点の畝状遺構と直交し、北東方向から南西方向に延びると思われるが、一部が調査区域外のため全長は不明である。

32～52号畝状遺構は、R-14、S-13～15、T-15グリッドから検出された。走行方向はN-40°-Eである。標高は13.70mから13.85mの範囲である。A地点の畝状遺構と重複し、A地点より掘削時期が新しい。また畝の掘り込み幅が全体的に広いことから、耕作物の違いも考えられる。畝の新旧関係であるが、東西方向の畝状遺構の地山が南北方向の畝状遺構の地山を切るような形で構築されていることが確認できた。このことから、南北方向が古く、東西方向が新しいと判断した。

C地点は1～5号畝状遺構の5条と、その下層で検出された53～83号畝状遺構の31条によって構

成されている。

1～5号畝状遺構は、U-14～16、V-15～17グリッドから検出され、東西方向に広がる。走行方向はN-65°-Wである。遺構は標高13.70mから13.80mの間にあり、北西方向から南東方向に延びると思われるが、一部が調査区域外のため全長は不明である。この1～5号畝状遺構は、53～58号畝状遺構の上層から検出された。

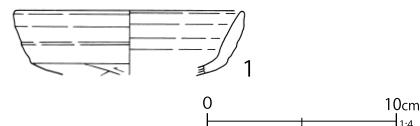
53～57号畝状遺構はU-14、15グリッドから検出され、東西方向に広がる。走行方向はN-65°-Wである。標高は13.60mから13.70mの間にある。

58～83号畝状遺構はU-15、16、V-15～17、W-17グリッドに位置する。走行方向はN-24°-Eである。遺構は標高13.60mから13.85mの間にある。

以上のように、畝状遺構はC地点下層の南北方向が最も古く、その後、A地点及びC地点上面の東西方向、最後にB地点の北東から南西方向のやや幅広の畝状遺構へと大きく変遷している。

畝状遺構から出土した遺物は、ほとんどが土師器の小破片である。第155図1に図示した土師器は、C区A地点の畝状遺構（T-14グリッド）の覆土中から出土した有段口縁壺の破片である。口縁部がやや厚く外側に開く形態である。時期は7世紀前半と考えられる。

このように住居跡周辺の空閑地を畠地として耕作したと考えられる。畠地の規模は、畝状遺構が調査区域外に延びるため不明である。



第155図 畝状遺構出土遺物

第38表 畝状遺構出土遺物観察表（第155図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	土師器	壺	(12.0)	[3.4]	—	CHIK	5	普通	灰褐	有段口縁壺 T14G (C区A地点)	

2. 奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡（第156～160図）

B区P-11、12グリッドに位置する。調査区中央部やや南寄りにあり、第2～5号住居跡に近接している。第1、5号住居跡はほぼ長軸方向を同じくする。これら5軒の住居跡は出土遺物等から時期差が見られ、近接した位置での建て替えが想定される。本住居跡の南西側には第2、6号溝跡が位置し、住居跡の南壁を壊している。また、東壁と北壁のコーナー部分には第11号土壙が検出されたが、本住居跡に壊されている。

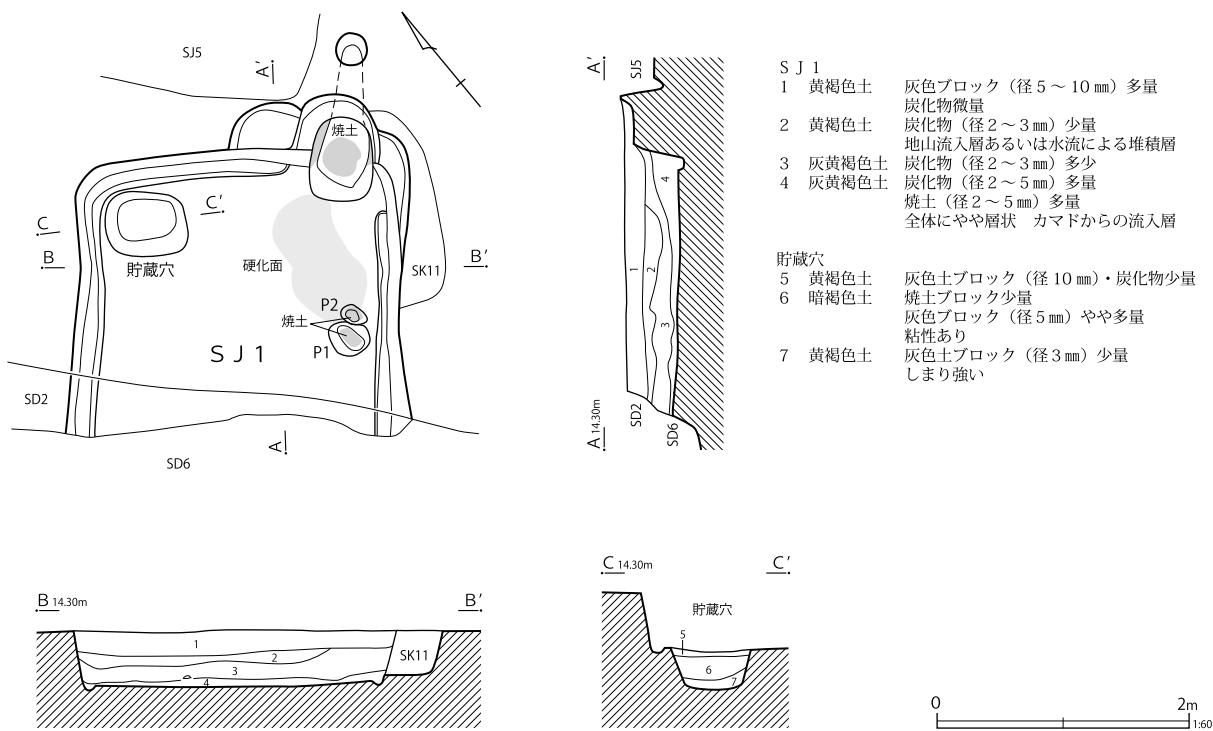
平面形態は南壁が確認できなかったが、南北方向にやや長い長方形と想定される。残存規模は主軸長3.12m、短軸長2.54m、深さ0.42mである。主軸方位はN-42°-Eである。

住居跡からは壁溝、カマド、貯蔵穴、柱穴2本が検出された。床面はほぼ平坦で、カマド前面を中心し硬化面が形成されていた。また、床面上には炭化物を多く含む第4層の灰黄褐色土で覆われ、

特に床面東側部分には炭層が広がっている。南東側の柱穴上面には焼土が残存している。

壁溝は壁直下で検出され、ほぼ全周している。壁溝の最大幅は24cm、最小幅は15cm、深さは4～9cmである。

カマドは北壁北東コーナーに付設され、壁面よりも外側に掘り込み、掛口部分が壁面と同じ位置にある。屋内に延びる袖は検出されず、壁面部分を利用して天井を構築したと考えられる。規模は全長132cm、焚口部分の幅50cm、深さ43cmである。煙道部は屋外に細長く延びる。煙道は地山をくり抜き掘削されていた。煙道の天井部分は地山が崩落せず円管状に残存し、被熱により赤色化していた。また、焚口から煙道部分の底面にはやや厚く灰層が堆積していた。灰層は、煙道部先端でやや厚く堆積していたが、焚口付近では灰の掻出しによりやや薄い堆積であった。煙道は長さ66cm、径20cmである。

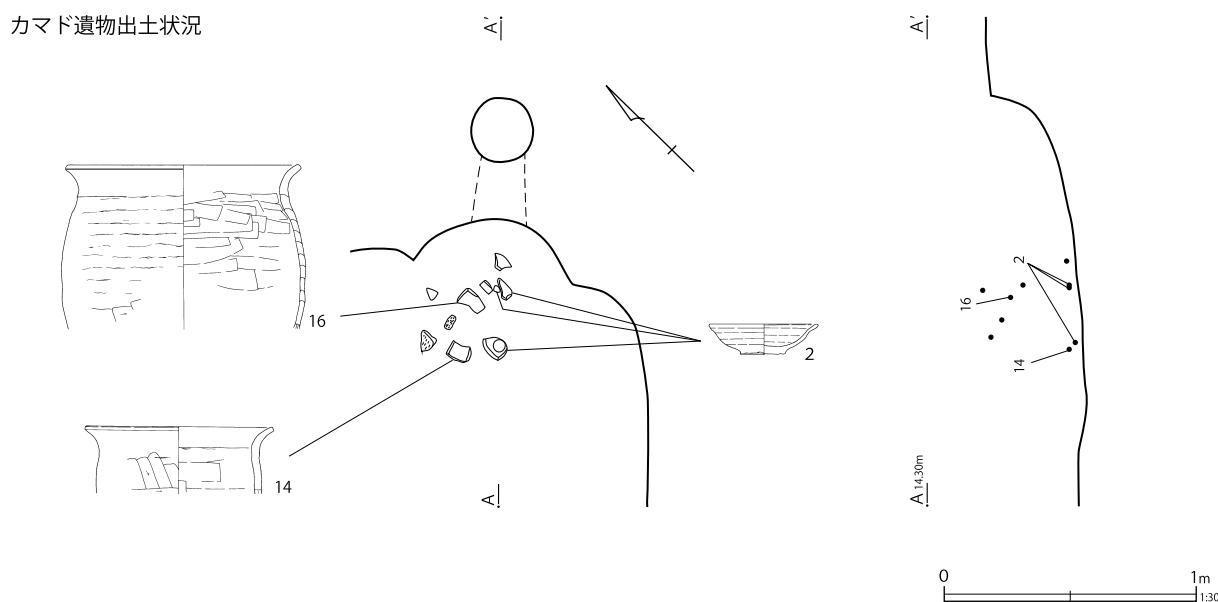
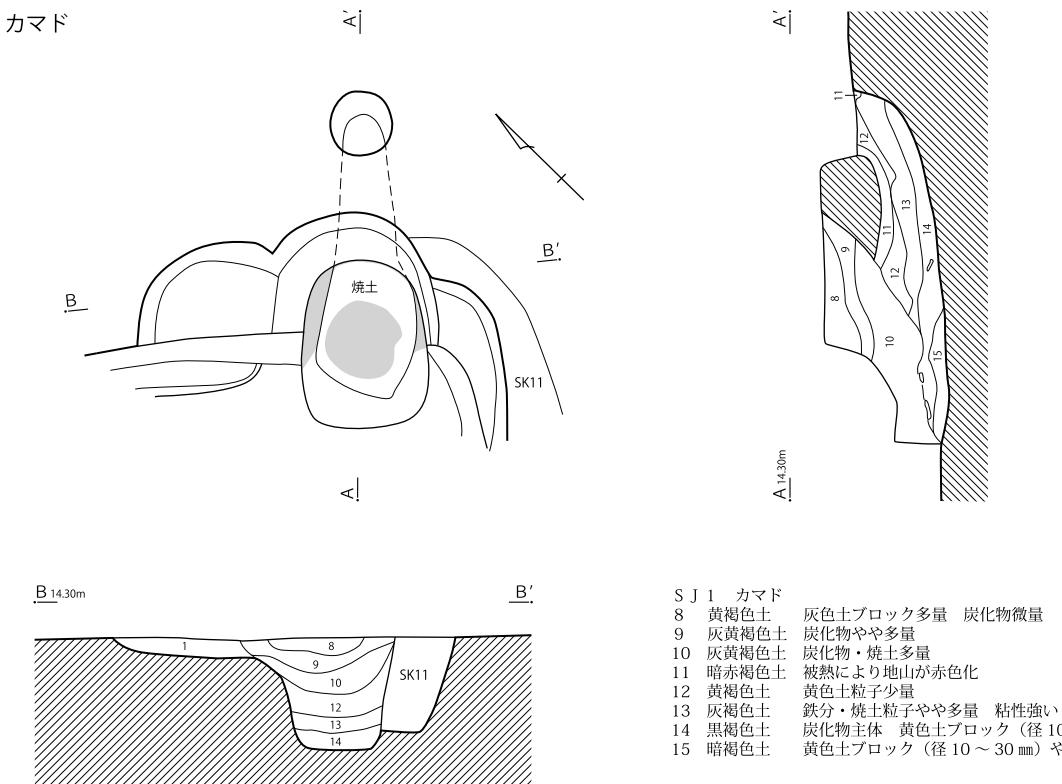


第156図 第1号住居跡

貯蔵穴は北西コーナーから検出され、平面形は隅丸方形で、やや逆台形に掘り込まれている。覆土は自然堆積で、灰色粘土ブロックを含む黄褐色～暗褐色土で覆われていた。規模は長径64cm、短

径48cm、深さ30cmである。

遺物は住居跡北壁側のカマド前面から貯蔵穴にかけて甕の破片が多く出土した。また、北壁側付近では、覆土上層からも甕の破片が多く出土して



第157図 第1号住居跡カマド

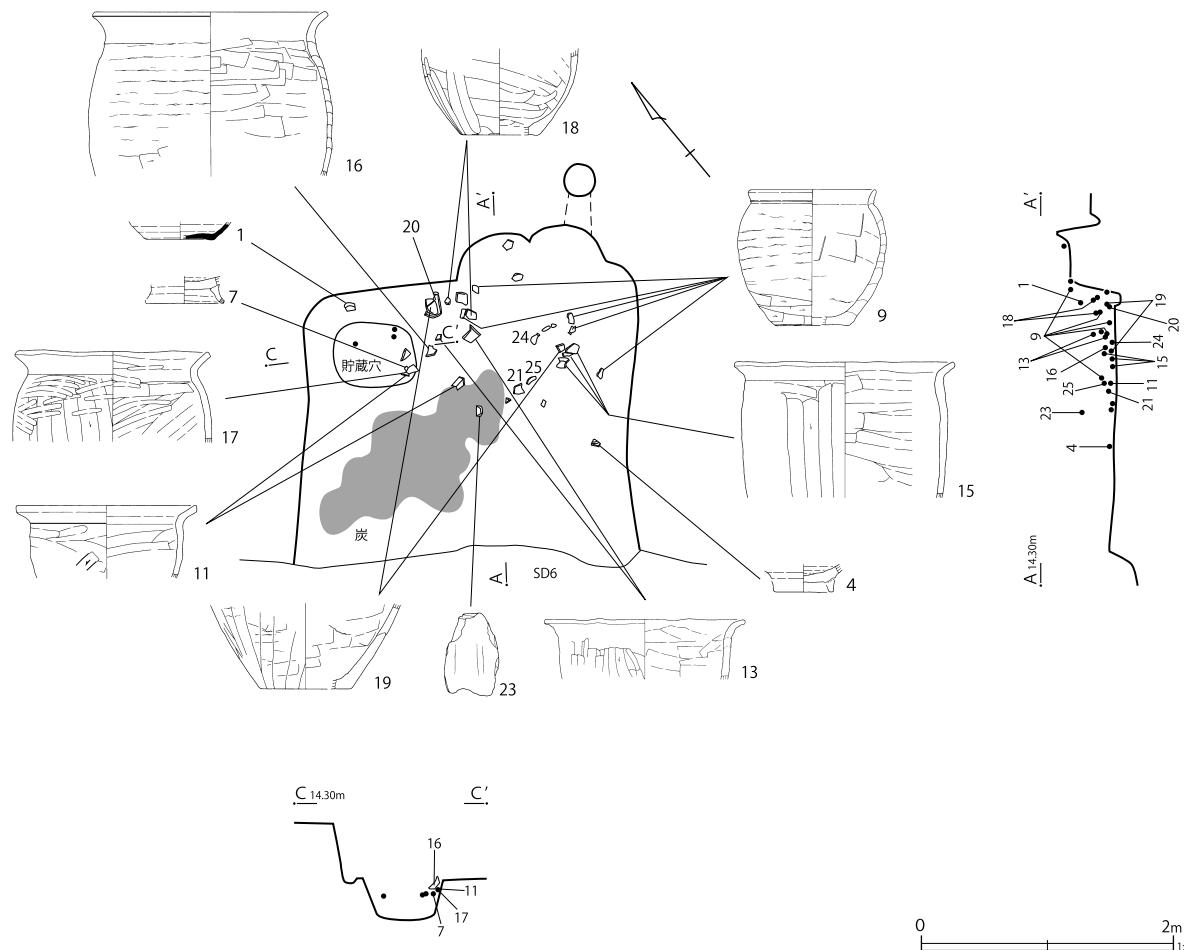
いる。さらに、住居跡中央付近の床面直上から甕等が出土している。こうした遺物の出土状況から判断すると、北壁側からまとまった量の遺物が、住居跡廃絶直後に投げ捨てられた可能性が高いと考えられる。第159図9の土師器小型壺の破片は、北壁付近の覆土上層と住居跡中央部の床面付近から出土し、高低差のある破片が接合した。

遺物は、第159、160図1～25に図示した須恵器壺・甕、口クロ土師器壺・高台付塊、土師器甕、砥石、鉄製品がある。

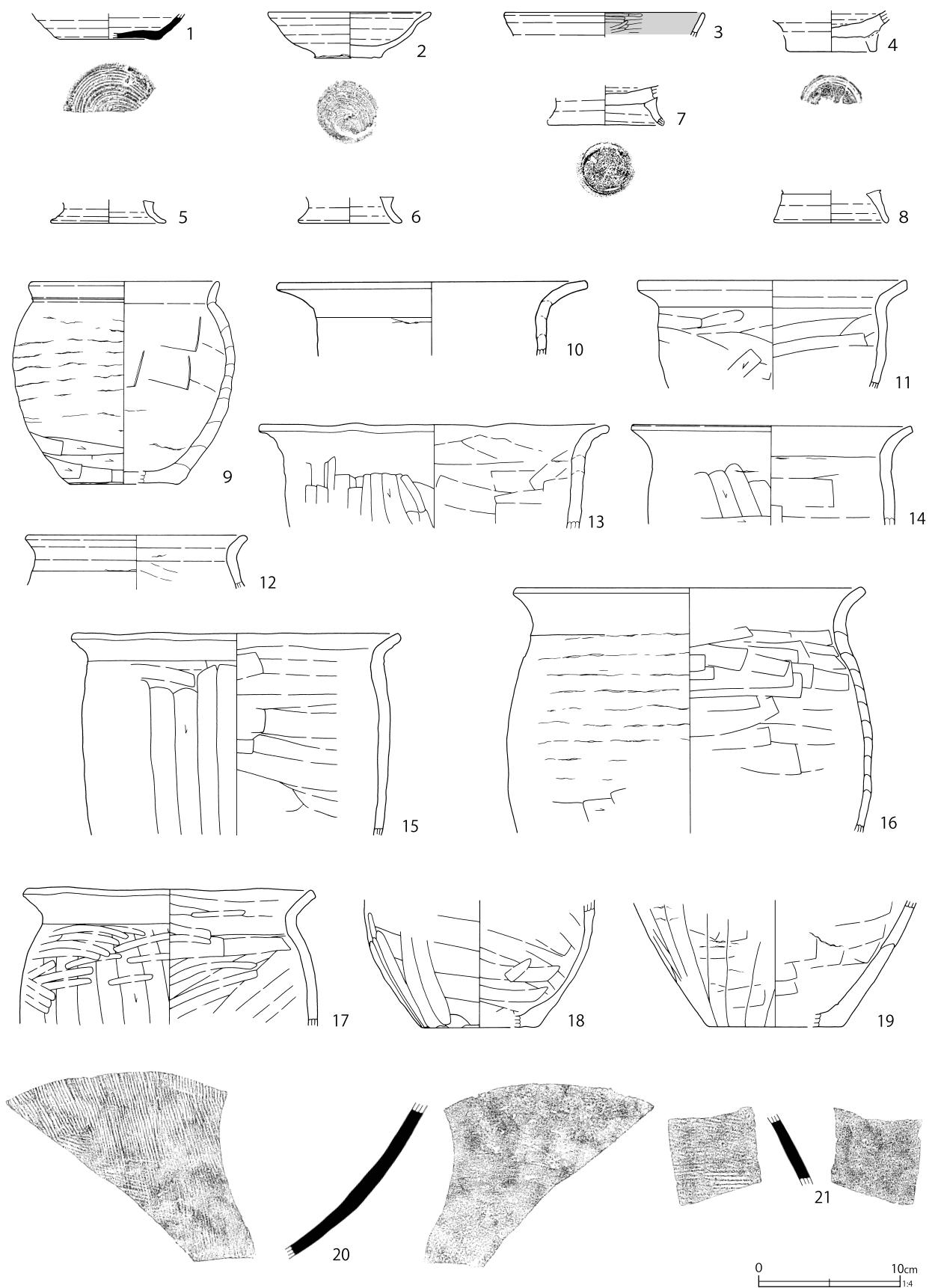
1は須恵器壺である。三毳窯跡群産と思われるもので、おそらく混入であろう。2～8は口クロ土師器で、2は底部の厚い小型壺である。3は内面にミガキの施された黒色土器（内黒壺）である。9は小型甕である。器壁が厚く、口縁部が外側に

短く開口する。胴部外面の調整は下端のみ横ヘラケズリが施される。他はナデまたは無調整で輪積痕が明瞭に残る。輪積の粘土紐は幅0.7～1.2cmで逆時計回りに積み上げている。胎土には、砂粒がやや多く含まれ角閃石が混在している。また、16は胴部にやや張りを持つ甕である。外面整形はほとんど行われずナデ整形され、輪積痕を明瞭に残している。輪積の粘土紐は幅1.0～1.2cmである。胎土には、砂粒が多く含まれ、角閃石と雲母片が含まれている。こうした造りが在地の甕の特徴と考えられる。17は胴部外面に横方向のナデが見られ常陸型甕の可能性がある。

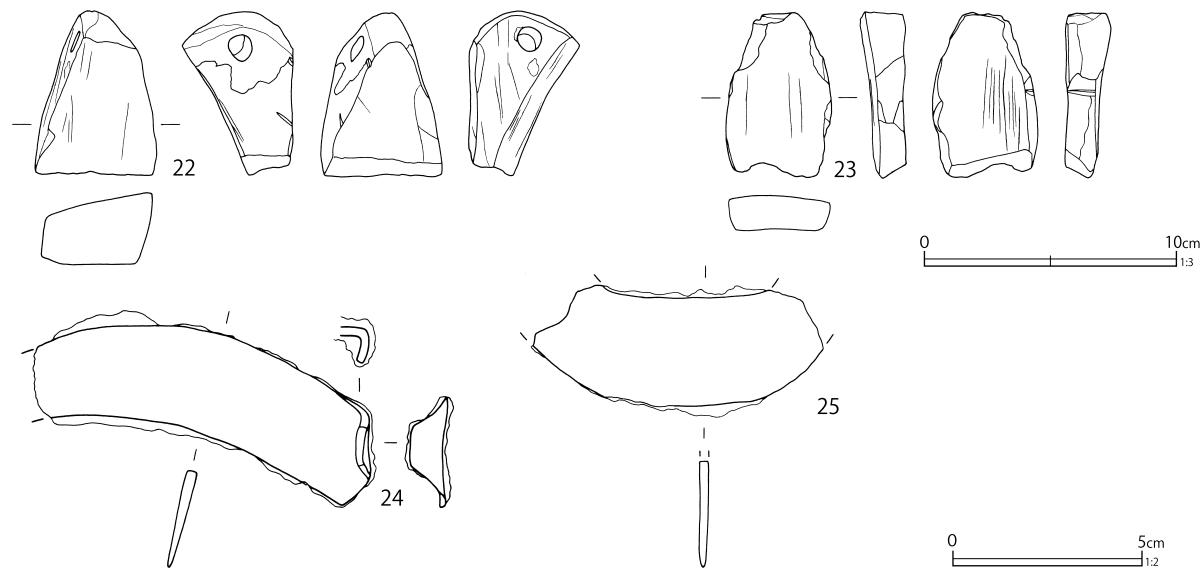
時期は高台付塊、小型壺と共に、ケズリ甕とナデ甕が伴出していることから10世紀前半から中葉頃の所産と推定しておきたい。



第158図 第1号住居跡遺物出土状況



第159図 第1号住居跡出土遺物(1)



第160図 第1号住居跡出土遺物(2)

第39表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第159、160図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	壺	—	[1.8]	(6.8)	IK	40	良好	灰白	三毳産か 器面滑らか No.2	
2	口クロ土師器	小型壺	11.2	3.1	4.8	CHI	85	普通	明黄橙	No.37.38.39 カマド2	77-9
3	口クロ土師器	壺	(14.0)	[1.7]	—	AHIK	5	普通	にぶい黄橙	内黒	
4	口クロ土師器	高台付壺	—	[2.0]	—	ACEHIK	20	普通	橙	No.41 上面	
5	口クロ土師器	高台付壺	—	[1.5]	(8.0)	ACHI	5	普通	にぶい橙	上面	
6	口クロ土師器	高台付壺	—	[1.8]	(7.2)	ACHI	25	普通	明黄橙		
7	口クロ土師器	高台付壺	—	[2.8]	—	CIK	95	普通	にぶい赤褐	底部ヘラケズリか? No.6 上面	
8	口クロ土師器	高台付壺	—	[2.3]	(8.0)	AEHIK	5	普通	にぶい橙	カマド2	
9	土師器	小型甕	(13.4)	14.2	(8.0)	EHI	50	普通	にぶい橙	輪積痕 No.3.16.28.29.30 カマド 上面	77-10
10	土師器	甕	(21.5)	[5.2]	—	ACHI	5	普通	にぶい褐	上面	
11	土師器	甕	(19.0)	[7.6]	—	ACHI	20	普通	にぶい黄橙	No.5.12	
12	土師器	甕	(15.4)	[3.7]	—	EIK	10	普通	灰黄褐	貯藏穴 上面	
13	土師器	甕	(24.6)	[7.3]	—	ACHI	20	普通	にぶい橙	No.8.11	77-11
14	土師器	甕	(20.0)	[7.0]	—	ACHI	10	普通	にぶい橙	No.31 カマド2	
15	土師器	甕	(23.0)	[14.2]	—	ACHI	20	普通	灰黄褐	No.20.22.27	77-12
16	土師器	甕	—	[15.8]	—	ACEHI	15	普通	橙	輪積痕明瞭 未調整 No.7.34 上面	77-13
17	土師器	甕	(20.0)	[9.5]	—	ACHI	20	普通	灰褐	No.5	77-14
18	土師器	甕	—	[9.0]	(8.0)	AEIK	20	普通	にぶい黄橙	内面指ナデ No.13.15 貯藏穴	
19	土師器	甕	—	[8.9]	9.2	ACK	30	普通	にぶい黄橙	外面煤付着 No.9.21 カマド2 SJ1上面	
20	須恵器	甕	—	[14.3]	—	IK	5	良好	灰白	湖西産か 外面平行叩き 内面当て具痕 No.10	
21	須恵器	甕	—	[5.1]	—	IK	5	良好	灰	東金子産 外面平行叩き 内面当て具痕 細密堅緻 No.18	
22	石製品	砥石	長さ [6.5] cm 幅 4.3 cm 厚さ 3.6 cm 重さ 100.6g					上面			
23	石製品	砥石	長さ [6.4] cm 幅 [4.2] cm 厚さ 1.6 cm 重さ 51.6g					No.1			
24	鉄製品	鎌	長さ [9.2] cm 幅 2.6 cm 背幅 0.25 cm 重さ 33.7g					No.25			
25	鉄製品	鋤先か	長さ [7.7] cm 幅 2.8 cm 厚さ 0.2 cm 重さ 25.9g					No.19			

第2号住居跡（第161、162図）

B区P-12グリッドに位置する。第1号住居跡の東側にあたる。住居跡の中央部にトレンチを入れたため、覆土上層が削られていた。

平面形態は方形で、規模は主軸長3.32m、短軸長2.72m、深さ0.27mである。主軸方位はS-67°-Eである。

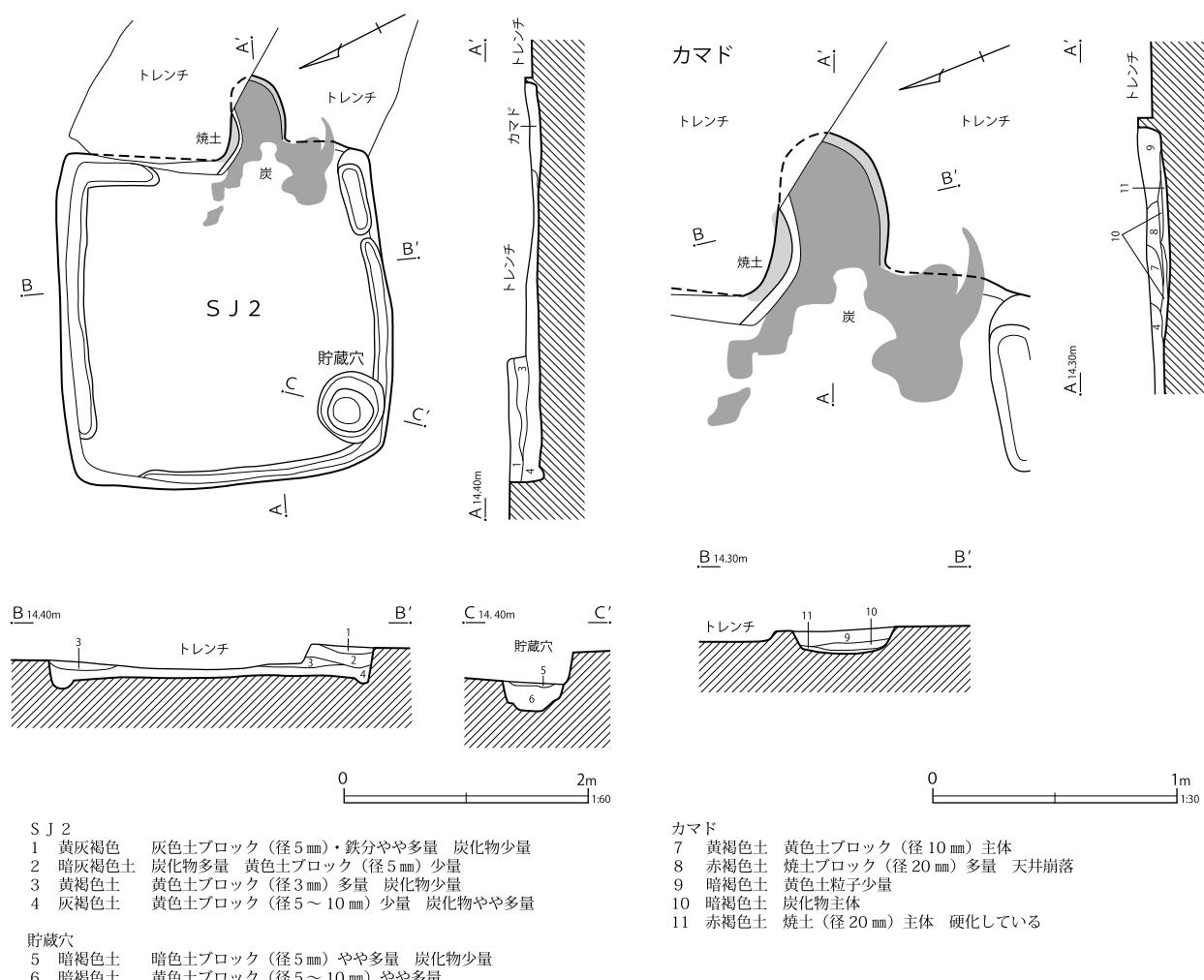
住居跡からは壁溝、カマド、貯蔵穴が検出された。床面はほぼ平坦である。壁溝は北西コーナー部分で途切れるものの、ほぼ全周している。壁溝の最大幅は20cm、最少幅12cm、深さ3~7cmである。

カマドは東壁やや南寄りに付設され、壁よりも外側に張り出して掘り込まれている。トレンチによって煙道部の一部が壊されている。屋内に袖は

検出されなかったことから、焚口部分は壁面と同じ位置にあたり、掛け口は壁外に位置すると考えられる。カマド底面は、地山が被熱により焼土化している。規模は全長91cm、幅40cm、深さ9cm、燃焼部は長さ48cm、幅47cm、深さ10cmである。

貯蔵穴は、カマドの反対側にあたる南西コーナー一部にあり、平面形態はほぼ円形である。規模は長径60cm、短径52cm、深さ22cmである。

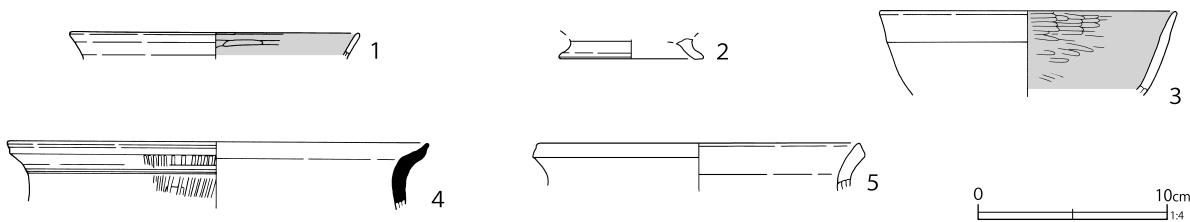
遺物は第162図1~5に図示したロクロ土師器塊・高台付塊、土師器甕、須恵器甕が出土した。1~3はロクロ土師器である。1は内面に黒色処理を施している。4は須恵器甕の口縁部破片である。外面には平行叩きが残る。5は土師器甕である。時期は10世紀前半から中葉と推定される。



第161図 第2号住居跡

第40表 第2号住居跡出土遺物観察表（第162図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	ロクロ土師器	塊	(15.2)	[1.3]	—	AIK	5	普通	灰黄	内黒	
2	ロクロ土師器	高台付塊	—	[1.0]	7.6	ACEHIK	90	普通	にぶい橙		
3	ロクロ土師器	高台付塊	(15.6)	[4.4]	—	AIK	10	普通	灰黄	体部外面未調整 内黒	
4	須恵器	甕	(22.4)	[3.5]	—	AIK	5	普通	にぶい黄		
5	土師器	甕	(17.0)	[2.5]	—	AIK	5	普通	褐灰		



第162図 第2号住居跡出土遺物

第3号住居跡（第163～165図）

B区P-12グリッドに位置する。北側を第2号住居跡、西側を第14号溝跡、南側を第6号溝跡に壊されている。

住居跡の覆土はほとんど検出できず、わずかにカマド側の東壁に一部掘り込みが検出されたのみである。平面形態は不明瞭である。規模は検出範囲で主軸長3.60m、短軸長1.96m、深さ0.11mである。主軸方位はS-56°-Eである。

住居跡からはカマド、柱穴が検出された。床面は平坦である。カマドは東壁で楕円状の掘り込みが検出された。掘り込みの規模は全長112cm、幅56cm、深さ10cm、焚口部や煙道部は確認できなかったが、燃焼部分の底面には炭化物が堆積していた。この炭化物層の上面から土器片がまとまって出土した。

柱穴はカマド南側で1本検出されたが、掘り込みは浅く、性格は不明である。規模は長径60cm、短径48cm、深さ11cmである。

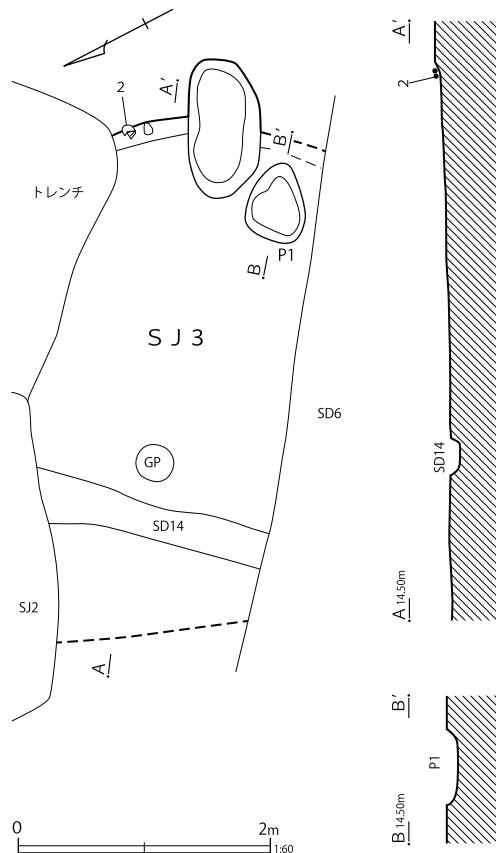
遺物は第165図1～5に示したロクロ土師器塊、土師器羽釜・甕等が出土した。

1は内外面にミガキが施された内黒土器である。

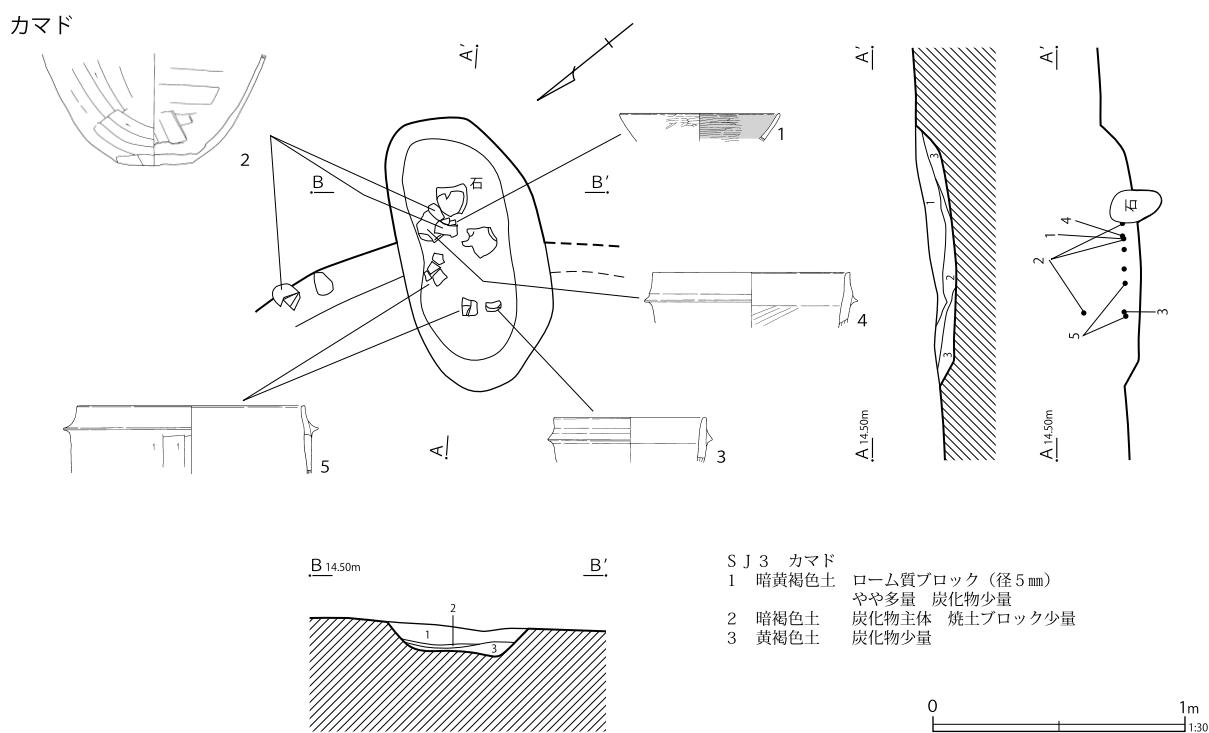
2は羽釜の胴部下端から底部にかけての破片であ

る。3～5は鐸の短い羽釜である。

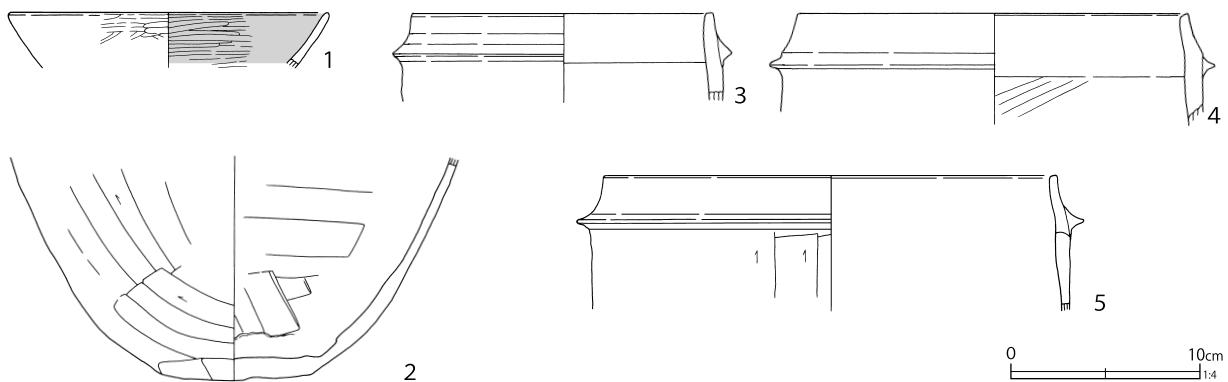
時期は10世紀中葉から後半である。



第163図 第3号住居跡



第164図 第3号住居跡カマド・遺物出土状況



第165図 第3号住居跡出土遺物

第41表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第165図)

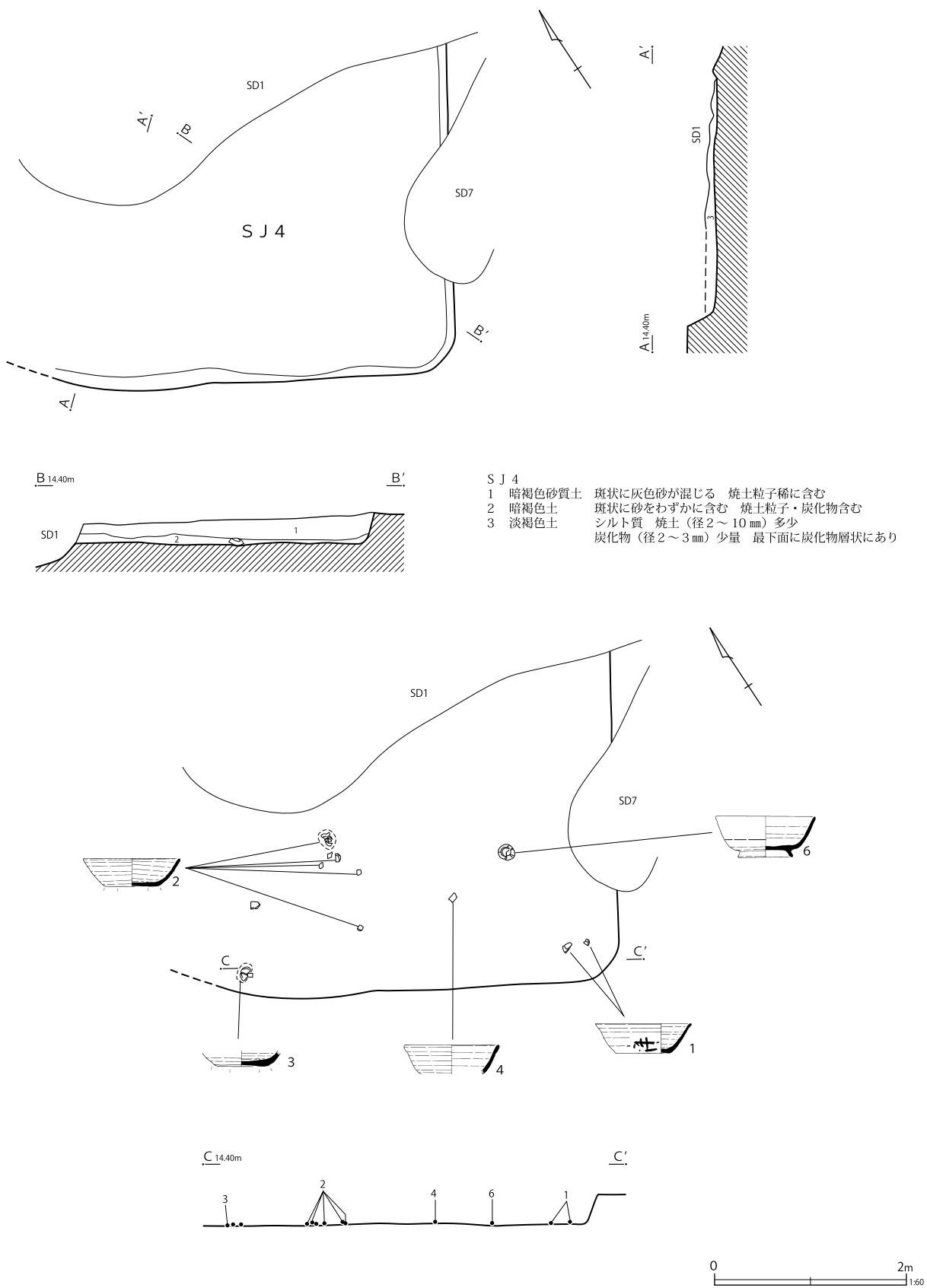
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	ロクロ土師器	塊	(16.8)	[2.8]	—	AIK	5	普通	にぶい黄	内黒 カマドNo.2	
2	土師器	羽釜	—	[11.8]	8.0	AIK	25	普通	にぶい黄橙	No.10 カマドNo.2.3 Q12G	
3	土師器	羽釜	(16.0)	[4.7]	—	ACEK	5	普通	にぶい黄橙	カマドNo.9	
4	土師器	羽釜	(20.8)	[5.9]	—	AHI	10	普通	灰褐	カマドNo.4	77-15
5	土師器	羽釜	(24.0)	[7.1]	—	AHIK	10	普通	明赤褐	No.6.8	77-16

第4号住居跡 (第166、167図)

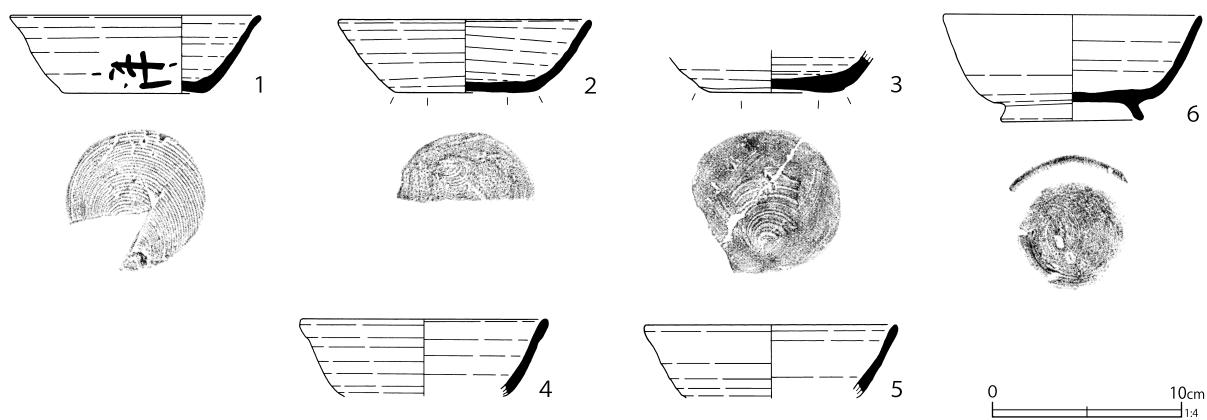
B区P、Q-10、11グリッドに位置する。北東側を第1号溝跡、東側を第7号溝跡に壊されている。

西側は後世の削平を受けている。

住居跡は南壁と東壁の一部が検出できたのみである。平面形態は方形である。残存規模は長軸長



第166図 第4号住居跡・遺物出土状況



第167図 第4号住居跡出土遺物

第42表 第4号住居跡出土遺物観察表（第167図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	壺	13.2	4.0	7.5	IK	50	良好	灰	東金子産 体部外面墨書 内外面火だす き有り №3.4	78-1
2	須恵器	壺	13.2	3.8	7.4	IK	60	普通	灰オリーブ	東金子産 糸切り後手持ちヘラケズリ №5.6.7.9.10	78-2
3	須恵器	壺	—	[2.2]	7.8	IK	65	普通	灰白	東金子産 糸切り後手持ちヘラケズリ №11	
4	須恵器	壺	(13.0)	[4.0]	—	IK	15	普通	灰白	東金子産 重ね焼き №1	
5	須恵器	壺	(13.0)	[3.8]	—	IK	10	良好	灰白	東金子産	
6	須恵器	高台付壺	13.4	5.5	(7.6)	IJ	90	良好	灰	東金子産 №2	78-3

4.10m、短軸長3.35m、深さ0.29mである。長軸方位はN-58°-Wである。

住居跡の覆土は南東コーナー部分が残存していたが、北側に向かって第1号溝跡の削平を受け、削り取られていた。壁溝やカマドは検出されなかった。床面はわずかな凹凸が見られたが、全体的に平坦である。住居跡中央よりやや西側の床面上には、炭化物層が堆積していた。

遺物は第167図に示した須恵器壺・高台付壺が、床面直上から出土した。1～6の須恵器は東金子産である。1の須恵器壺の体部外面には墨書があるが、判読できなかった。時期は、9世紀第1四半期である。東金子窯の製品がまとまって出土していることから、南比企窯や末野窯の操業がありながらも、東金子窯の製品がこの地まで流通していたことがわかる資料である。

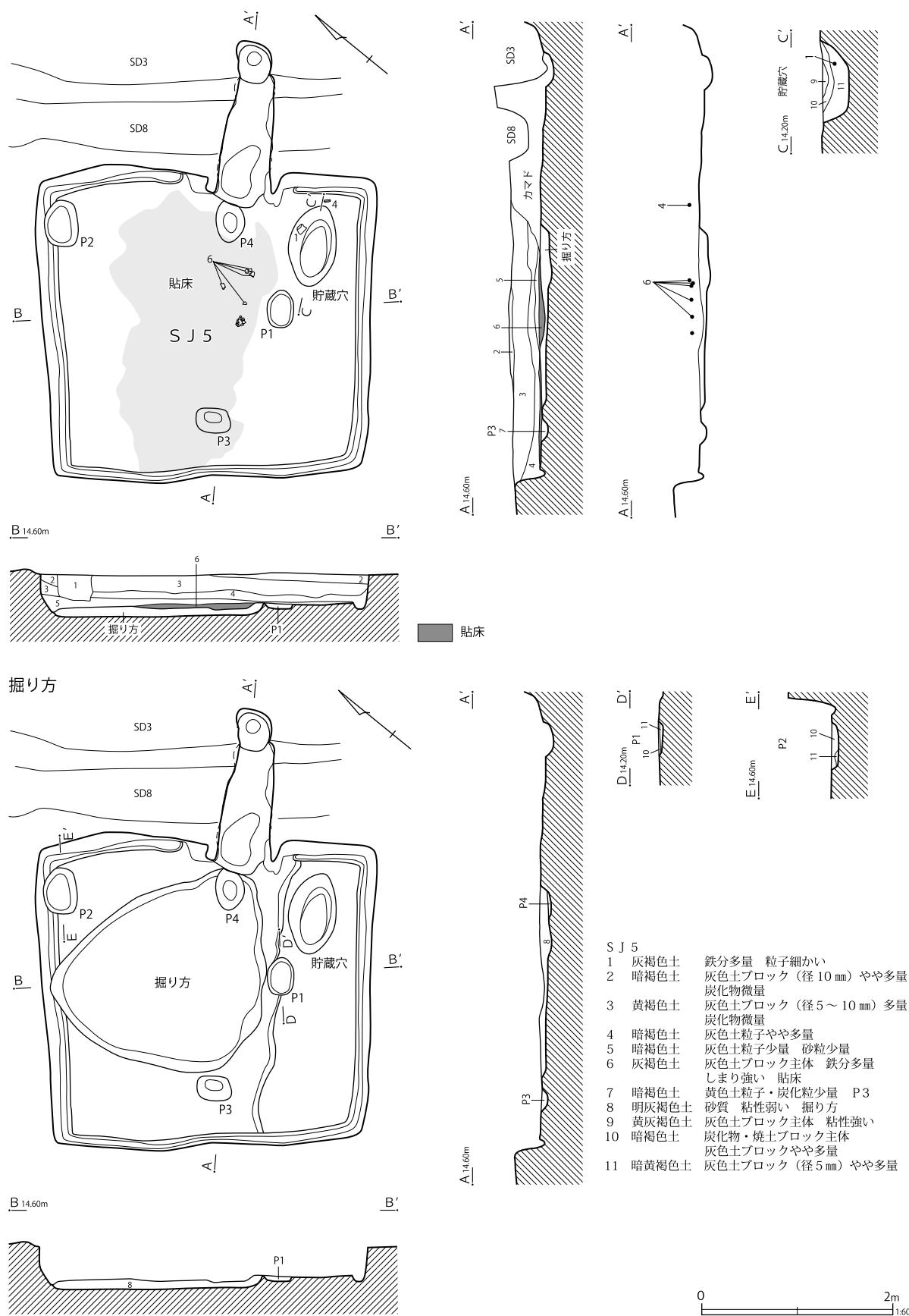
第5号住居跡（第168～170図）

B区O、P-12グリッドに位置する。東側を第3、8号溝跡に壞されている。本住居跡の南側には第1号住居跡、南東側には第2号住居跡が検出された。

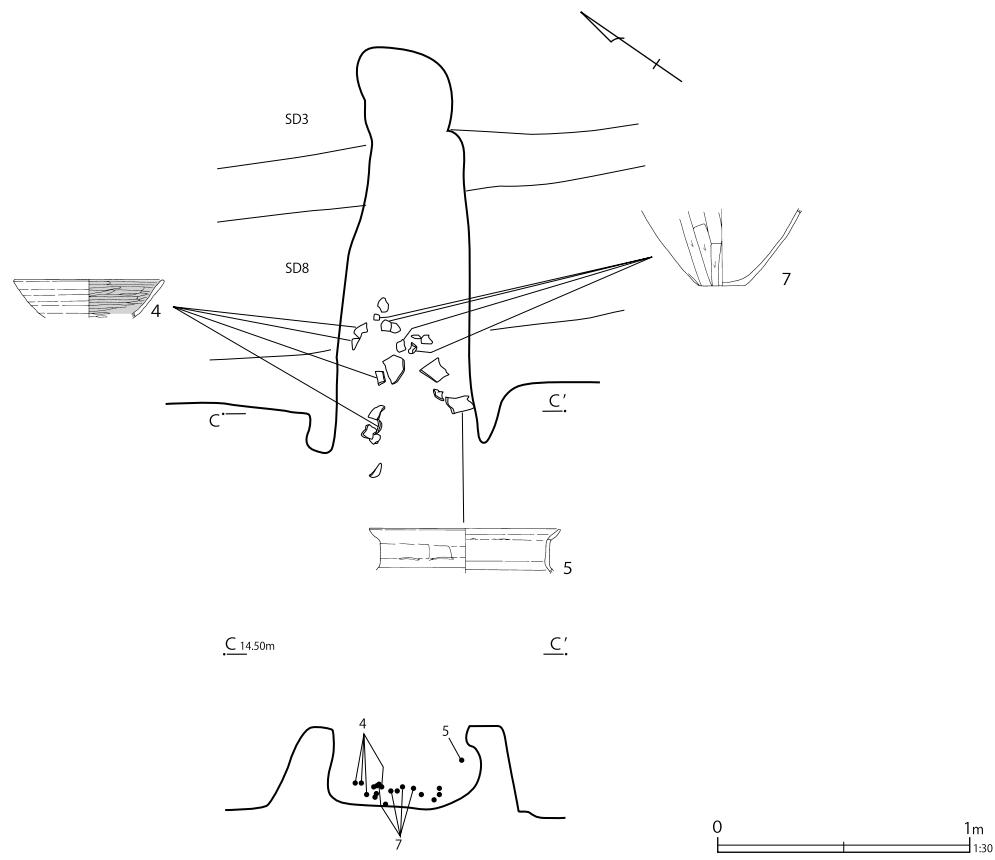
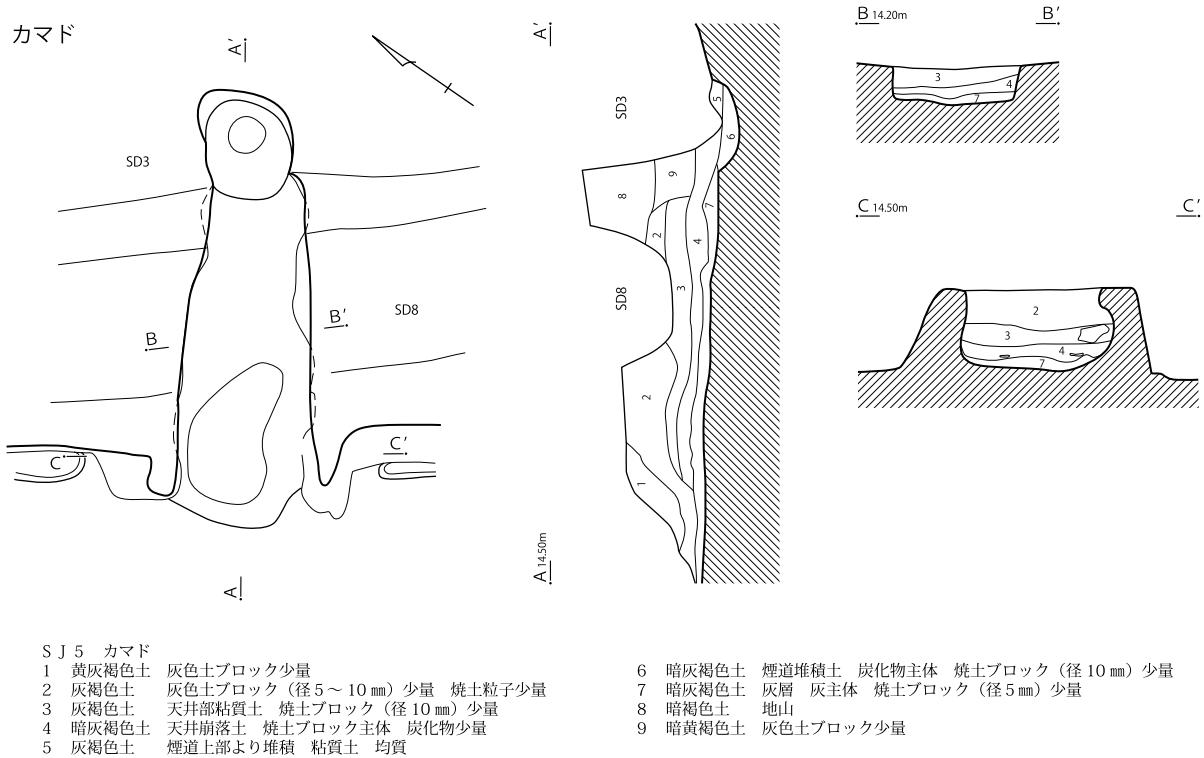
平面形態は方形である。規模は主軸長4.52m、短軸長3.42m、深さ0.35mである。主軸方位はN-50°-Eである。

住居跡からは、貼床、壁溝、カマド、貯蔵穴、柱穴4本が検出された。床面はわずかな凹凸が見られ、住居跡北西側の床面では貼床が確認できた。貼床の下から西側に広がる掘り方が検出された。壁溝は住居跡全体の壁際に巡っていた。規模は、最大幅21cm、最小幅11cm、深さ2～6cmである。

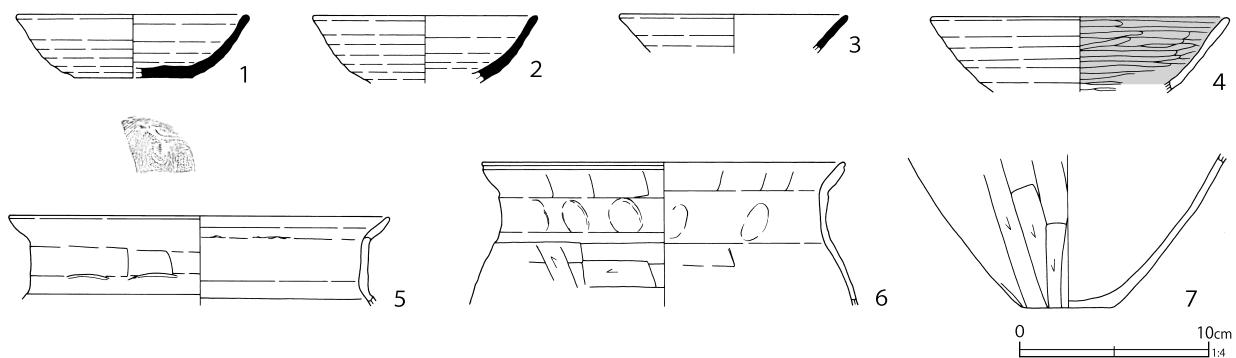
カマドは、北壁のやや東寄りに付設されていた。カマドの一部は、第3、8号溝跡によって壞され



第168図 第5号住居跡



第169図 第5号住居跡カマド・遺物出土状況



第170図 第5号住居跡出土遺物

第43表 第5号住居跡出土遺物観察表（第170図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	壺	(12.2)	[3.3]	(6.2)	IK	20	普通	褐灰	東金子産 No.8	78-4
2	須恵器	壺	(11.8)	[3.5]	—	IK	20	普通	灰	東金子産	
3	須恵器	壺	(12.2)	[2.0]	—	EIK	10	普通	灰	末野産 重ね焼き	
4	口クロ土師器	壺	15.6	[3.9]	—	IK	40	普通	灰白	内黒 No.1 カマドNo.1.2.8.15 P2	78-5
5	土師器	甕	(20.0)	[4.7]	—	ACHI	5	普通	橙	武藏型甕 No.13	
6	土師器	甕	(19.0)	[7.6]	—	ACHI	15	普通	橙	武藏型甕 No.2.3.4.5.6 カマド	
7	土師器	甕	—	[8.0]	(5.0)	AHIK	10	普通	明赤褐	武藏型甕 カマドNo.3.5.6.19	

ているが、住居跡の壁面より外側に長く突出して掘り込まれている。規模は全長172cm、幅80cm、深さ31cm、煙道部は長さ66cm、幅36cm、深さ30cmである。カマド袖は残存せず、焚口部分は不明瞭であるが、壁部分を利用して天井を構築し、掛け口を造り出していると考えられる。カマド構造の特徴としては、住居壁をカマド袖を利用して焚口から天井部の粘土を積み上げ、燃焼部はあまり大きく膨らまず、地山をほぼ垂直に掘り込んで燃焼部の壁面を造り出している。煙道はその延長上に延び、底面に段差や傾斜を持たず、ほとんど水平に掘り込み、先端部を上方に立ち上げる構造であると考えられる。このため、煙道先端の底面には円形の掘り込みが見られ、第6層として観察した炭化物層が堆積している。この地域における特徴的なカマド構造と考えられる。

貯蔵穴は北東コーナーで検出され、平面橢円形で、規模は長径84cm、短径51cm、深さ27cmである。

ピットは4本検出された。貼床の下面で検出されたP1、P3、P4は、覆土に炭化物、焼土ブロックを多く含むことから、柱穴ではなく、炉跡の可能性もあるが、性格は不明瞭である。

遺物は第170図1～7に図示した須恵器壺、口クロ土師器壺、土師器甕が出土した。1、2は東金子産の須恵器壺で、器壁が厚く、底部も厚みがあり、やや重量感がある。3は末野産須恵器壺で器壁はやや薄く軽量である。4は内黒土器である。5～7は武藏型甕である。出土した土器は武藏地域で生産されたものが主体を占めており、この時期までは、武藏国内の土器が安定期に供給されていたことがわかる。時期は9世紀第3四半期と考えられる。

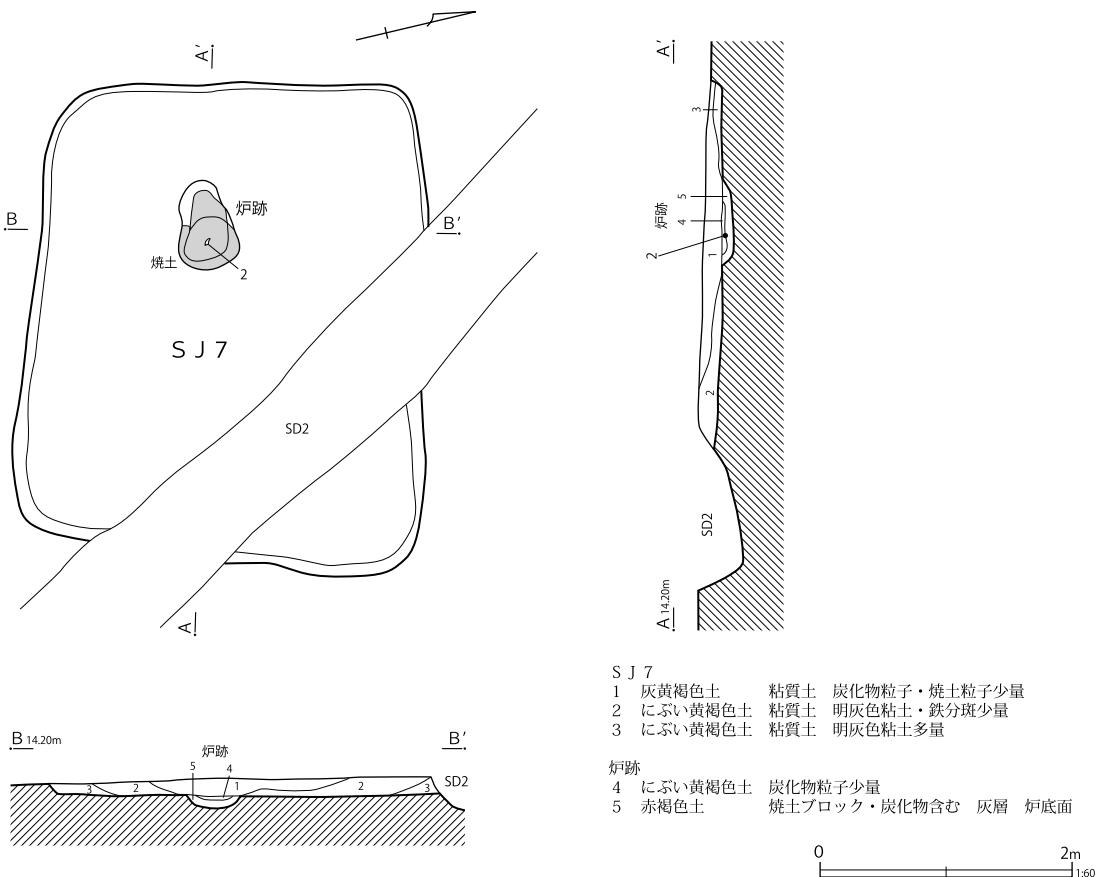
第7号住居跡（第171、172図）

B区O-10、11グリッドに位置する。第2号溝跡に東側を壊されている。第1号住居跡の北西約13mにある。

平面形態は長方形である。規模は主軸長3.82m、短軸長3.02m、深さ0.16mである。主軸方位はN-74°-Wである。

住居跡の床面は平坦で、壁溝は検出されなかった。住居跡の中央やや西寄りに炉跡が検出された。規模は長径71cm、短径42cm、深さ9cmである。

遺物は第172図1～3に図示した須恵器坏、ロクロ土師器高台付塊が出土した。1、3は東金子産である。時期は不明確であるが、9世紀後半から10世紀と推定される。



第171図 第7号住居跡



第172図 第7号住居跡出土遺物

第44表 第7号住居跡出土遺物観察表（第172図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	坏	—	[2.2]	(6.0)	EHIK	20	良好	灰オリーブ	東金子産 底部台状に突出する	
2	ロクロ土師器	高台付塊	—	[1.8]	(7.0)	AHI	20	良好	にぶい橙	No.1 炉	
3	須恵器	坏	—	[0.6]	—	CEHIK	20	普通	灰黄褐	東金子産 底部回転糸切り	

第9a号住居跡（第173図）

調査区中央部の西寄り、A区L-7グリッドに位置する。本住居跡は第9b号住居跡上面で検出した。本住居跡の南側にある第7号住居跡まで約40m、北側で検出した第10号住居跡まで約20m離れ、周辺の住居跡とやや距離を置いて構築されている。

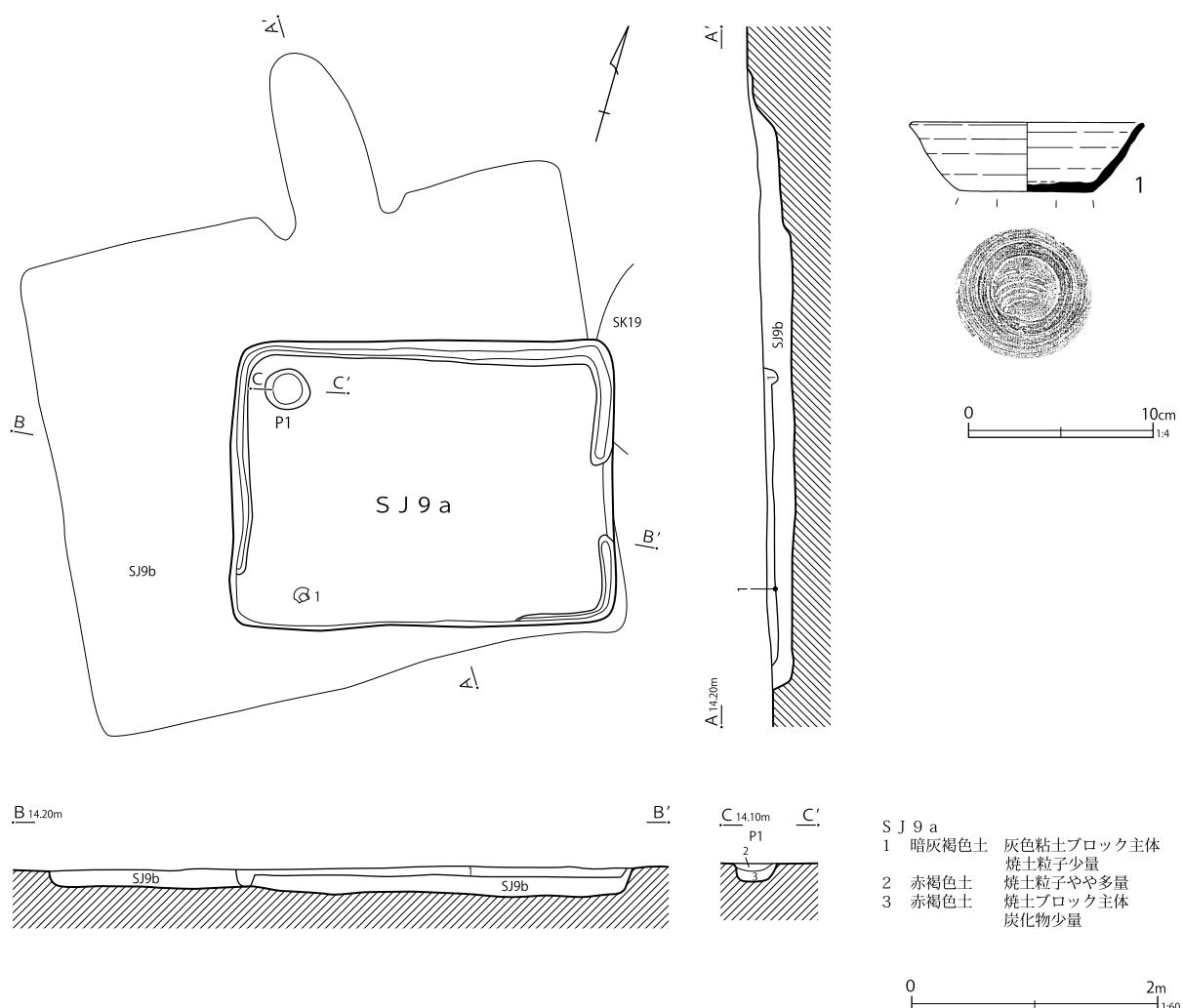
平面形態は長方形である。規模は長軸長3.10m、短軸長2.32m、深さ0.08mである。長軸方位はN

-77° -Eである。

床面は緩やかな起伏があり、壁溝は南壁側を除き、西壁から北壁、東壁にかけて巡っている。規模は最大幅19cm、最少幅10cm、深さ6cmである。

柱穴は北西コーナーで検出され、平面形は円形である。規模は直径36cm、深さ15cmである。

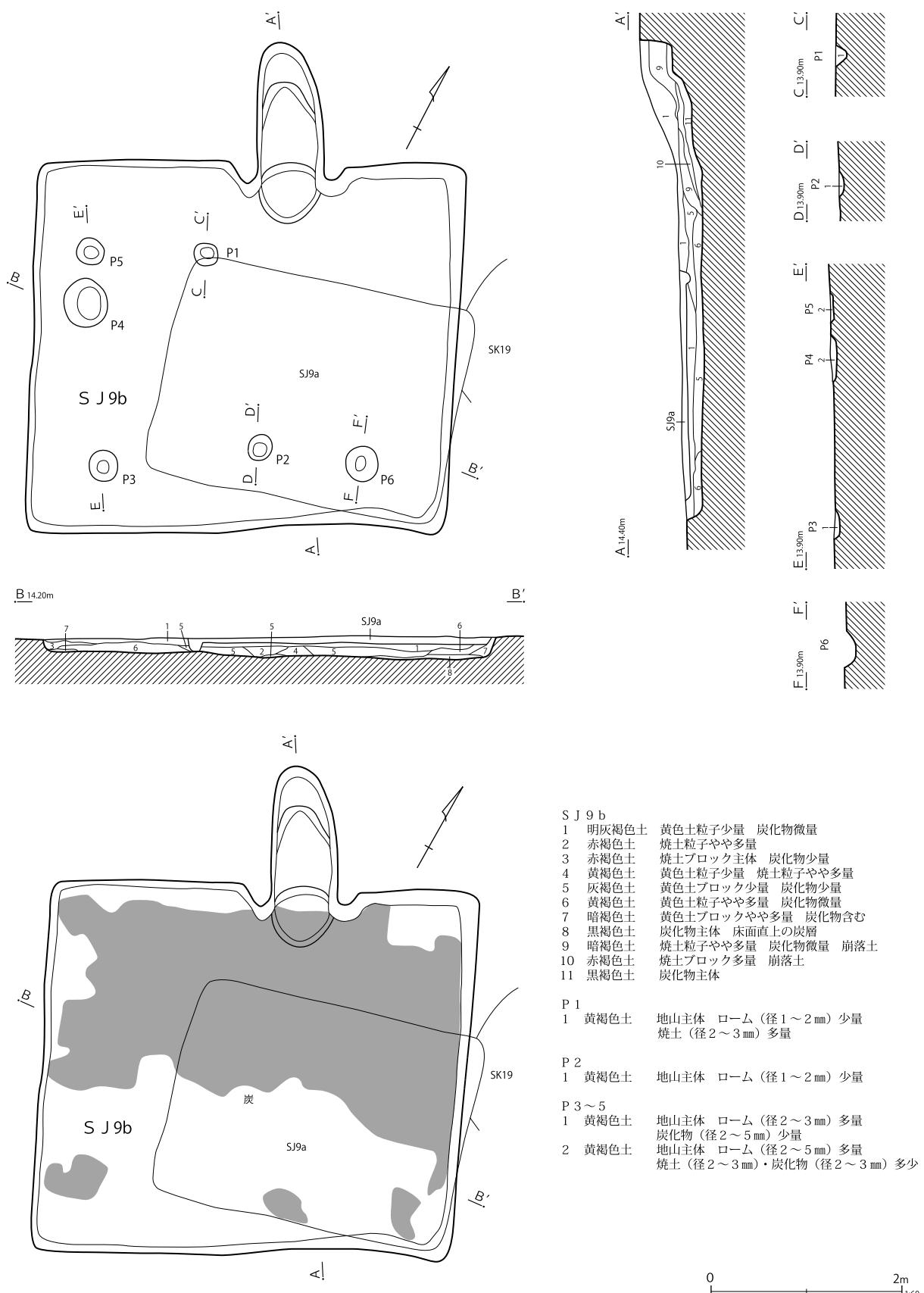
遺物は第173図1に図示した須恵器壺が出土した。南比企産の壺で胎土に白色針状物質を含む。時期は8世紀第4四半期頃である。



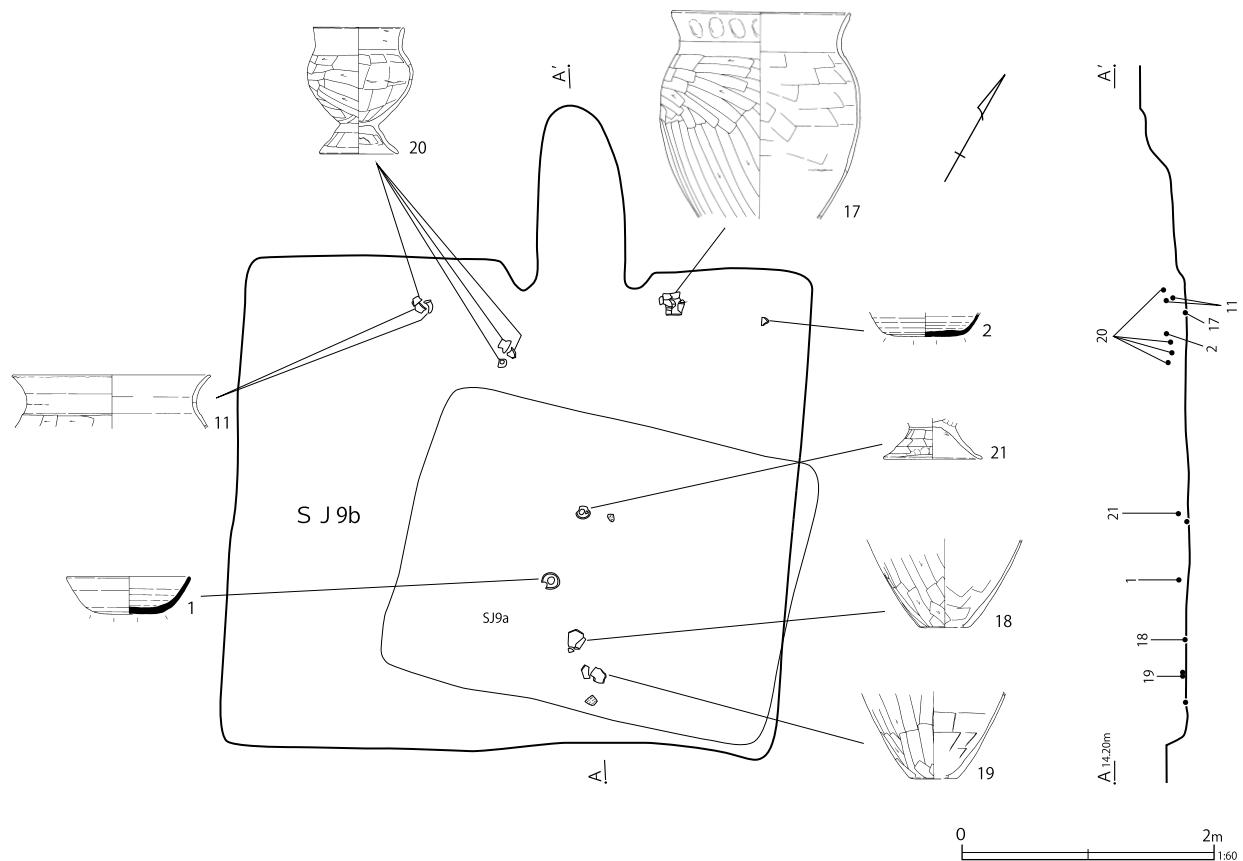
第173図 第9a号住居跡・出土遺物

第45表 第9a号住居跡出土遺物観察表（第173図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	壺	12.4	3.9	7.2	EIJK	60	普通	灰黄	南比企産 底部外周回転ヘラケズリ	78-6



第174図 第9b号住居跡



第175図 第9 b号住居跡遺物出土状況

第9b号住居跡（第174～178図）

A区L-7グリッドに位置する。第9 a号住居跡に壊されている。

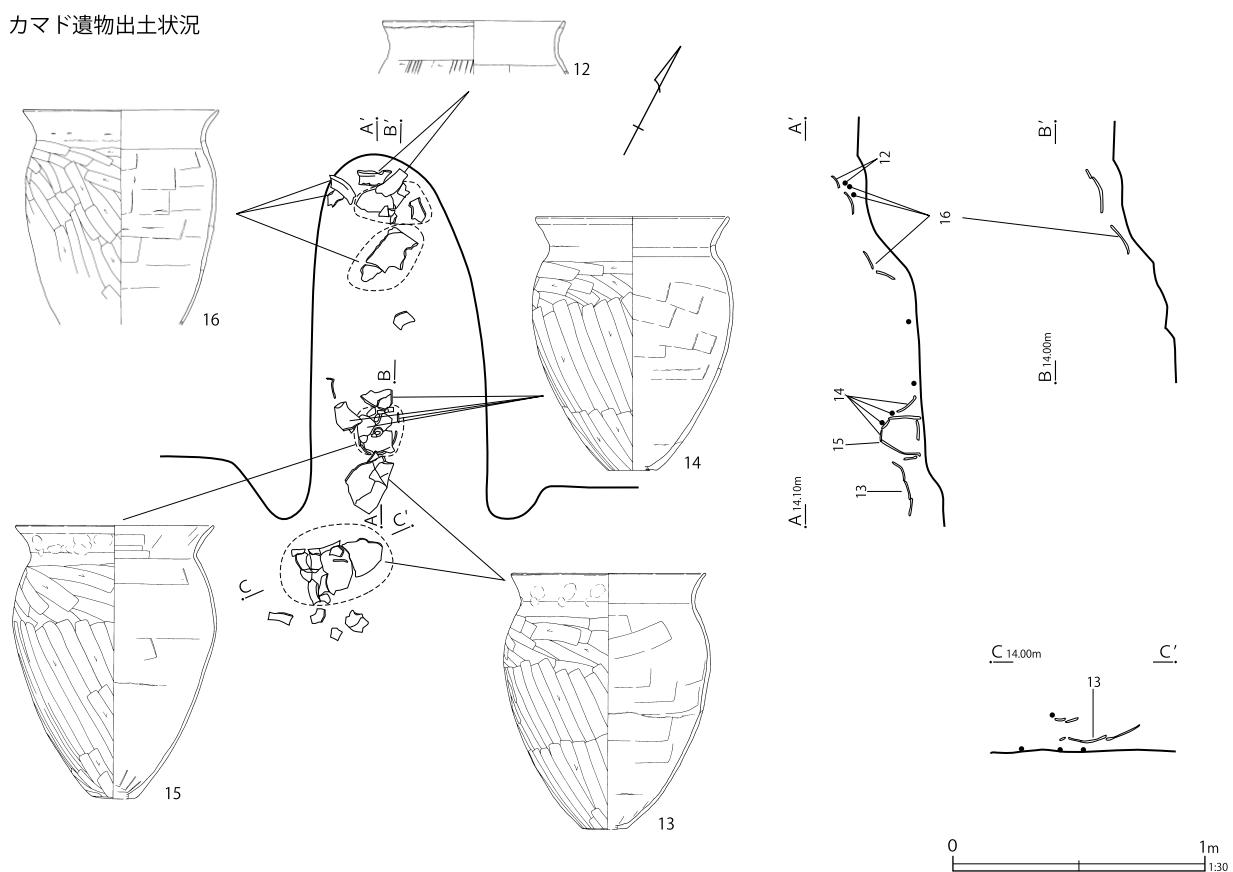
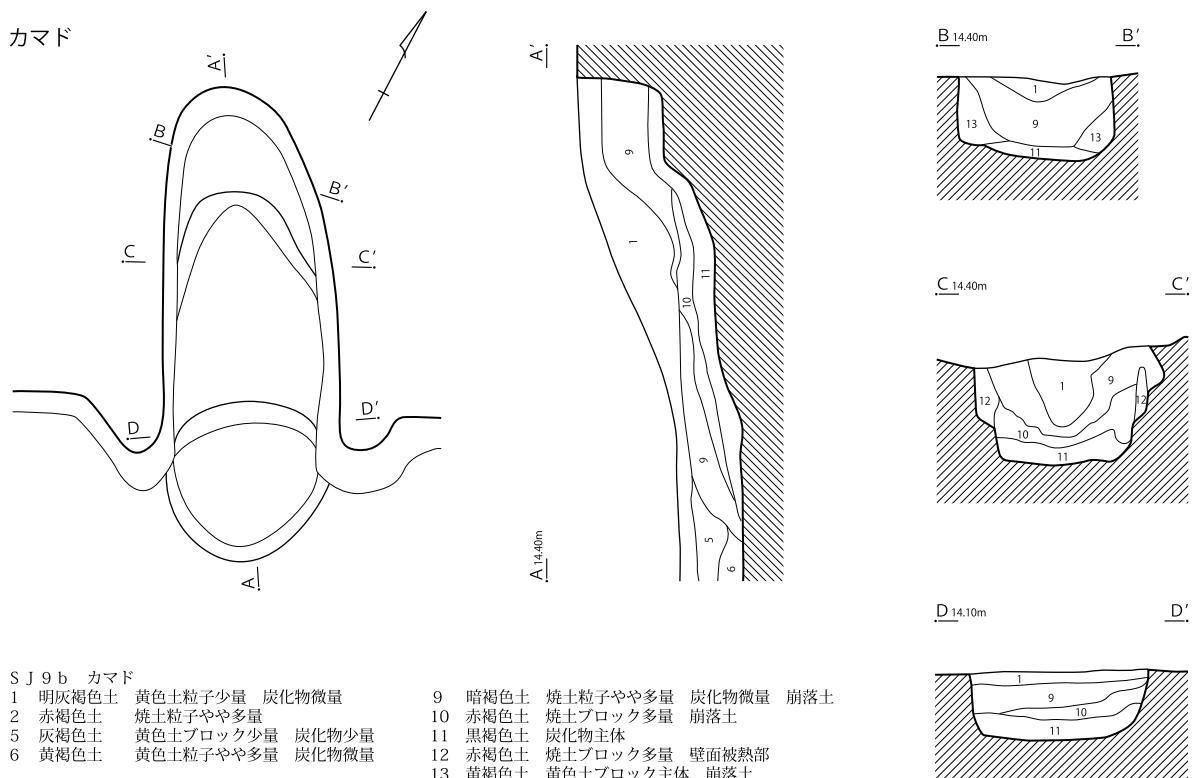
平面形態は、東西方向にわずかに長い長方形である。規模は主軸長5.04m、短軸長4.46m、深さ0.23mである。主軸方位はN-30°-Wである。

住居跡からは、カマド、柱穴が検出された。確認面からの掘り込みが浅く、覆土上層に第9 a号住居跡が造られている。本住居跡は第1層の明灰褐色土と、黄色土の径0.5～1cmのブロックを含む第5層の灰褐色土、第6層の黄褐色土で覆われ、床面直上に炭化物を主体とする第8層の黒褐色土が堆積している。特に住居跡の北側部分の床面には炭層が広がっている。床面は平坦でわずかに中央部分がくぼんでいるが、第9 a号住居跡の影響とも考えられる。

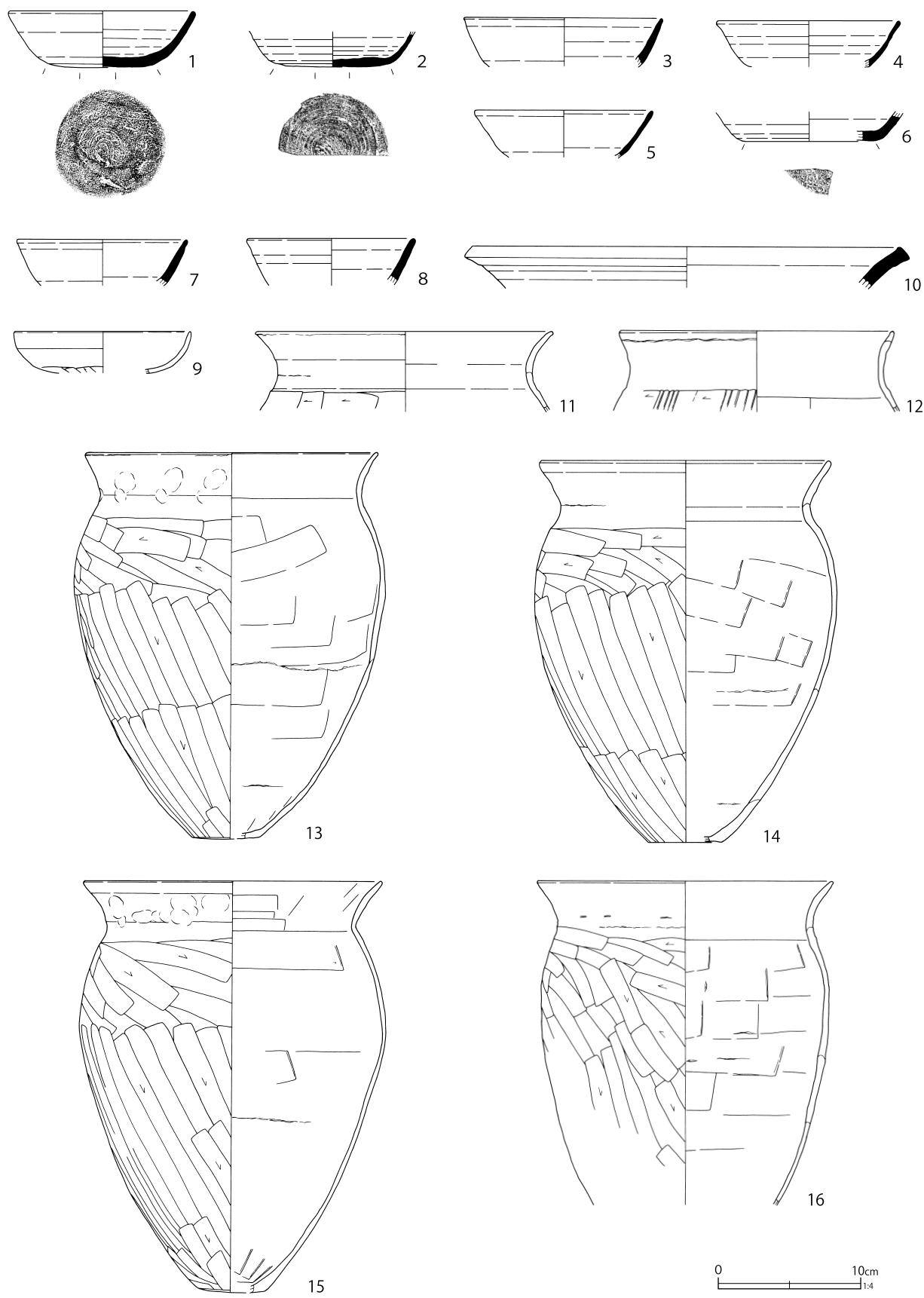
カマドは北壁やや東寄りに付設され、規模は全長150cm、幅71cm、深さ27cm、燃焼部から煙道部は長さ120cm、幅58cm、深さ32cmである。カマドは地山を掘り残した短い袖部に粘土を積み上げて天井部を構築し、焚口、掛け口を設ける構造である。やや幅広の焚口部がそのまま煙道に延びている。煙道は長く、底面はわずかだが有段式で先端部分は12cm程の奥壁を造り、段を付けて立ち上がっている。

柱穴は6本検出された。P1は長径25cm、短径23cm、深さ11cm、P2は長径28cm、短径24cm、深さ5cm、P3は長径32cm、短径30cm、深さ5cm、P4は長径51cm、短径47cm、深さ6cm、P5は長径30cm、短径28cm、深さ3cm、P6は長径37cm、短径34cm、深さ12cmでいずれも浅い。

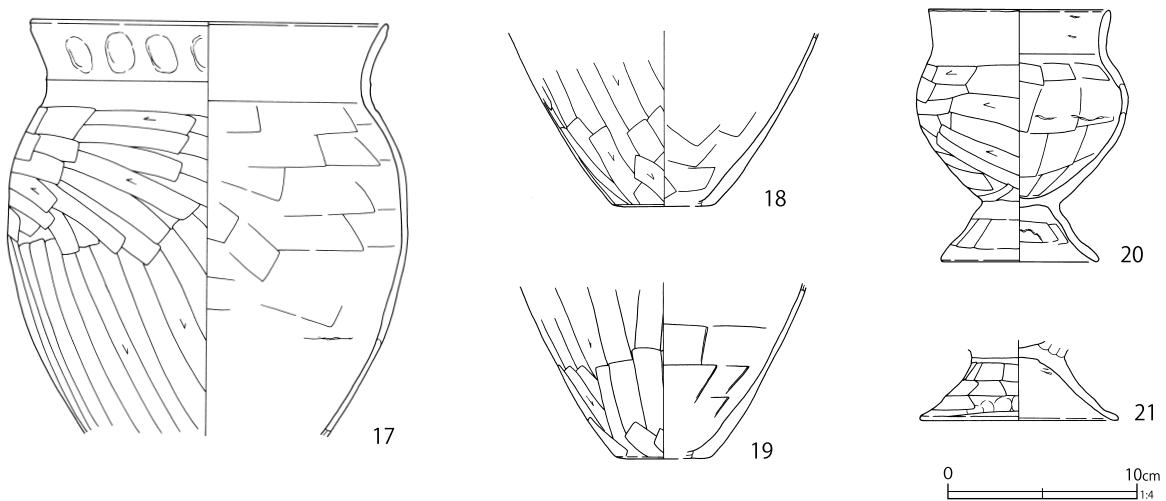
遺物は、第177、178図に示した須恵器壊・甕、土



第176図 第9b号住居跡カマド・遺物出土状況



第177図 第9b号住居跡出土遺物(1)



第178図 第9b号住居跡出土遺物(2)

第46表 第9b号住居跡出土遺物観察表(第177、178図)

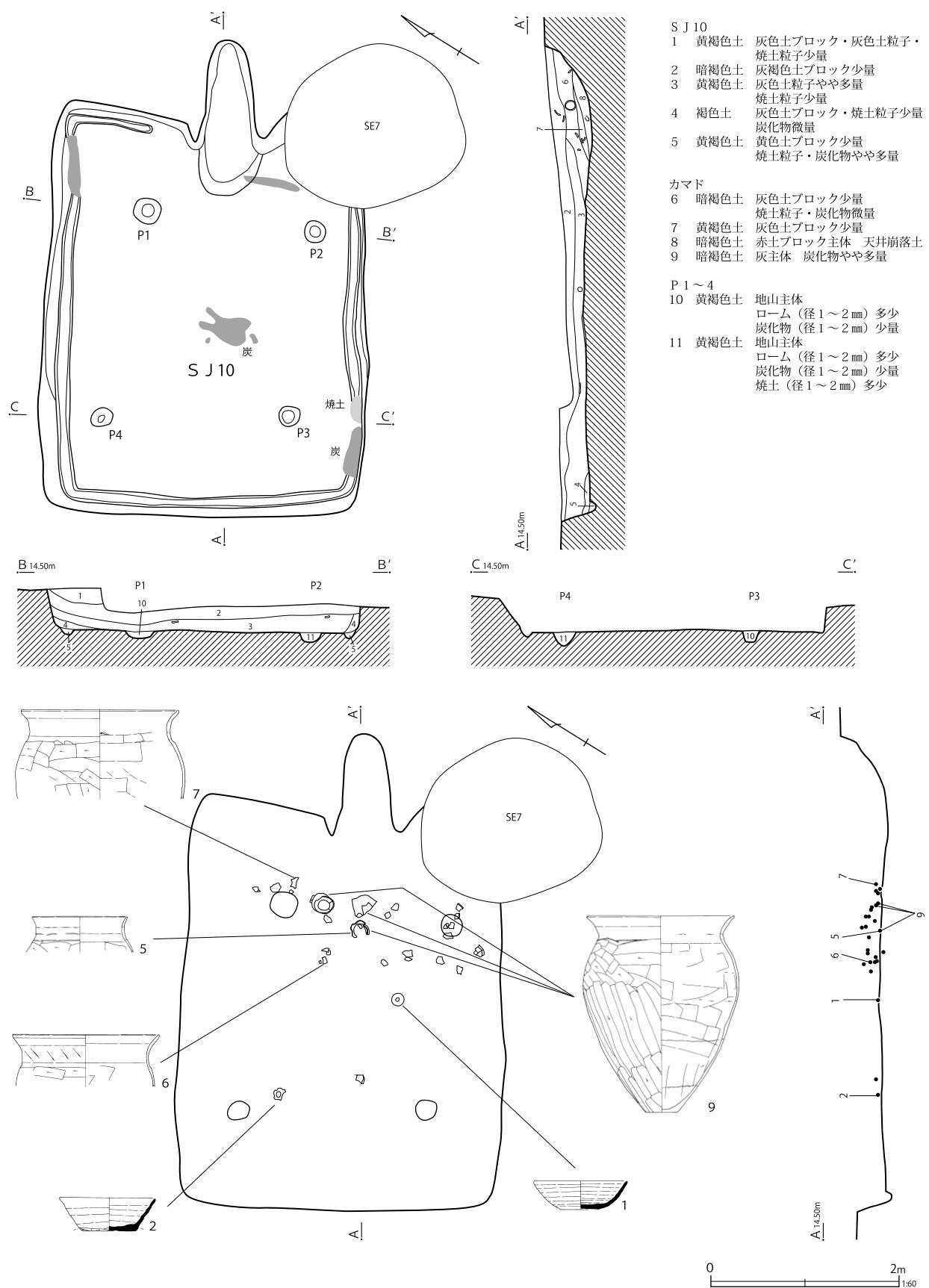
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	壺	12.8	3.9	7.4	ABCEI	90	普通	暗赤褐	東金子産 №10	78-7
2	須恵器	壺	—	[2.5]	(8.0)	EHIJ	35	普通	灰	南比企産 №16	
3	須恵器	壺	(13.8)	[3.4]	—	IJK	10	普通	灰白	南比企産	
4	須恵器	壺	(12.8)	[3.2]	—	EHIJK	10	良好	灰	南比企産	
5	須恵器	壺	(12.4)	[3.3]	—	IJK	15	良好	灰	南比企産	
6	須恵器	壺	—	[2.1]	(9.6)	I	5	普通	黄灰	底部ヘラケズリ	
7	須恵器	壺	(11.8)	[3.2]	—	AIK	10	良好	灰白	南比企産	
8	須恵器	壺	(11.4)	[3.2]	—	IJK	10	良好	灰	南比企産	
9	土師器	壺	(12.2)	[2.9]	—	C	30	普通	橙	北武藏型壺	78-8
10	須恵器	甕	(30.0)	[2.9]	—	AEHIK	5	良好	黄灰	新治産	
11	土師器	甕	(20.8)	[5.6]	—	CHIK	30	普通	にぶい赤褐	武藏型甕 №3.4	78-9
12	土師器	甕	(19.0)	[5.7]	—	ACEHIK	40	良好	橙	武藏型甕 カマド№16.17	
13	土師器	甕	20.2	27.0	(4.6)	AEHIJK	80	普通	にぶい橙	武藏型甕 カマド№1.6	78-12
14	土師器	甕	(16.6)	27.3	5.4	HK	25	普通	赤褐	武藏型甕 カマド№9.10.11.12.15 床面下	78-13
15	土師器	甕	20.6	28.9	4.8	CEHIK	90	普通	にぶい橙	武藏型甕 カマド№8.9	78-14
16	土師器	甕	(20.6)	[22.7]	—	ACEHI	20	良好	橙	武藏型甕 カマド№15.19.20	79-5
17	土師器	甕	18.6	[21.8]	—	ACEHI	30	普通	明赤褐	武藏型甕 №15	78-10
18	土師器	甕	—	[9.1]	(5.4)	ACEHI	30	普通	にぶい橙	武藏型甕 №11	
19	土師器	甕	—	[9.2]	(5.0)	ACHIK	25	普通	にぶい赤褐	武藏型甕 №12	
20	土師器	台付甕	9.4	13.3	(8.0)	ACHIK	70	普通	にぶい赤褐	№2.5.6.7 カマド	79-1
21	土師器	台付甕	—	[4.1]	10.4	CIK	90	普通	橙	№8	78-11

師器壺・台付甕・甕・小型台付甕の他、ミニチュア土器、磨石が出土した。カマド周辺から武藏型甕と台付甕が、住居跡中央付近と南西側から須恵器壺と土師器甕が出土した。時期は8世紀中葉と考えられる。

第10号住居跡(第179~181図)

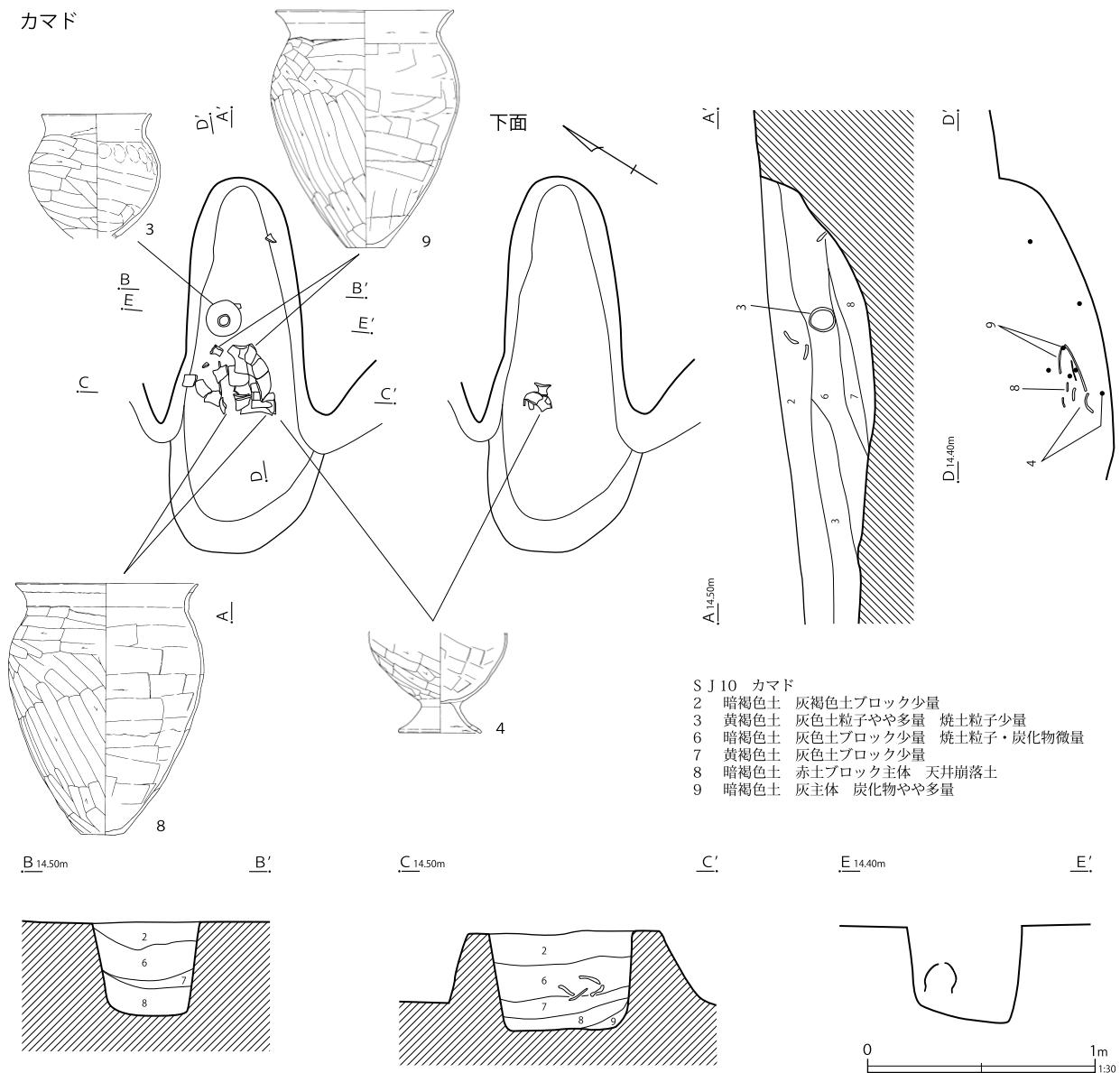
A区J-6グリッドに位置する。第7号井戸跡に南東コーナー部を壊されている。

平面形態は長方形である。規模は主軸長5.10m、短軸長3.45m、深さ0.32mである。主軸方位はN



第179図 第10号住居跡・遺物出土状況

カマド



第180図 第10号住居跡カマド・遺物出土状況

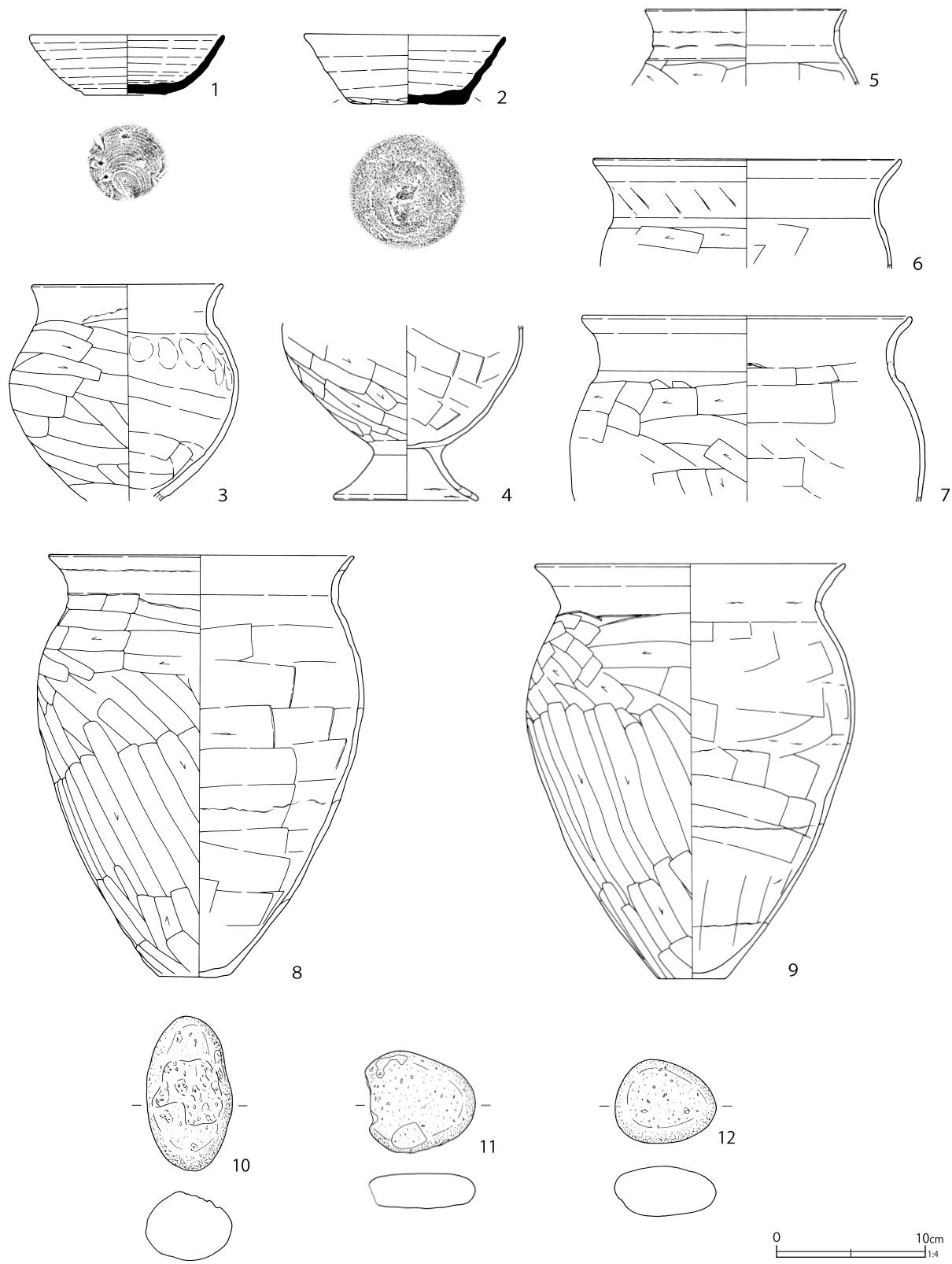
-60° -Eである。

住居跡からはカマド、壁溝、柱穴が検出された。床面はほぼ平坦であるが、中央部分にやや高まりを持つ。壁溝は全周し、壁溝内的一部分には焼土や炭化物が堆積している。規模は最大幅15cm、最小幅12cm、深さ5~7cmである。

カマドは東壁中央に付設され、全長166cm、幅64cm、深さ42cm、煙道部は長さ82cm、幅48cm、深さ42cmである。

柱穴は4本検出された。P1は長径30cm、短径27cm、深さ7cm、P2は長径24cm、短径22cm、深さ10cm、P3は長径22cm、短径20cm、深さ42cm、P4は長径24cm、短径18cm、深さ14cmである。柱穴はすべて浅く、主柱穴となるか不明であった。

遺物は第181図1~12に図示した須恵器壊、土師器壊・甕・台付甕、軽石が出土した。住居跡中央付近で1の東金子産壊、2の体部下端に手持ちヘラケズリを施す新治産壊が出土した。また、カ



第181図 第10号住居跡出土遺物

マド内やカマド周辺から煮沸具が出土した。3～5は小型の台付甕、6～9は口縁部が弓状で、底

径が小さく、器壁の薄い武藏型甕である。時期は8世紀末から9世紀初頭と考えられる。

第47表 第10号住居跡出土遺物観察表（第181図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	壺	12.9	4.0	5.6	EIK	100	良好	灰	東金子産 №31	79-3
2	須恵器	壺	(13.3)	4.6	8.0	AEHIK	80	普通	暗灰黄	新治産 №33	79-2
3	土師器	台付甕	12.6	[14.5]	—	ACEI	100	良好	にぶい黄橙	内面指頭痕 カマド№2	79-9
4	土師器	台付甕	—	[11.8]	9.4	AEHIK	70	普通	にぶい赤褐	№7 №1 カマド	79-8
5	土師器	甕	13.4	[5.2]	—	AEIJK	80	普通	赤褐	№17	79-4
6	土師器	甕	(20.6)	[7.3]	—	ACHIK	20	普通	にぶい赤褐	武藏型甕 カマド№36	
7	土師器	甕	(22.0)	[12.5]	—	ACIK	25	良好	にぶい赤褐	№13 カマド	79-10
8	土師器	甕	20.5	28.5	5.0	AEHIK	90	普通	にぶい褐	武藏型甕 №1.7 カマド	79-6
9	土師器	甕	20.6	28.0	4.5	CEHIK	80	普通	橙	武藏型甕 №14.16.17 №1 カマド	79-7
10	石		長さ 10.2 cm	幅 5.7 cm	厚さ 4.6 cm		重 205.5g			安山岩か？	
11	軽石		長さ 6.7 cm	幅 7.4 cm	厚さ 2.3 cm		重さ 56.8g				
12	軽石		長さ 5.5 cm	幅 6.8 cm	厚さ 3.3 cm		重さ 55.6g				

第16号住居跡（第182図）

調査区南東端、C区R-13グリッドに位置する。北側を第6号溝跡によって壊されている。本住居跡は今回の調査で検出された住居跡の中で最も南東にある。

平面形態は整った長方形であるが、北側が第6号溝跡によって壊されているため、北壁は検出できなかった。規模は主軸長5.92m、短軸長3.17m、深さ0.06mである。主軸方位はN-30°-Eである。

住居跡からは壁溝、カマド、土壙、柱穴が検出された。住居跡の壁の立ち上がりはわずかで、確認面で床面が検出された。

床面はほぼ平坦で、カマドの前面から住居跡北壁側にかけて黄褐色土の貼床を伴う硬化面が確認できた。

壁溝は東壁、南壁、西壁に沿って巡っているのが検出された。北壁側は第6号溝跡に壊されていたため検出できなかった。壁溝はU字状に掘り込まれ、覆土はしまりの弱いシルト質の灰黄褐色土である。壁溝の幅は一定で、掘り込みの深さは浅い。最大幅は20cm、最小幅13cm、深さ7~12cmである。

カマドは北壁の北東コーナー部寄りに付設され、屋外に煙道が長く延びる構造である。焚口部から

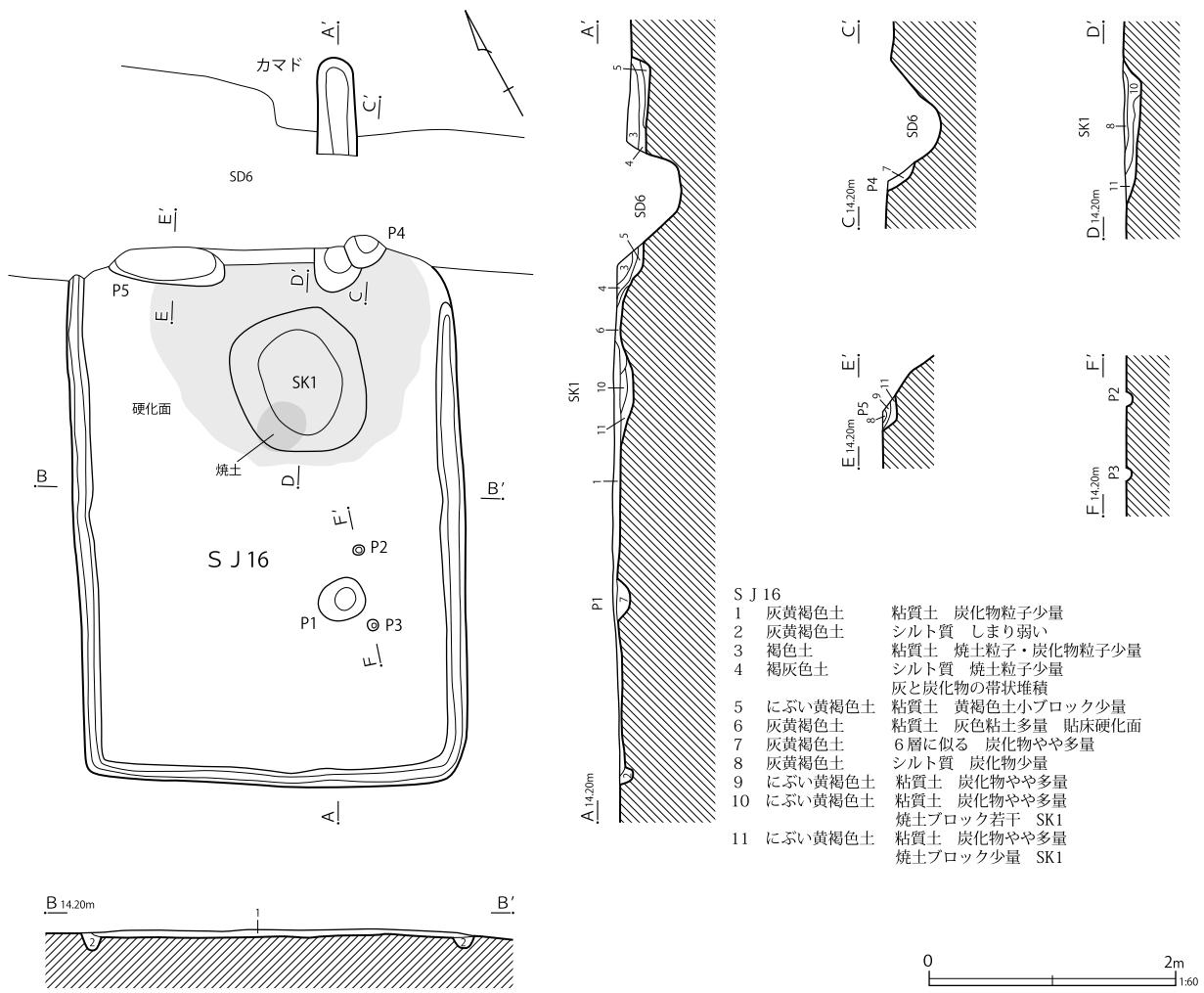
燃焼部にかけて第6号溝跡に壊されている。検出された部分では全長189cm、幅42cm、深さ44cm、煙道部は長さ78cm、幅30cm、深さ16cmである。

また、カマド前面に円形の掘り込みを持つ第1号土壙が検出された。規模は長径1.26m、短径1.08m、深さ0.14mである。覆土中には炭化物が多く詰まり、焼土ブロックも混入する。おそらくカマド焚口部から掻き出した灰を住居内に埋めた灰溜りと考えられる。

柱穴は5本検出された。P1は長径40cm、短径33cm、深さ11cm、P2は長径9cm、短径7cm、深さ5cm、P3は長径10cm、短径9cm、深さ4cm、P4は長径32cm、短径25cm、深さ19cm、P5は長径94cm、短径31cm、深さ11cmである。

北壁コーナー寄りのP5は、位置的に見て貯蔵穴の可能性があるが、第6号溝跡に壊されているため断定することはできなかった。また、P4はカマドを壊していることから、住居跡よりも新しい柱穴と考えられる。

遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。やや距離を置いているが、調査区北側の第10号住居跡が縦長長方形の類似する住居形態であることから、近接した時期の可能性もある。



第182図 第16号住居跡

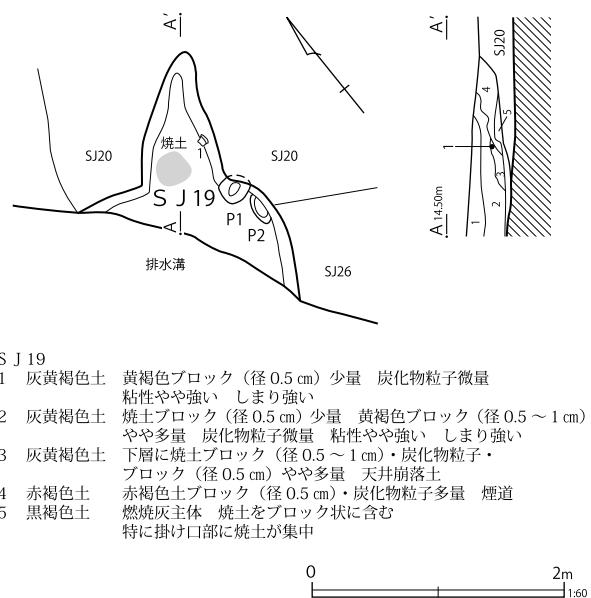
第19号住居跡 (第183、184図)

A区G-4グリッドに位置する。第20、26号住居跡を壊している。南西側は調査区域外に延びている。カマド以外の大半は調査区域外にある。このため、平面形態は方形と推定されるが、全体は不明である。

住居跡の残存規模は主軸長1.60m、短軸長1.50m、深さ0.06mである。主軸方位はN-40°-Eである。

住居跡からは、カマドとピット2本が検出された。

床面のほとんどが調査区域外にあたるため、全容は不明であるが、住居空間に比べて、カマド部



第183図 第19号住居跡

分が大きいと想定される。

カマドは北東壁のコーナー部分に付設され、焚口から燃焼部にかけて焼土が確認された。カマドは全長102cm、幅66cm、深さ31cmである。

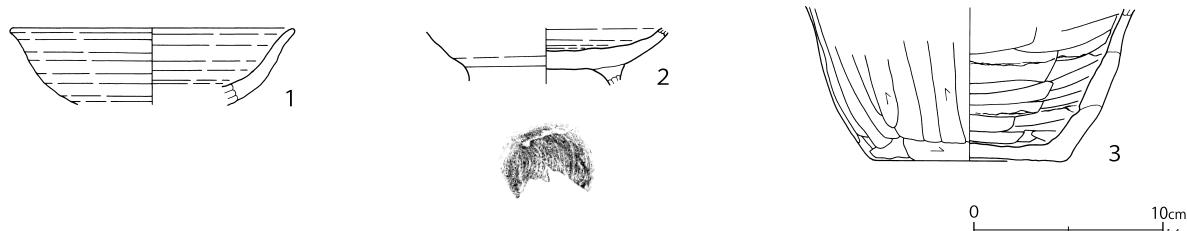
住居跡コーナーにカマドを持つ住居跡は、本集落の中で6軒検出されている。第1号（10世紀前半）、第19号（10世紀前半）、第24号（10世紀前半）、第26号（9世紀後半）、第28号（9世紀前半）、第30号（9世紀後半）住居跡である。9世紀後半から10世紀前半が主体を占め、この時期の特徴の一つとして捉えることができる。

また、出土土器を見ると紐作り成形で胴部外面にヘラケズリを施す酸化焰焼成の常陸型甕を主体としている。この地域では、9世紀になると住居跡からは武藏型甕と常陸型甕の両者が共伴して出土する傾向にあるが、9世紀後半以降は常陸型甕が主体となり、その後羽釜が出現する。

ピットは住居跡東側コーナーに2本検出されたが、掘り込みが浅く、用途は不明である。壁際であることから本住居跡に伴うかどうかは不明である。P1は長径24cm、短径20cm、深さ33cm、P2は長径25cm、短径10cm、深さ25cmである。

遺物はカマド内から第184図1～3のロクロ土師器高台付坏、土師器甕が出土した。1、2はロクロ土師器の高台付坏で在地の製品である。1は、推定口径15.0cmとやや大振りである。体部は腰に丸みを持って立ち上がり、口縁部は大きく外反して、器壁が厚い。2は体部下端から底部にかけての破片である。糸切り後高台を貼り付けている。3は器壁の厚い甕の底部と見られ、粘土紐を積み上げる輪積成形で、胴部外面にヘラケズリを施す。焼成は酸化焰焼成により色調は黒褐色である。口縁部の形態は不明である。

時期は10世紀前半と考えられる。



第184図 第19号住居跡出土遺物

第48表 第19号住居跡出土遺物観察表（第184図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	ロクロ土師器	高台付坏	(15.0)	[4.0]	—	CHI	10	普通	にぶい赤褐	カマド	
2	ロクロ土師器	高台付坏	—	[3.0]	—	CHIJK	70	普通	にぶい橙	カマド SJ26	
3	土師器	甕	—	[8.0]	10.2	CEHI	45	普通	黒褐	カマド No.101	79-11

第20号住居跡（第185～187図）

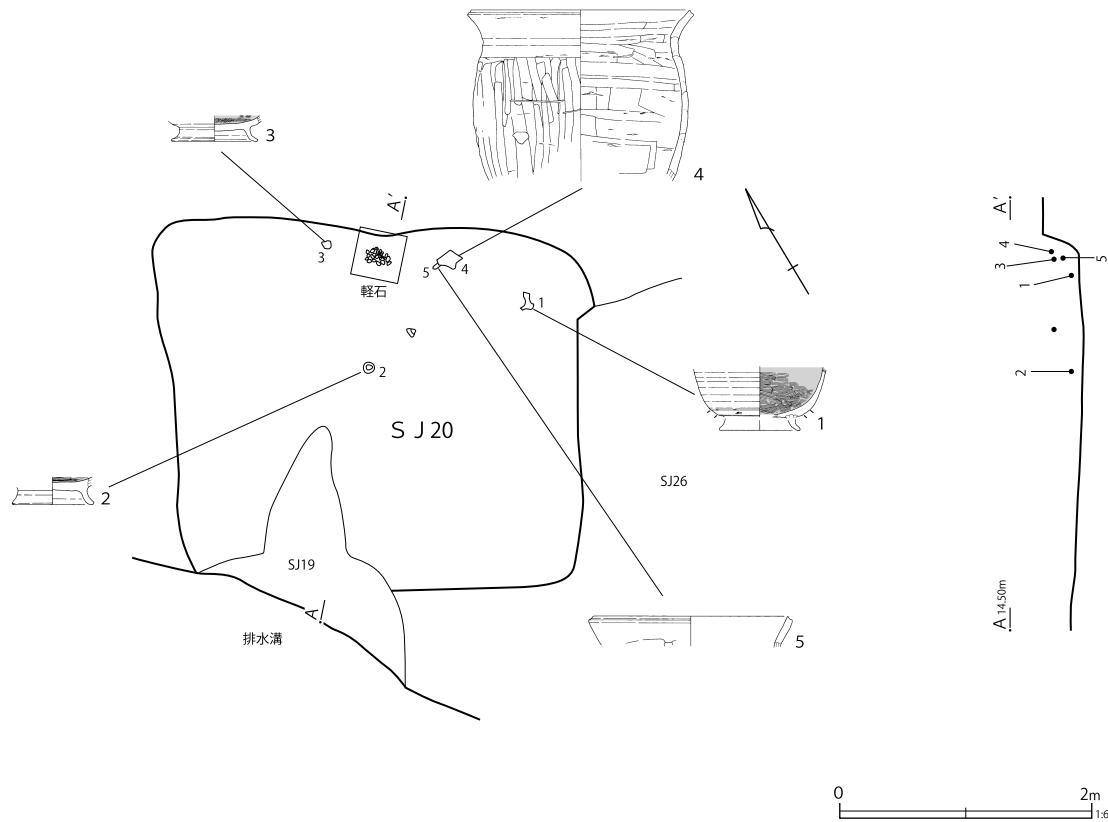
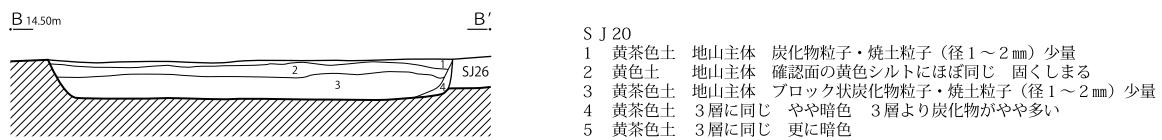
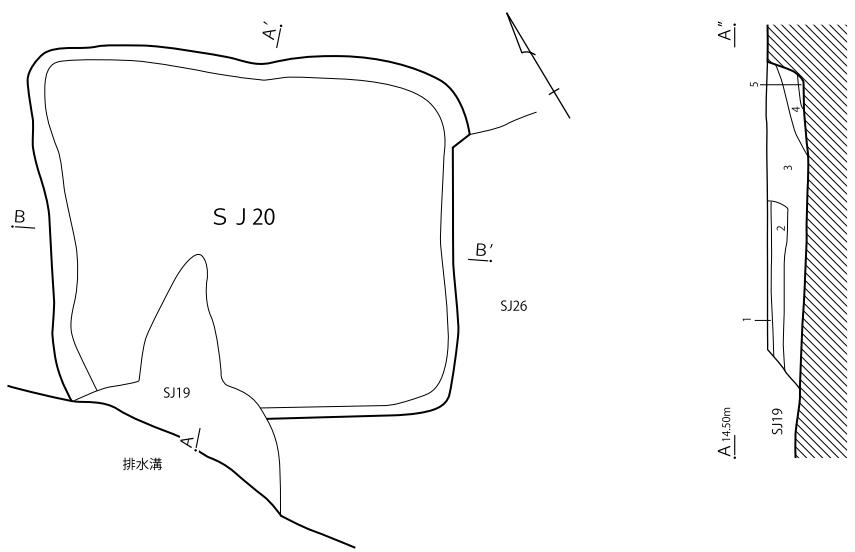
A区F、G-4グリッドに位置する。第19号住居跡に壊されている。第26号住居跡とも重複するが、本住居跡の方が新しい。西側は調査区域外に延びている。

平面形態は概ね方形と想定されるが、南西部分

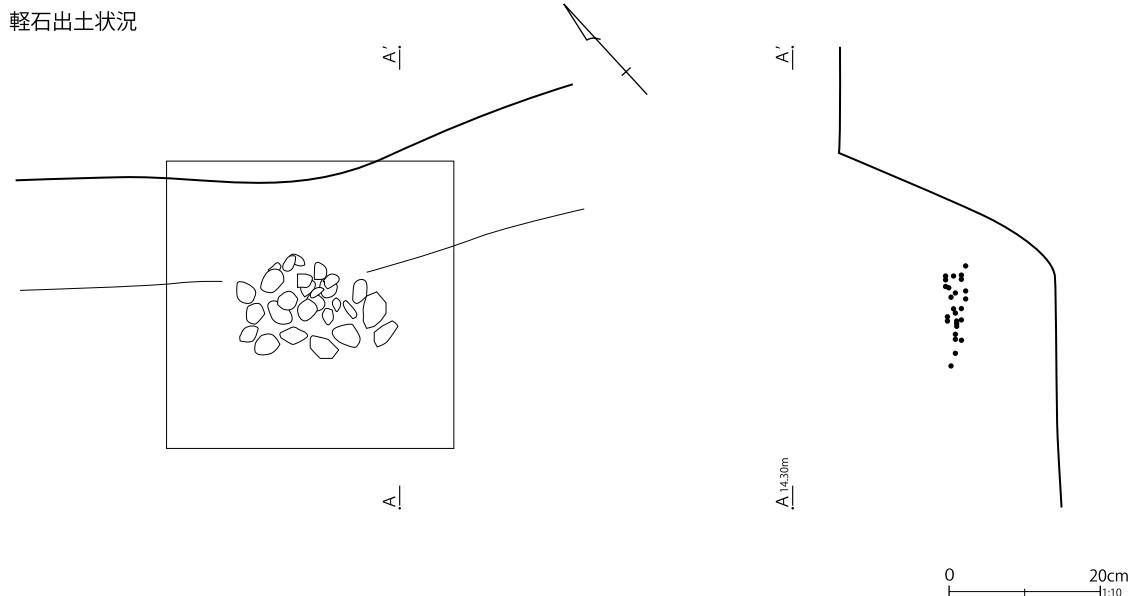
が第19号住居跡の重複により壊されている。規模は長軸長3.20m、短軸長2.90m、深さ0.31mである。長軸方位はN-55°-Wである。

住居跡からは、カマドや柱穴、壁溝等は検出されなかった。床面は平坦である。

遺物は、第187図1～6に図示したロクロ土師



第185図 第20号住居跡・遺物出土状況



第186図 第20号住居跡遺物出土状況

器高台付塊、土師器甕、第186図の軽石の他、須恵器壊・蓋がある。

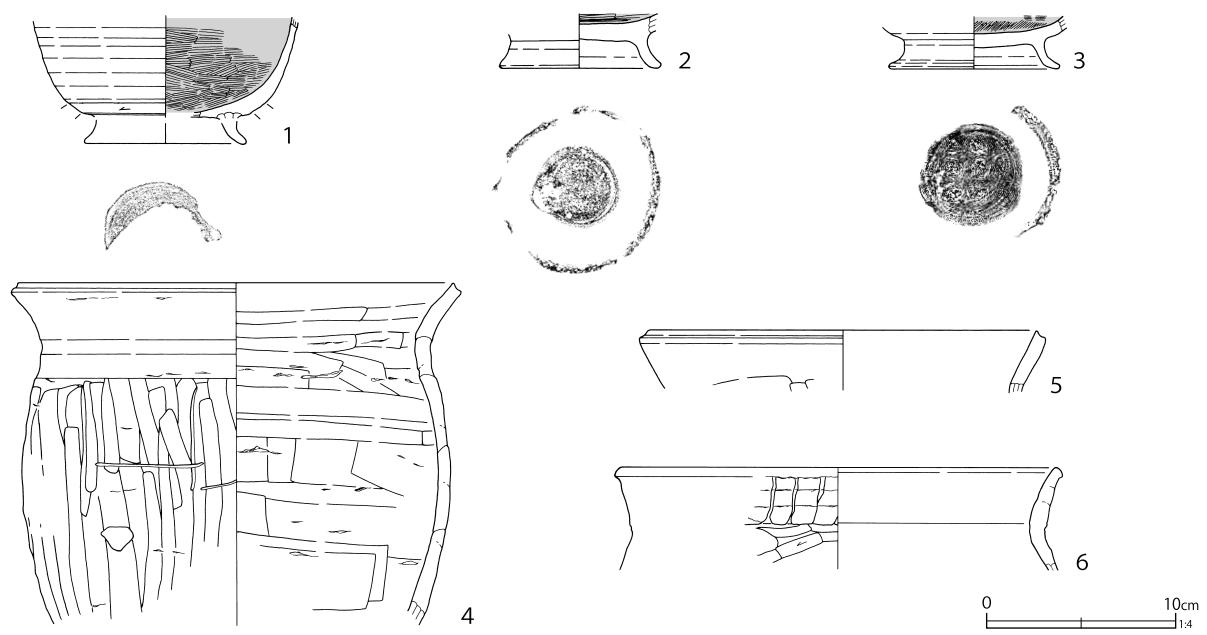
1～3は内黒の高台付塊で、1は、体部から底部内面に細かなミガキが施され光沢を持っている。外面はロクロ整形で、体部下端に回転ヘラケズリが施されている。底部は、高台が剥離した痕跡が残る。木器椀を模倣した土器と考えられる。胎土は、赤色粒子と細かい角閃石が目立つ。少量ではあるが、黒雲母片が含まれている。2、3は、高台部の破片である。「ハ」の字状に大きく開く高台が貼り付けられている。4～6は土師器甕である。器壁が厚く輪積痕を残す。6は口縁部外面に指押さえの圧痕が明瞭に残され、輪積痕がそのまま残り、ヨコナデによる整形はほとんど施されていない。時期は10世紀前半から中頃と考えられる。

この他、住居跡の北壁側の覆土中層から軽石がまとまった状態で出土した。これらの軽石は、住居跡廃絶後に、住居跡が埋まりかけた際に置かれたものと考えられ、住居跡に伴う遺物ではない。軽石は、ほぼ同じ高さで並べた状態でまとまって

いることから、人為的なものと考えられる。第186図に示した軽石の出土範囲は、壁面から13cmほど内側で直径20cm前後の範囲に集中している。

軽石は、最大で長さ4.0cm、幅3.0cm、重さ10.7gのものから、最小は長さ1.8cm、幅1.5cm、重さ1.6gまでのものが計25個出土した。長さ3.0cm、幅2.5cm、重さ2.0g前後のものが主体である。ほぼ同じ大きさの軽石を揃えている。扁平なものと厚みを持つものと半々位であるが、いずれも平面形は橢円形である。表面は磨滅し凹凸はほとんど見られず、丸みを持っている。

この軽石は、浅間山の噴火に起因する軽石と考えられる。浅間山は3度の大きな噴火があり、浅間A軽石が天明3年(1783)、浅間B軽石が天仁元年(1108)、浅間C軽石が3世紀後半とされている。出土状況は10世紀後半の住居跡覆土中であり、利根川等の河川によって運ばれた軽石を拾い集め、持ち込んだ可能性が強い。その用途は不明だが、何らかの目的によって意図的に集積されたものであろう。



第187図 第20号住居跡出土遺物

第49表 第20号住居跡出土遺物観察表 (第187図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	ロクロ土師器	高台付塊	—	[5.4]	—	CDHIK	40	普通	褐灰	内黒 No.1	
2	ロクロ土師器	高台付塊	—	2.9	8.5	CEH	90	普通	にぶい黄褐	内黒 No.5	
3	ロクロ土師器	高台付塊	—	[2.8]	(8.8)	CEHIK	65	普通	にぶい黄橙	内黒 No.6	
4	土師器	甕	(23.0)	[18.0]	—	CEIK	20	良好	にぶい黄橙	茨城県西部 No.2 SJ26	79-12
5	土師器	甕	(20.6)	[3.2]	—	CEHIK	20	良好	にぶい黄橙	No.3	
6	土師器	甕	(23.0)	[4.9]	—	ACEHI	5	普通	にぶい橙		

第21号住居跡 (第188、189図)

A区H-5グリッドに位置する。本住居跡と重複する遺構は見られず、南東側15mに第22号住居跡、北西側10mに第19、20、26号住居跡等が検出された。

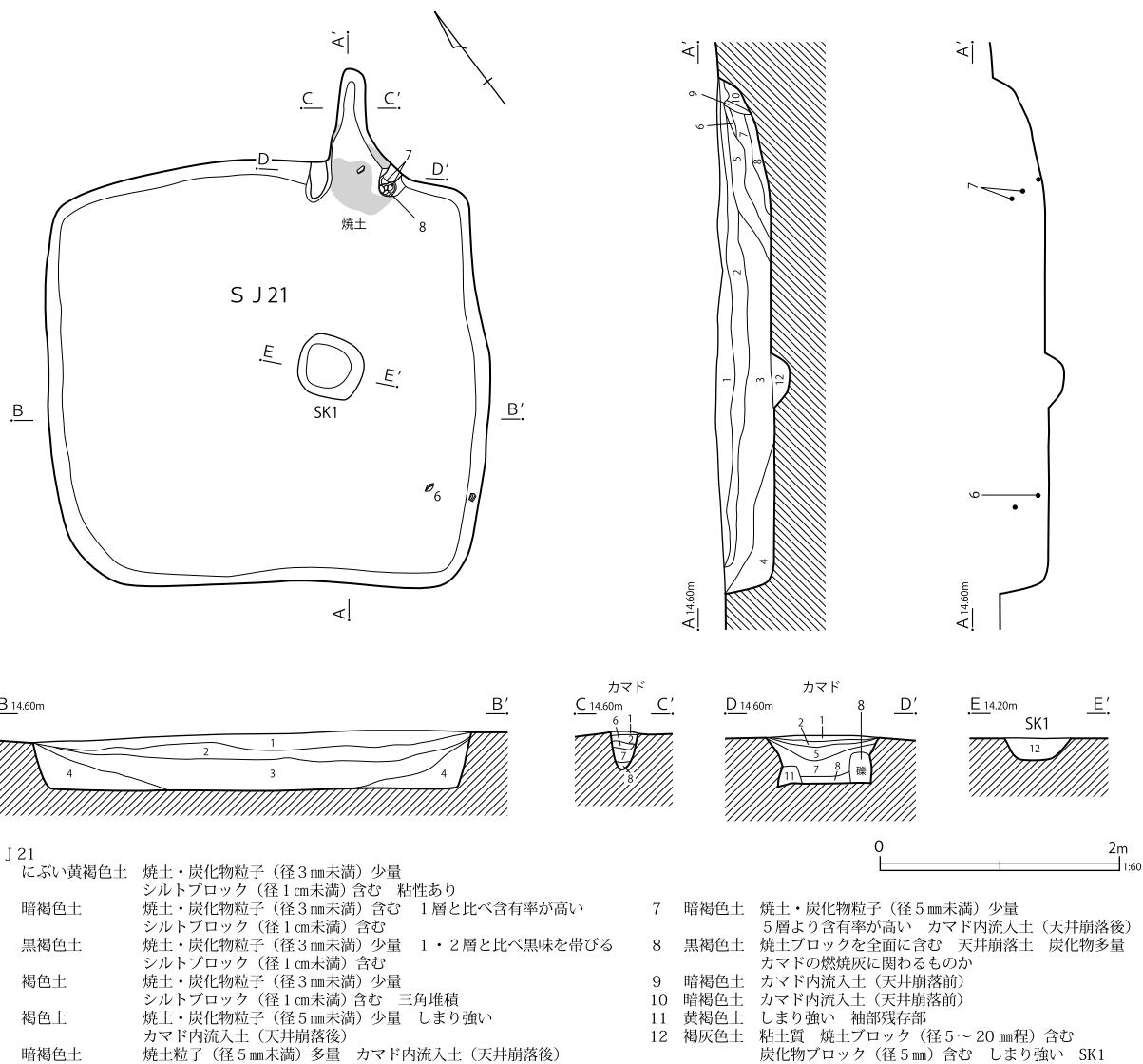
平面形態は方形である。規模は主軸長4.30m、短軸長3.68m、深さ0.35mである。主軸方位はN-39°-Eである。

床面はほぼ平坦で、掘り込んだ地山面を利用し、カマド前面から東壁寄りに硬化面が見られた。壁溝は検出されなかった。

カマドは北壁東寄りに付設され、天井部はカマド内に崩落していた。袖部は左袖がわずかに残存していたが、右袖は確認できなかった。燃焼部は

壁外に設けられ、煙道部は、そのまま緩やかに傾斜して伸びていた。カマドの壁面は良く焼けていた。右袖があったと考えられる位置から、長楕円形の角閃石安山岩礫（第189図8）が出土した。礫は被熱を受けていた。また、部分的に煤が付着していることから、焚口部の袖石として使用されたと考えられる。カマド内からは土器片がわずかに出土したのみである。

カマド覆土は、第9、10層が天井部崩落以前に煙道からカマド内に流入した堆積土である。第7、8層は天井部崩落土であり、焼土ブロックと炭化物を多く含んでいた。炭化物の中には火床面に堆積した燃焼灰も含まれていたが、天井部崩落土と灰層を明確に分層することができなかった。第5、



第188図 第21号住居跡

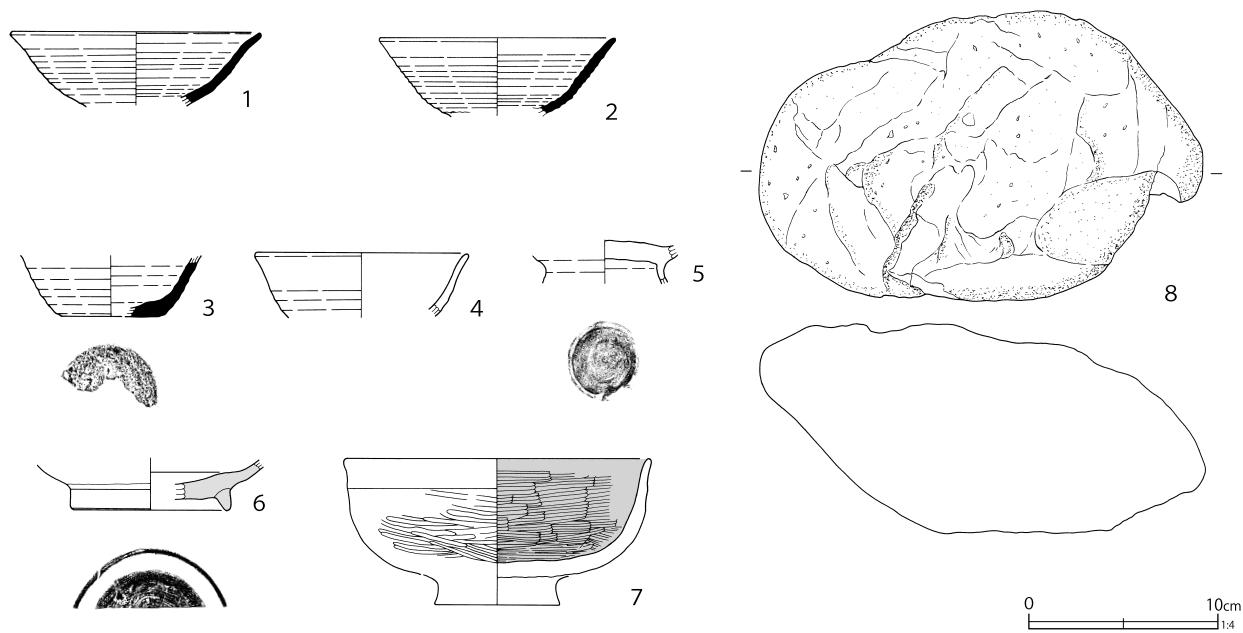
6層は天井部崩落後の流入土である。第11層は残存した左袖であり、黄褐色土によって構築されていた。

カマド以外の付属施設としては、住居中央東寄りの床面で土壙1基が検出された。平面形態は円形である。規模は径0.60m、床面からの深さが0.20mである。覆土には焼土、炭化物がブロック状に含まれていた。本土壙は床面から掘り込まれており、本住居跡に伴うものと考えられるが、性格は不明である。遺物は出土していない。

遺物は床面や覆土から第189図1～8に図示し

た須恵器高台付壺、ロクロ土師器壺・高台付壺、灰釉陶器壺、角閃石安山岩礫の他須恵器長頸瓶、土師器鉢が出土した。

1～3は三和産の須恵器壺である。1は口縁部が大きく外反し、2は直線的に開いている。3の底部はヘラ切りである。6は灰釉陶器壺である。7は、内外面にミガキが施される木器椀模倣の内黒土器である。8は幅23.4cmで重さ2.6kgと大型の礫である。カマド右側から検出され、袖石として使われていた。時期は10世紀第1四半期と考えられる。



第189図 第21号住居跡出土遺物

第50表 第21号住居跡出土遺物観察表 (第189図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	高台付塊	(13.0)	[3.9]	—	ACIK	20	普通	明赤褐	三和産	
2	須恵器	高台付塊	(12.4)	[4.1]	—	ACIK	15	普通	にぶい褐	三和産	
3	須恵器	塊	—	[3.2]	(5.0)	ACIK	30	普通	にぶい褐	三和産	
4	ロクロ土師器	塊	(11.0)	[3.3]	—	ACK	15	普通	にぶい黄橙		
5	ロクロ土師器	高台付塊	—	[2.3]	—	ACHK	70	普通	にぶい橙		
6	灰釉陶器	塊	—	[2.7]	8.0	K	40	普通	灰白	No. 6	79-13
7	ロクロ土師器	高台付塊	(16.0)	[6.3]	—	CHIK	50	普通	にぶい橙	No. 1.2 内黒	79-14
8	角閃石安山岩砾						長さ 15.4 cm 幅 23.4 cm 厚さ 11.1 cm 重さ 2660.0g			No. 3	

第22号住居跡 (第190~192図)

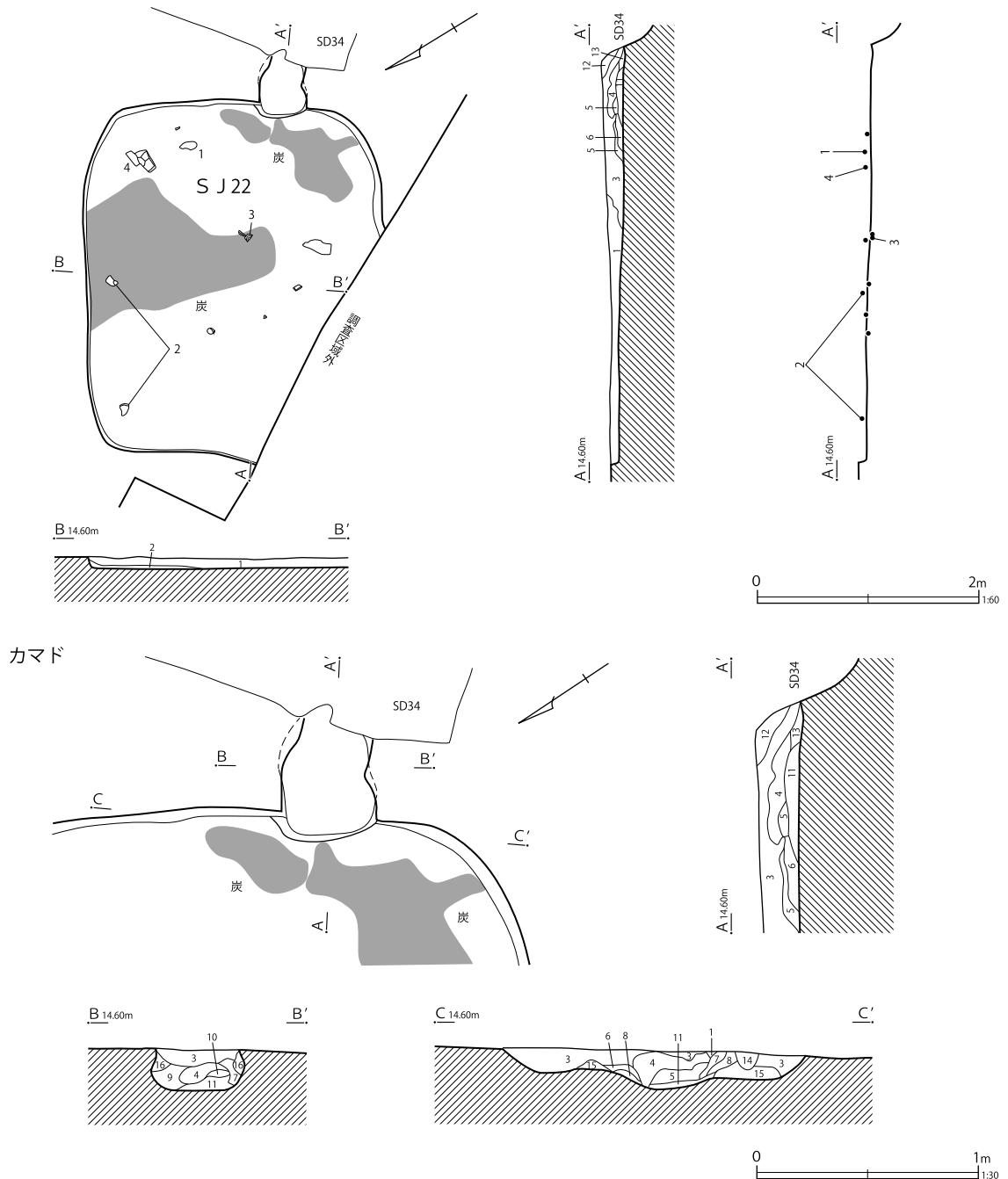
A区 I - 5、6グリッドに位置する。東側の第34号溝跡にカマド煙道部を壊されていた。西側は調査区域外に伸びている。

平面形態は長方形である。残存規模は、主軸長3.70m、短軸長2.70m、深さ0.11mである。主軸方位はS-54°-Eである。

床面はほぼ平坦で、壁溝は検出されなかった。住居跡北側の床面上には、炭化物を多量に含む第2層が薄く面的に堆積している。これは床面上に置かれた敷物が長い期間をかけて炭化したものと考えられる。住居跡の覆土第1層には炭化物や焼

土が多く含まれていた。屋根構築材の一部が崩落したものと推定される。

カマドは東壁やや南寄りに付設され、煙道部の先端は第34号溝跡によって壊されている。残存規模は、全長62cm、幅42cm、深さ19cmである。天井部はすでに崩落し、残存していない。袖部は全く残存していなかった。燃焼部は壁外にあり、火床面は床面と同じ高さで続いている。カマドの壁面は良く焼けており、赤色に変化していた。カマド覆土は第3層が住居内に流入したものである。第4~10層は天井部崩落土、第11層は灰層、第14層はカマド構築材である。

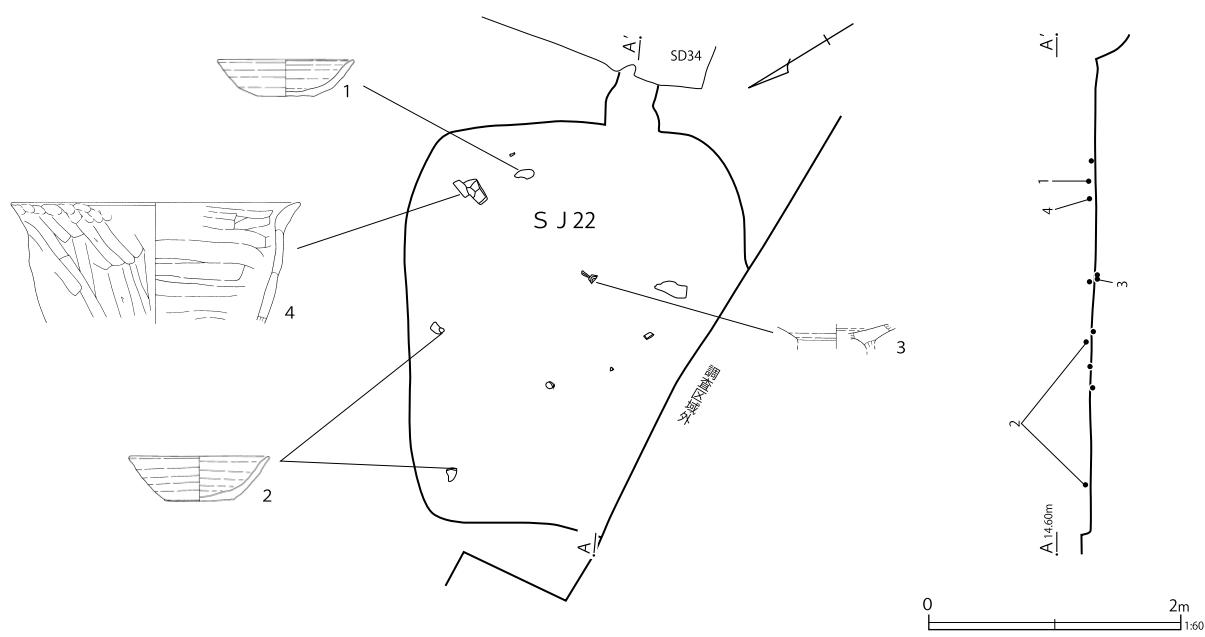


S J 22

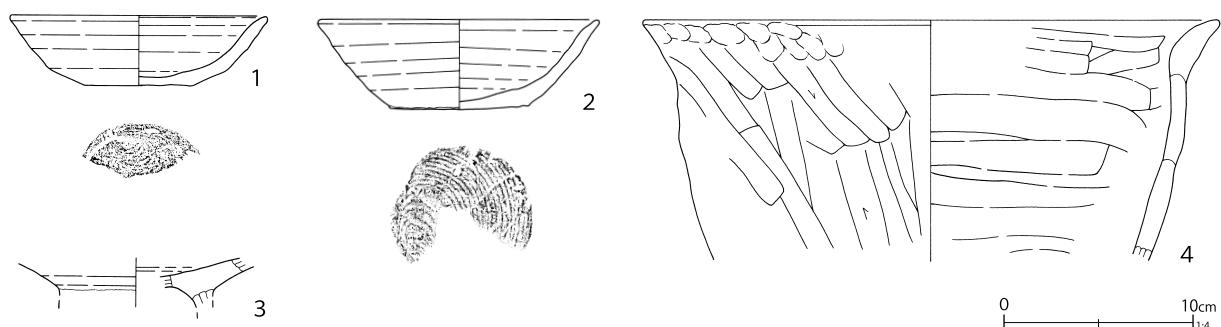
- | | |
|-----------|--|
| 1 にぶい黄褐色土 | 炭化物（径5mm前後）・焼土（径3mm前後）少量
しまりやや強く粘性あり |
| 2 黒色土 | 炭化物多量 住居内北部に面的に分布
焼土（径3mm前後）極少量 1層よりしまり弱く粘性弱い |
| 3 暗褐色土 | 炭化物・焼土（径3～5mm）多量
カマド方向に焼土粒が多い
炭化物（径2～3cm）・ロームブロック（径2cm）・
粘土粒子（径2mm）極少量 やや粘質 住居跡覆土 |
| 4 橙色土 | 焼土主体 しまり強い 粘性なくボロボロ カマド天井崩落土 |
| 5 橙色土 | 焼土主体だが灰混じる 焼土しまり強く灰弱い
粘性やや強い カマド天井崩落土 |
| 6 黒色土 | 炭化物多量 カマド付近に分布する炭化物層
灰層と同じくらいしまり弱い |
| 7 暗褐色土 | 焼土（径5mm）極少量 全体的に粘土に近い しまり・粘性強い
カマド壁崩落土か |
| 8 暗褐色土 | 粘土質 焼土（径5mm）極少量 しまり・粘性強い
カマド袖部流出土 |

- | | |
|---------|---|
| 9 暗褐色土 | 3層とほぼ同じ 焼土（径5mm）より多量
カマドが崩落した際に流入した土か |
| 10 褐色土 | 焼土粒子主体 焼土粒子（径3～5mm）多量
炭化物（径2mm前後）少量 しまり・粘性弱い
カマド天井構築材 |
| 11 褐灰色土 | 灰多量 しまり弱い ザラザラ カマド灰層 |
| 12 褐色土 | 焼土（径3mm前後）・炭化物（径2mm）極少量
カマド覆土だが溝に切られており溝の堆積物の影響からか
やや砂質 しまりやや弱い |
| 13 暗褐色土 | 炭化物・焼土（径3～5mm）少量 しまり強い
粘性ややあり カマド覆土 |
| 14 暗褐色土 | 全体的に赤く変色 含有物ほとんど無し
しまりやや強い 粘性弱い カマド壁構築材 |
| 15 黒褐色土 | 均質な粘質土が若干灰色味が加っている
含有物ほとんど無し しまり・粘性強い カマド袖残存部 |
| 16 橙色土 | 焼土主体 含有物少なく材として形を残す しまり強い
ボロボロ カマド壁構築材 |

第190図 第22号住居跡



第191図 第22号住居跡遺物出土状況



第192図 第22号住居跡出土遺物

第51表 第22号住居跡出土遺物観察表（第192図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	ロクロ土師器	壺	(13.6)	3.6	(5.6)	AK	40	普通	灰白	No.3	79-15
2	ロクロ土師器	壺	14.7	4.8	7.3	AEIK	60	良好	にぶい黄橙	No.8.9	80-1
3	ロクロ土師器	高台付壺	—	[2.6]	—	AEI	15	普通	橙	No.11	
4	土師器	甕	(30.0)	[12.8]	—	EIK	20	普通	明赤褐	No.1	

遺物は、第192図1～4に図示したロクロ土師器壺・高台付壺、土師器甕が出土した。1～3はロクロ土師器である。1、2は底部糸切離しで体部の器壁はやや厚く、底部が薄い。口唇部が外側に大きく開く特徴を持つ。胎土に酸化鉄粒子と角閃石を含む。2は口径、器高とも大きな製品で重

量感がある。4は土師器甕である。粘土紐の輪積成形で、口縁部が外側に大きく開き、外面指ナデ調整が残存する。胴部外面はタテヘラケズリが施され、部分的にノッキングが見られる。内面はヨコヘラナデが施されている。時期は10世紀前半から中葉と考えられる。

第23号住居跡（第193、194図）

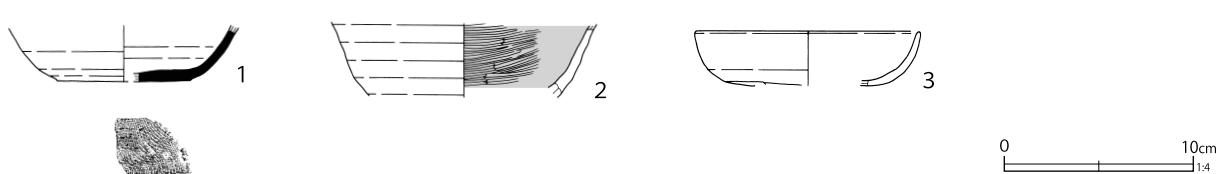
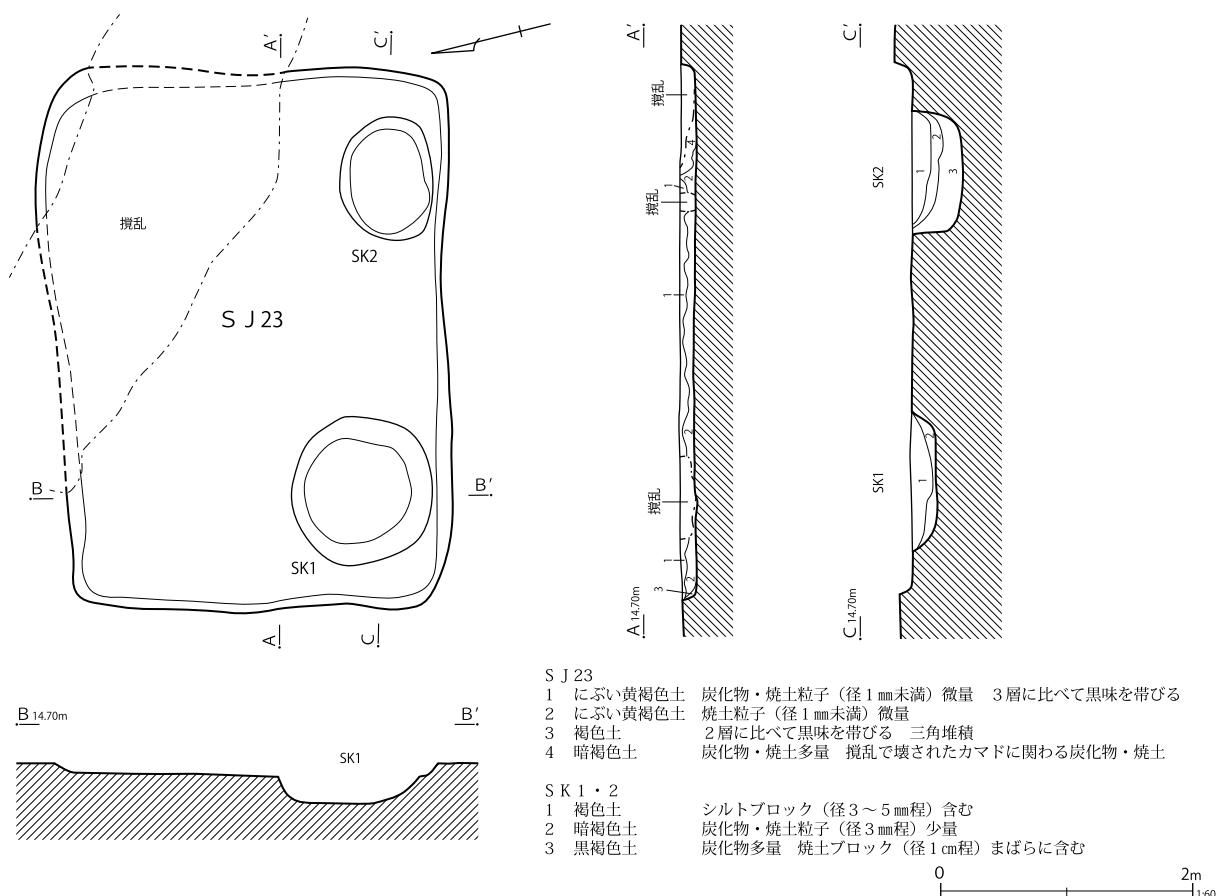
A区D-3、4グリッドに位置する。調査区の最も北側に検出した。北東側を攪乱に壊されていた。

平面形態は長方形である。規模は長軸長4.27m、短軸長3.06m、深さ0.12mである。長軸方位はN

-75° -Wである。

床面はほぼ平坦で、掘り込んだ地山面を床面として利用している。

住居跡の掘り込みは浅いが、覆土上層の第1層はにぶい黄褐色土でやや黒味を帯び、微量の炭化物と焼土粒子を含む。下層の第2層もにぶい黄褐



第194図 第23号住居跡出土遺物

第52表 第23号住居跡出土遺物観察表（第194図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	壺	—	[3.0]	(7.0)	IK	20	普通	灰	南比企産	80-2
2	ロクロ土師器	壺	—	[4.3]	—	ACHI	10	普通	灰黃褐	内黒	
3	土師器	壺	(11.8)	[2.9]	—	EHIK	10	普通	橙	北武藏型壺	

色土で焼土粒子を微量に含んでいる。西壁際には第3層の黒みを帯びる褐色土が堆積していた。

北東側は攪乱によって床面が壊されていたが、東側の壁際部分の床面上には多量の焼土ブロックや炭化物の堆積層が検出された。おそらくカマドの構築材や燃焼灰と考えられる。カマドは検出されなかったが、東壁に設けられていたと推測される。

土壙は床面から2基検出された。土壙覆土上層に貼床は見られなかった。

第1号土壙は南西コーナー部分から検出された。平面形態は円形である。土壙内の覆土は上層がシルトブロックを含む褐色土、下層が炭化物、焼土粒子を少量含む暗褐色土である。規模は径1.20m、深さが0.20mである。床面から掘り込まれており、住居に伴うものと考えられるが、性格は不明である。遺物は出土していない。

第2号土壙は、住居跡の南東コーナー部分から検出された。平面形態は橢円形で、断面形態はやや袋状に近い。覆土の第3層は、炭化物が多量に廃棄されたような状況が観察された。覆土は人為的堆積で、上層にシルトブロックを含む褐色土、中層に炭化物、焼土粒子を少量含む暗褐色土、下層に炭化物を多量に含み、焼土ブロックを伴う黒褐色土が見られた。規模は長径0.97m、短径0.74m、深さ0.40mである。

遺物は第194図1～3に図示した須恵器壺、口クロ土師器壺、土師器壺が出土した。1は南比企産の須恵器壺である。底部外面は回転糸切り。体部はやや内湾気味に立ち上がる。2は内面にミガキが施される内黒土器である。混入と思われる。3は北武藏型の土師器壺で、口縁部は上方に立ち上がり体部下端に腰を持ち、底部は平底気味である。口縁部にヨコナデが施され、体部外面は未調整で、底部外面はヘラケズリが施される。時期は8世紀末から9世紀初め頃と考えられる。

第24号住居跡（第195図）

A区F-5、6グリッドに位置する。第30、31号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。

平面形態は長方形であるが、西壁の南寄りに張り出しを持つ。規模は主軸長3.45m、短軸長2.34m、深さ0.06mである。張り出しの規模は幅1.25m、奥行0.25mである。主軸方位はN-25°-Eである。

住居跡の掘り込みは浅く、確認面からわずか6cm程度である。覆土は床面直上に堆積したシルト質の粘土と燃焼灰を含む土層である。第1層が黒色土でシルト質粘土に燃焼灰が混入、第2層が褐色土、第3層が灰白色土、第4層が褐色土、第5層が黒色土である。また、南側壁には第6層の褐色土が堆積していた。

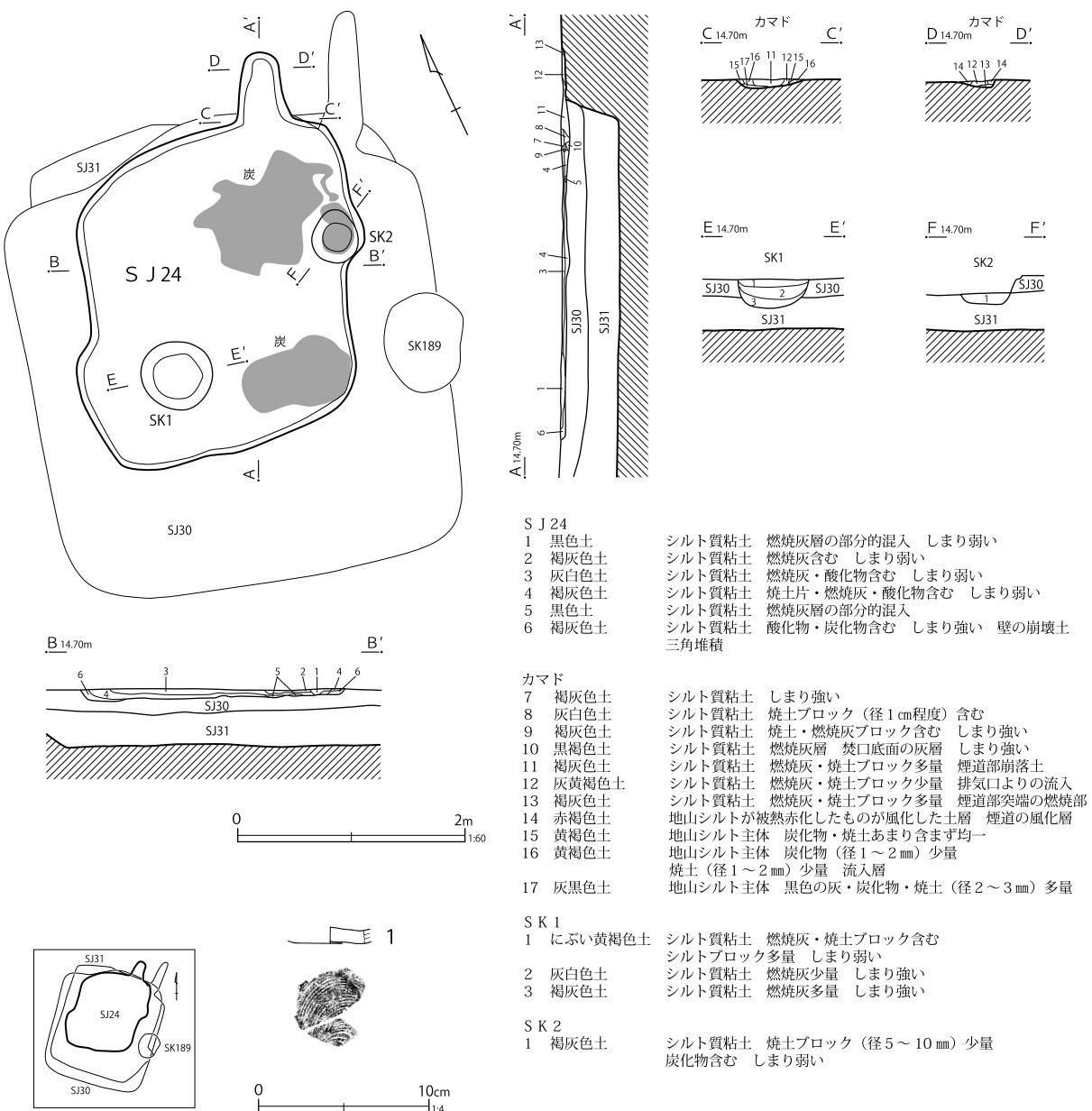
住居跡からは土壙、カマドが検出された。床面は平坦で、東側壁から南東隅にわたって炭化物が薄く堆積していた。

床面から2基の土壙が検出された。

第1号土壙は南西部から検出され、円形を呈している。覆土は水平堆積で、上層はシルト質粘土と燃焼灰、焼土ブロックを含むにぶい黄褐色土、中層はシルト質粘土、燃焼灰を少量含む灰白色土、下層はシルト質粘土、燃焼灰を多量に含む褐色土である。規模は長径0.63m、短径0.60m、深さ0.26mである。第2号土壙は東壁沿いの中央から検出され、円形で、覆土はシルト質粘土と焼土ブロック、炭化物を含む褐色土である。規模は長径0.46m、短径0.42m、深さ0.10mである。

カマドは北壁やや東寄りに付設されていたが、削平を受けカマド基底面がわずかに残存するのみであった。カマド袖は存在しない。規模は全長62cm、幅50cm、深さ6cmである。

遺物は第195図1に図示した酸化焰焼成の口クロ土師器壺が出土した。糸切り痕が底部外面に残る小破片である。時期は10世紀前半頃と推定される。



第195図 第24号住居跡・出土遺物

第53表 第24号住居跡出土遺物観察表（第195図）

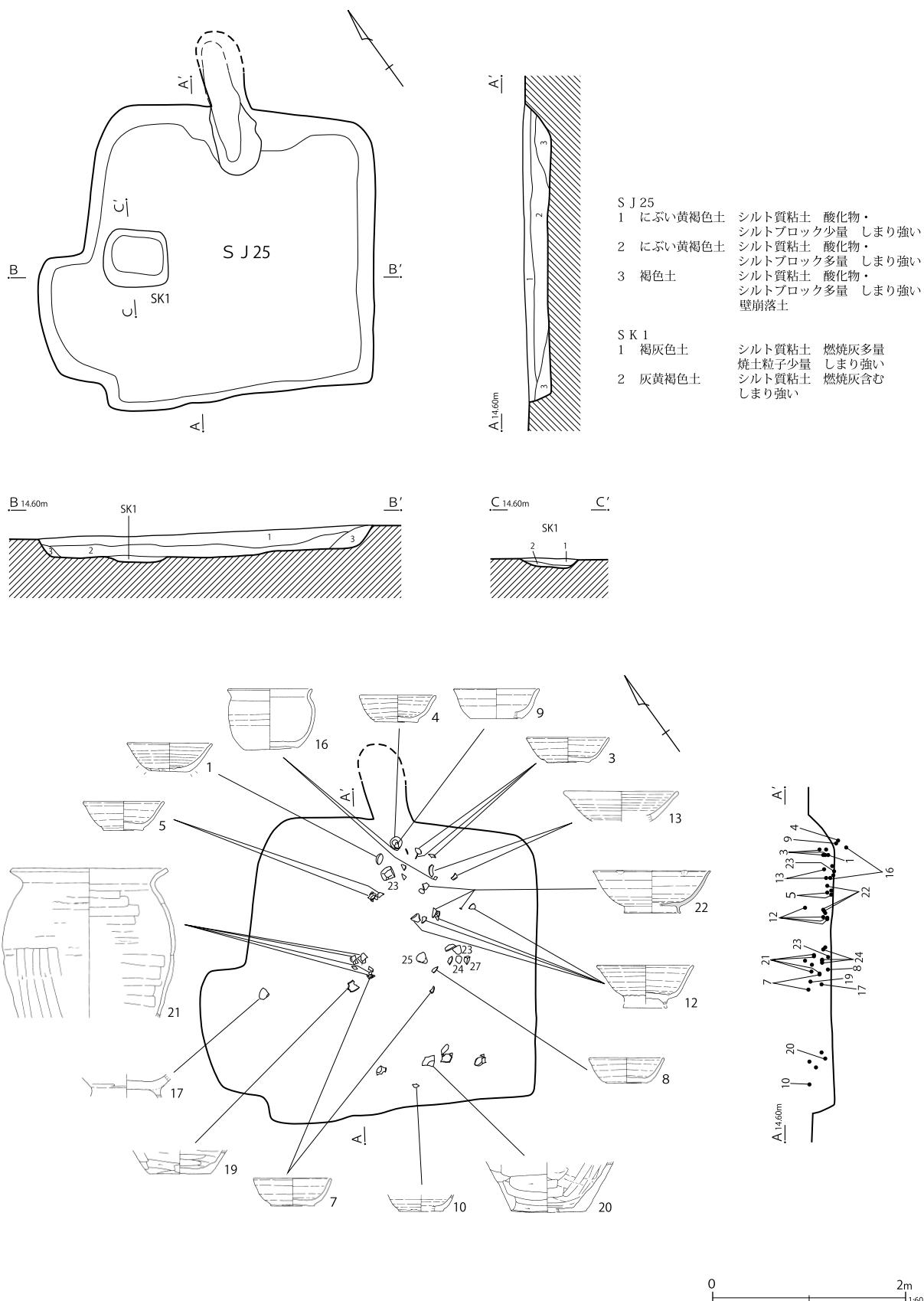
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	ロクロ土師器	壺	—	[1.0]	(4.6)	ACEHI	75	普通	にぶい黄橙	在地	

第25号住居跡（第196~199図）

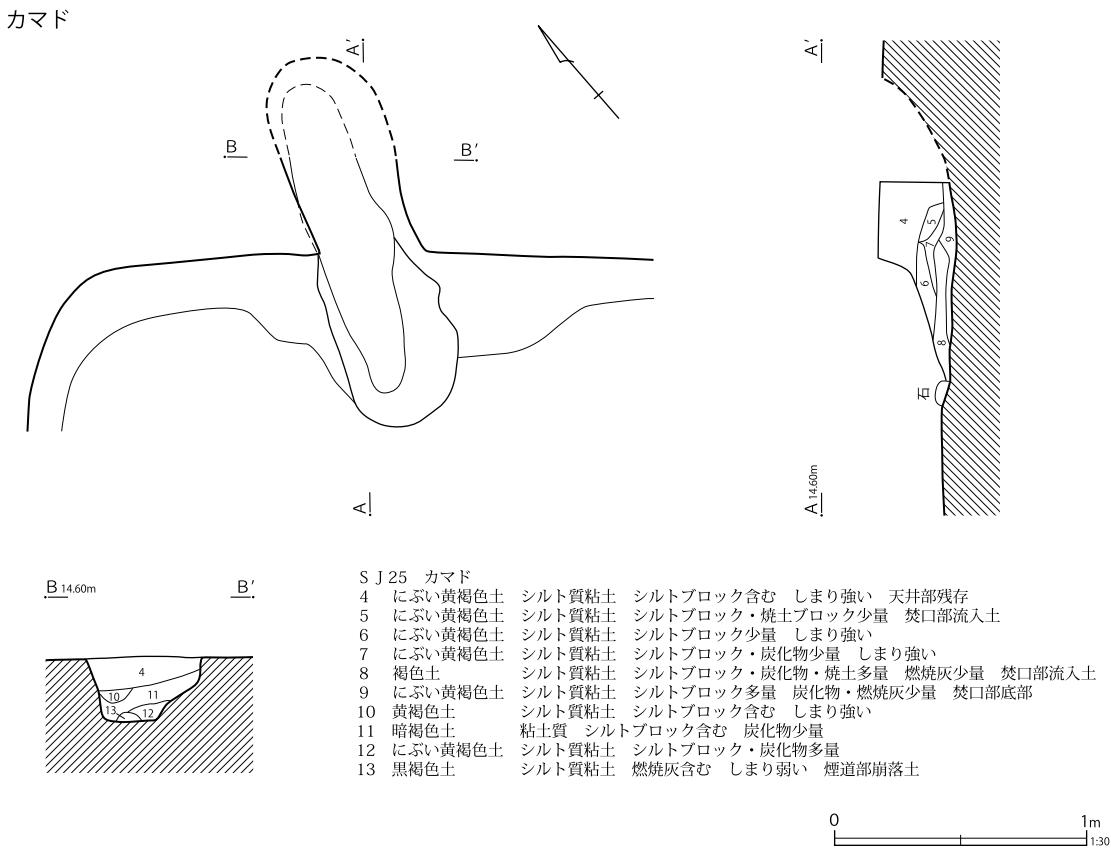
A区F-5グリッドに位置する。第24、30、31号住居跡の西側にあたる。

平面形態は方形であるが、西壁の南寄りに短冊状の張り出しを持っている。規模は主軸長3.72m、

短軸長2.50m、深さ0.28mである。主軸方位はN-25°-Eである。住居跡西側の張り出しの機能は不明であるが、住居内の付帯施設と考えられる。同様の張り出し構造は、近接する第24号住居跡でも確認できた。



第196図 第25号住居跡・遺物出土状況



第197図 第25号住居跡カマド

住居跡からは土壙、カマドが検出された。床面は平坦で、カマドの前面から中央付近にかけて硬化面を持つ。

第1号土壙は西壁沿い中央で検出され、形態は隅丸方形である。規模は長径0.68m、短径0.60m、深さ0.10mである。遺物は出土しなかった。

覆土は第1～3層に分層され、第3層は三角堆積土であり、第1、2層は自然堆積と考えられる。

カマドは北壁中央から検出され、全長148cm、幅47cm、深さ38cmである。当初カマドの存在は確認できなかったが、北側壁ほぼ中央部分に焼土の分布が確認され、カマドが検出された。カマド周辺からは、壁内の袖は検出されなかった。煙道部は、焚口部より約22°程北へ振れて直線的に延びる。掛け口部と想定される箇所からは、多くの焼土が確認された。また、3個体の土器が重なった状態で出土し、支脚に転用された可能性もある(第

196図4、9、16)。

カマド覆土を観察すると、第9層が焚口部の灰層であることから、焚口部が壁面よりも屋内側にあったことがわかる。

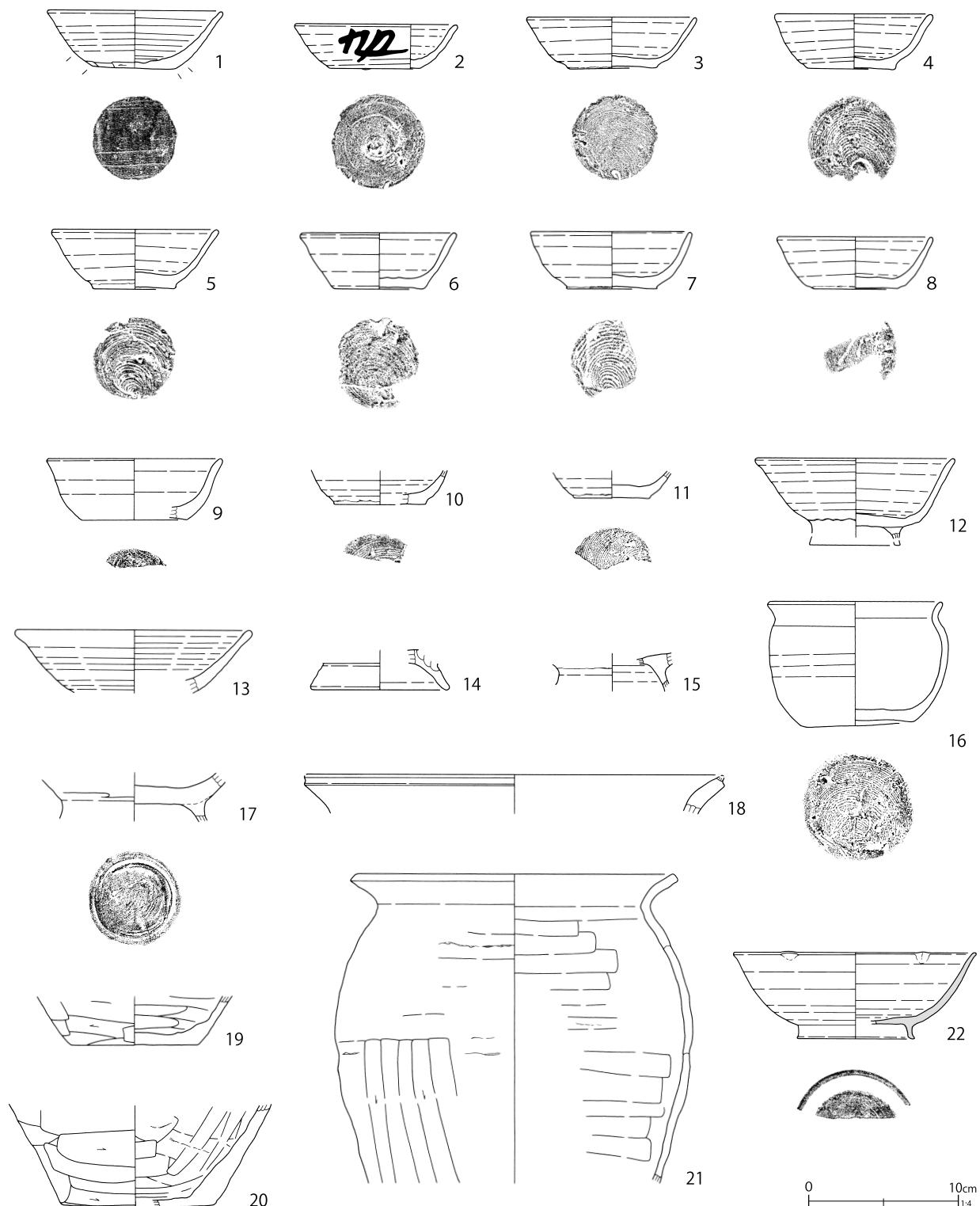
遺物は、カマド周辺に多く、他に住居跡中央付近と南東部から出土した。

遺物はロクロ土師器壺・高台付壺・鉢、土師器甕、緑釉陶器輪花壺、角閃石安山岩礫等が出土した(第198図1～22)。1、9はロクロ土師器壺で三和産系である。1は、体部下端及び底部外面に手持ちヘラケズリが施される。2～8、10、11は三毳産系と考えられ、2は底部ヘラ切りで体部外面に墨書きがある。12、13は在地の土器である。16は平底の鉢である。19～21は器壁のやや厚い在地の甕である。21は胴部に輪積痕が残り、器面に凹凸が見られる。22は尾北産の緑釉陶器輪花壺である。時期は10世紀前半と考えられる。

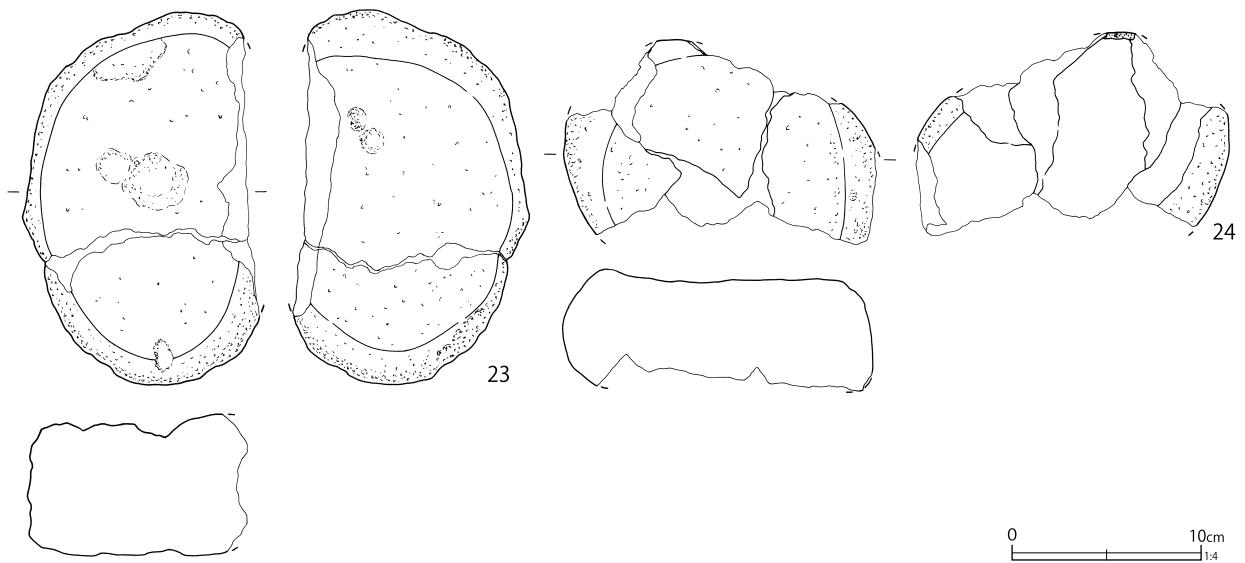
また、覆土から角閃石安山岩礫（199図23、24）が出土した。これらの礫は住居跡床面直上の覆土中からまとめて出土している。いずれも拳大の

大きさであるが、接合して2個体になった。

周辺には土器片も出土しており、住居廃絶後に土器と一緒に一括廃棄されたものと考えられる。



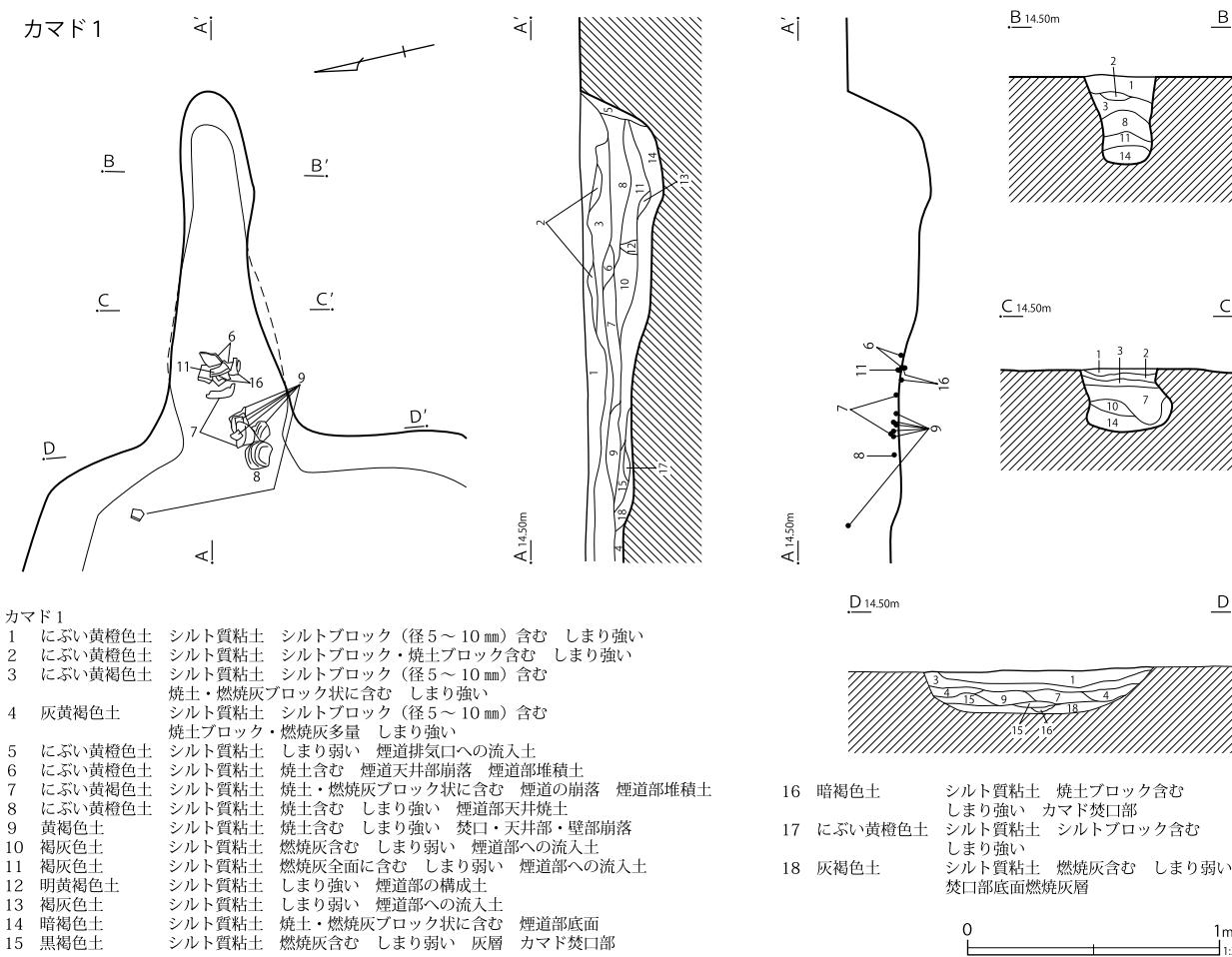
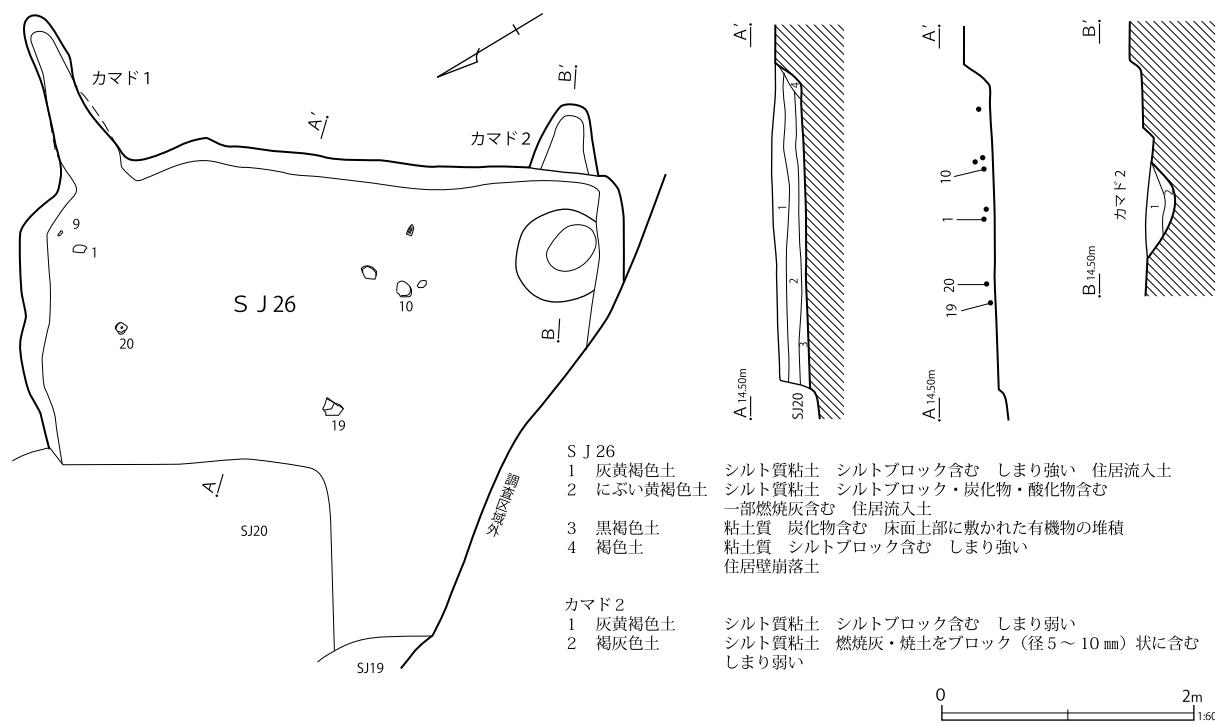
第198図 第25号住居跡出土遺物(1)



第199図 第25号住居跡出土遺物(2)

第54表 第25号住居跡出土遺物観察表(第198、199図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	ロクロ土師器	壺	11.8	3.9	5.6	ACEHIK	100	普通	にぶい黄橙	三和産系 手持ちヘラケズリ №.1	80-4
2	ロクロ土師器	壺	10.7	3.0	6.2	AIK	95	普通	浅黄橙	三毳産系 墨書 底部回転ヘラ切り	80-3
3	ロクロ土師器	壺	11.1	3.4	5.6	CHIK	70	普通	にぶい橙	三毳産系 №.6.7.38 カマド	80-5
4	ロクロ土師器	壺	10.4	3.6	5.9	AHK	100	普通	にぶい黄橙	三毳産系 №.3	80-6
5	ロクロ土師器	壺	10.9	3.9	5.5	ACHK	70	普通	にぶい褐	三毳産系 №.36.37	80-7
6	ロクロ土師器	壺	(10.0)	3.8	6.0	HIK	50	普通	橙	三毳産系	80-8
7	ロクロ土師器	壺	(10.4)	3.8	(6.0)	HIK	35	普通	灰黄褐	三毳産系 №.28.33	80-9
8	ロクロ土師器	壺	10.3	3.5	5.7	ACHIK	30	普通	にぶい橙	三毳産系 底部回転糸切り後ヘラ記号 №.27	80-10
9	ロクロ土師器	壺	(11.5)	4.1	(7.0)	HI	30	普通	にぶい黄橙	三和産系 №.2	80-11
10	ロクロ土師器	壺	—	[2.3]	(6.0)	CEHK	30	普通	にぶい黄橙	三毳産系 №.43	
11	ロクロ土師器	壺	—	[1.9]	(5.0)	CEHI	30	普通	橙	三毳産系 カマド	
12	ロクロ土師器	高台付塊	13.3	[5.4]	—	AIK	90	普通	にぶい橙	茨城県西部 №.15.18.19.20	80-12
13	ロクロ土師器	高台付塊	(15.4)	[4.2]	—	ACEHJK	50	良好	にぶい橙	茨城県西部 №.10.13	80-13
14	ロクロ土師器	高台付塊	—	[2.6]	(9.0)	ACHIK	10	普通	にぶい黄橙		
15	ロクロ土師器	高台付塊	—	[2.6]	—	ACHIK	20	普通	明赤褐	内黒か	
16	ロクロ土師器	鉢	11.4	8.2	7.2	HJK	90	良好	にぶい黄橙	微量の白色針状物質を含む №.4.11	80-14
17	ロクロ土師器	塊	—	[3.4]	—	CHIK	90	普通	にぶい黄橙	№.41	80-15
18	土師器	甕	(27.7)	[2.5]	—	AEHIJ	5	普通	にぶい橙	常陸型甕	
19	土師器	甕	—	[3.3]	(8.6)	CEIK	45	普通	にぶい橙	№.39	81-1
20	土師器	甕	—	[6.8]	(10.2)	AEHIK	80	普通	灰黄褐	中央部ドーナツ状に煤 №.44	81-2
21	土師器	甕	(21.5)	[20.4]	—	AIK	10	普通	灰黄褐	№.29.30.31.32	81-4
22	緑釉陶器	輪花塊	(16.2)	5.8	(8.0)	EHIK	30	良好	灰	尾北産 №.12.14.16 内外面施釉	81-3
23	角閃石安山岩礫			長さ 12.1 cm	幅 13.7 cm	厚さ 7.5 cm	重さ 1060.0g			№.26.40	
24	角閃石安山岩礫			長さ 10.3 cm	幅 8.6 cm	厚さ 6.7 cm	重さ 310.0g			№.22.24.25	



第200図 第26号住居跡

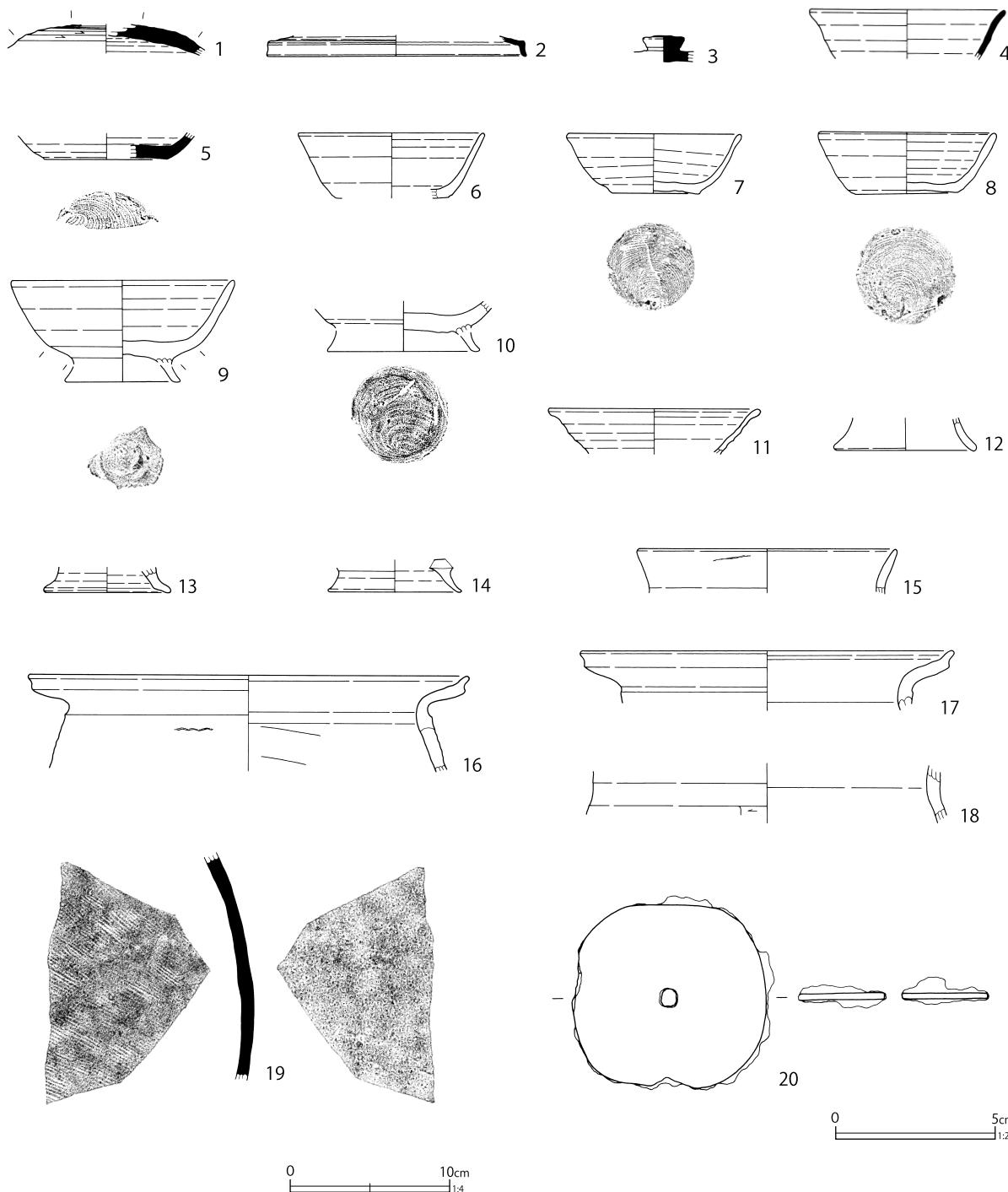
第26号住居跡（第200、201図）

A区G-4グリッドに位置する。第19、20号住居跡に壊されている。西側は調査区域外に延びている。残存する部分から平面形態は、方形であると推定される。カマド2が古いため、長軸方位をカマド2の方向とした。規模は検出された範囲で

長軸長4.80m、短軸長3.78m、深さ0.25mである。
長軸方位はN-54°-Eである。

住居跡からは土壙とカマドが2基検出された。
床面は平坦で、壁溝は検出されなかった。

重複関係は、(旧) 第26号住居跡→第20号住居跡→第19号住居跡（新）の順であった。



第201図 第26号住居跡出土遺物

第55表 第26号住居跡出土遺物観察表（第201図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	蓋	—	[1.8]	—	AIK	40	普通	灰	新治産 No.2	81-5
2	須恵器	蓋	(16.0)	[1.3]	—	EIJK	5	良好	灰	南比企産 SK	
3	須恵器	蓋	—	[1.6]	—	I	85	良好	灰褐	東金子産か SJ20	
4	須恵器	坏	(12.2)	[3.2]	—	ACEHIK	5	普通	にぶい黄橙	SK	
5	須恵器	坏	—	[1.6]	(7.6)	CHIK	20	普通	灰白	東金子産 SJ20 No.4	
6	ロクロ土師器	坏	(11.6)	4.0	(6.4)	CEIK	25	普通	にぶい黄橙	三毳産系 カマド No.10.13	
7	ロクロ土師器	坏	10.7	3.7	5.4	CEHI	80	普通	明黄褐	三毳産系 カマド No.14.20	
8	ロクロ土師器	坏	(11.0)	3.8	6.4	CHIK	65	普通	にぶい黄橙	三毳産系 カマド No.18	81-6
9	ロクロ土師器	高台付塊	(14.0)	[5.2]	—	CHIK	50	普通	にぶい黄橙	茨城県西部 カマド No.3.19.21.22.23.24	
10	ロクロ土師器	高台付坏	—	[2.0]	—	CHIK	90	不良	にぶい橙	茨城県西部 No.6	
11	ロクロ土師器	坏	(13.0)	[2.9]	—	ACEI	15	良好	にぶい黄橙	カマド No.11	
12	ロクロ土師器	高台付坏	—	[2.0]	(8.6)	ACI	15	良好	にぶい橙		
13	ロクロ土師器	高台付坏	—	[1.6]	(8.0)	HI	10	普通	にぶい黄橙		
14	ロクロ土師器	高台付坏	—	[2.1]	(8.3)	CHIK	10	普通	灰黄褐	内黒	
15	土師器	甕	(16.0)	[2.8]	—	CEHIK	5	普通	橙	武藏型甕（小型） SJ20	
16	土師器	甕	(27.4)	[6.0]	—	ACEHI	15	普通	にぶい褐	常陸型甕 カマド No.15.16	81-7
17	土師器	甕	(23.3)	[3.6]	—	CHIK	5	普通	にぶい黄橙		81-8
18	土師器	甕	—	[3.7]	—	ACEHI	5	普通	橙	SJ20	
19	須恵器	甕	—	[14.0]	—	EI	5	普通	灰	南比企産 平行叩き 自然釉 No.5	81-9
20	鉄製品	紡錘車	径 5.6 × 6.0 cm 厚さ 0.2 cm 重さ 34.2g				No.1				87-3

カマド1は北東コーナー部に付設され、全長183cm、幅47cm、深さ25cmである。煙道が長く外に延びていた。煙道天井部はほぼ完全な形で残存し、焼土がトンネル状に確認できた。煙道先端部分の立ち上がりには焼土が漸移的に堆積している。また、支脚に使用されたと思われる土器片がカマド燃焼部付近から出土した他、鉄製紡錘車が、カマド前面から出土している。

カマド内の堆積層は断面観察によると、第1～3層は住居跡廃絶後の自然堆積土である。第5層は煙道先端の開口部からの流入土である。第6、7層は煙道部分の天井崩落土であり、第8層は被熱により焼土化した煙道天井部である。第10～13層は空洞化した煙道部への流入土である。そして、第14層は焼土、燃焼灰を主体とした煙道底面の堆積土である。

カマド2は、南東コーナー部に付設されている。本住居跡のカマドは造り替えが行われたと考えら

れ、カマド2が古く、カマド1が新しい。カマド2は壁外に延びる煙道と燃焼部の床面にあるくぼみが残存していた。残存する煙道の規模は、長さ52cm、幅55cm、深さ10cmである。また、燃焼部の掘り込みの規模は、長径73cm、短径70cm、深さ35cmである。覆土上層にはシルト質粘土が堆積し、貼床の可能性がある。

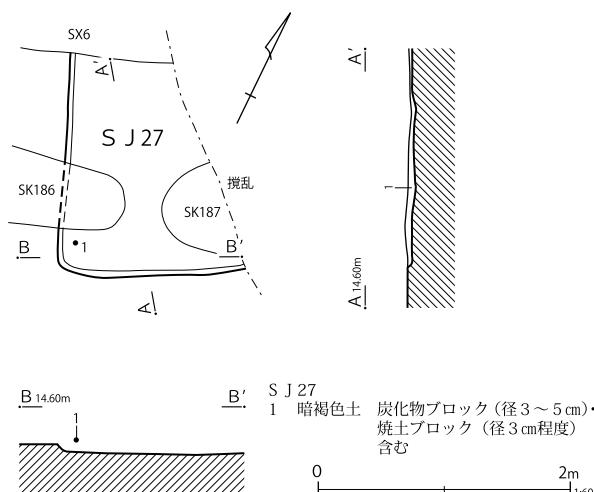
遺物は須恵器蓋・坏・甕、ロクロ土師器坏・高台付塊・高台付坏、土師器甕、鉄製紡錘車が出土した（第201図1～20）。カマド1からは6～8の三毳産系のロクロ土師器坏や9の高台付塊、16の常陸型甕の口縁部破片等が焚口部底面からまとめて出土している。カマド2の覆土中からは2の南比企産須恵器蓋の破片が出土している。また、住居跡北壁寄りから20の鉄製紡錘車が出土した。時期はカマド2から出土した須恵器蓋が9世紀第1四半期頃、カマド1から出土したロクロ土師器が9世紀第3四半期頃と考えられる。

第27号住居跡（第202、203図）

A区E-3グリッドに位置する。第23号住居跡の西側7mで調査区の北西端から検出された。北側を大規模な搅乱によって削平され、北西側を第6号性格不明遺構に壊されていた。また、周辺には東西方向に長軸方位を持つ短冊状の土壙が掘り込まれ、第186、187号土壙に壊されている。このため平面形態は不明瞭である。残存規模は、長軸長1.69m、短軸長1.47m、深さ0.06mである。長軸方位はN-25°-Wである。

住居跡の壁はほとんど残存していないが、南壁の一部と西壁の一部が検出された。浅い掘り込みではあるが、南西コーナーは明瞭に検出できた。覆土は暗褐色土で、明らかに地山との識別ができる。住居跡は本来もっと上層から掘り込まれていたと考えられるが、現状では6cm程の掘り込みである。カマドや柱穴、壁溝等の施設は検出できなかつた。

残存する床面は平坦である。硬化面等は見られなかった。

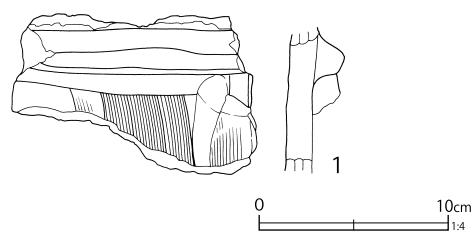


第202図 第27号住居跡

床面直上は径3~5cmの炭化物ブロックや径3cm程度の焼土ブロックを含む暗褐色土が堆積していた。

遺物は第203図1に図示した形象埴輪の破片が、南西コーナー部の床面よりやや浮いた位置から出土した。1は円筒部に突帯を貼付して上衣の裾を表現した人物埴輪の破片である。裾部は笠状に短く張り出し、裾部下端に接するように縦方向の突帯を貼付する。大部分が剥離しているため詳細は不明であるが、剥離痕の観察によると腰に垂下した附属具の緒の表現と考えられる。外面調整はタテハケ、内面調整は斜め方向のナデを施す。ハケメは幅2cmあたり、14条である。胎土は白色粒子、角閃石粒子の混入が目立つ。焼成は普通である。色調はにぶい黄褐色を基調とし、内外面の一部に黒色に変色した部分が見られることから、二次被熱を受けた可能性もある。埴輪の時期は概ね6世紀代である。

埴輪以外に出土遺物が全くないため、住居跡の時期を特定することは難しいが、第二面上層で検出したことや覆土の状態等から該期に位置づけておきたい。なお、埴輪片が住居内から出土した理由については、混入と考えるのが素直であるが、カマド袖の補強材として埴輪を再利用した事例もあり、留意される。



第203図 第27号住居跡出土遺物

第56表 第27号住居跡出土遺物観察表（第203図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	埴輪	形象埴輪	-	[8.4]	-	CEHIK	5	普通	にぶい黄橙	No.1	84-12

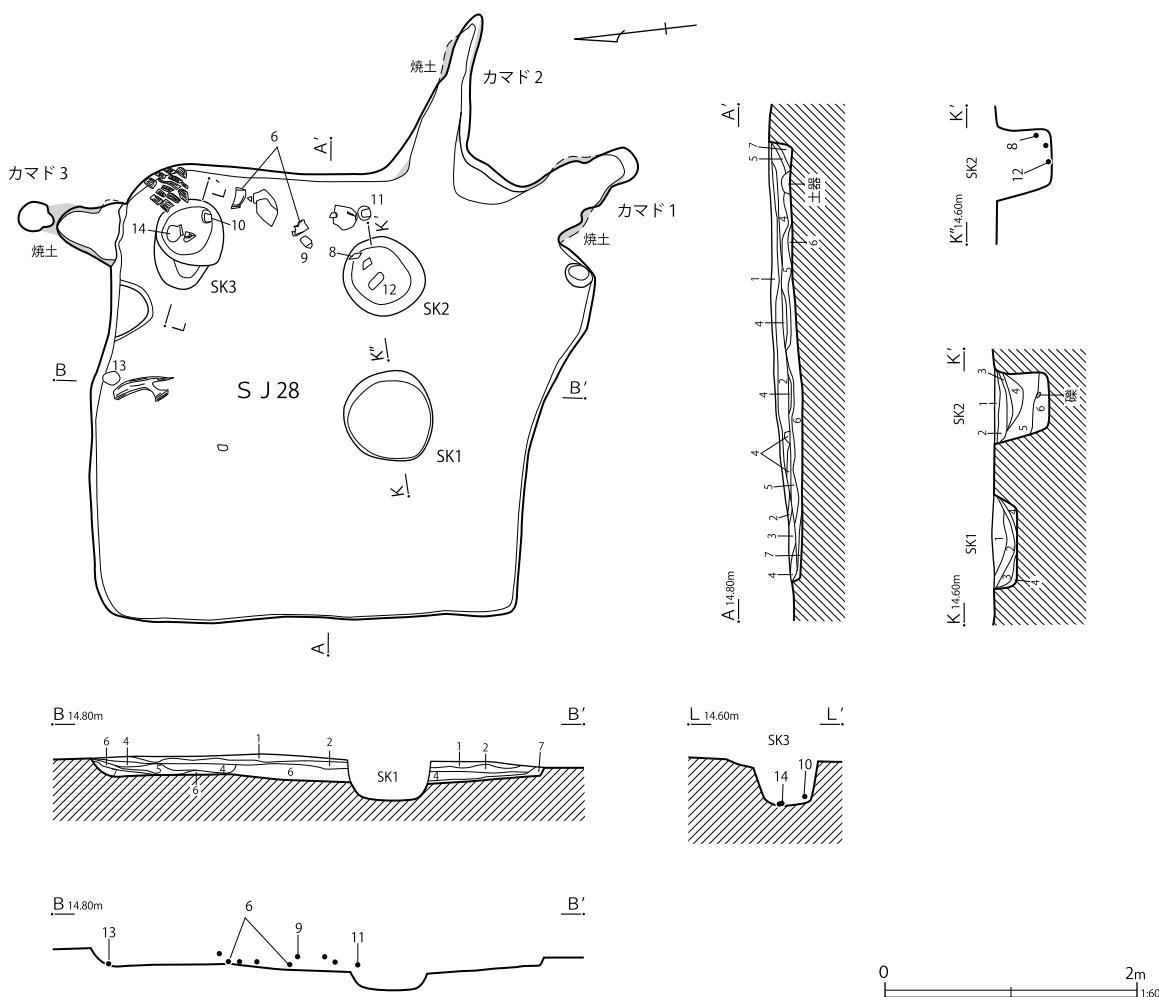
第28号住居跡（第204～207図）

A区G-5、6グリッドに位置する。住居跡からは床下土壙3基、カマド3基が検出された。検出された3基のカマドは、東壁と南壁のコーナー部にカマド1、東壁中央やや南寄りにカマド2、北壁東側コーナー部にカマド3が設けられている。新旧関係は、カマド3が最も古く、カマド2、カマド1の順に新しくなる。

平面形態は方形である。規模は主軸長4.85m、短軸長3.45m、深さ0.18mである。主軸方位はN-18°-Eである。

床面は平坦で、貼床がある。黒褐色土の掘り方の上に灰黄褐色の粘土を貼って床面としていた。壁溝は検出されなかった。

カマド1は東壁から検出され、南東コーナーに付設されている。規模は全長155cm、幅50cm、深

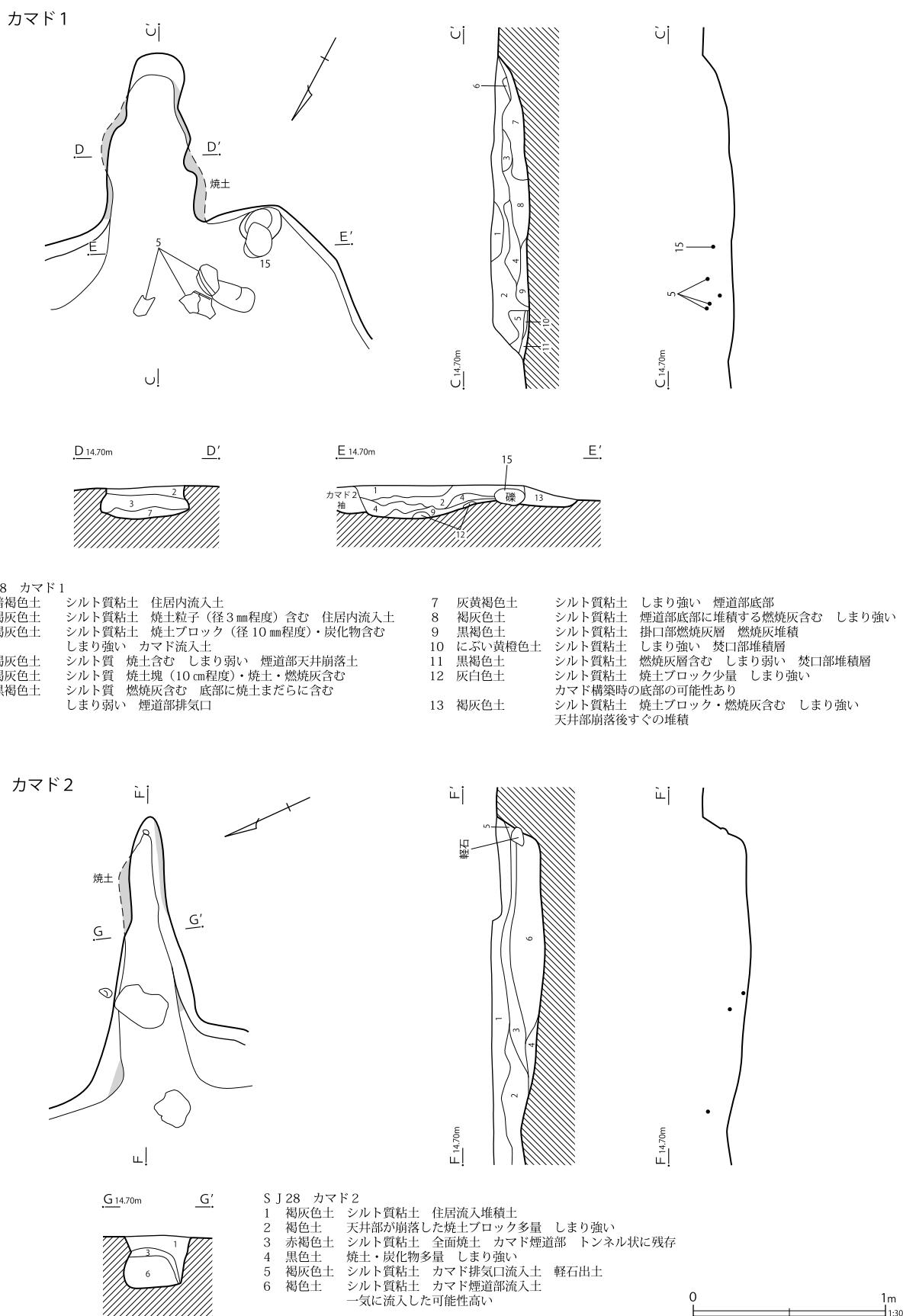


SJ 28	
1	褐灰色土 シルト質 燃土・燃焼灰ブロック状に含む しまり強い 住居流入土
2	褐灰色土 シルト質粘土 燃土ブロック（径1cm程度、1層より大きい）・ 燃焼灰含む しまり強い 住居流入土
3	黒褐色土 シルト質粘土 燃土ブロック主体 燃焼灰層 住居流入土
4	灰黄褐色土 シルト質粘土 シルトブロック含む しまり強い 住居流入土
5	褐灰色土 シルト質粘土 燃焼灰ブロック状に含む 燃土粒子含む しまり強い 住居内での燃焼の痕跡
6	灰黄褐色土 シルト質粘土 燃土粒子・シルトブロック含む しまり強い 重複住居上面の床面の可能性あり
7	にぶい黄褐色土 シルト質粘土 しまり強い 壁崩落土

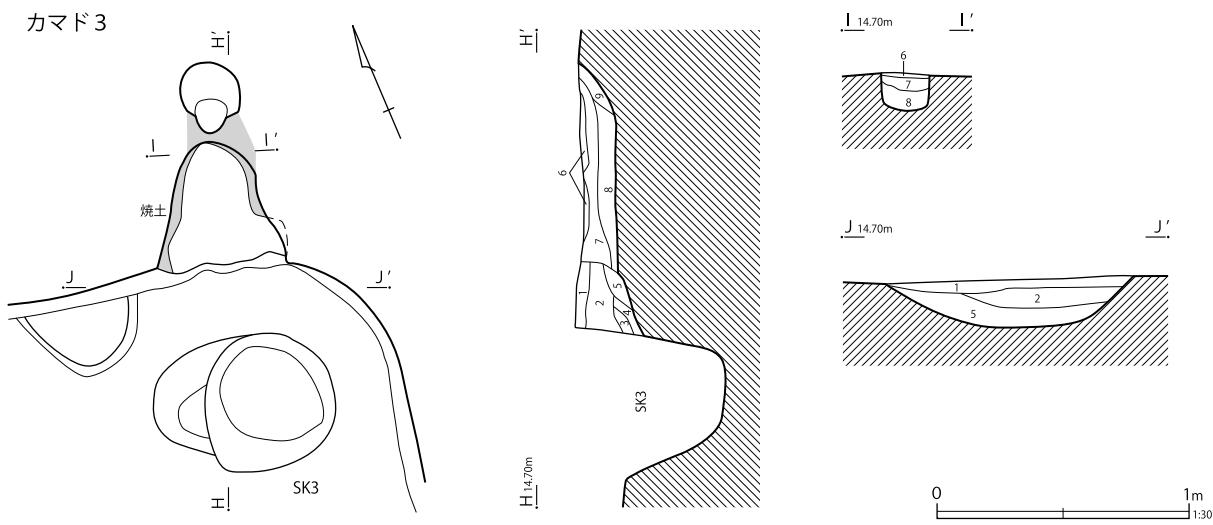
SK 1	
1	褐灰色土 シルト質、酸化物含む しまり強い
2	褐色土 シルト質粘土 燃土ブロック・燃焼灰含む しまり強い
3	灰黄褐色土 シルト質粘土 燃焼灰含む しまり強い
4	にぶい黄褐色土 シルト質粘土 岩化物粒子少量 しまり強い

SK 2	
1	灰黄褐色土 シルト質粘土 岩化物・燃土ブロック多量 しまり弱い
2	にぶい黄褐色土 シルト質粘土 岩化物・燃土ブロック含む しまり弱い
3	灰黄褐色土 シルト質粘土 燃焼灰層主体 一部燃土粒子（径5mm程度）含む しまり強い
4	褐灰色土 粘土質 燃焼灰・燃土少量 しまり強い
5	にぶい黄褐色土 粘土質 岩化物少量 しまり弱い
6	灰黄褐色土 粘土質 岩化物含む 5層よりやや多い しまり強い 軽石出土

第204図 第28号住居跡



第205図 第28号住居跡カマド 1、2



S J 28 カマド3

1 暗褐色土 シルト質粘土 住居内流入土
2 褐灰色土 シルト質粘土 焼土粒子（径3mm程度）含む住居内流入土
3 褐灰色土 シルト質粘土 焼土粒子・炭化物を含む
住居内流入土あるいはカマド焚口堆積土
4 灰黄褐色土 シルト質粘土 住居内流入土あるいはカマド焚口覆土

5 にぶい黄褐色土 シルト質粘土 住居壁の崩落土
6 赤褐色土 シルト質粘土 カマド天井部残存
7 黒褐色土 烧土粒子（径3～5mm）・炭化物含む
8 黒色土 烧土・炭化物多量 灰層
9 にぶい黄橙色土 烧土粒子含む 排気口への流入土

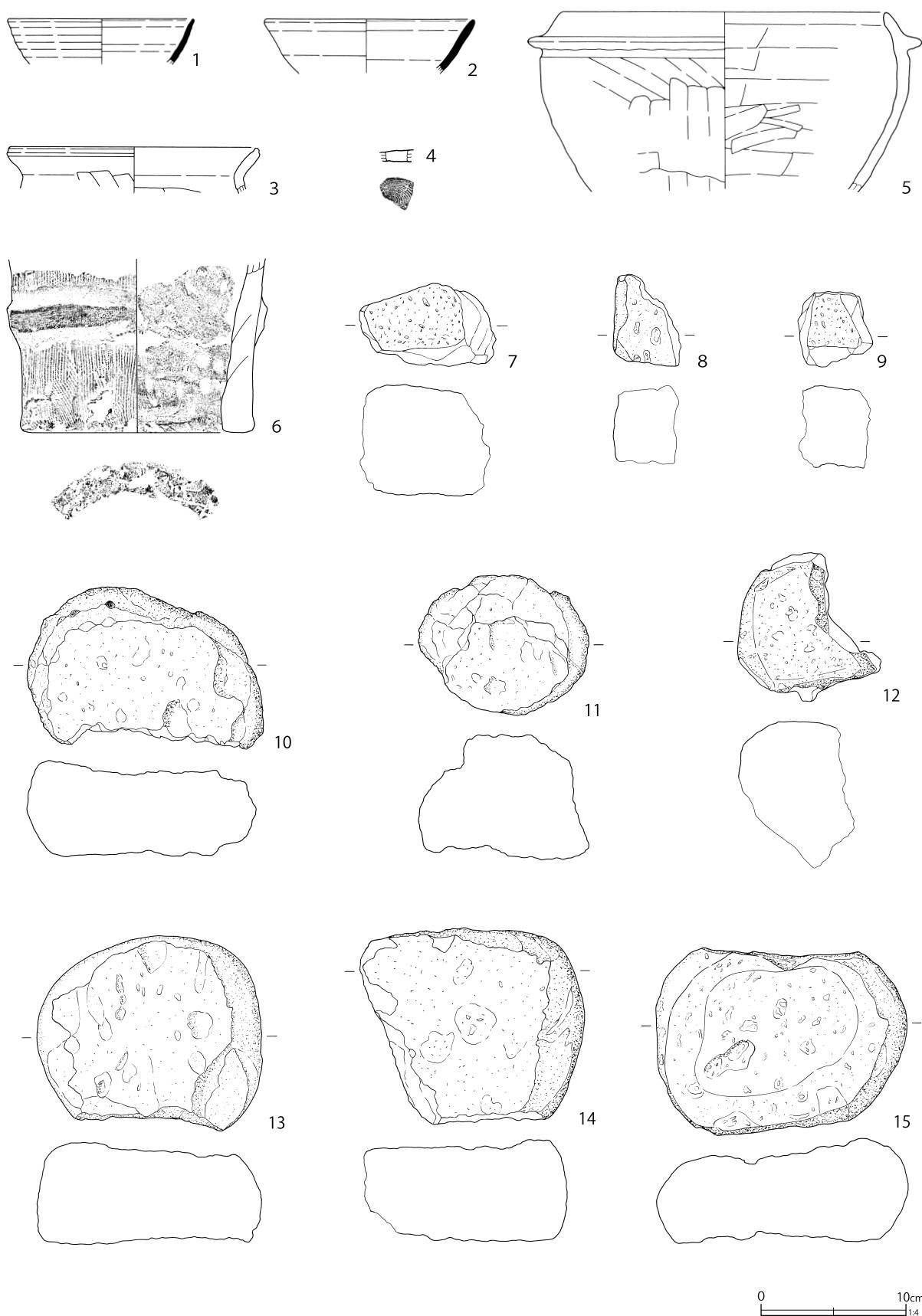
第206図 第28号住居跡カマド3

さ20cm、煙道部は長さ65cm、幅35cm、深さ15cmである。焚口部から煙道部にかけて広く被熱を受けて硬く締まっている。カマドの堆積状況は、一定の流入土があった後、天井部分が崩落し、その上に堆積したものと考えられる。またカマド付近からは、当初袖石と考えた角閃石安山岩製円礫（第207図15）が出土した。この石については、その後石の底部に被熱を受けている痕跡が確認できることから、支脚に使用した円礫と判断した。この他にも、支脚に使用したと思われる土器片、礫が出土している。カマド1は、カマド2の使用時に掻き出したと思われる燃焼灰をカマド袖の基底部に巻き込む形で構築している。また、カマド構築時に造られたと思われる造り出し状のコーナーが確認された。カマド1はカマド2よりも新しい。

カマド2は東壁、中央よりやや南側に付設されている。規模は全長200cm、幅41cm、深さ22cm、煙道部は長さ60cm、幅25cm、深さ20cmである。焚口部から煙道部分にかけて広く被熱しており、煙道部中央から煙出しにかけて天井部が残存していた。このことから、カマド2は、カマド1を構築

する際に、人為的にカマドを埋めたため、天井部が崩落しなかったものと考えられる。カマド2においても、支脚に使用したと思われる角閃石安山岩礫（第207図7）が出土している。また袖部の痕跡は確認できなかった。

カマド3は北東コーナー部に付設されている。規模は全長145cm、幅50cm、深さ20cm、煙道部は長さ60cm、幅40cm、深さ20cmである。煙道部中央から排煙口にかけて一部天井が残存していた。煙道部は、全体が被熱している。カマド3の堆積状況を見ると、天井部が残存していることから第6層に代表される土砂が短期間に堆積したと思われ、人為的な可能性も考えられるが、明確ではない。また第7、8層は、その際に焼土、燃焼灰を巻き込んで堆積したものと想定される。北東コーナー部分では、炭化物が塊で堆積し、埴輪片、土器片が焚口部付近より出土している。カマド3廃棄後にカマドの焚口部分をローム土で埋め住居跡の壁面を作り出していた痕跡が確認された。これによりカマド3が最も古く、カマド1の袖が残存していることから、カマド1が最も新しい。



第207図 第28号住居跡出土遺物

第57表 第28号住居跡出土遺物観察表（第207図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	壺	(12.8)	[3.2]	—	AEHIK	10	普通	黄灰	三和産 SK2	
2	須恵器	壺	(14.4)	[3.8]	—	HIK	10	普通	灰白	三毳産系 SK2	
3	土師器	甕	(17.0)	[3.1]	—	AHIK	5	普通	橙	常陸型甕	
4	ロクロ土師器	壺	—	[0.8]	—	HK	5	普通	にぶい褐	SK2	
5	土師器	羽釜	(22.5)	[12.4]	—	AEHI	30	普通	にぶい褐	東毛産 No.11.12.13	81-10
6	埴輪	円筒埴輪	—	[11.9]	(16.2)	ACEHIK	20	普通	橙	No.1.4	84-15
7	角閃石安山岩礫					長さ 5.5 cm 幅 9.5 cm 厚さ 7.6 cm 重さ 208.8g				カマド 2	
8	角閃石安山岩礫					長さ 5.9 cm 幅 4.2 cm 厚さ 5.3 cm 重さ 90.0g				SK2 No.3	
9	角閃石安山岩礫					長さ 5.1 cm 幅 5.1 cm 厚さ 5.6 cm 重さ 100.0g				No.3	
10	角閃石安山岩礫					長さ 10.9 cm 幅 16.2 cm 厚さ 6.5 cm 重さ 1100.0g				SK3 No.3	
11	角閃石安山岩礫					長さ 9.5 cm 幅 11.8 cm 厚さ 8.6 cm 重さ 550.0g				No.8	
12	角閃石安山岩礫					長さ 10.1 cm 幅 9.9 cm 厚さ 10.0 cm 重さ 540.0g				SK2 No.1	
13	角閃石安山岩礫					長さ 13.5 cm 幅 15.4 cm 厚さ 7.0 cm 重さ 1000.0g				No.17	
14	角閃石安山岩礫					長さ 13.6 cm 幅 15.4 cm 厚さ 7.0 cm 重さ 1600.0g				SK3 No.1	
15	角閃石安山岩礫					長さ 12.9 cm 幅 17.4 cm 厚さ 7.1 cm 重さ 1420.0g				No.18	

土壙は3基検出された。第1号土壙はほぼ中央で検出され、円形を呈する。第2号土壙は東側中央、カマド2前庭部付近で検出された。第3号土壙は北東コーナーカマド3の前面で検出された。第2、3号土壙は形態や規模が近似しており、底面からは第207図8、10、12、14の角閃石安山岩礫が出土した。また、第3号土壙の東側から、木炭の破片が検出された。

遺物は須恵器壺、土師器甕・羽釜、埴輪、礫等が出土した（第207図1～15）。1はロクロ目が細かく残る三和産の須恵器壺である。体部がやや内傾に立ち上がり内湾している。2は器壁のやや厚い三毳産系の須恵器壺である。3は在地の土師器甕の口縁部破片である。口唇部が突出していることから常陸型甕である。5の羽釜は口縁部が内傾し、胴部が丸く張った樽のような器形で、底部に向かってすぼまる形態である。鍔は貼り付けで短く横方向に伸びている。粘土紐づくりで、胴部外面はヘラケズリを軽く施し、内面はヨコ方向のナデを施す。胎土は砂粒を多く含みきめが粗い非ロクロ成形である。東毛産羽釜と考えられる。

出土遺物には時期差が見られ、1、2の須恵器壺は9世紀中葉、5の羽釜は10世紀中葉である。

第29号住居跡（第208～210図）

A区G、H-6グリッドに位置する。第35号溝跡と重複している。平面形態は方形である。規模は主軸長3.62m、短軸長3.01m、深さ0.48mである。主軸方位はS-38°-Eである。

住居跡からカマドが検出された。床面は平坦で、掘り込んだ地山面をそのまま利用している。壁溝は検出されなかった。

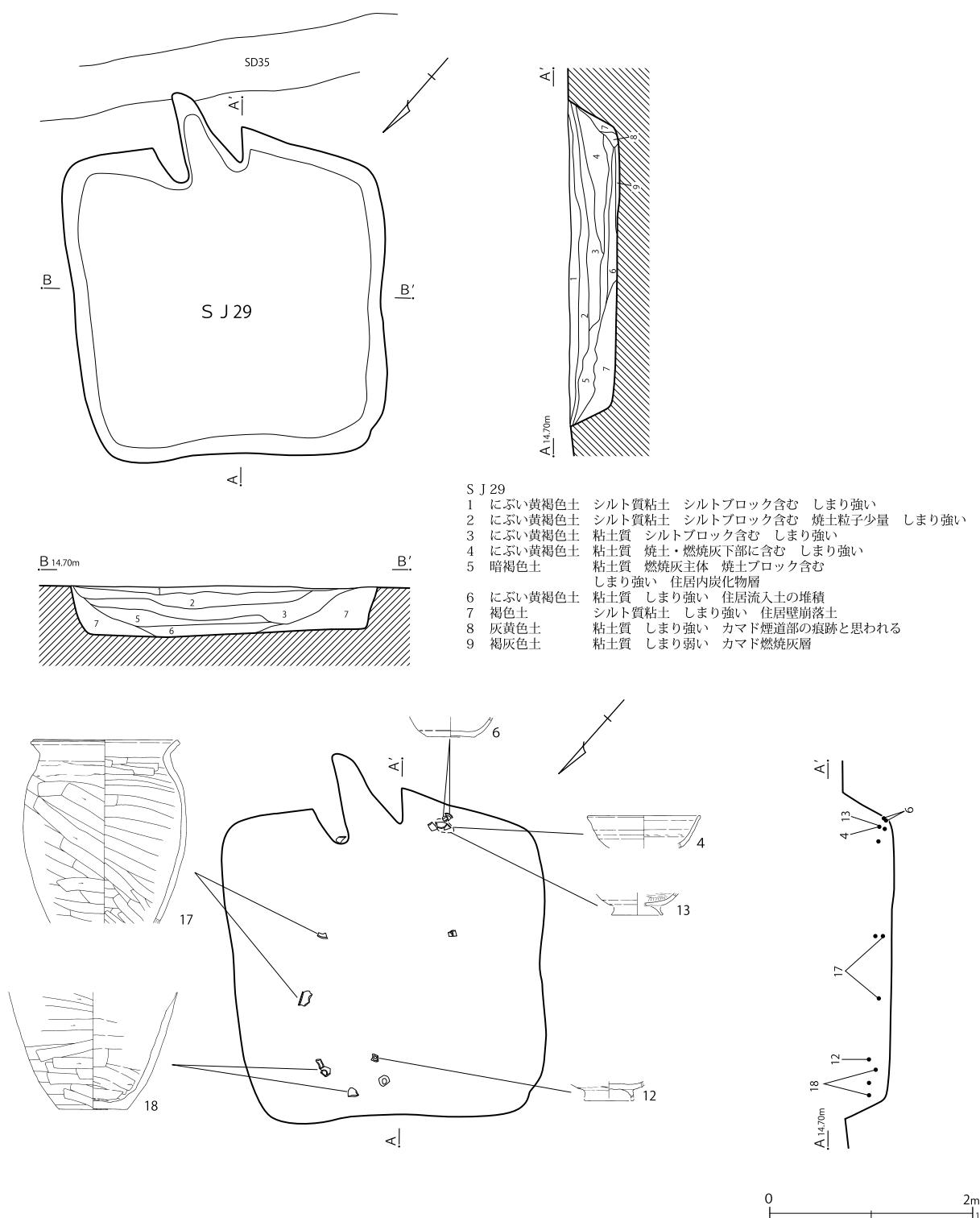
覆土の断面観察では、住居跡の壁際に第7層とした褐色土によるきれいな三角堆積が見られた。これは、住居跡周囲の壁崩落土が住居跡内に堆積したものと考えられる。また、この第7層の直上には北壁側から流れ込むように燃焼灰を主体とした炭化物層の第5層が住居跡全体を覆っていた。この層は住居跡の屋根材等が焼失により崩落し、堆積したものと考えられる。

カマドは、東壁中央に付設されている。規模は全長110cm、幅51cm、深さ53cm、煙道部は長さ54cm、幅28cm、深さ20cmである。天井部は部分的に地山土が良好な状態で残存していた。カマド袖部が屋内に延びて、燃焼部はほぼ壁内に収まる。焚口部の火床面は床面よりやや低い位置にあった。煙道部は先端部の屋外煙出しへと向かって緩やかに傾

斜して延びていた。壁面は良く焼けており、赤色に変化していた。

カマド覆土は、カマド内への流入土である第14、

16層と、灰層の第12、13、15層が、互層に堆積していた。第11層は天井部崩落土である。第10層は天井部崩落後のカマド内への流入土である。

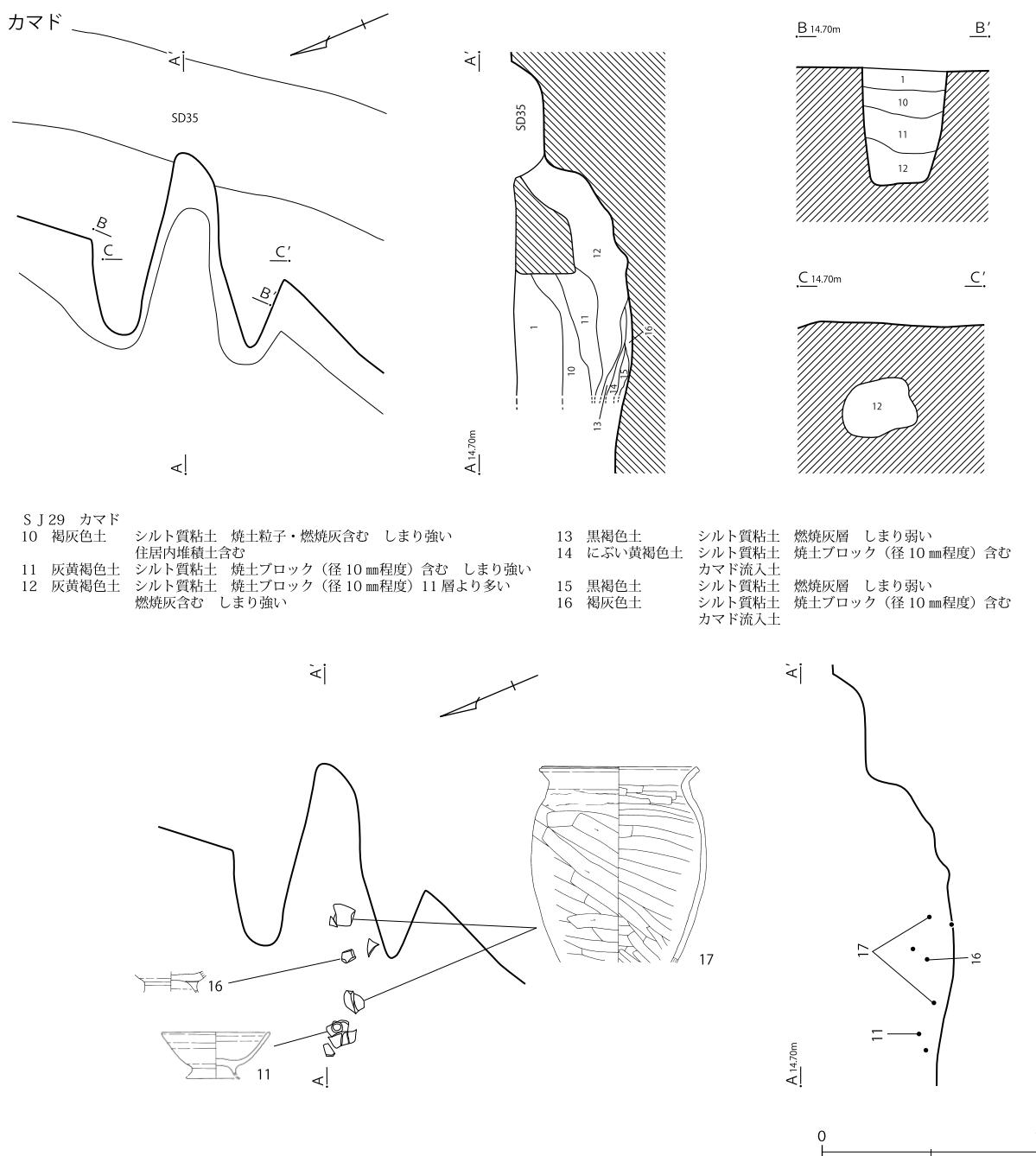


第208図 第29号住居跡・遺物出土状況

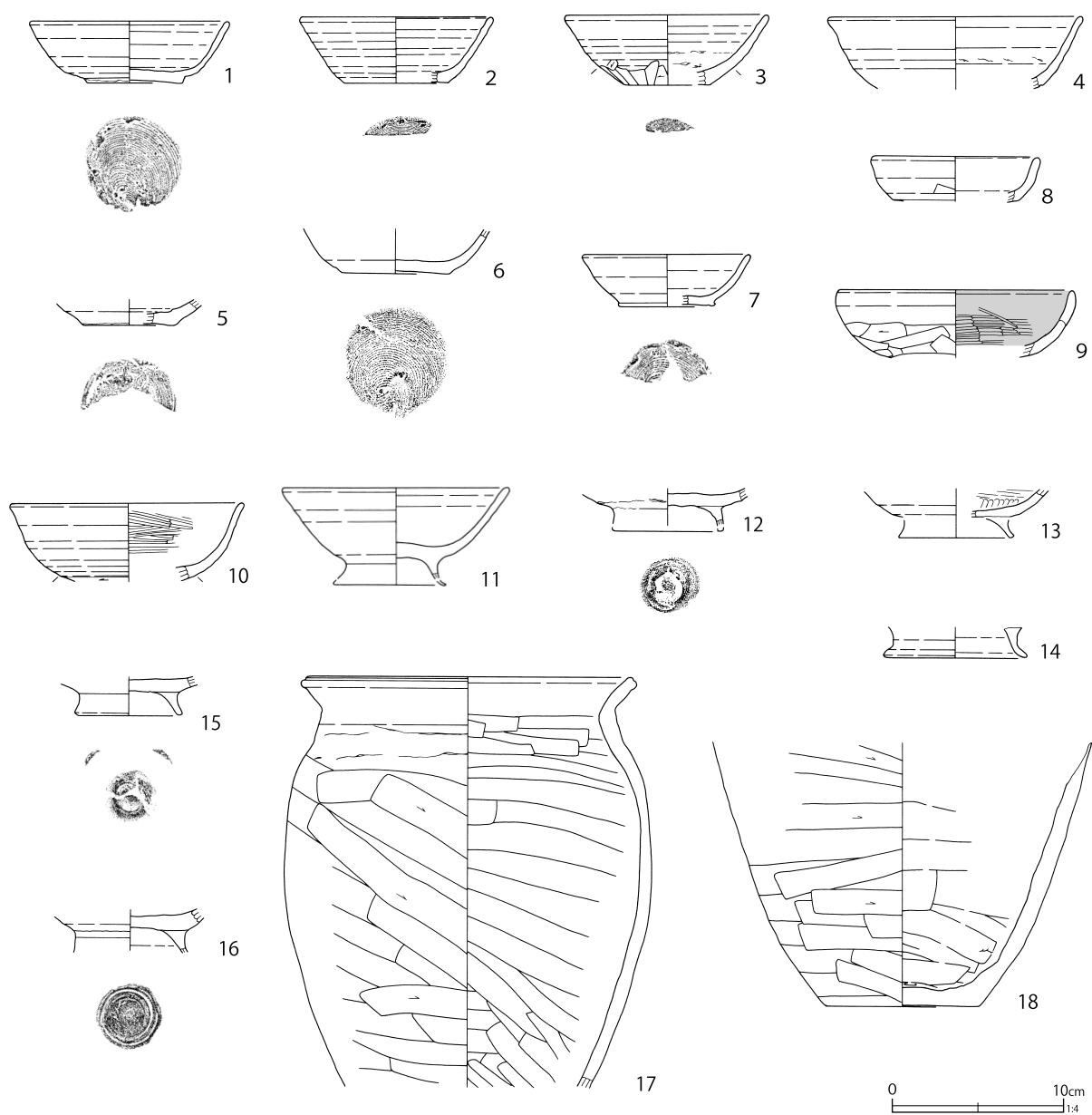
また、カマドの焚口部付近から、在地の常陸型甕の胴部破片が出土した。カマドの掛け口は住居壁のラインとほぼ同じ位置にある。カマド袖は地山を掘り残して造り出されている。煙道は奥壁から急激に立ち上がって延びる特徴を持つ。

遺物は第210図1～18に図示したロクロ土師器壺・高台付壺、土師器壺・甕が出土した。遺物は

覆土や床面等から出土し、3の三和産系ロクロ土師器と在地のロクロ土師器に混じって1、2、4、7、10、13の下総系ロクロ土師器が共伴する。また、カマド内から11のロクロ土師器高台付壺や17の土師器甕が検出された。3の三和産系としたロクロ整形の土器は、体部外面下端と底部に手持ちヘラケズリが施される特徴を持つ。また、焼成は



第209図 第29号住居跡カマド・遺物出土状況



第210図 第29号住居跡出土遺物

酸化焰で、色調が黄橙色から褐色である。8、9は土師器环で、8は小型のやや器壁が厚い平底の环である。9は内黒土器で内面に横方向のミガキが施され、体部外面にヘラケズリが施される。口縁部はヨコナデされる器壁のやや厚い丸底気味の环である。10は体部の立ち上がりが緩やかに内湾氣味に湾曲し、口唇部で外側に開く。ロクロ目が明瞭で、回転のやや速いロクロ目の細かな引き上げ痕が残る。内面にはミガキが施されている。底

部は欠損しているが、おそらく高台の付く高台付塊と見られ下総系のロクロ土師器とした。11、12、14~16は在地のロクロ土師器と考えられる。17、18は大型で平底の常陸型甕である。器壁が厚く、口縁部が外径に大きく「く」の字状に屈曲する。口唇部には一条のくぼみが巡り、面を持つ。粘土紐の輪積成形で胴部外面は斜めのヘラケズリを施し、内面はヨコヘラナデが施されている。時期は10世紀前半頃と考えられる。

第58表 第29号住居跡出土遺物観察表（第210図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	ロクロ土師器	壺	(11.4)	3.6	5.7	ACEHK	50	普通	にぶい黄橙	下総系 カマド	81-11
2	ロクロ土師器	壺	(11.0)	3.8	(6.0)	CEHIK	20	普通	灰黄褐	下総系	
3	ロクロ土師器	壺	(11.7)	4.1	(5.0)	ACEHIK	30	良好	にぶい橙	三和産系 底部手持ちヘラケズリ 下端ヘラケズリ 上半ロクロ	
4	ロクロ土師器	壺	(14.6)	[4.2]	—	ACHI	15	普通	にぶい橙	下総系 №16	
5	ロクロ土師器	壺	—	[1.5]	(5.4)	ACEHI	40	普通	にぶい橙	カマド	
6	ロクロ土師器	壺	—	[2.6]	6.2	ACHIK	80	普通	にぶい橙	No.17.18	81-12
7	ロクロ土師器	壺	(9.6)	3.0	(5.6)	HIK	20	普通	にぶい橙	下総系	81-13
8	土師器	壺	(9.6)	[2.6]	(7.4)	ACHIK	15	普通	にぶい赤褐		
9	土師器	壺	(13.6)	[3.9]	—	EHIK	40	普通	灰黄	内黒 内面ミガキ 掘り方	
10	ロクロ土師器	高台付塊	(13.3)	[4.5]	—	CEI	30	良好	にぶい橙	下総系 内面ミガキ	
11	ロクロ土師器	高台付塊	(13.0)	[5.3]	—	AEHI	65	普通	にぶい橙	茨城県西部 №10	81-14
12	ロクロ土師器	高台付塊	—	[2.2]	—	ACEHIK	80	普通	にぶい黄橙	茨城県西部 №4	
13	ロクロ土師器	高台付塊	—	[1.6]	—	EHIK	10	普通	にぶい黄橙	下総系 №16 内面ミガキ	
14	ロクロ土師器	高台付塊	—	[1.8]	(8.4)	ACHI	10	普通	にぶい黄橙		
15	ロクロ土師器	高台付塊	—	[2.3]	(6.3)	CEHIK	80	普通	にぶい褐	茨城県西部	
16	ロクロ土師器	高台付塊	—	[2.6]	—	HIK	70	普通	にぶい黄橙	茨城県西部 №12	
17	土師器	甕	(18.8)	[24.0]	—	AEHI	30	良好	にぶい黄橙	常陸型甕 №5.6.11.14	82-1
18	土師器	甕	—	[15.5]	9.0	EHIK	30	普通	にぶい黄橙	常陸型甕 №1.2	

第30号住居跡（第211、212図）

A区F-5、6グリッドに位置する。第24、31号住居跡と重複している。土層断面の観察から第30号住居跡は、第24号住居跡より古く、第31号住居跡より新しいと判断される。三軒の住居跡は、ほとんど同じ場所に掘り込まれており、最も新しく規模の小さな第24号住居跡は、本住居跡の覆土中に入れ子状に造られていた。

また、本住居跡は第24号住居跡の下面から検出され、掘り込みの深さは0.19mである。さらに、本住居跡の下面には第31号住居跡が検出された。第30号住居跡のカマド煙道部の灰層が第31号住居跡の覆土上層に堆積していたことから、新旧の重複関係を判断することができた。

カマド左側の壁はやや北側に膨らむが、おそらく廃絶後に壁が崩落し広がってしまった結果であり、本来構築時の北壁は直線的であったと推測される。また、第24号住居跡が上面に構築されていることから、壁面の崩落はその影響によるものと考えられる。おそらく住居跡の平面形態は比較的

整った方形であったと考えられる。規模は主軸長5.05m、短軸長3.82m、深さ0.19mである。主軸方位はN-31°-Eである。

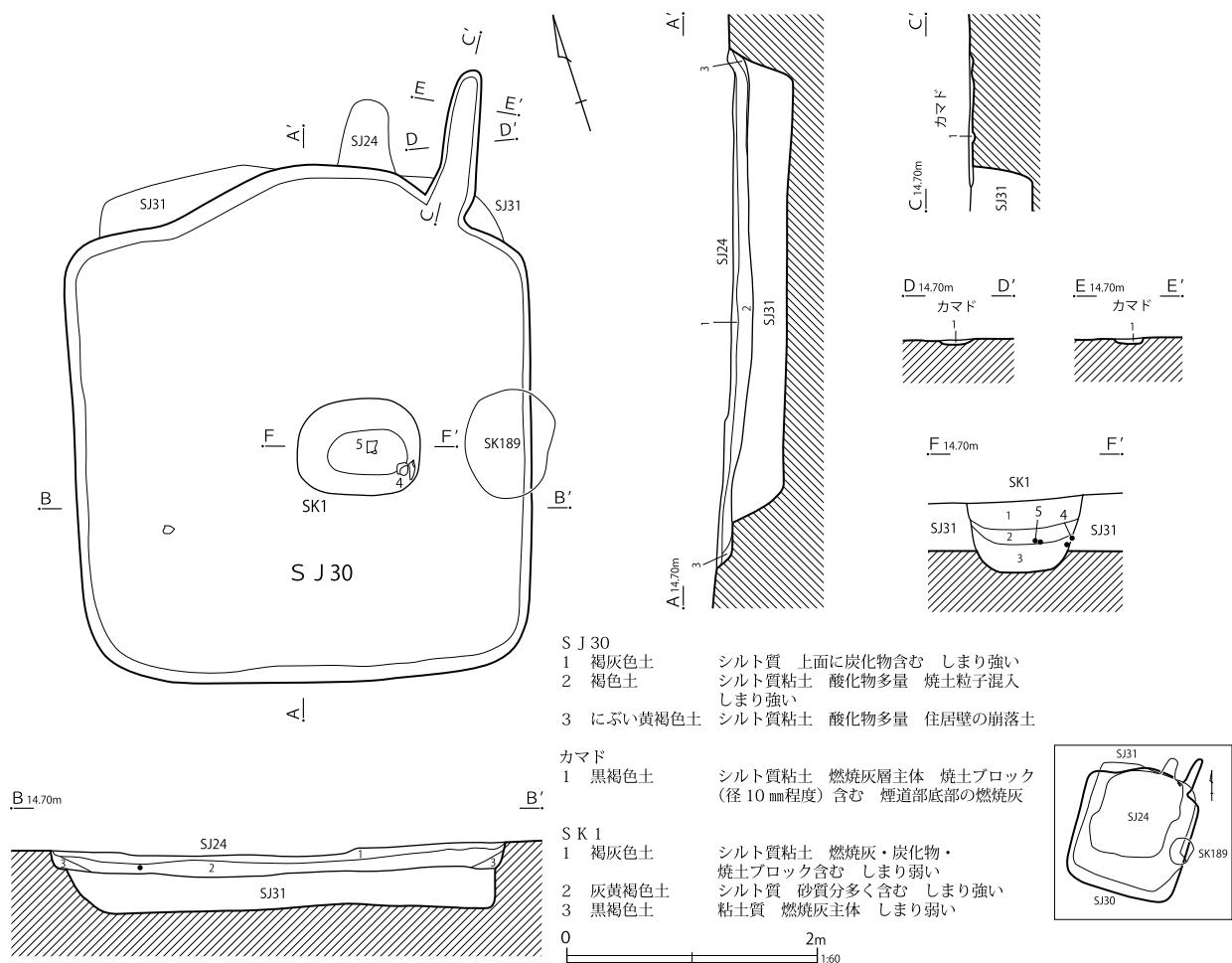
床面は平坦であり、粘土質の褐色土を、硬く踏み固められていた。覆土はシルト質褐色土を中心である。壁溝は検出されなかった。

住居跡からは、土壙、カマドが検出された。

カマドは、北壁の東側コーナーに付設されている。上面を削平され、燃焼部や袖部は確認できなかったが、煙道部の底面は燃焼灰層の堆積が確認できた。規模は全長128cm、幅34cm、深さ4cmである。カマド内から土器や支脚等は検出されなかつた。

カマドが壁コーナー部分に付設される構造を持つ住居跡は、第26号住居跡にも見ることができる。いずれも住居跡の掘り込みは浅く、構築時期は9世紀後半である等の共通点が見られる。両住居跡の距離は南西に約12m離れている。

さらに、同じ場所に建て替えが行われているのも大きな特徴である。三軒が重複する住居跡は、



第211図 第30号住居跡

本住居跡の南側へ約3m隔てて第28号住居跡が位置している。

第28号住居跡でも2回にわたりカマドの造り替えが行われており、掘り込みは深いが、煙道の細長いカマド2がやはり住居跡のコーナー部分に付設されている等共通する特徴が見られる。

9世紀から10世紀にかけて、同じ場所を継続的に宅地として利用する様相が見て取れる。園宅地の成立を考える上で注目される現象である。

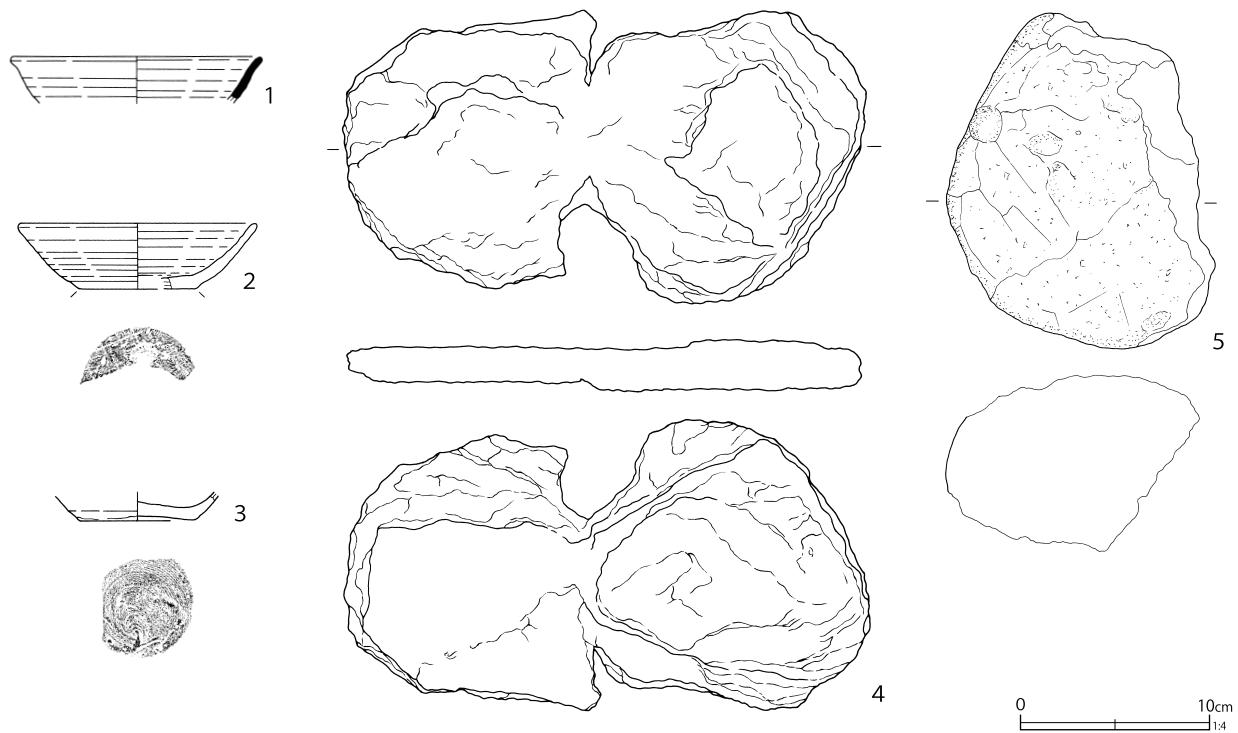
この他住居跡の中央から土壙1基が検出された。土壙は平面椿円形を呈し、覆土に炭化物、燃焼灰を多量に含み、意図的に埋め戻された可能性がある。規模は長径0.97m、短径0.76m、深さ0.56mである。

土壙内からは、土器片の他に第212図4の緑泥

片岩の破片、5の角閃石安山岩礫が出土した。礫は扁平ではあるが、長さ17.7cm、重さ1310gと大きなものである。石の用途は不明であるが、これまで他の住居跡から同様の礫が出土しており、土壙の性格や用途を検討する必要がある。住居跡確認面では、この土壙の存在は不明瞭であったが、住居跡の底面で検出した。また、土壙の覆土中から板碑に使われた緑泥片岩が出土していることから考えて、住居跡より新しい時期である。

遺物は第212図1~5に図示した須恵器坏、ロクロ土師器坏、緑泥片岩、角閃石安山岩礫が出土した。1は南比企産の須恵器坏である。2は下総北部産のロクロ土師器坏で、底部は手持ちヘラケズリである。

時期は、9世紀後半から末頃である。



第212図 第30号住居跡出土遺物

第59表 第30号住居跡出土遺物観察表（第212図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	壺	(13.0)	[2.4]	—	IJK	5	良好	灰	南比企産	
2	ロクロ土師器	壺	(12.4)	[3.5]	(6.0)	ACHIK	25	普通	にぶい橙	下総系 底部手持ちヘラケズリ	
3	ロクロ土師器	壺	—	[1.5]	(6.0)	ACEHI	30	普通	灰褐		
4	緑泥片岩						長さ 14.7 cm 幅 27.0 cm 厚さ 1.9 cm 重さ 1380.0g			SK1 No.1 No.2	
5	角閃石安山岩礫						長さ 17.7 cm 幅 14.2 cm 厚さ 9.3 cm 重さ 1310.0g			SK2	

第31号住居跡（第213、214図）

A区F-5、6グリッドに位置する。第24、30号住居跡と重複している。重複する三軒の住居跡の中で最も古い時期の住居跡である。

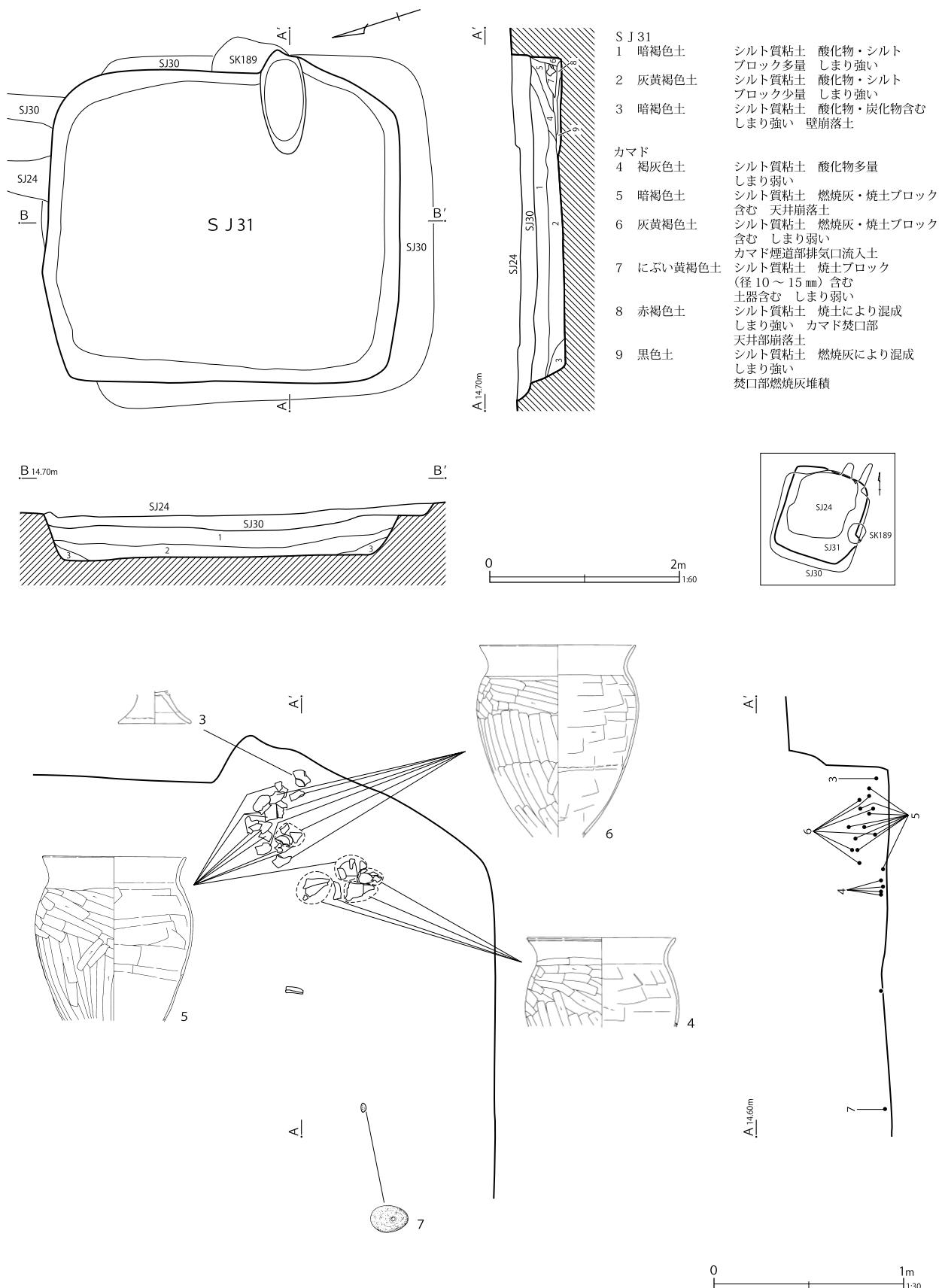
平面形態は比較的整った方形である。規模は主軸長3.55m、短軸長3.75m、深さ0.46mである。主軸方位はS-71°-Eである。

住居跡からはカマドが検出された。壁溝は検出されなかった。

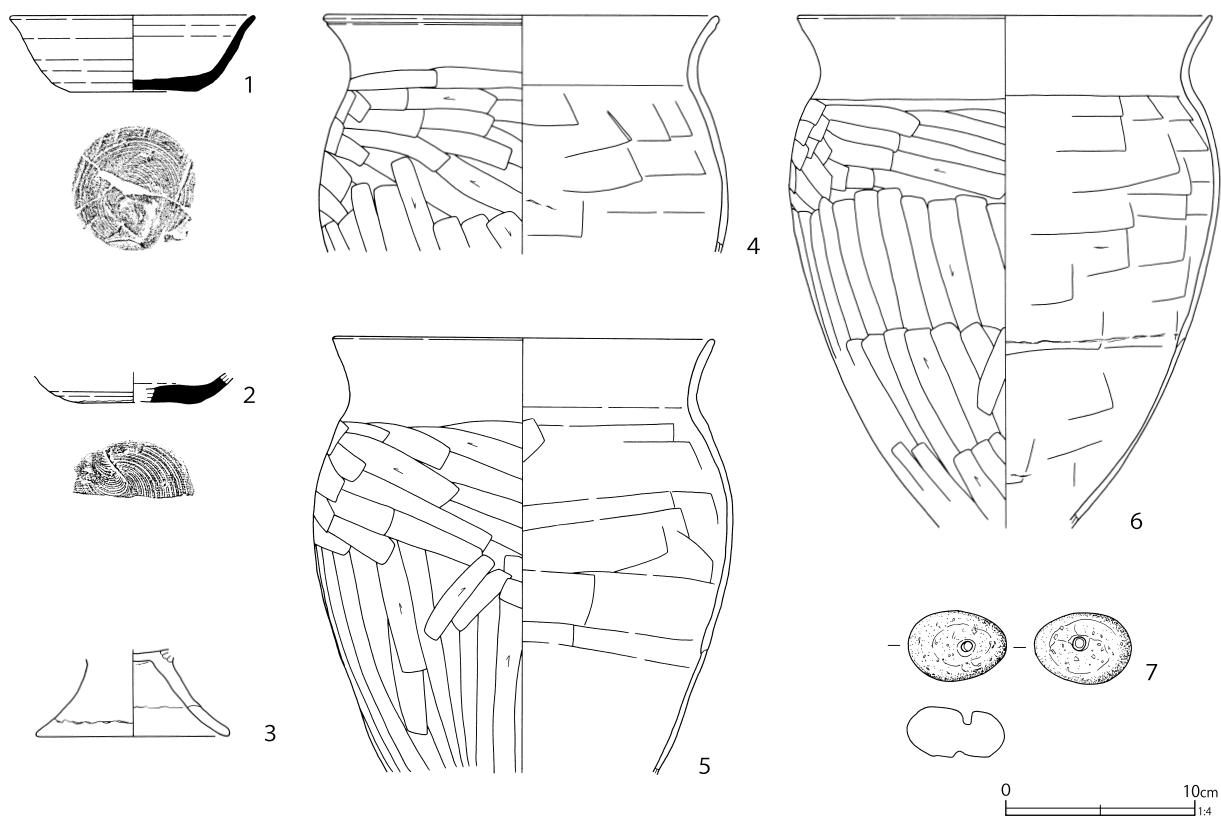
床面は、粘土質の暗褐色土で、硬く踏み固められていた。覆土は、シルト質の暗褐色土が主体であり、住居廃絶後自然堆積したものと判断され、堆積後に第30号住居跡が構築されている。

カマドは東壁やや南寄りに付設され、規模は全長103cm、幅47cm、深さ32cmである。カマドは、第30号住居跡のトレーナにより大部分が失われていたが、焼土、燃焼灰の確認により、東壁東南部に存在したと想定できた。カマド燃焼部周辺から土師器の甕がまとまって出土している。特に4～6はつぶれて重なりあっていた（第213図）。

遺物は第214図1～7に図示した須恵器壺、土師器台付甕・甕、軽石が出土した。1、2の須恵器壺は三毳産であるが、3は武藏型の小型台付甕の脚部破片である。4～6の土師器甕はいずれも武藏型甕の「く」の字状口縁甕である。時期は8世紀中葉頃と見られる。



第213図 第31号住居跡・遺物出土状況



第214図 第31号住居跡出土遺物

第60表 第31号住居跡出土遺物観察表 (第214図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	壺	(12.7)	4.0	6.7	BCEHI	60	良好	灰	三毳産	81-15
2	須恵器	壺	—	[1.3]	(7.0)	AEHI	40	普通	灰黄	三毳産	
3	土師器	台付甕	—	[4.6]	10.0	ACIK	75	普通	橙	No. 1	
4	土師器	甕	20.7	[12.6]	—	CHI	60	普通	橙	武藏型甕 No. 15.16.17.18 カマド	81-16
5	土師器	甕	(19.8)	[23.1]	—	ACHI	30	普通	にぶい赤褐	武藏型甕 No. 3.4.6.7.8.9.12.13.19 カマド	82-2
6	土師器	甕	(21.6)	[27.1]	—	CHIK	30	普通	にぶい赤褐	武藏型甕 No. 2.5.10.11.13.14 カマド SJ30	82-3
7	軽石		長さ 3.6 cm 幅 5.2 cm 厚さ 2.6 cm 重さ 22.7g						No. 21		

第32号住居跡 (第215、216図)

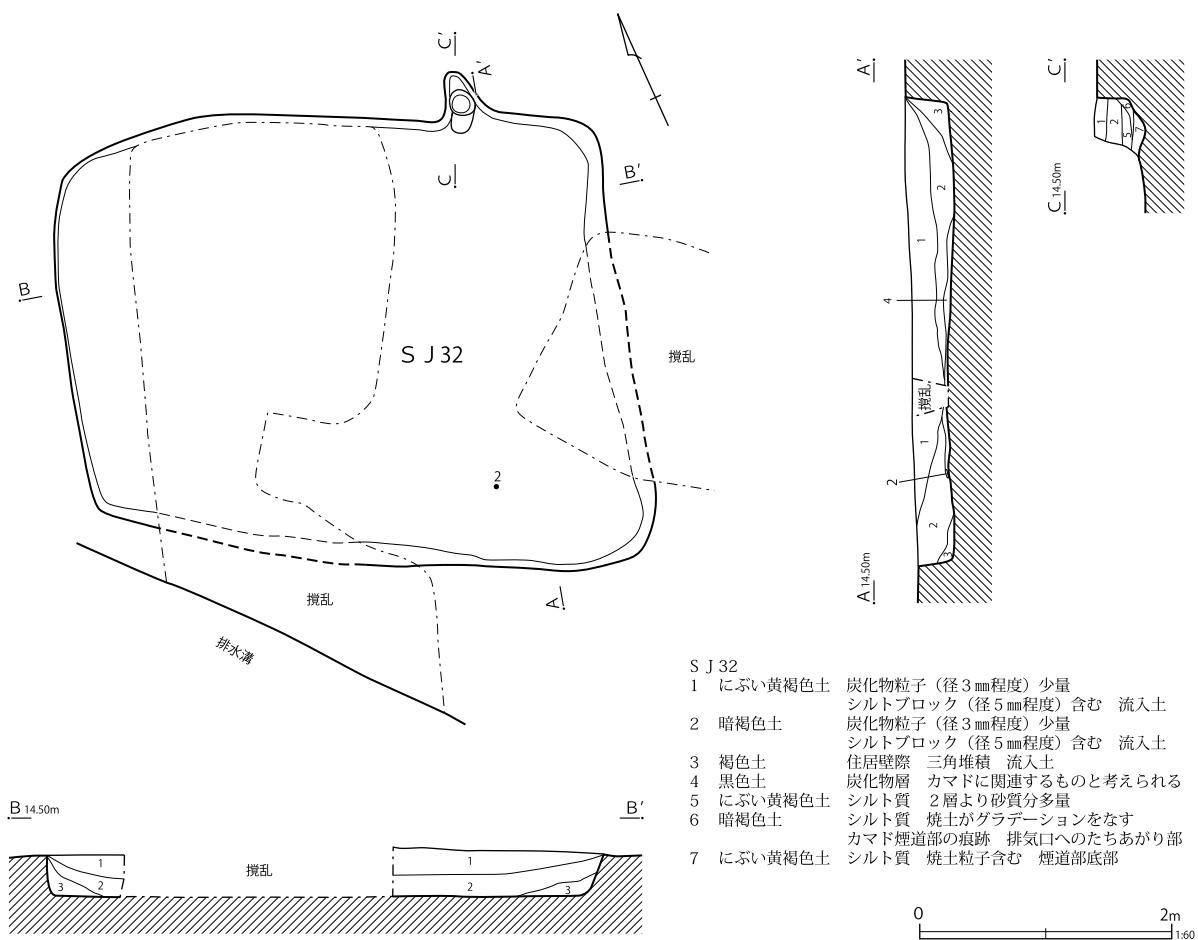
A区E、F - 3グリッドに位置する。搅乱によって大きく壊されている。

平面形態は不整長方形である。規模は長軸長4.48m、短軸長3.94m、深さ0.34mである。長軸方位はN-75°-Wである。

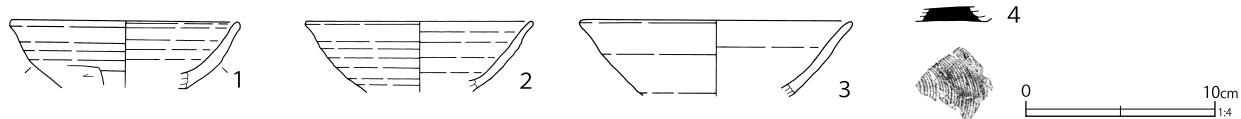
カマドが北壁東寄りで検出された。壁溝は検出

されなかった。床面は搅乱を受けており、残存する床面は平坦で、地山面を利用していた。東側の一部に硬化面が確認された。また、敷物状の薄い炭化物層が見られた。

遺物は第216図1～4に図示した須恵器壺、口クロ土師器壺等が出土した。時期は9世紀後半と見られる。



第215図 第32号住居跡



第216図 第32号住居跡出土遺物

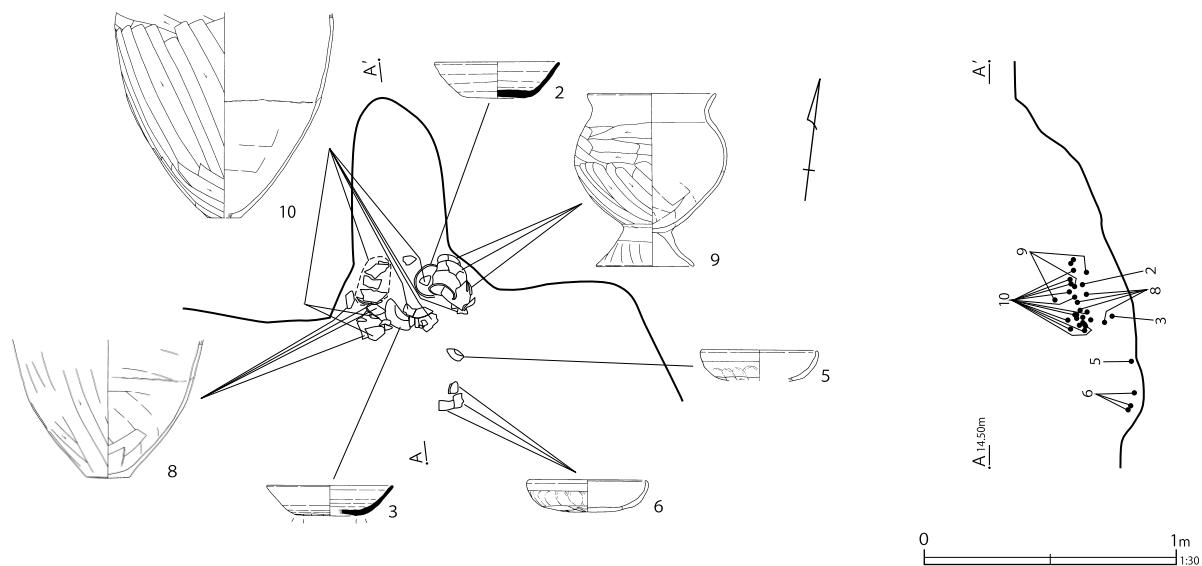
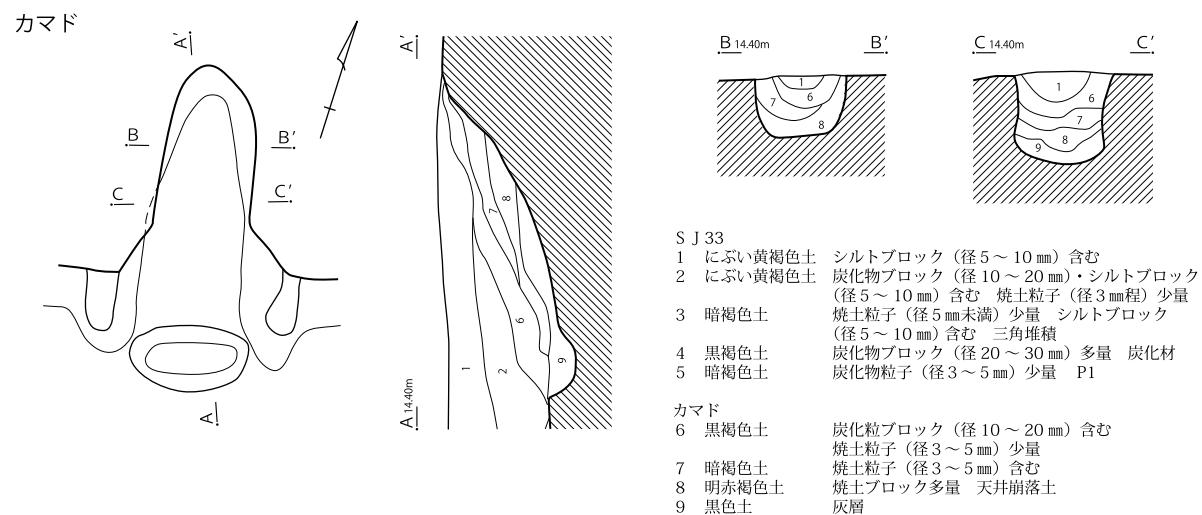
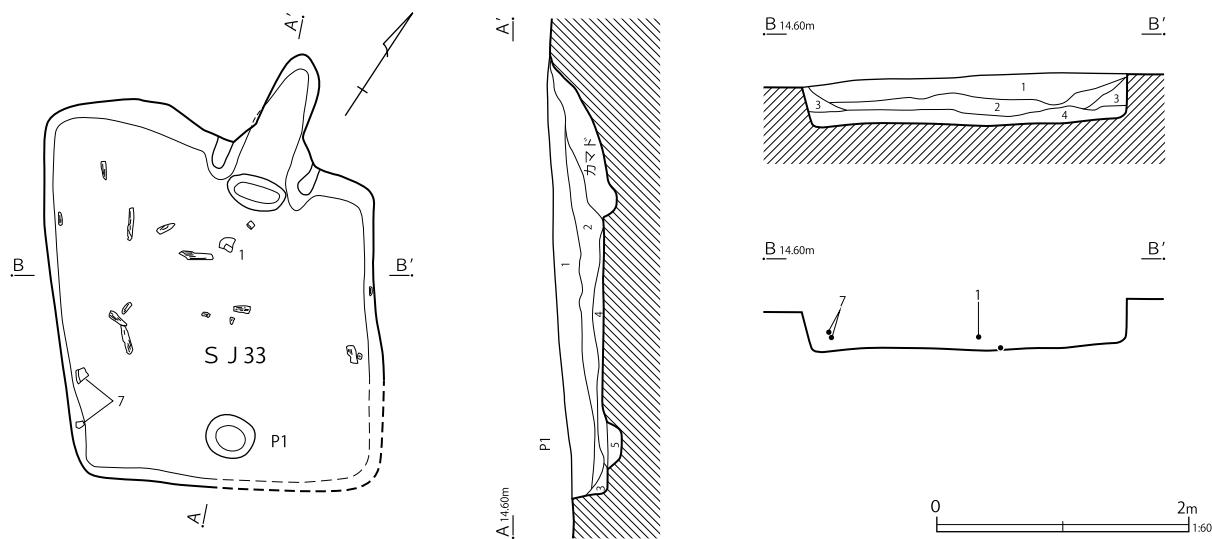
第61表 第32号住居跡出土遺物観察表（第216図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	ロクロ土師器	壺	(12.0)	[3.5]	—	H	10	普通	にぶい橙	茨城県西部	
2	ロクロ土師器	壺	(12.2)	[3.7]	—	AEHIK	20	普通	にぶい黄橙	No 1	
3	ロクロ土師器	高台付壺	(14.1)	[4.0]	—	ACEIK	30	不良	にぶい黄橙	茨城県西部	
4	須恵器	壺	—	[0.8]	—	IJK	5	良好	灰	三毳産か	

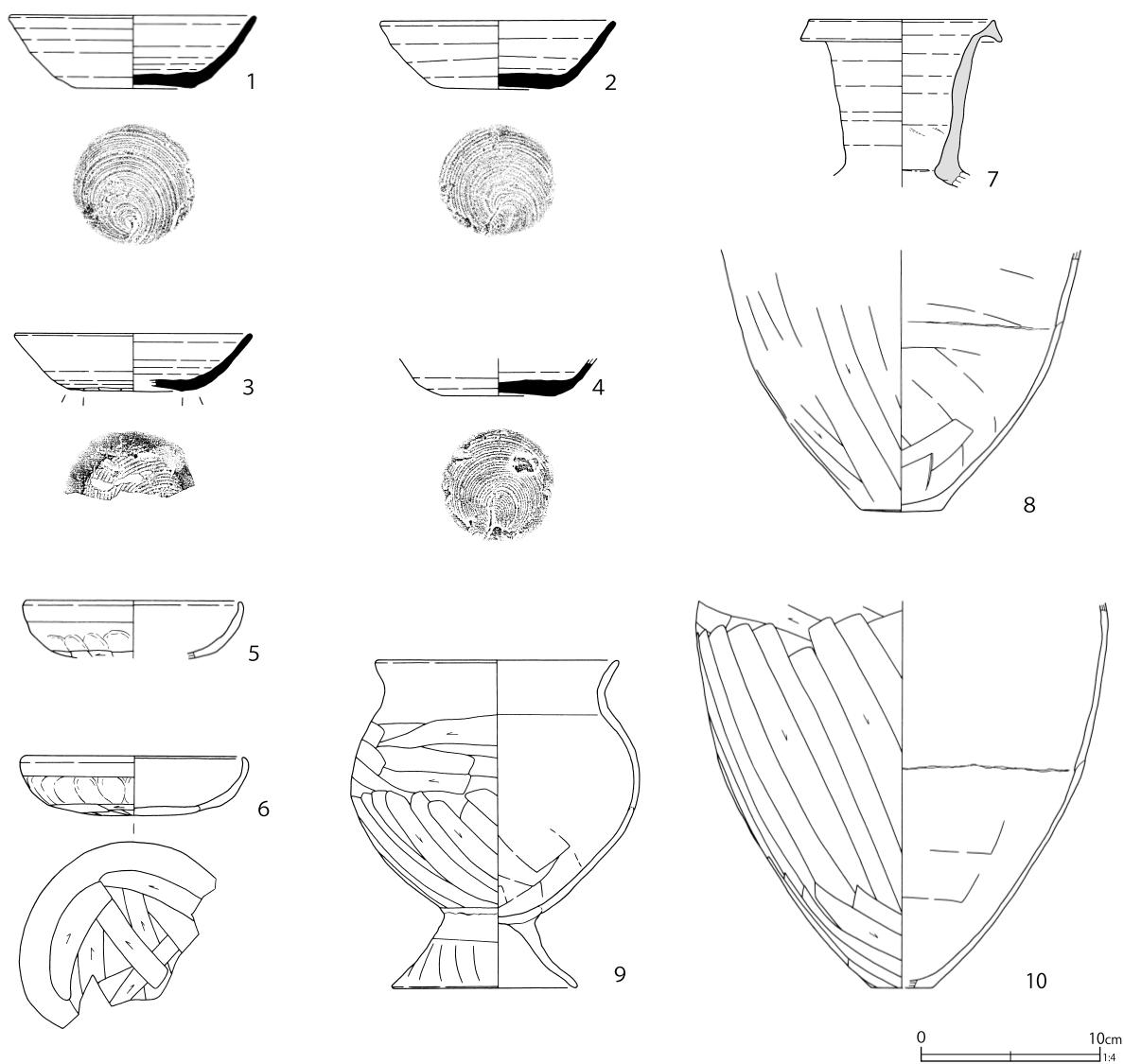
第33号住居跡（第217、218図）

A区G-6グリッドに位置する。南東側を搅乱によって壊されている。

平面形態は長方形である。規模は主軸長3.58m、短軸長2.58m、深さ0.39mである。主軸方位はN-15°-Wである。



第217図 第33号住居跡・遺物出土状況



第218図 第33号住居跡出土遺物

第62表 第33号住居跡出土遺物観察表（第218図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	坏	13.6	4.1	6.7	AHIK	60	良好	黄灰	三毳産 № 32	82-4
2	須恵器	坏	13.0	3.8	6.1	CHI	100	普通	灰白	三毳産 № 29	82-5
3	須恵器	坏	(13.3)	3.2	(7.2)	EIK	30	良好	灰黄	三毳産 底部回転糸切り後手持ちヘラ ケズリ № 37	82-6
4	須恵器	坏	—	[2.1]	6.2	HI	75	普通	灰白	三毳産	
5	土師器	坏	(12.0)	3.2	—	ACIK	25	普通	橙	北武藏型坏 № 20	82-7
6	土師器	坏	(12.2)	3.3	—	ACHI	45	普通	橙	北武藏型坏 № 21.22.23	82-8
7	灰釉陶器	長頸瓶	(10.2)	[9.3]	—	EIK	30	良好	褐	猿投産 内外面施釉 № 33.34 SJ21	
8	土師器	甕	—	[14.6]	(4.6)	CHIK	25	普通	にぶい赤褐	武藏型甕 № 6.7.35.36 カマド	
9	土師器	小型台付甕	13.4	18.4	10.3	ACHI	90	良好	にぶい赤褐	武藏型台付甕 № 24.25.30	82-9
10	土師器	甕	—	[21.8]	(3.6)	ACHI	30	普通	橙	武藏型甕 № 1.3.4.5.9.10.14.17.18.26.28 カマド	82-10

住居跡からはカマド、柱穴1本が検出された。

床面はほぼ平坦であり、掘り込んだ地山面をそのまま利用していた。住居全域の床面から炭化材が検出された。

カマドは北壁やや東寄りに設置され、規模は全長130cm、幅62cm、深さ39cm、煙道部は長さ62cm、幅35cm、深さ25cmである。天井部はすでに崩落しており、残存していない。袖部は部分的に残存しており、黄褐色土で構築されていた。燃焼部は壁内に收まり、火床面は床面より低い位置にあった。煙道部は煙出しへと向かって緩やかに傾斜して延びていた。壁面は良く焼けており、赤色に変化していた。カマド覆土は第9層が灰層である。第8層は天井部崩落土であり、焼土ブロックを多量に含んでいた。第6、7層は天井部崩落後に排煙口からカマド内へ流入した土である。

カマド内からは土師器甕・台付甕・壺、須恵器壺等が出土した。台付甕は甕の下から出土しており、支脚として使用された可能性が考えられる。

柱穴は南壁寄りから1本検出された。平面形態は円形である。規模は長径38cm、短径33cm、深さ14cmである。覆土には炭化物が少量含まれていた。柱穴は床面から掘り込まれており、本住居に伴うものと考えられる。

遺物は第218図1～10に図示した須恵器壺、灰釉陶器長頸瓶、土師器壺・甕・小型台付甕が出土した。1～4の須恵器壺はいずれも三毳産である。一方、カマド内から出土した土師器は、北武藏型壺と武藏型甕、武藏型の小型台付甕である。5、6の土師器壺は丸底気味の傾向がまだ残るものである。体部は内湾気味に立ち上がり、体部指ナデ、底部ヘラケズリを施す。8、10の武藏型甕は底径の小さな薄甕で「コ」の字状口縁を持つ胴部下半の破片である。9は小型の台付甕で、口縁部が外反し、胴部が球形状に張りを持つ形態である。7の猿投産長頸瓶は出土状況から流れ込みの可能性がある。時期は8世紀第4四半期頃と見られる。

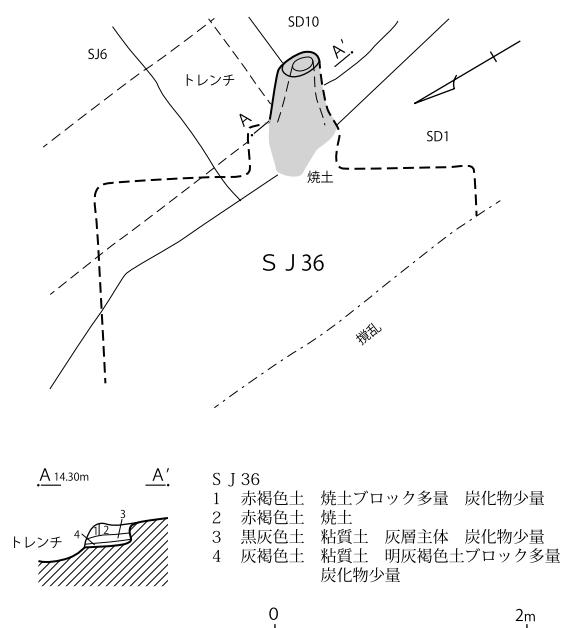
第36号住居跡（第219図）

B区K-8グリッドに位置する。第1号溝跡と第10号溝跡に挟まれ、地山が残存する部分に住居跡が検出されたが、その大半は壊されていてカマドのみが検出できた。

平面形態は不明である。検出されたカマドの長軸方位はN-30°-Wである。

カマドは遺構検出面で焼土の広がりから東壁中央部に付設されていたと考えられる。掘り込まれた部分に煙道の先端が検出された。煙出しの先端部下面には浅い円形の掘り込みが検出された。カマドの焼土ブロックが残存する範囲での規模は、全長97cm、幅40cm、深さ20cmである。掘り込みはやや深く、覆土は上層の第1、2層には赤褐色に被熱した焼土ブロックが多量に含まれていた。その下層の第3層には灰層を主体とする黒灰色土が堆積していた。

本住居跡の周辺には同時期の住居跡はなく、下面に古墳時代後期の住居跡が近接した位置から検出されていることや、出土遺物が全くないことから該期としたが、古墳時代後期の可能性もある。



第219図 第36号住居跡

(2) 掘立柱建物跡

調査区中央やや南東側から掘立柱建物跡が1棟検出された。住居跡は26軒検出されたが、掘立柱建物跡は1棟のみである。

第1号掘立柱建物跡（第220図）

B区P-12、13グリッド、調査区中央やや南東側に位置し、北西側に第1～3、5号住居跡が検出されている。北側に中世の第3、8号溝跡、南側には中世の第6号溝跡が東西に走り、これらの溝跡に挟まれた位置から、東西方向に一列に並んだ3本の柱穴が等間隔で検出されたため、掘立柱建物跡と判断した。

東側は調査区域外に伸びているが、西側は第14号溝跡や第2号住居跡が近接し他の柱穴は検出できなかった。柱間が広いことから大型の掘立柱建

物跡の可能性が高いが、現状では側柱建物か総柱建物であるかは断定できない。

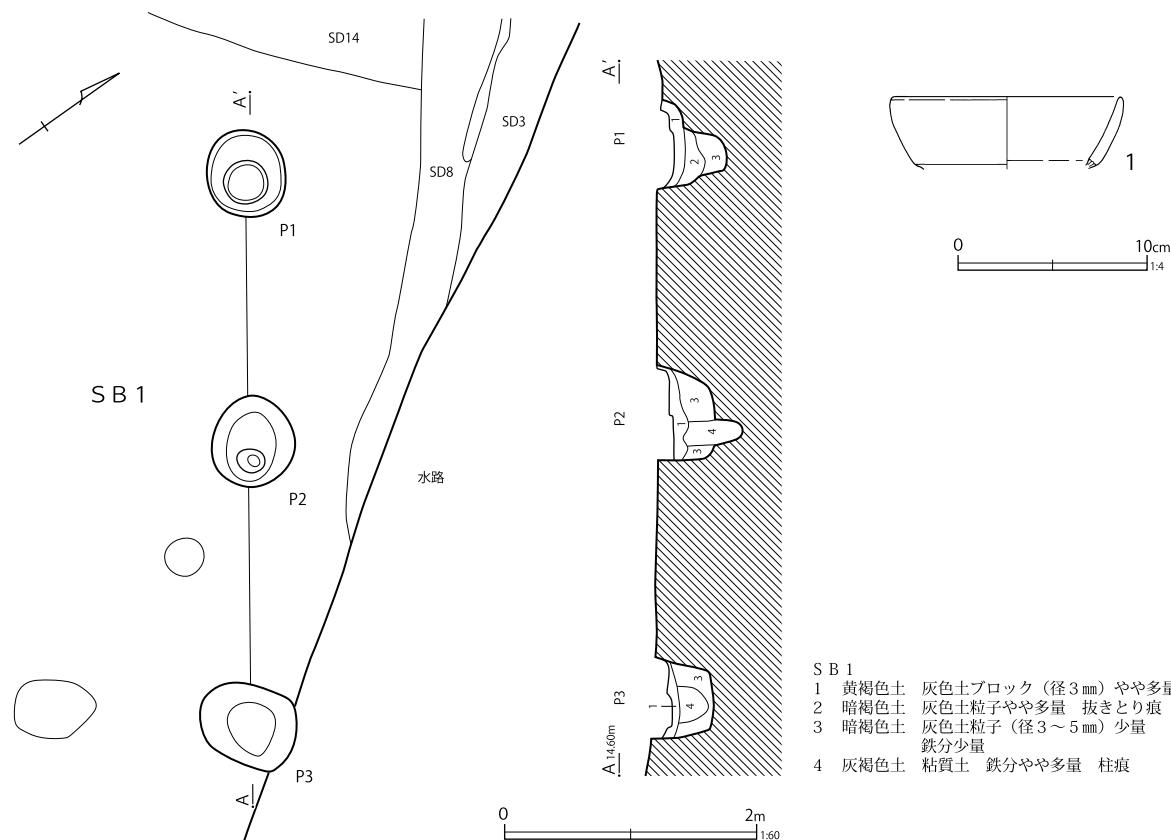
P1～P3間の長さは4.32m、P1～P2、P2～P3間の柱間寸法は2.16mの等間隔となる。柱穴の規模は、P1が径69×62cm、深さ52cm、P2が径72×64cm、深さ66cm、P3が径79×60cm、深さ48cmである。

柱穴の土層の断面観察では、P2、P3の中央部から柱痕（第4層）が確認された。

遺物は第220図1の土師器坏がP2から出土した。口縁部はヨコナデ、体部と底部の境に腰を持ち、平底化している。胎土には、赤色粒子、白色粒子、黒色粒子を含み、北武藏の土師器である。時期は、口縁部が内湾気味に直線的に立ち上がっていることから、9世紀前半と考えられる。

第63表 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第220図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	土師器	坏	(12.0)	[3.7]	—	AHIK	5	普通	橙	P2	



第220図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物

(3) 竪穴状遺構

竪穴状遺構が2基検出された。

第1号竪穴状遺構（第221図）

B区N-10グリッドに位置する。東側は南北方向に延びる中世の第2号溝跡によって壊されている。南東側3mには第7号住居跡が位置している。

平面形態は東半が検出できなかったものの、北壁と南壁の一部、それに西壁が検出されたことから方形または長方形であると考えられる。

残存する規模は長軸長5.15m、短軸長1.94m、深さ0.22mである。長軸方位はN-35°-Wである。

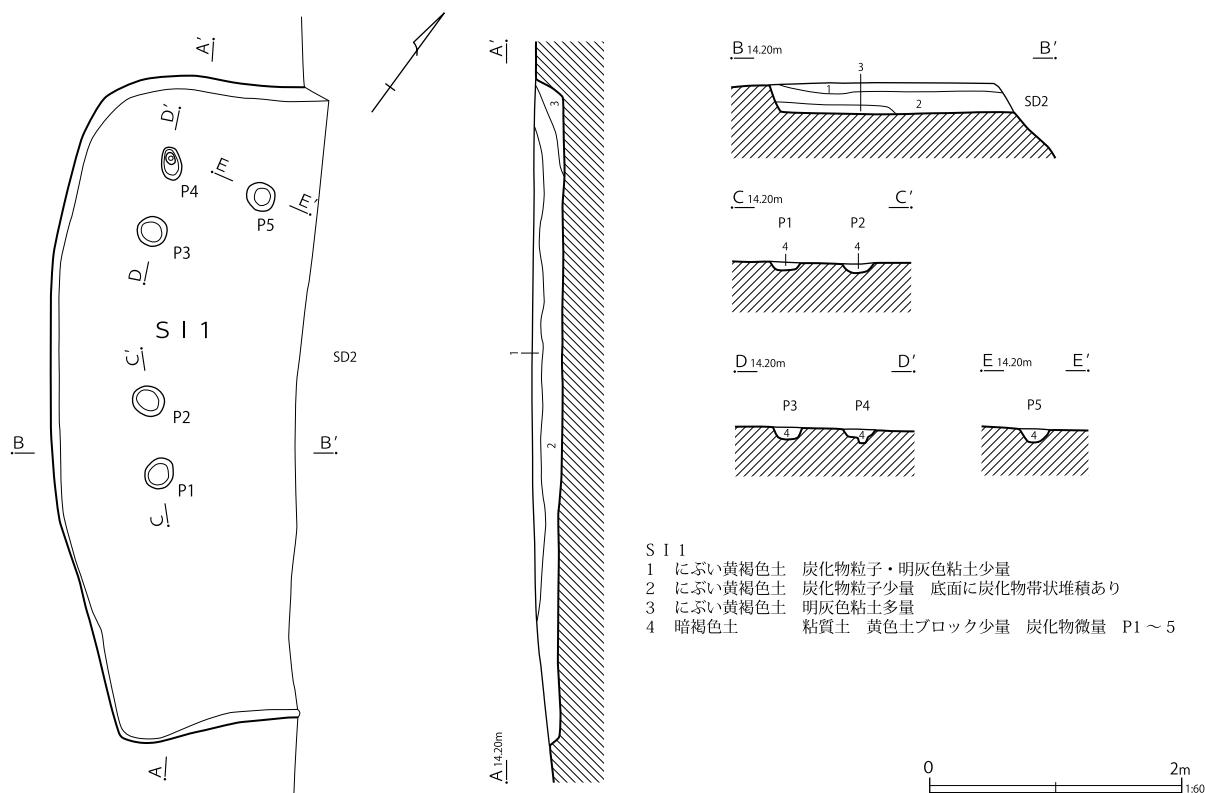
床面は平坦で、床面には炭化物が部分的に見られた。壁溝は検出されなかった。本遺構からは柱穴が5本検出されたが、いずれも西壁に近い部分で、主柱穴とは考えられない。P1は径25×22cm、深さ6cmである。P2は径26×23cm、深さ7cmである。P3は径24×23cm、深さ9cmである。P4は

径25×16cm、深さ10cmである。P5は径23×22cm、深さ10cmである。

覆土上層には、炭化物粒子を少量含むにぶい黄褐色土が堆積している。その下層(第2層)は炭化物粒子を少量含み、床面直上にあたる底面には炭化物の堆積層が見られ、壁際には第3層の明灰色粘土を多量に含むにぶい黄褐色土が堆積している。

時期を示す遺物は出土しなかったが、奈良・平安時代の遺構確認面で検出したこと、遺構の形態や覆土の色調の特徴等から該期の可能性が考えられる。

本遺構は住居跡の可能性が高いが、東壁側の約半分が第2号溝跡に壊されており、住居跡に付随するカマド等を検出できなかったことから竪穴状遺構としておく。



第221図 第1号竪穴状遺構

第7号竪穴状遺構（第222図）

B区Q-11、12グリッドに位置する。北東側10mに第1～3、5号住居跡、北西側7mに第4号住居跡、東側15mに第16号住居跡があり、その中心に本遺構が存在する。

平面形態は方形である。規模は長軸長2.73m、短軸長2.53m、深さ0.16～0.24mである。周囲の住居跡と比較すると小型である。長軸方位はN-53°-Eである。

床面には硬化面は見られず、やや軟化した地山面が残存する。床面はほぼ平坦で中央には柱穴が1本検出された。柱穴内には黄灰色土を主体とする粘質の暗黄灰色土が堆積する。柱穴の平面形態は円形で、規模は径17cm、深さ22cmである。

遺構の覆土は、炭化物粒子を少量含む暗オリーブ色土がレンズ状に堆積していた。その下層には壁際から床面中央にかけて黄褐色土ブロックを含む暗灰黄色土が三角堆積していた。

壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁はほぼ直線的に掘り込まれているが、西壁がわずかに膨らみ弧状になる。

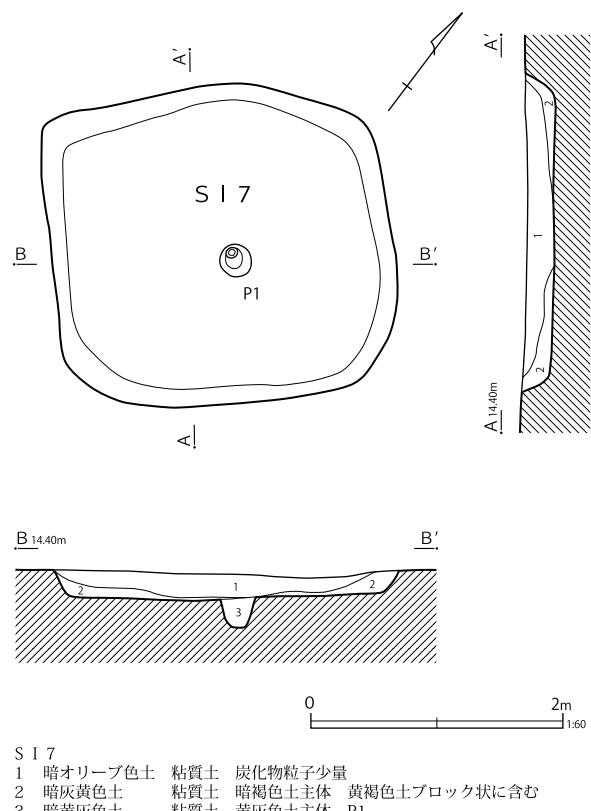
本遺構は住居跡の可能性があるが、壁溝やカマド等の付帯施設が見られなかったことから、竪穴状遺構とした。

遺物は、柱穴内から土師器甕の破片が少量出土した。時期は、土師器甕の器壁が薄く、外面にヘラケズリが見られたことから奈良・平安時代と考えられる。

(4) 土壌

土壌は11基検出された。古墳時代のものも含まれている可能性はあるが、覆土に時期を表す顕著な違いが見られず、遺物もほとんどなく、明確に時期の判定ができなかったため、一括して報告する。

第11、14、19号土壌は楕円形で、灰褐色系の覆土が見られる。また、第189号土壌は楕円形、第



第222図 第7号竪穴状遺構

192、194号土壌はいずれも浅い円形で、覆土内には多量の炭化物や焼土ブロック、焼土粒子を含み、住居跡のカマド周辺の土に類似していることから、貯蔵穴と考えることも可能である。

さらに、第190、193、195号土壌もやはり住居跡に伴う貯蔵穴の可能性がある。これらの土壌は、黒褐色土の地山から住居跡が検出される場所にあるため、覆土が失われ貯蔵穴のみが残った可能性もある。

第11号土壌（第223図）

B区P-12グリッドに位置する。第1号住居跡に壊されている。平面形態は全体を確認していないため、判断できないが、東壁と南北コーナー部分が見られることから、楕円形と推定できる。検出された部分は壁面がほぼ垂直に立ち上がり、底

面も平坦であることが窺える。土壌の性格は不明である。覆土は水平堆積であり、灰色土ブロックや粒子を含む暗褐色土で覆われている。

規模は長軸長1.56m、短軸長0.22m、深さ0.36mである。長軸方位はN-31°-Eである。

遺物は検出されず、時期は不明である。

第14号土壙（第223図）

B区M-10グリッドに位置する。調査区中央付近にあたり、周囲にはこの時期の遺構は見られない。平面形態は橢円形である。掘り込みが浅く、底面はやや皿状に中央部に向かってわずかに深くなっている。覆土は砂質の灰～黄褐色土が水平堆積している。規模は長軸長1.39m、短軸長0.76m、深さ0.20mである。長軸方位はN-25°-Wである。

遺物は出土せず、時期は不明である。

第19号土壙（第223図）

A区L-7、8グリッドに位置する。第9号住居跡の東壁際から検出され、一部壁を壊していた。平面形態は不整円形である。規模は長軸長2.08m、短軸長1.63m、深さ0.36mである。長軸方位はN-7°-Wである。覆土上層には炭化物と焼土が多く混在する明灰褐色砂質土が堆積している。やや大型で掘り込みの深い土壙である。

遺物は出土せず、時期は不明である。

第20号土壙（第223図、224図）

A区L-7グリッドに位置する。第9a、9b号住居跡の南側で検出した。第480号土壙に壊されている。平面形態は円形である。覆土は灰褐色土で覆われている。規模は長径0.69m、短径0.64m、深さ0.14mである。

遺物は覆土中から第224図1、2が出土した。1は土師器甕、2は末野産の須恵器甕の胴部破片である。時期はこれらの遺物から、6世紀末から7世紀前半と判断できる。

第189号土壙（第223図）

A区F-6グリッドに位置する。第30号住居跡を壊している。平面形態は橢円形である。掘り込

みは浅いが、底面は船底状に丸みをもっている。覆土上層は燃焼灰や焼土ブロックを含む灰白色土で覆われている。覆土の堆積状況から判断すると、カマドに関連する遺構と見られる。規模は長軸長0.85m、短軸長0.69m、深さ0.13mである。長軸方位はN-18°-Eである。

遺物は出土しなかったが、住居跡関連の遺構との関連性が想定されることから奈良・平安時代と考えられる。

第190号土壙（第223図）

A区D-4グリッドに位置する。第23号住居跡の下面に位置する。形態は円形である。

規模は長径0.99m、短径0.95m、深さ0.87mである。覆土はにぶい黄褐色土と黒色土の灰層の互層である。灰層が多量に堆積した土壙は、第23号住居跡でも確認されており、本土壙もまた第23号住居跡と重複しているため、第23号住居跡の附属施設である可能性も考えられる。

遺物は出土せず、時期は不明である。

第191号土壙（第223図）

A区E-4グリッドに位置する。平面形態は隅丸方形である。掘り込みは浅く、底面は皿形をしている。規模は長軸長0.57m、短軸長0.48m、深さ0.06mである。長軸方位はN-34°-Eである。覆土には炭化物が多量に含まれる。

遺物は出土せず、時期は不明である。

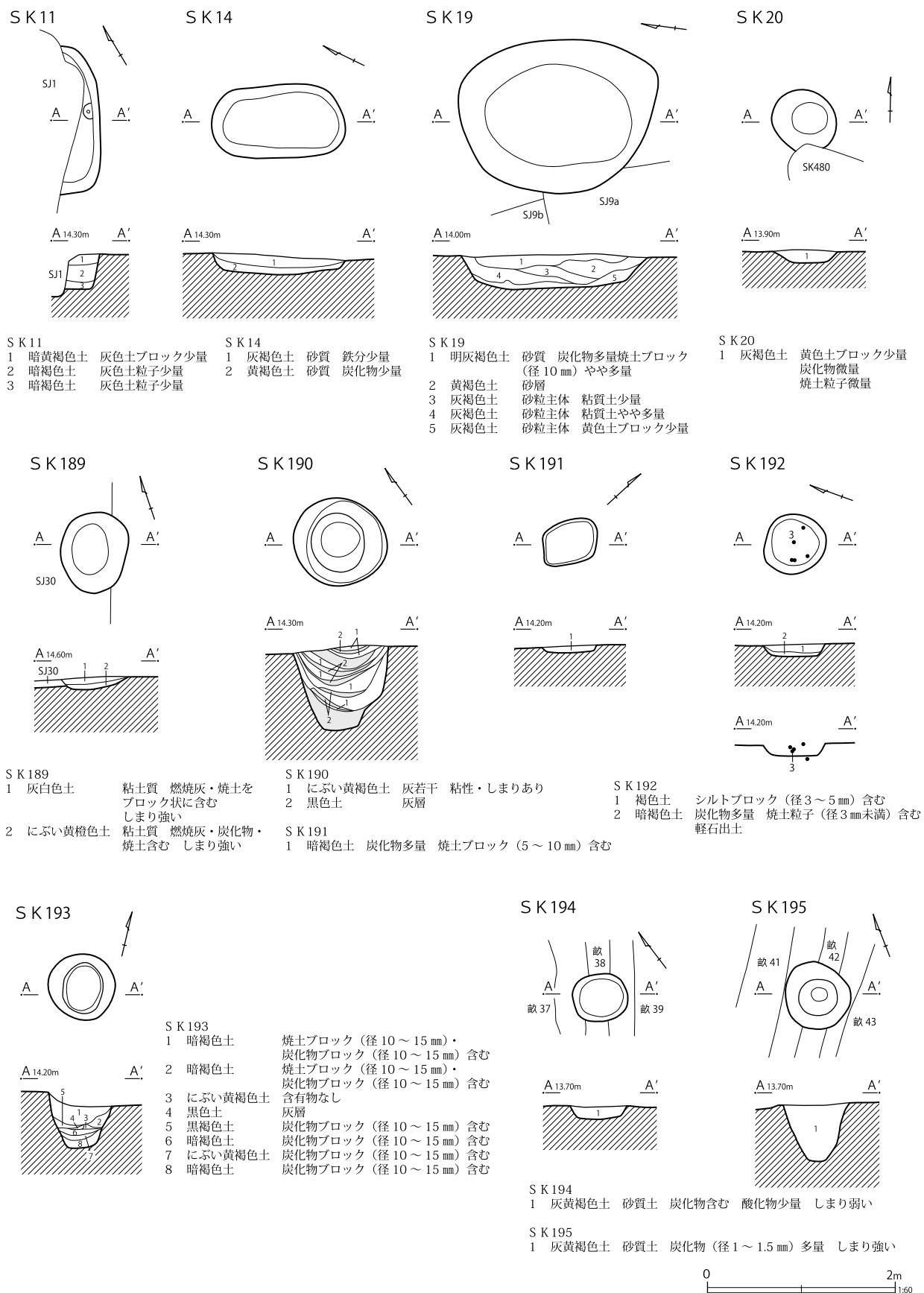
第192号土壙（第223、224図）

A区G-5グリッドに位置する。平面形態は円形である。掘り込みは浅く、底面は皿形をしている。規模は長径0.65m、短径0.64m、深さ0.13mである。覆土に炭化物や焼土を含み、第224図3に図示した角閃石安山岩礫が出土した。

他の遺物は出土せず、時期は不明である。

第193号土壙（第223図）

A区G-4グリッドに位置する。平面形態は円形である。掘り込みは深く、貯蔵穴の可能性が高い。覆土中には炭化物ブロックが多く混在してい



第223図 奈良・平安時代の土壤

た。規模は径0.70m、深さ0.47mである。

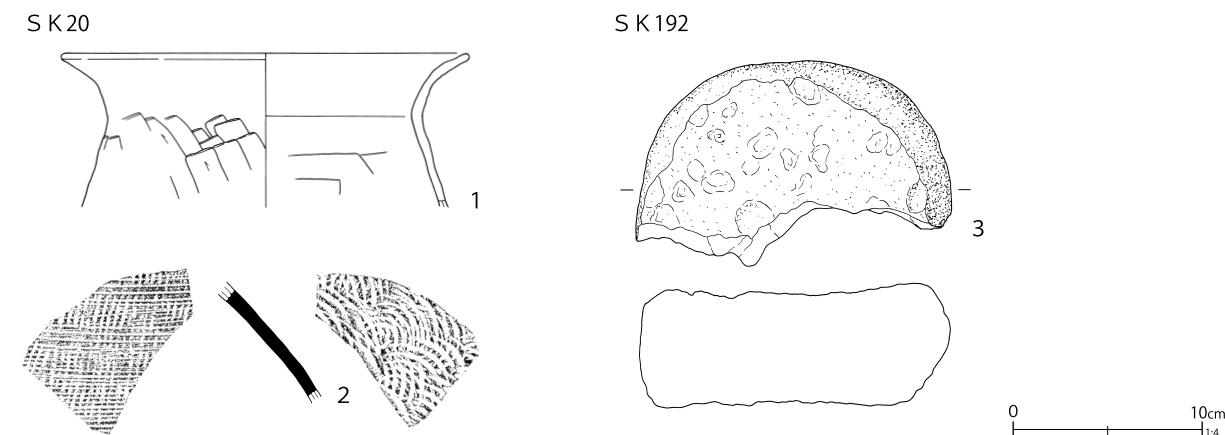
遺物はほとんど出土せず、時期は不明である。

第194号土壙（第223図）

A区D-3グリッドに位置する。第37～39号畠状遺構と重複し、畠の一部を壊して造られている。平面形態は円形である。規模は長径0.59m、短径0.50m、深さ0.14mである。時期は不明である。

第195号土壙（第223図）

A区D-4グリッドに位置する。第41～43号畠状遺構と重複し、畠の一部を壊していることから本土壙の方が新しい。平面形態は円形である。断面形態は逆台形状である。規模は長径0.72m、短径0.67m、深さ0.60mである。覆土は第1層の単層で、第193号土壙の堆積状況とは大きく異なっている。遺物は出土せず、時期は不明である。



第224図 土壙出土遺物

第64表 土壙出土遺物観察表（第224図）

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	SK20	土師器	甕	(21.4)	[8.2]	—	ACIK	25	普通	にぶい橙		
2	SK20	須恵器	甕	—	[6.4]	—	EHIJK	5	良好	黄灰	木野産	
3	SK192	角閃石安山岩礫						長さ 10.9 cm 幅 16.5 cm 厚さ 6.7 cm 重さ 944.9g			No. 2	91-9

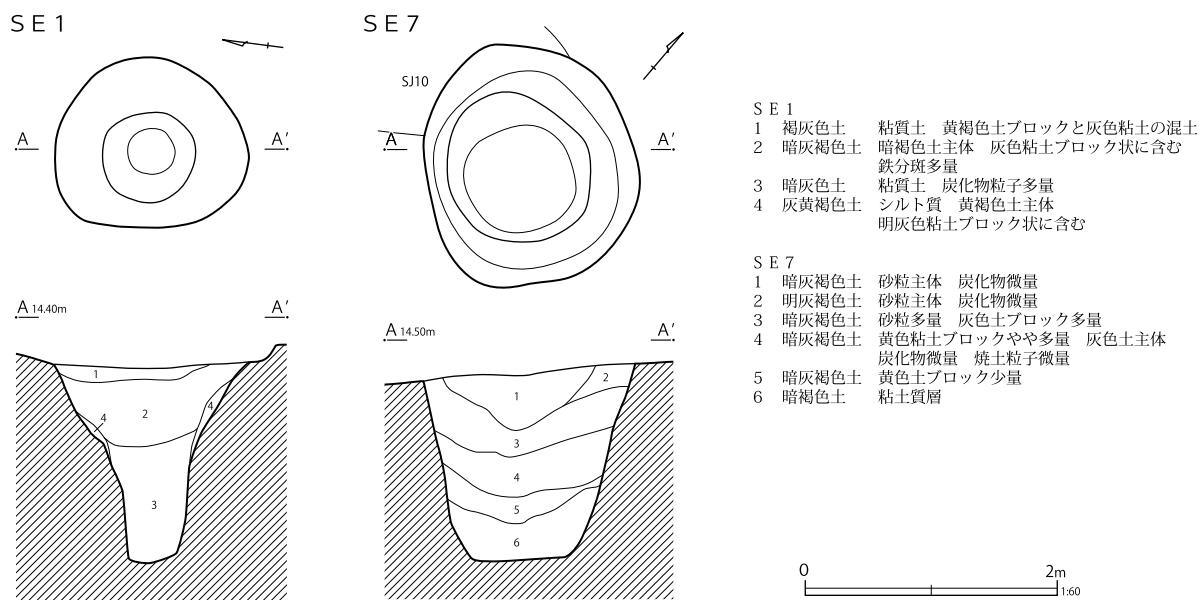
（5）井戸跡

井戸跡は、調査区の中央寄りで2基検出された。いずれも平安時代の所産である。

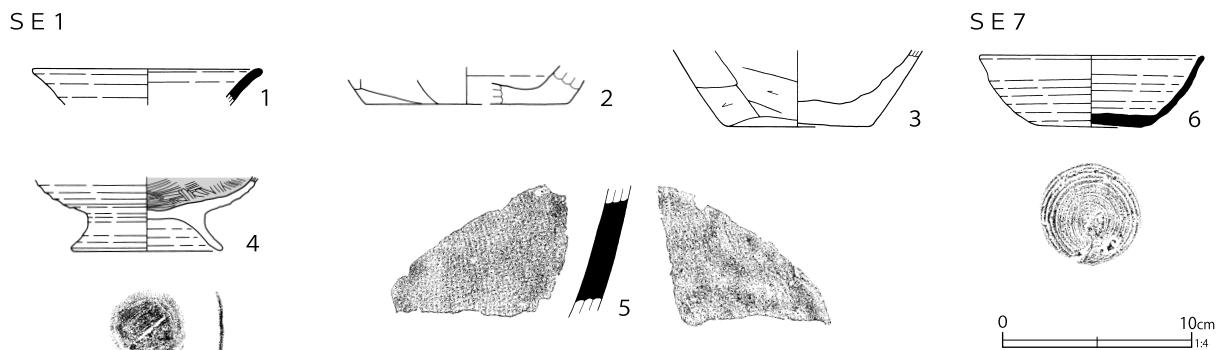
第1号井戸跡（第225、226図）

B区L-8グリッドに位置する。第9a、9b号住居跡の東側にあたる。住居跡からの距離は4.7mである。平面形態は円形で、断面形態は漏斗形である。掘り方は上半部が逆「ハ」の字状で、下半部は掘り込みが細長くなる。規模は上径1.34～1.52m、下径0.36～0.38m、深さ1.53mである。上半部は、井戸廃絶後の崩落によって広がったと考えられるが、本来は円筒形である。

遺物は、第226図1～5に図示した須恵器坏・甕、口クロ土師器高台付塊、土師器甕が出土した。1は、須恵器坏の口縁部破片である。外側に大きく開き口唇部は丸くやや外反する。2、3の土師器甕は平底で底部外面下端にヘラケズリが施されている。常陸西部地域に見られるものである。4は内面にヘラミガキが施された木器椀模倣の内黒土器である。足の長い高台が貼り付いている。5は須恵器甕の胴部破片である。遺物は、須恵器坏・甕が出土し、内黒土器、常陸型甕が見られることから、時期は9世紀後半と考えられる。



第225図 第1、7号井戸跡



第226図 第1、7号井戸跡出土遺物

第65表 第1、7号井戸跡出土遺物観察表(第226図)

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	SE1	須恵器	壺	(12.0)	[1.9]	—	IK	5	普通	灰		
2	SE1	土師器	甕	—	[2.1]	(10.8)	AIK	20	普通	にぶい黄橙	常陸西部	
3	SE1	土師器	甕	—	[4.0]	8.0	IK	40	普通	にぶい橙	常陸西部	82-12
4	SE1	ロクロ土師器	高台付甕	—	[3.9]	(8.0)	ACEHK	40	普通	にぶい橙	内黒	82-13
5	SE1	須恵器	甕	—	[6.9]	—	IK	5	普通	灰		
6	SE7	須恵器	壺	11.7	3.8	5.5	ADIJK	65	普通	灰	南比企産	82-14

第7号井戸跡(第225、226図)

A区J-6グリッドに位置する。第10号住居跡と重複し、住居跡の南東端を壊している。平面形態は橢円形で、断面形態は逆台形である。

規模は上径1.66~1.90m、下径0.86~0.90m、

深さ1.45mである。

覆土は砂粒を主体とする暗褐色土で、概ね自然堆積である。

遺物は、第226図6の南比企産の須恵器壺が出土した。時期は9世紀後半である。

3. 中近世の遺構と遺物

中近世の遺構は、土壙73基、溝跡40条、井戸跡12基、性格不明遺構7基、ピット83基、旧堤防跡1箇所等が検出された。

中近世の遺構検出面は、地表下0.50m、標高14.50m前後である。

建物跡は検出されなかったが、井戸跡が検出されたことから居住域として利用されていたと考えられる。

(1) 土壙

中近世の土壙には、人骨が出土したことから墓壙と考えられる第1号土壙、礫がまとまって出土している第13号土壙、板碑が出土している第484、485号土壙、馬骨が出土した第486、487号土壙などが見られる。

第1号土壙（第227図）

B区O-11グリッドに位置する。平面形態は長方形である。規模は長軸長1.45m、短軸長0.57m、深さ0.15mである。長軸方位はN-64°-Eである。

土壙内からは成人男性と考えられる人骨が検出された。東西方向に長軸長を持つ土壙で、頭骨を東に向けて埋葬されていた。また、脚部は屈曲させて納められていた。木棺等の棺は利用していない直葬による埋葬形態である。

第2号土壙（第227図）

B区O-11グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.40m、短軸長0.90m、深さ0.21mである。長軸方位はN-90°である。

第3号土壙（第227図）

B区N-11グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.22m、短軸長0.61m、深さ0.07mである。長軸方位はN-38°-Eである。

第4号土壙（第227図）

B区M-11グリッドに位置する。平面形態は長

方形である。規模は長軸長1.49m、短軸長0.83m、深さ0.14mである。長軸方位はN-57°-Eである。

第5号土壙（第227図）

B区M-10グリッドに位置する。平面形態は橢円形である。規模は長軸長1.14m、短軸長0.96m、深さ0.12mである。長軸方位はN-35°-Wである。

第6号土壙（第227図）

B区O-12グリッドに位置する。平面形態は橢円形である。規模は長軸長1.47m、短軸長0.73m、深さ0.21mである。長軸方位はN-50°-Eである。中央に浅いくぼみを設けるが、目的はわからない。

第7号土壙（第227図）

B区O-11グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.66m、短軸長0.83m、深さ0.08mである。長軸方位はN-59°-Eである。

第8号土壙（第227図）

B区O-11グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.56m、短軸長0.82m、深さ0.15mである。長軸方位はN-59°-Eである。

第9号土壙（第227図）

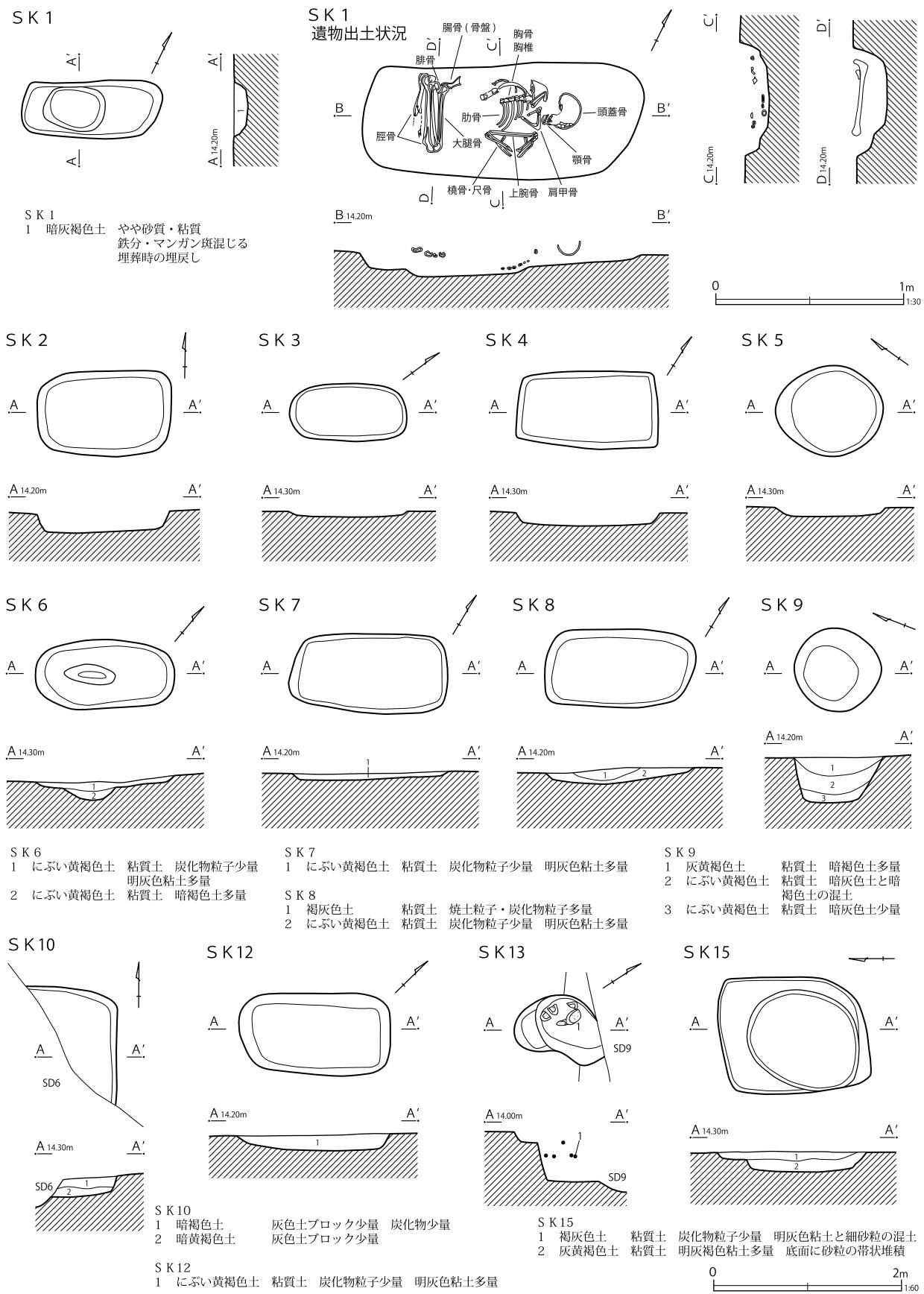
B区O-11グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長径0.94m、短径0.89m、深さ0.48mである。

第10号土壙（第227図）

B区P-12グリッドに位置する。第6号溝跡に壊されている。平面形態は不明である。規模は検出範囲で長軸長1.08m、短軸長0.92m、深さ0.20mである。

第12号土壙（第227図）

B区O-11グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.60m、短軸長0.85m、深さ0.17mである。長軸方位はN-45°-Eである。



第227図 土壌(1)

第13号土壙（第227、232図）

B区M-9グリッドに位置する。第9号溝跡と重複している。平面形態は不整形である。規模は長軸長0.88m、短軸長0.60m、深さは0.53mである。長軸方位はN-32°-Eである。

覆土やや上層からは第232図1に図示した常滑甕の底部破片や角閃石安山岩礫、軽石がまとまって出土した。

第15号土壙（第227図）

B区M-10グリッドに位置する。平面形態は長方形だが、やや南寄りでもう一段円形に落込む。規模は長軸長1.57m、短軸長1.23m、深さ0.19mである。長軸方位はN-1°-Eである。

第16号土壙（第228図）

B区M-10グリッドに位置する。平面形態は楕円形である。規模は長軸長0.96m、短軸長0.88m、深さ0.11mである。長軸方位はN-43°-Wである。

第17号土壙（第228図）

B区N-10グリッドに位置する。第38号溝跡と重複している。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長0.90m、短軸長0.58m、深さ0.24mである。長軸方位はN-50°-Eである。

第18号土壙（第228図）

A区K-7グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長径0.62m、短径0.60m、深さ0.20mである。

第59号土壙（第228図）

A区J-6グリッドに位置する。第10号住居跡内にあり、平面形態は楕円形である。規模は検出範囲で長軸長1.14m、短軸長1.00m、深さ0.12mである。長軸方位はN-31°-Wである。

第60号土壙（第228図）

A区L-7グリッドに位置する。第9号住居跡内にあり、第61号土壙に壊されている。平面形態は円形である。規模は長径0.97m、短径0.95m、深さ0.14mである。

第61号土壙（第228図）

A区L-7グリッドに位置する。第9号住居跡内にあり、第60号土壙を壊している。平面形態は円形である。規模は長径1.37m、短径1.33m、深さ0.20mである。

第76号土壙（第228図）

C区V-17グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は検出範囲で長径0.95m、短径0.82m、深さ0.22mである。

第77号土壙（第228図）

C区U-17グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.16m、短軸長0.60m、深さ0.22mである、長軸方位はN-60°-Eである。

第78号土壙（第228図）

C区U-15グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.54m、短軸長0.70m、深さ0.19mである。長軸方位はN-52°-Eである。

第79号土壙（第228図）

C区U-16グリッドに位置する。第27号溝跡を壊し、第29号溝跡に壊されている。平面形態は方形である。規模は検出された範囲で長軸長1.32m、短軸長1.11m、深さ0.40mである。長軸方位はN-13°-Eである。

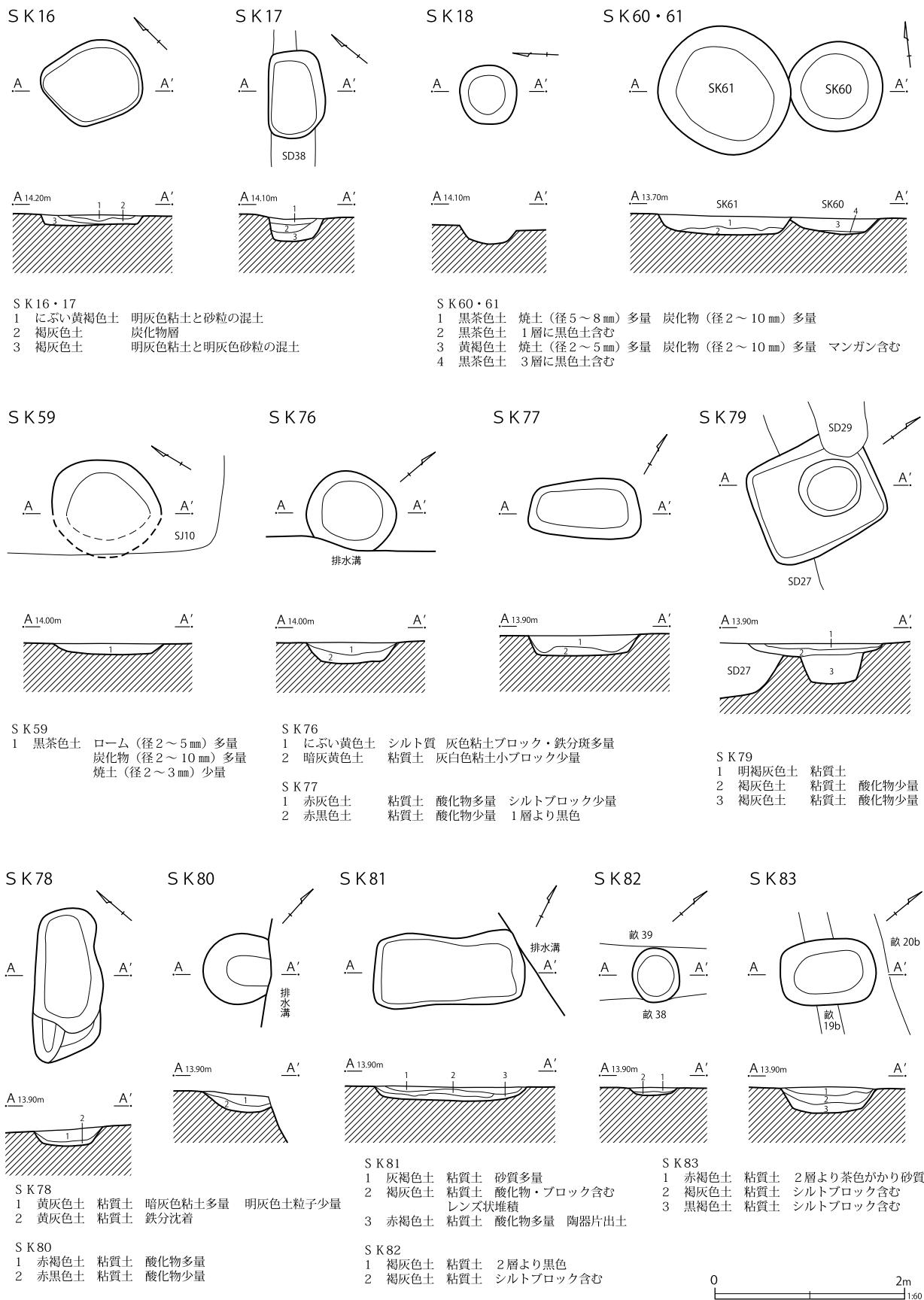
第80号土壙（第228図）

C区T-16グリッドに位置する。北東側は排水溝にかかっている。平面形態は不明である。規模は検出範囲で長軸長0.72m、短軸長0.72m、深さ0.23mである。長軸方位はN-50°-Eである。

第81号土壙（第228、232図）

C区T-15、16グリッドに位置する。北東側は排水溝にかかっている。平面形態は長方形である。規模は長軸長1.57m、短軸長0.70m、深さ0.14mである。長軸方位はN-63°-Eである。

覆土中から第232図3に図示した常滑甕の口縁部破片が出土した。



第228図 土壌(2)

第82号土壌（第228図）

C区S-15グリッドに位置する。38号畝と重複し、壊している。平面形態は楕円形である。規模は長軸長0.57m、短軸長0.49m、深さ0.06mである。長軸方位はN-50°-Wである。

第83号土壌（第228図）

C区S、T-15グリッドに位置する。19b号畝と重複している。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.00m、短軸長0.64m、深さ0.26mである。長軸方位はN-33°-Eである。

第84号土壌（第229図）

C区U、V-16グリッドに位置する。第21号溝跡を壊している。平面形態は不整楕円形である。規模は長軸長1.70m、短軸長0.84m、深さ0.37mである。長軸方位はN-32°-Eである。

第85号土壌（第229図）

C区S-14グリッドに位置する。18号畝と重複し、壊している。平面形態は円形である。規模は長径0.92m、短径0.86m、深さ0.12mである。

第86号土壌（第229図）

C区S-14グリッドに位置する。22、23a号畝と重複し、壊している。平面形態は楕円形である。規模は長軸長0.62m、短軸長0.51m、深さ0.24mである。長軸方位はN-59°-Wである。

第87号土壌（第229図）

C区S-14グリッドに位置する。45号畝と重複し、壊している。平面形態は円形である。規模は長径0.83m、短径0.82m、深さ0.07mである。

第88号土壌（第229図）

C区S-14グリッドに位置する。22、23b、45号畝と重複し、壊している。平面形態は不整楕円形である。規模は長軸長0.82m、短軸長0.70m、深さ0.23mである。長軸方位はN-50°-Wである。

第89号土壌（第229図）

C区V-16、17グリッドに位置する。平面形態は不整楕円形である。規模は長軸長1.22m、短軸長0.80m、深さ0.53mである。長軸方位はN-40°-Wである。

Eである。

第90号土壌（第229図）

C区T-14、15グリッドに位置する。17、18号畝と重複し、壊している。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.82m、短軸長1.32m、深さ0.15mである。長軸方位はN-78°-Eである。

第91号土壌（第229図）

C区R-12グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長径1.14m、短径1.13m、深さ0.23mである。

第92号土壌（第229図）

C区R-12、13グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.51m、短軸長1.15m、深さ0.17mである。長軸方位はN-26°-Eである。

第93号土壌（第229図）

C区T-15グリッドに位置する。16、17号畝と重複し、壊している。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.45m、短軸長0.91m、深さ0.18mである。長軸方位はN-21°-Eである。

第94号土壌（第229図）

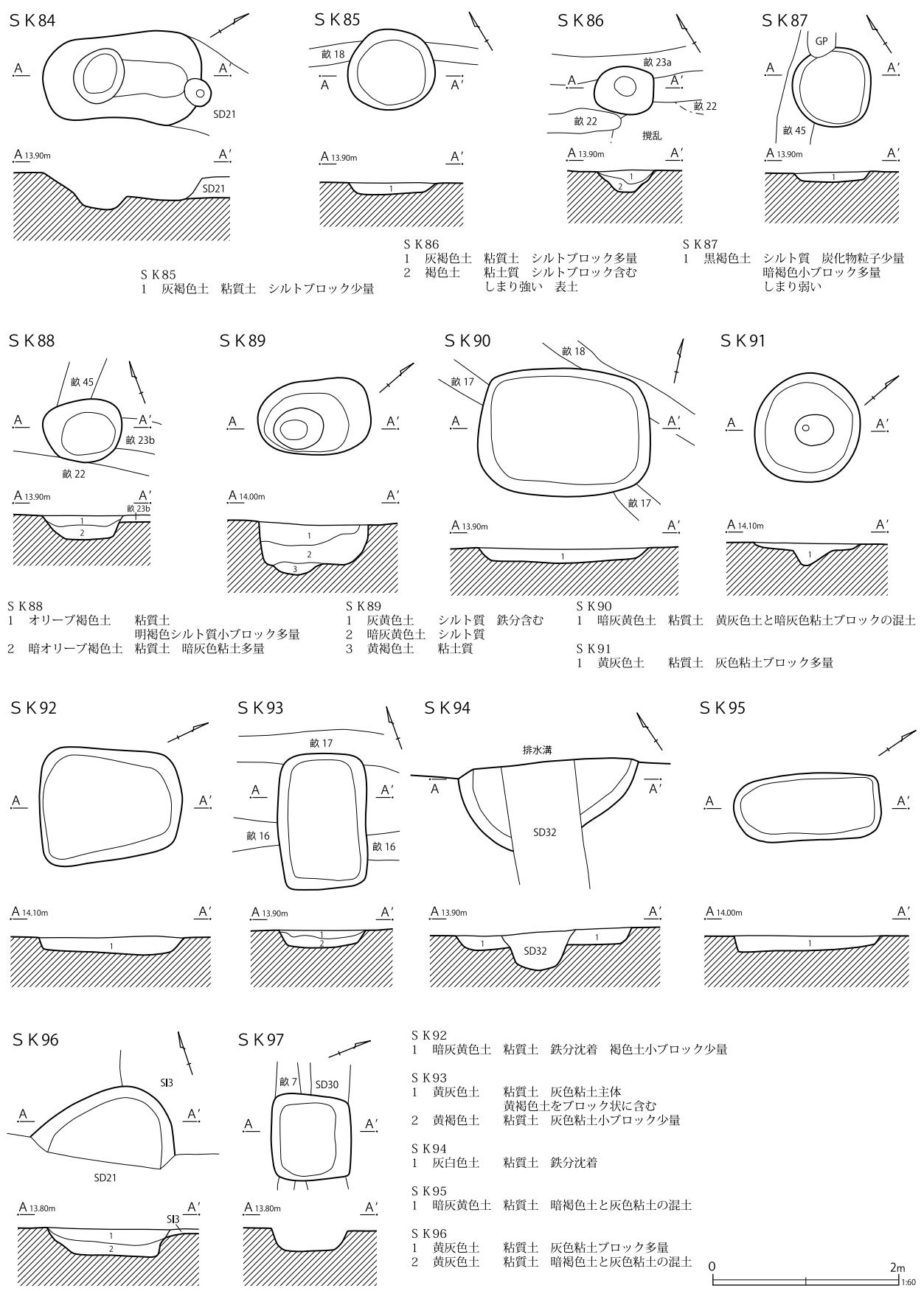
C区U-16グリッドに位置する。中央を第32号溝跡に壊され、北側は排水溝にかかる。規模は検出範囲で長軸長1.86m、短軸長0.92m、深さ0.17mである。長軸方位はN-55°-Wである。

第95号土壌（第229図）

C区R、S-13グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.58m、短軸長0.73m、深さ0.15mである。長軸方位はN-35°-Eである。

第96号土壌（第229図）

C区U-15グリッドに位置する。第3号竪穴状遺構を壊し、第21号溝跡に壊されている。平面形態は不明である。規模は検出範囲で長軸長1.45m、短軸長0.82m、深さ0.28mである。長軸方位はN-72°-Wである。



第229図 土壌(3)

第97号土壤 (第229図)

C区T-14、15グリッドに位置する。第30号溝跡、7号畝と重複し、壊している。平面形態は方形である。規模は長軸長0.90m、短軸長0.84m、深さ0.22mである。長軸方位はN-24°-Eである。

第165号土壤 (第230図)

A区D-4グリッドに位置する。平面形態は不整橿円形である。規模は長軸長1.36m、短軸長0.55m、深さ0.15mである。長軸方位はN-56°-Wである。

第166号土壤 (第230図)

A区D-4、5グリッドに位置する。平面形態は橿円形である。規模は長軸長0.65m、短軸長0.53m、深さ0.10mである。長軸方位はN-87°-Eである。

第167号土壤 (第230図)

A区D-5グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長径0.94m、短径0.92m、深さ0.20mである。

第168号土壤 (第230図)

A区E-5グリッドに位置する。平面形態は不整橿円形である。規模は長軸長1.39m、短軸長0.51m、深さ0.10m、長軸方位はN-60°-Wである。

第169号土壤 (第230図)

A区F-6グリッドに位置する。平面形態は橿円形である。規模は長軸長0.57m、短軸長0.42m、深さ0.20mである。長軸方位はN-90°である。

第170号土壤 (第230図)

A区F-5グリッドに位置する。平面形態は橿円形である。規模は長軸長0.81m、短軸長0.70m、深さ0.33mである。長軸方位はN-82°-Wである。

第171号土壤 (第230図)

A区F-4グリッドに位置する。平面形態は不整橿円形である。規模は長軸長1.40m、短軸長0.98m、深さ0.13mである。長軸方位はN-11°-Eである。

第172号土壤 (第230図)

A区F-4グリッドに位置する。平面形態は橿円形である。断面形は逆台形状で、掘り込みが深い。規模は長軸長1.04m、短軸長0.80m、深さ0.48mである。長軸方位はN-21°-Eである。

第173号土壤 (第230図)

A区F-4グリッドに位置する。第174号土壤に壊されている。平面形態は橿円形である。規模は長軸長1.01m、短軸長0.62m、深さ0.36mである。長軸方位はN-0°である。

第174号土壤 (第230図)

A区F-4グリッドに位置する。第173号土壤を壊している。平面形態は橿円形である。規模は長軸長0.87m、短軸長0.64m、深さ0.36mである。長軸方位はN-61°-Wである。

第175号土壤 (第230図)

A区F-4グリッドに位置する。平面形態は橿円形である。規模は長軸長1.02m、短軸長0.56m、深さ0.16mである。長軸方位はN-58°-Wである。

第176号土壤 (第230図)

A区G-4グリッドに位置する。平面形態は橿円形である。規模は長軸長0.81m、短軸長0.70m、深さ0.07mである。長軸方位はN-43°-Eである。

第177号土壤 (第230図)

A区G-4グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長径0.80m、短径0.75m、深さ0.20mである。

第178号土壤 (第230図)

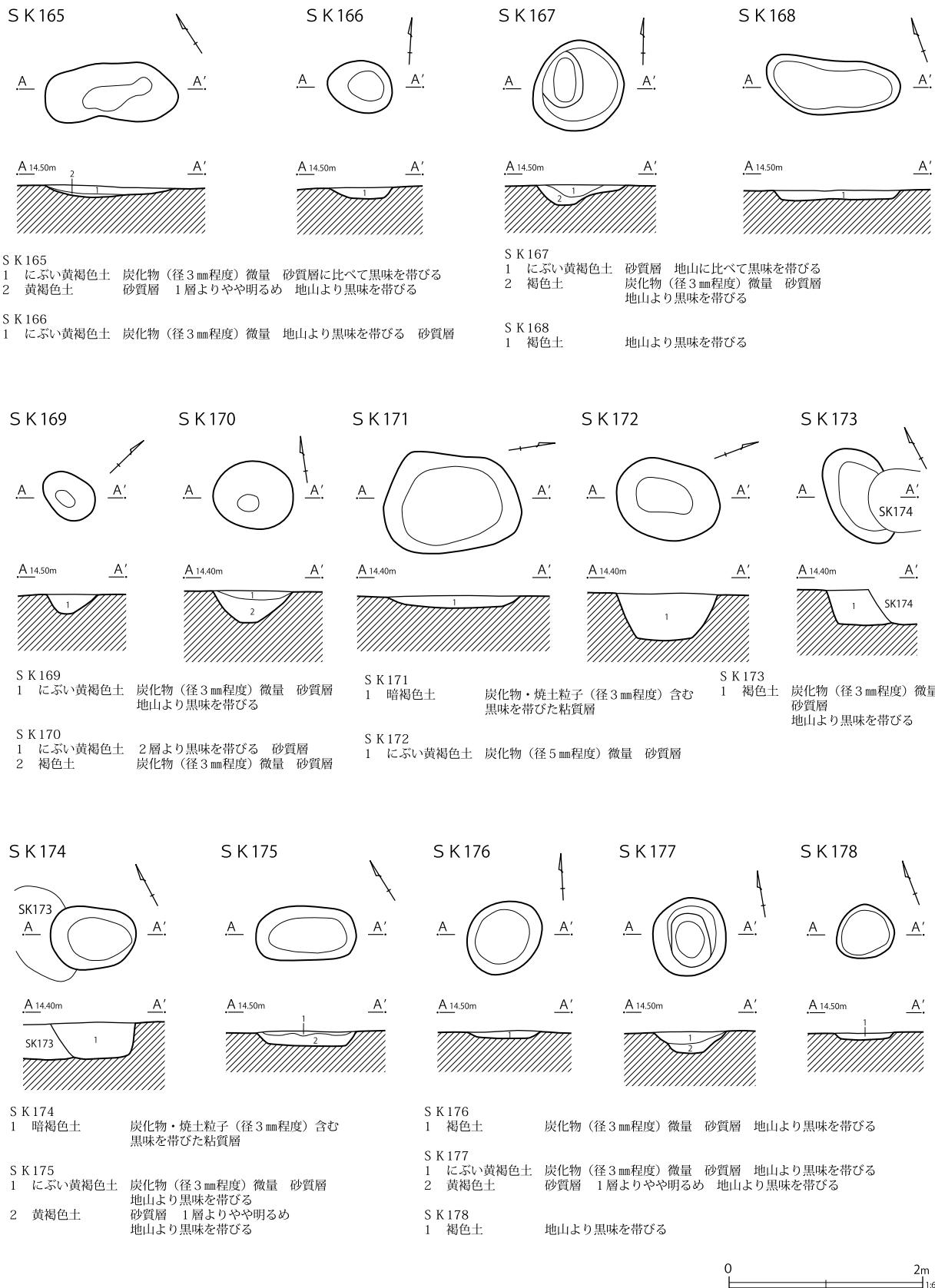
A区F-5グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長径0.58m、短径0.55m、深さ0.07mである。

第179号土壤 (第231図)

A区F-5グリッドに位置する。平面形態は橿円形である。規模は長軸長0.86m、短軸長0.51m、深さ0.06mである。長軸方位はN-31°-Wである。

第180号土壤 (第231図)

A区G-4グリッドに位置する。平面形態は円



第230図 土壌(4)

形である。規模は長径1.04m、短径0.96m、深さ0.31mである。

第181号土壙（第231図）

A区G-5グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長径0.66m、短径0.56m、深さ0.26mである。

第182号土壙（第231図）

A区G-5グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長径0.63m、短径0.61m、深さ0.10mである。

第183号土壙（第231図）

A区I-6グリッドに位置する。平面形態は長方形である。規模は長軸長1.64m、短軸長0.78m、深さ0.30mである。長軸方位はN-43°-Eである。

第184号土壙（第231図）

A区E-3グリッドに位置する。第6号性格不明遺構と重複している。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長2.00m、短軸長0.70m、深さ0.10mである。長軸方位はN-76°-Eである。

第185号土壙（第231図）

A区D-2グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.54m、短軸長0.75m、深さ0.28mである。長軸方位はN-34°-Eである。

第186号土壙（第231図）

A区E-2、3グリッドに位置する。第27号住居跡と重複している。搅乱によって削平されている。平面形態は隅丸長方形と推定される。規模は検出範囲で長軸長2.14m、短軸長0.59m、深さ0.11mである。長軸方位はN-75°-Eである。

第187号土壙（第231図）

A区E-3グリッドに位置する。東側を搅乱によって壊されている。平面形態は不明である。規模は検出範囲で長径0.76m、短径0.52m、深さ0.06mである。

第188号土壙（第231図）

A区D-3グリッドに位置する。南西側を搅乱

されており、平面形態は不明である。規模は検出範囲で長径1.45m、短径1.02m、深さ0.30mである。

第480号土壙（第231図）

A区L-7、8グリッドに位置する。第20号土壙と重複している。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.41m、短軸長0.48m、深さ0.08mである。長軸方位はN-70°-Wである。

第481号土壙（第231図）

B区Q-12グリッドに位置する。第4号溝跡と重複している。平面形態は不整形である。規模は検出範囲で長軸長0.50m、短軸長0.30m、深さ0.28mである。長軸方位はN-45°-Wである。

第482号土壙（第231図）

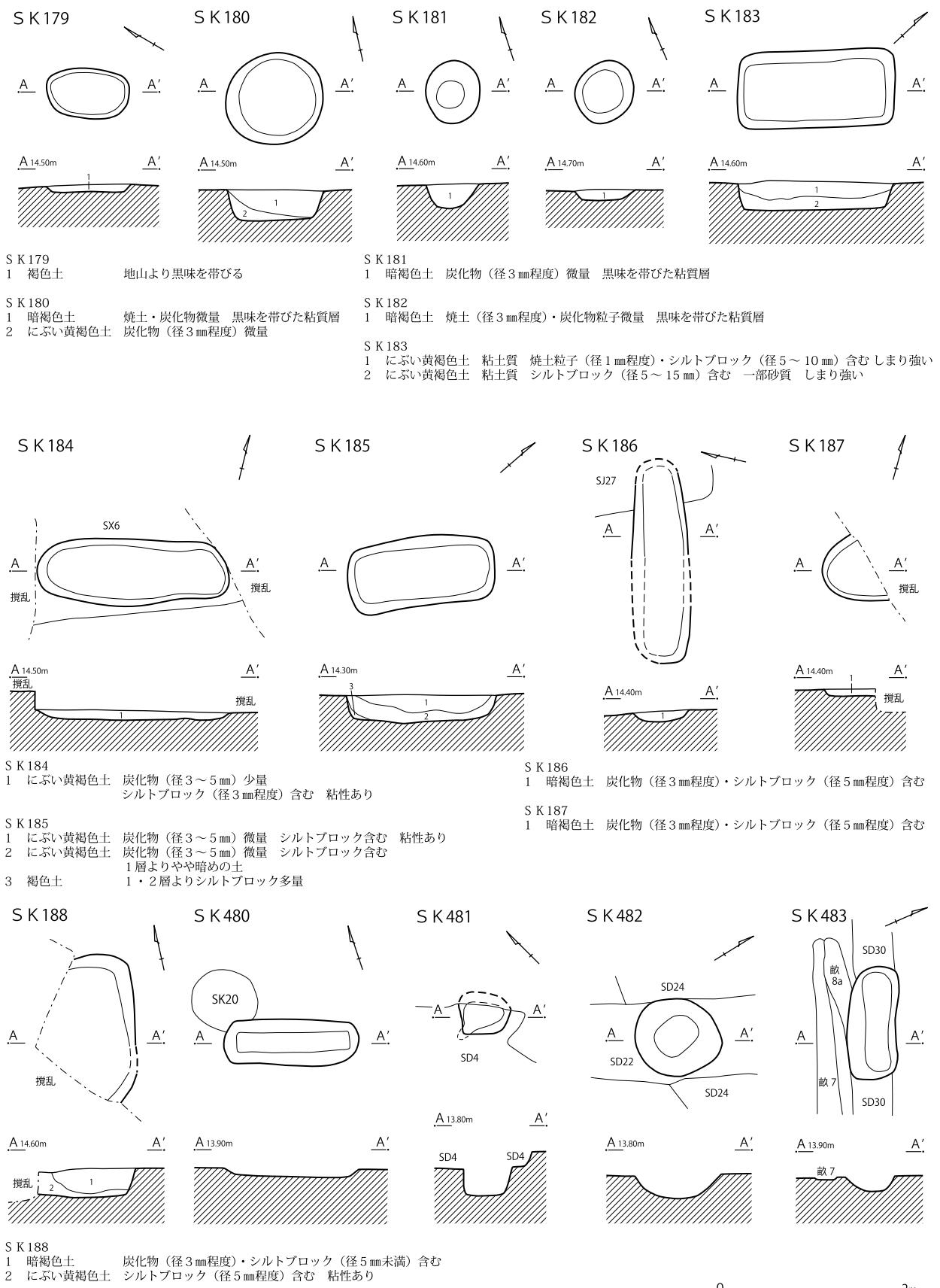
C区V-17グリッドに位置する。第22、24号溝跡と重複している。平面形態は橢円形である。規模は長軸長0.90m、短軸長0.80m、深さ0.22mである。長軸方位はN-31°-Eである。

第483号土壙（第231図）

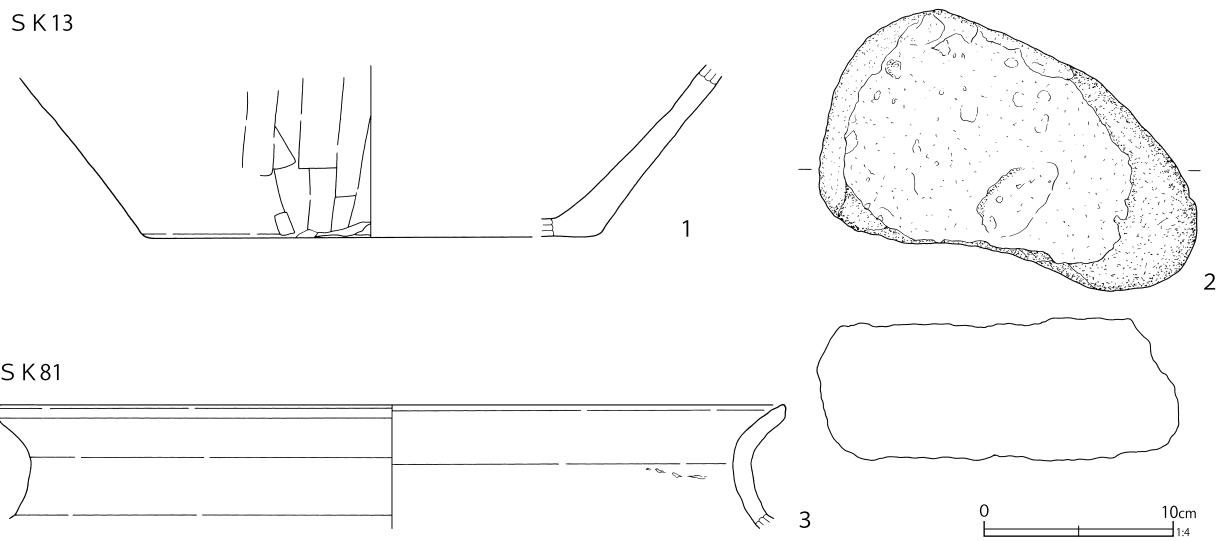
C区T-14グリッドに位置する。第30号溝跡、8a号畝と重複し壊している。第30号溝跡の底面より一段深く掘り下げている。壁の立ち上がりは緩やかである。本土壙と同じような長方形をした土壙は多く検出されているが、いずれも掘り込みは浅い。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸長1.17m、短軸長0.52m、深さ0.15mである。長軸方位はN-66°-Wである。

第484号土壙（第233、234図）

B区N-11グリッドに位置する。第3、8号溝跡と重複し、壊されている。各溝跡の底面は第484号土壙の中位にあり、標高13.80mに対し、土壙の底面は標高13.15mである。溝跡を掘削後、下層から板碑や馬の下顎骨等の骨が出土した。平面形態は不整形である。東側はやや垂直に掘り込まれていたが、西側は第3号溝跡と重複することもあり、傾斜を持って掘り込まれている。底面は東側が深く、凹凸が見られる。規模は長軸長2.15m、短軸長2.00m、深さ1.02mである。長軸方位



第231図 土壌(5)



第232図 土壙出土遺物(1)

第66表 土壙出土遺物観察表(1)(第232図)

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	SK13	陶器	甕	—	[9.1]	(23.8)	EHIK	5	普通	灰白	常滑	86-17
2	SK13	角閃石安山岩礫		長さ 15.4 cm	幅 19.8 cm	厚さ 7.5 cm		重さ 1916.8g		No.2		
3	SK81	陶器	甕	(41.6)	[7.5]	—	IK	5	良好	にぶい赤橙	常滑	86-18

はN-16° -Wである。

覆土中から第234図1に図示した板碑が出土した。板碑には種子のキリーグ「阿弥陀如来」に花瓶が対峙し、花瓶の表現は丁寧に描かれている。花瓶には蓮の花が描かれる。花瓶を上から覗いたような表現は古い様相である。また、蓮の花の中の点は実を表現している。「文保二年十一月日」(1318年)の年号が記されている。

第485号土壙(第233~235図)

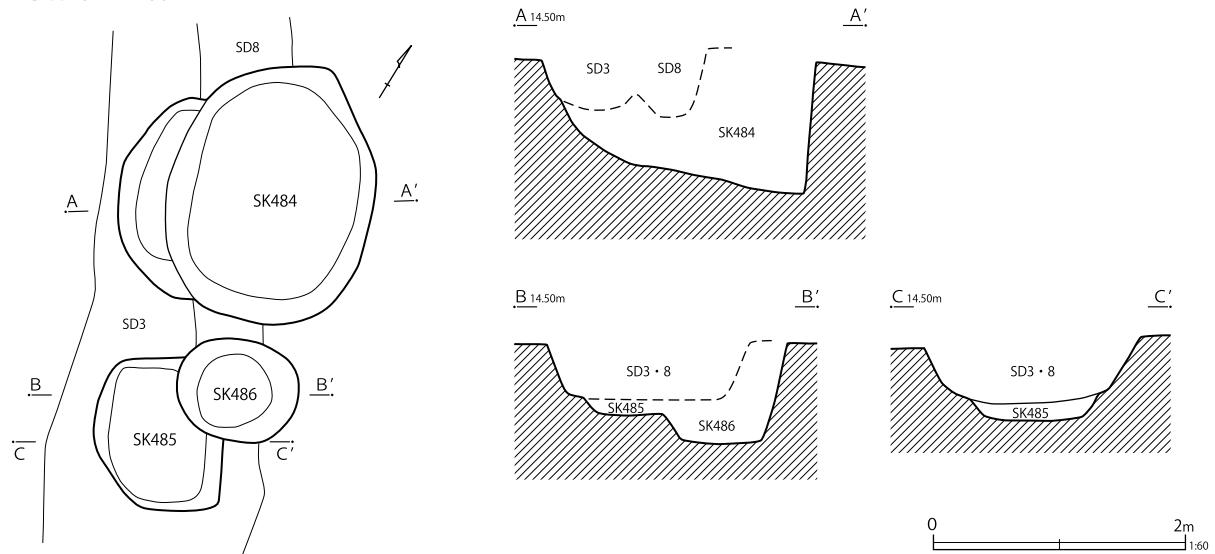
B区O-11グリッドに位置する。第3、8号溝跡、第486号土壙と重複している。重複関係は、第484号土壙と同様で、第3号溝跡と第8号溝跡に壊されている。各溝跡の底面は中位にあり、標高13.80mであるのに対し、土壙の底面は標高13.65mである。溝跡を掘削後、下層から板碑や馬の下顎骨等の骨がまとまって出土した。平面形態は隅丸方形である。規模は長軸長1.20m、短軸長1.01m、深さ0.15mである。長軸方位はN-35° -Wで

ある。

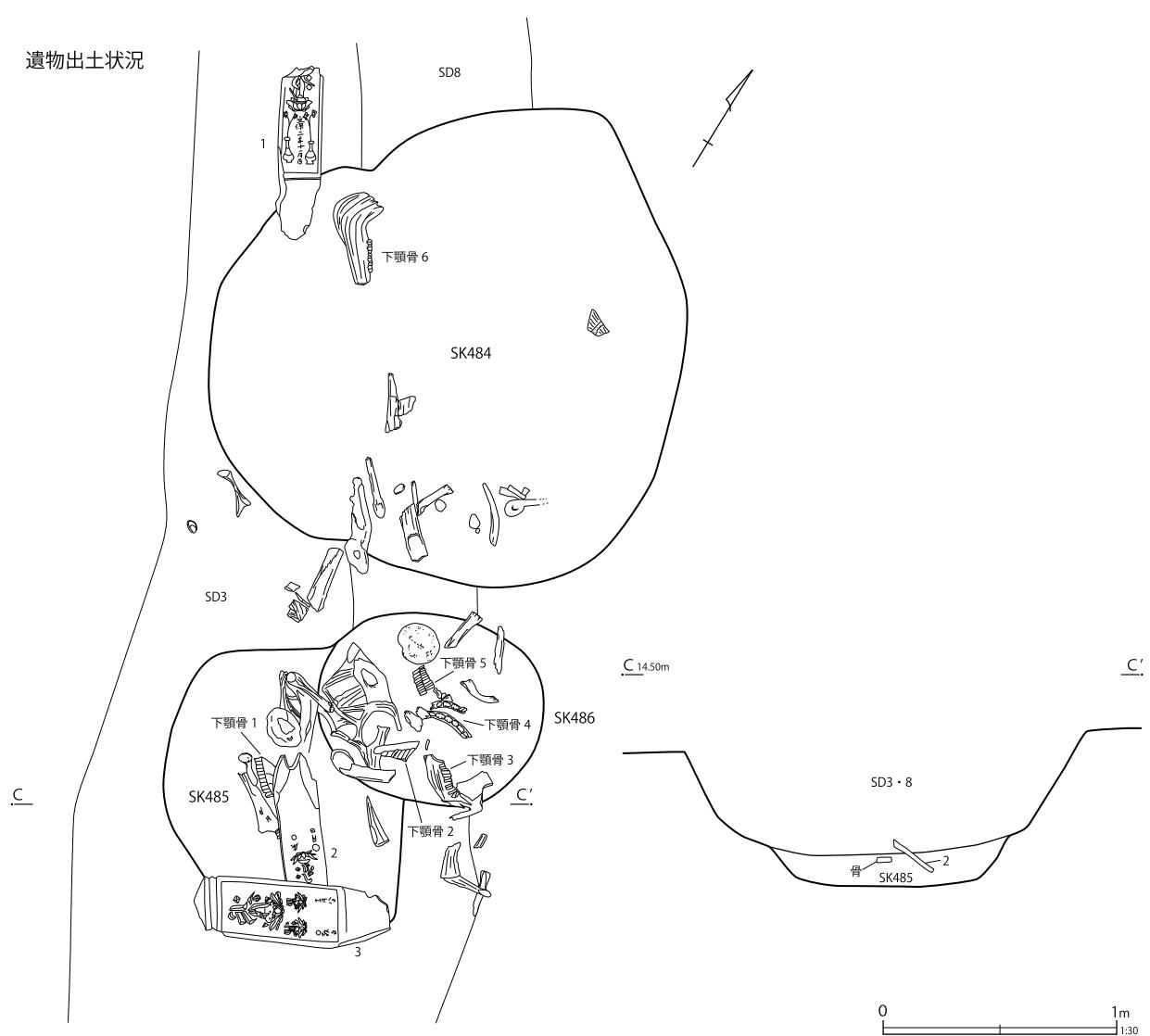
覆土中から2枚の板碑が出土した。第234図2の板碑には種子のキリーグ「阿弥陀如来」が描かれている。「康安 十月 日」の元号が記されているが年号の記載はなかった。康安年間は1361年及び、1362年のわずか二年間使われた元号で、南北朝時代の北朝の元号である。その前の延文(6年間)とその後の貞治(7年間)にそれぞれ重なる。第235図3の板碑には種子のキリーグ、サ、サク「阿弥陀三尊」が描かれている。上段中央は阿弥陀如来、下段右側は觀音菩薩、下段左側は勢至菩薩である。種子の下には、中央に「嘉元三年 乙巳」(1305年)、その右側に「閏十二月八日」、左側に「孝子敬白」と記されている。孝子敬白とは先祖供養の板碑に多く用いられる慣用句である。親や先祖に孝養を尽くす子供の願いを込めたもので、天界の阿弥陀様に願う意味がある。

土壙内からは、中世の板碑が出土しているが、

S K 484 ~ 486



遺物出土状況



第233図 土壌(6)

これらの板碑は、周辺に建立されていたものが何らかの理由で投棄されたものと考えられる。本来板碑は供養塔であるが、埋葬土壙等とともに建てられる場合もあった。遺跡内には人骨が埋葬されていた第1号土壙等が存在することから、板碑を伴う土壙墓が存在した可能性も考えられよう。その後、これらの板碑は廃棄土壙として掘られた本土壙に投棄されたと見られる。

第486号土壙（第233図）

B区N、O-11グリッドに位置する。第3、8号

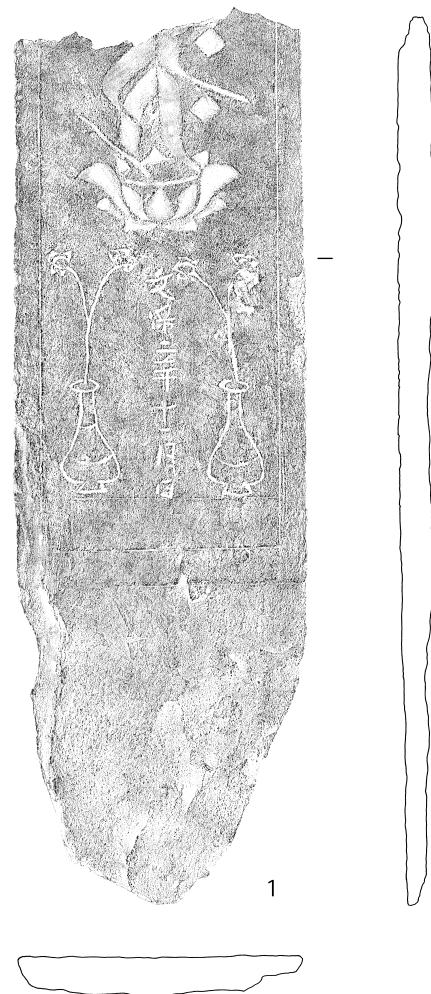
溝跡が上層に掘り込まれている。第485号土壙と重複し、掘り込みの深さは第485号土壙よりもさらに0.20m前後深くなる。両土壙の新旧関係は不明である。平面形態は楕円形である。規模は長軸長0.98m、短軸長0.80m、深さ0.80mで、長軸方位はN-58°-Eである。

土壙覆土中からは、馬の頭骨、上顎、下顎の骨がまとまって出土した。

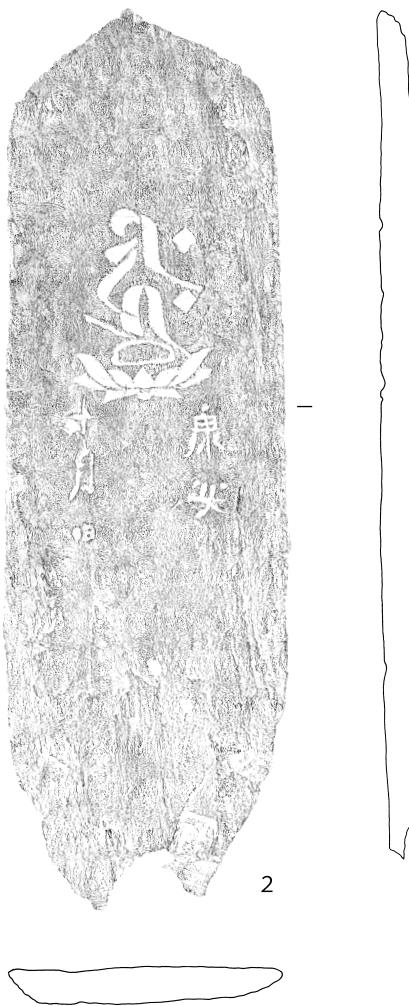
第487号土壙（第236図）

B区O、P-12グリッドに位置する。第486号土

S K 484



S K 485



0 20cm

第234図 土壙出土遺物(2)

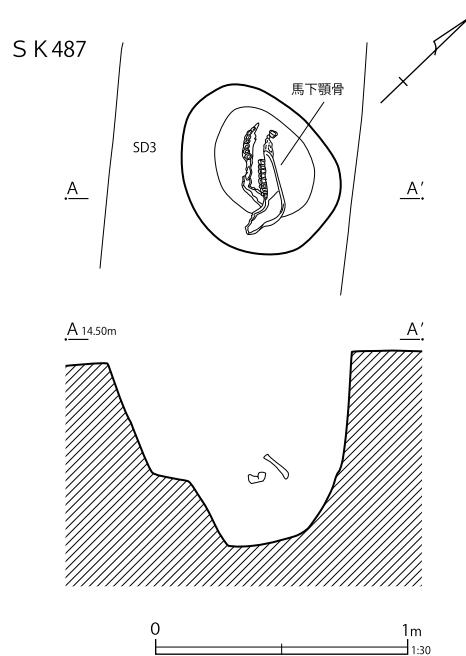
SK 485



第235図 土壙出土遺物(3)

第 67 表 土壙出土遺物観察表 (2) (第 234、235 図)

番号	遺構	種別	器種	大きさ	石材	備考・出土位置	図版
1	SK484	石造物	板碑	長さ 71.1 cm 幅 22.8 cm 厚さ 2.9 cm	緑泥片岩	SD3・8 (N11G) No.3	87-6
2	SK485	石造物	板碑	長さ 67.8 cm 幅 21.9 cm 厚さ 2.9 cm	緑泥片岩	SD3・8 (O11G) No.2	87-7
3	SK485	石造物	板碑	長さ 96.7 cm 幅 26.3 cm 厚さ 2.0 cm	緑泥片岩	SD3・8 (O11G) No.1	87-8



第236図 土壙(7)

壙から南東側約11mの位置にあたる。第3号溝跡と重複し、本土壙の上層覆土は、第3号溝跡に壊されていた。平面形態は橢円形である。残存する規模は長軸長0.69m、短軸長0.56m、深さ0.78mである。長軸方位はN-84°-Wである。土壙からは馬の下顎骨が出土した。時期は、中世と考えられる。

北西側には東西方向に長軸長を持つ長方形を呈した土壙墓と見られる土壙がまとまって検出されている。さらに北側には、掘り込みの深い第484～486号土壙が存在する。

これらの土壙から板碑や馬骨が出土している。板碑はいずれも廃棄された状況である。馬骨は頭骨を中心に残存していた。

(2) 溝跡

中近世の溝跡は40条検出された。

溝跡には、南北に細長い調査区を南北方向にやや弧を描くように延びる溝跡と、東西方向に直線的に延びる溝跡の二者が認められた。

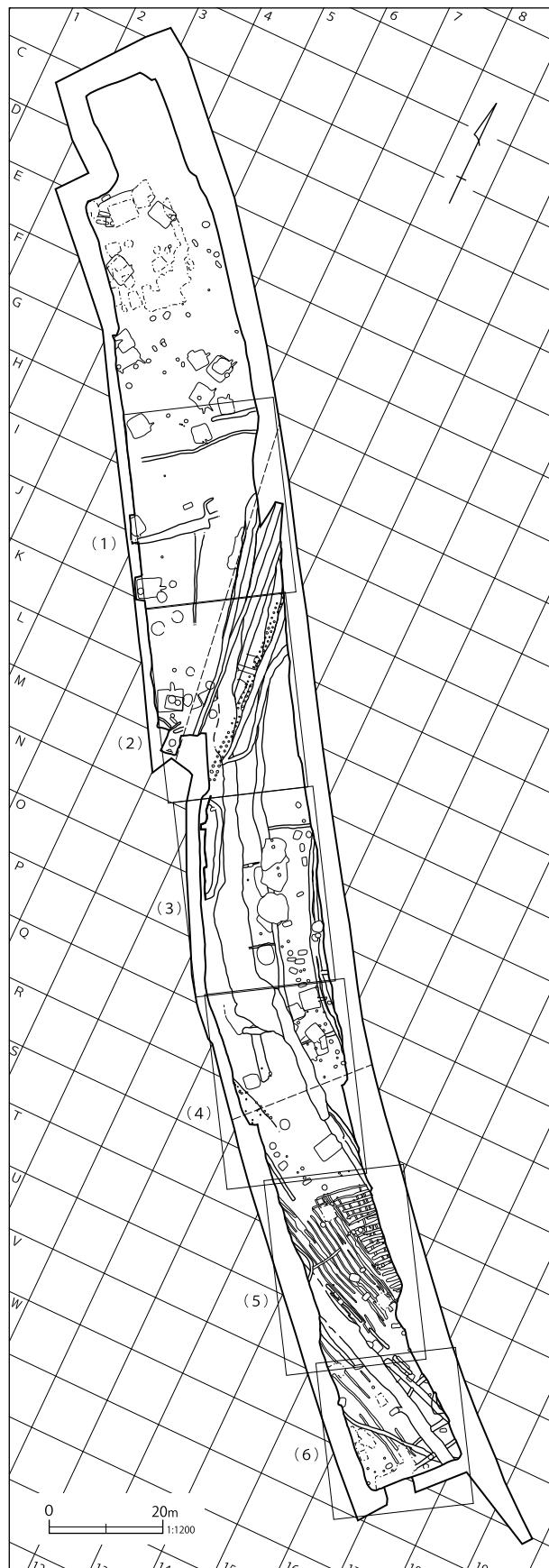
南北方向に弧を描く溝跡は、第1号溝跡が典型で、他に第2~6、8、10~13、17、21、26~30、33、40号溝跡がある。これらの溝跡は、並走する方向性や重複による新旧関係、掘り直し規模等に違いが見られる。

並走する溝跡は、第1~3、6、8、21号溝跡である。他に、第10~13、33号溝跡がある。並走関係にある溝跡の中で、第1号と第6号、第3号と第8号溝跡は重複し、規模が同じであることから掘り直しの可能性が考えられ、断面観察により(旧)第6号<(新)第1号溝跡、第8号<第3号溝跡の新旧関係にあることもわかった。また、第21号溝跡は第1号溝跡と規模が類似していることから、途中で途切れてはいるが、同じ性格の溝跡の可能性が考えられる。また、第13号と第33号溝跡、第11号と第12号溝跡は一部で重複し、断面観察により第13号<第33号溝跡、第12号<第11号溝跡の新旧関係にあることもわかった。

並走関係に無い交差して重複する溝跡の新旧関係は、第1号溝跡は第10、13、33号溝跡によって壊されている。また第2号溝跡は第11、12号溝跡によって壊されている。

東西方向に延びる溝跡には、第7、14、15、22、23、32、34~39号溝跡が見られる。これらの溝跡は南北方向に延びる溝跡に壊されていることから、前段階の時期に掘り込まれた溝跡と考えられる。

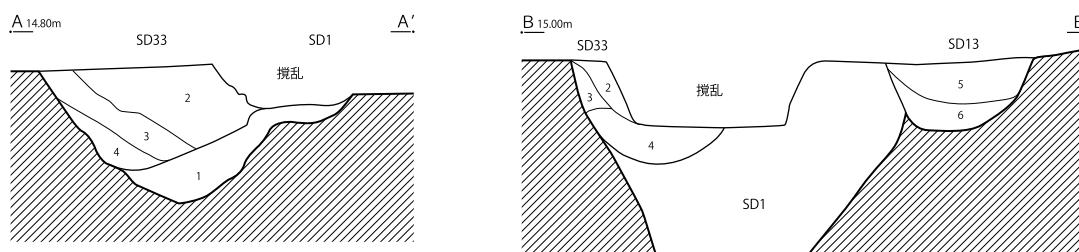
南北方向の弧状を描く溝跡は、利根川の堤防築堤の際に盛土の裾に設けた排水溝の痕跡として捉えることができる。東側から西側に溝跡の造り替えが行われた。覆土中に軽石が多く見られることから天明3年の浅間山噴火後に掘削された遺構と考えられる。



第237図 溝跡区割り図

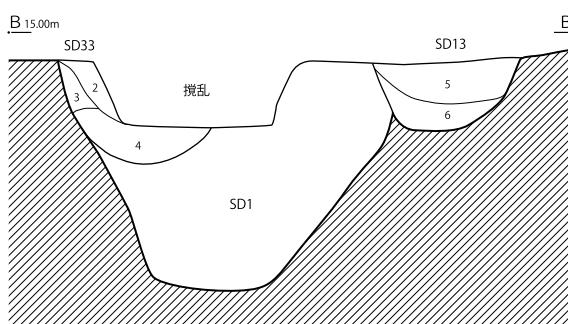


第238図 溝跡(1)

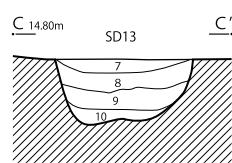


S D 1
1 褐灰色土 粘土質 マンガン多量 しまり弱い

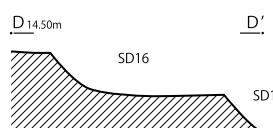
S D 33
2 褐色土 粘土質 しまり強い 現代の埋土
3 暗褐色土 粘土質 マンガン含む しまり強い
4 褐灰色土 粘土質 マンガン・炭化物多量
しまり弱い



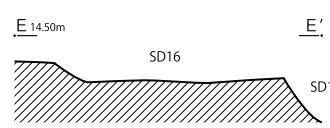
S D 13
5 にぶい黄褐色土 粘土質 マンган少量 しまり強い
6 褐灰色土 粘土質 マンガン・炭化物多量 しまり弱い



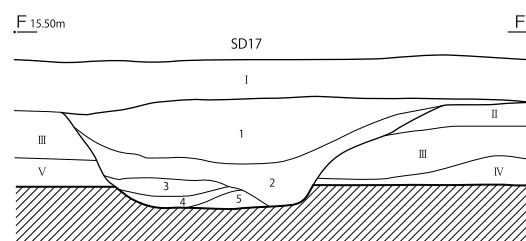
S D 13
7 黄褐色土 地山主体 浅間A少量
8 灰色土 地山主体 マンガン・鉄分多量
9 灰色土 やや砂質
10 灰黑色土 地山混入



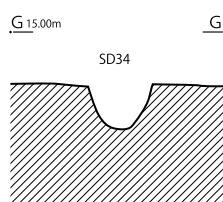
D 14.50m
SD16
SD1



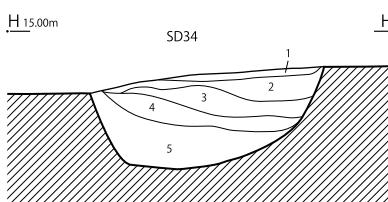
E 14.50m
SD16
SD1



S D 17
I 灰褐色土 表土
II 褐灰色土 粘質土 暗褐色土主体 暗灰色粘土少量
III 暗褐色土 粘質土 暗灰色粘土多量 細砂粒含む
IV 灰黃褐色土 シルト質
V 暗褐色土 粘質土 鉄分斑点多量 土器片含む（古墳～古代）
1 褐灰色土 シルト質 炭化物粒子・焼土粒子・暗灰色粘土少量
2 褐灰色土 シルト質 炭化物粒子・焼土粒子少量
暗灰色粘土と暗褐色粘土をブロック状に含む
3 暗灰褐色土 シルト質 暗褐色土・暗灰色粘土・細砂粒の混土
4 暗灰褐色土 粘質土 暗褐色土主体 黃褐色土をブロック状に含む
5 暗褐色土 粘質土 暗灰色粘土ブロック少量

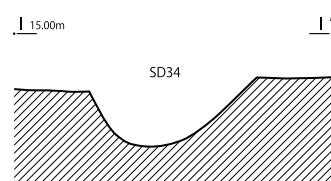


G 15.00m
SD34
SD1



H 15.00m
SD34
SD1

S D 34
1 黒褐色土 しまり強い
2 暗褐色土 黄褐色の砂質土をまだらに含む
シルトブロック（径3～5mm程度）含む しまり強い
3 黒褐色土 黄褐色の砂質土をまだらに含む
シルトブロック（径3～5mm程度）含む しまり強い
4 黑褐色土 黄褐色の砂質土をまだらに含む
シルトブロック（径3～5mm程度）含む しまり強い
5 暗褐色土 黄褐色の砂質土をまだらに含む
シルトブロック（径3～5mm程度）含む しまり強い



I 15.00m
SD34
SD1

S D 35
1 暗褐色土 シルトブロック（径5mm程度）含む
しまりあり
2 にぶい黄褐色土 シルトブロック（径5mm程度）含む
しまりあり

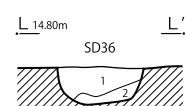


J 14.90m
SD35
SD1



K 14.90m
SD35
SD1

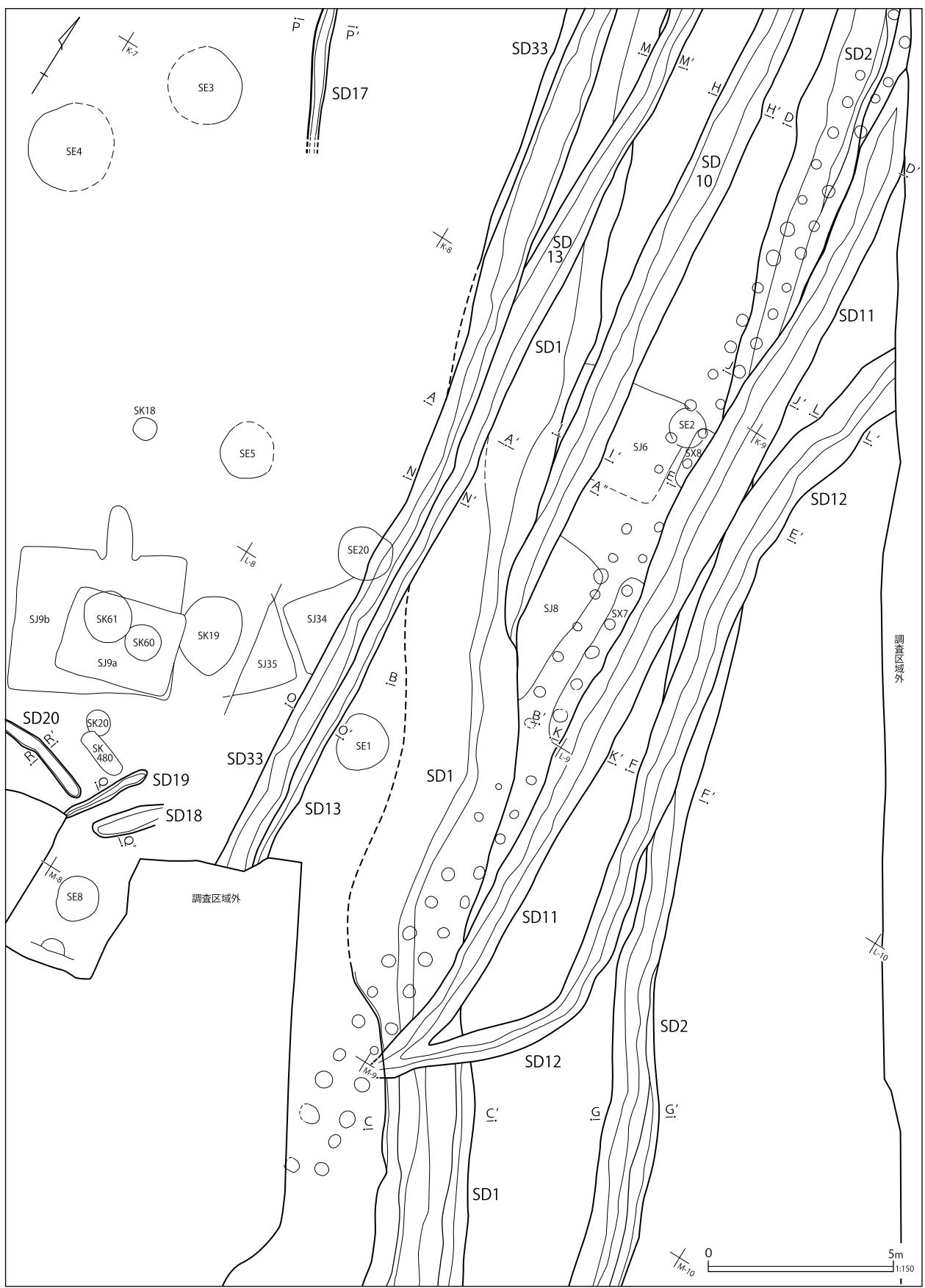
S D 36
1 褐色土 シルトブロック（径5mm程度）含む
しまりあり
2 暗褐色土 シルトブロック（径5mm程度）含む
しまりあり



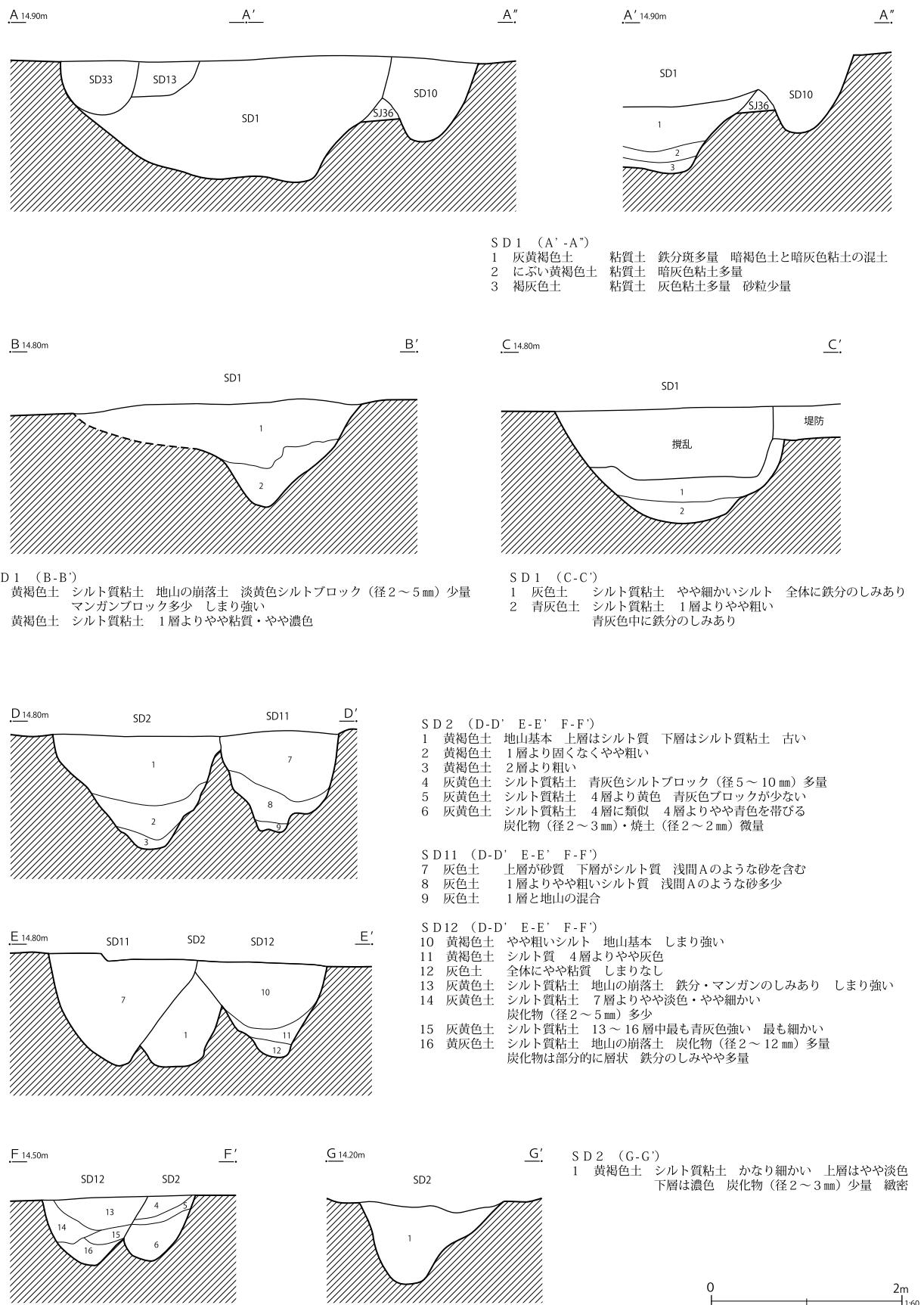
L 14.80m
SD36
SD1

0 2m
1:60

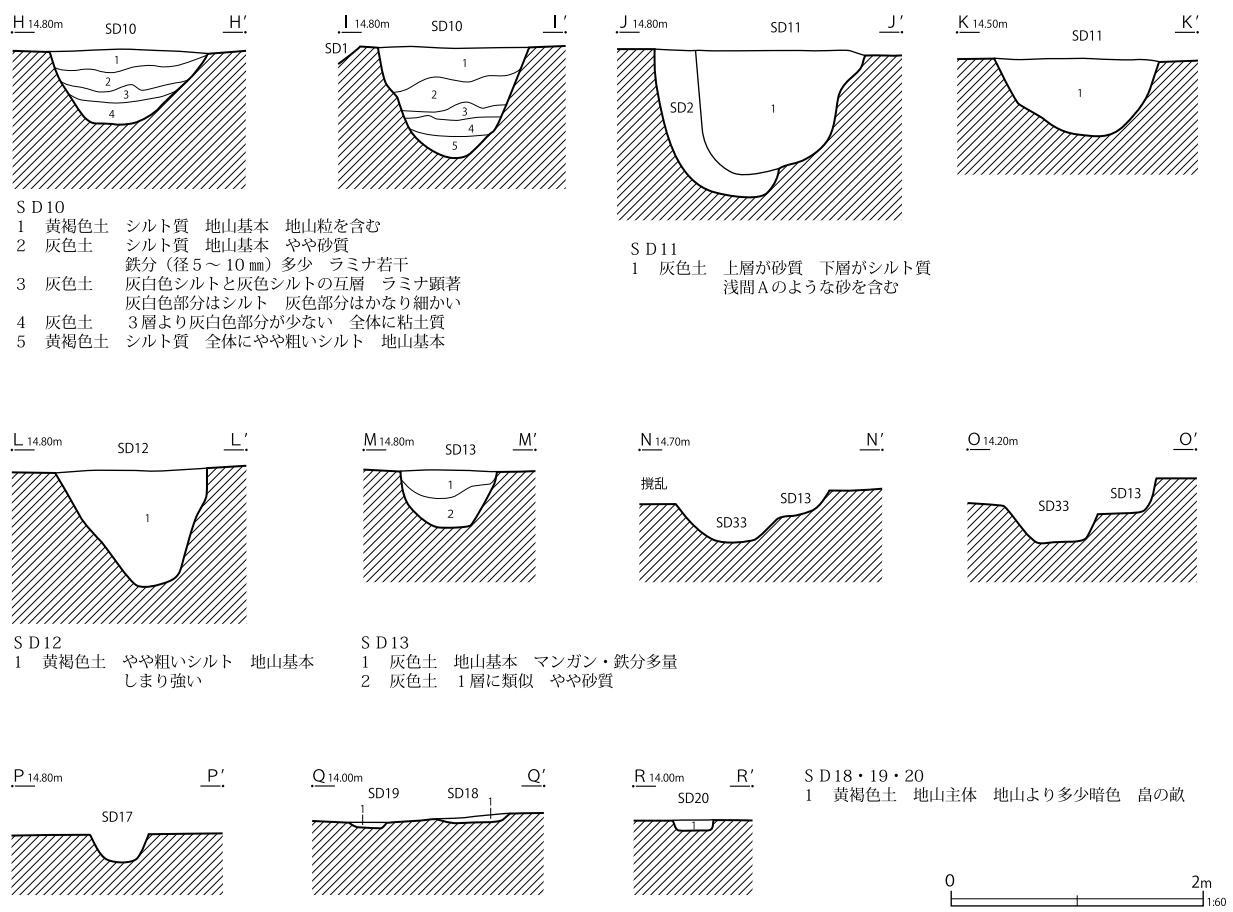
第239図 溝跡(2)



第240図 溝跡(3)



第241図 溝跡(4)



第242図 溝跡(5)

第1号溝跡(第238~241、243、244、246、253、254図)

A、B区 I-7、J-7、8、K-8、L-8、9、M-9、N-9、10、O-9～11、P-10～12グリッドを北西から南東にやや弧を描くように延びる。A、B区全体に延びているため、多くの遺構と重複している。本遺構の上面には第33号溝跡が重複している。断面形態は逆台形である。規模は幅2.00～7.50m、長さ90.00m、深さ0.50～1.50mである。走行方向はN-30°-Wである。南北方向に並走する第1～3、6、8、21号溝跡の中では第6号溝跡と並んで最も古く、西側に位置する。掘り込みの規模が大きく、堤防に沿う初期の溝跡である。

遺物は第253、254図に示した常滑産甕、鉢、擂鉢、瓦質陶器片口鉢、青磁碗、瓦、砥石、角閃石安山岩礫、蛭石等が出土した。

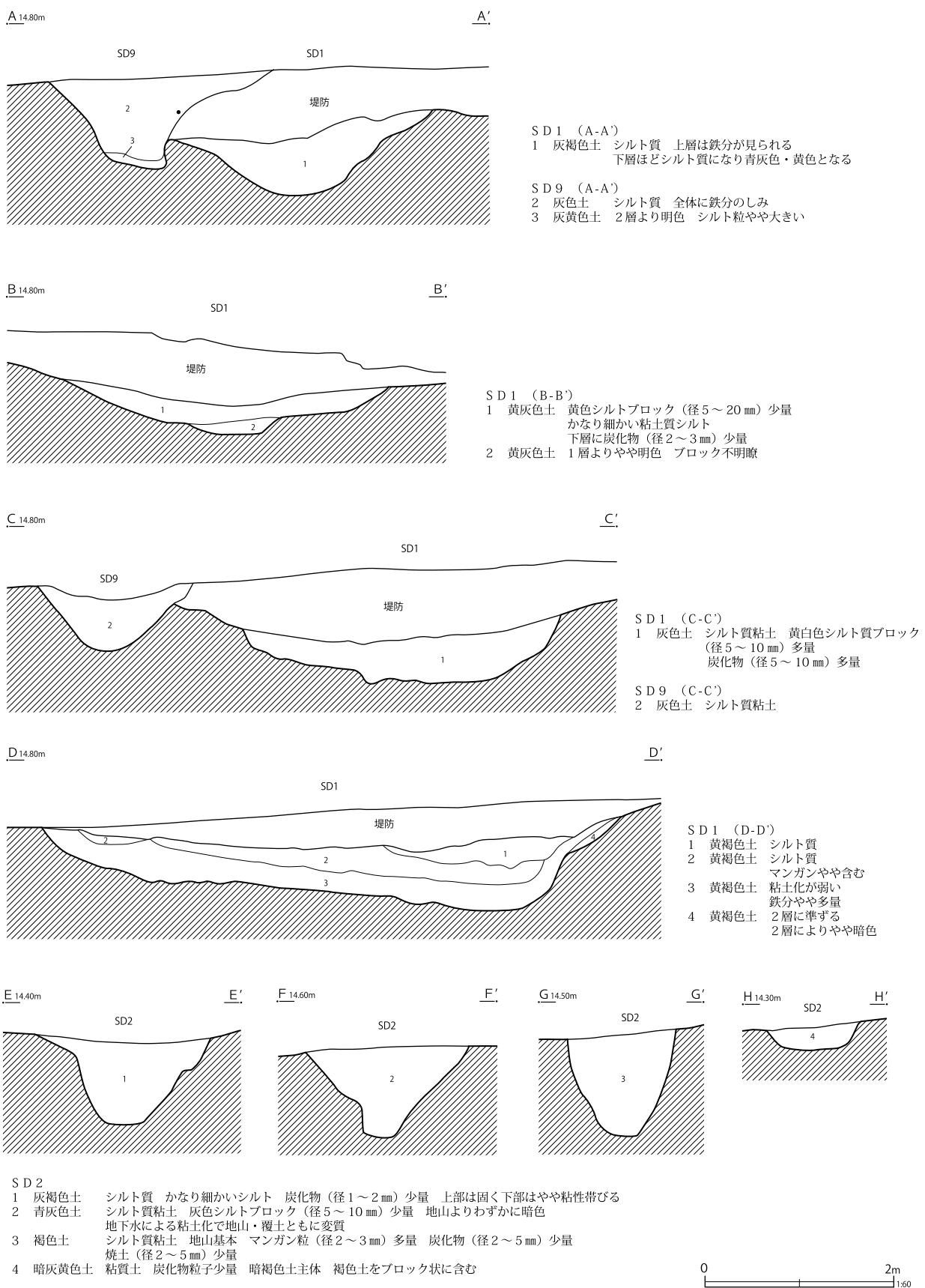
第2号溝跡(第238、240、241、243、244、246、255図)

B、C区 I～K-8、K～M-9、M～Q10、Q、P-11、Q-12、13、R-13、14グリッドを北西から南東に延びる。第1、3、7号住居跡、第6号溝跡、第1号竪穴状遺構、第10号土壙よりも新しい。第11、12号溝跡に壊される。第1～3号性格不明遺構と重複し、本溝跡が壊している。断面形態は逆台形である。規模は幅0.80～2.00m、長さ110.00m、深さ0.28～1.18mである。走行方向はN-25°-WからN-60°-Wである。覆土はシルト質だが、地点によって土質が異なる。北側の掘り込みは深く1.18mであるが、南側では0.28mと浅くなり、調査区域外へ延びる。

遺物は第255図に示した、青磁碗、常滑産擂鉢・甕の破片が出土した。



第243図 溝跡(6)



第244図 溝跡(7)

第3号溝跡（第243～246、248図）

B区M～O-11、P-12、13、O-12グリッドを南北方向に延びる。第5号住居跡、第8号溝跡を壊す。第14、15号溝跡、第484～487号土壙と重複している。北側と南東側は調査区域外に延びる。覆土にはシルト質の粘土層が堆積し、灰色砂粒をブロック状に含んでいる。断面形態はU字形で、規模は幅0.65～1.50m、長さ36.00m、深さ0.40～0.70mである。走行方向はN-45°-Wである。遺物は出土しなかった。

第4号溝跡（第246、248図）

B区Q-11、12グリッドを南北方向に延びる。第7号溝跡に壊されている。第481号土壙と重複する。断面形態は皿形である。規模は幅1.55～1.75m、長さ8.60m、深さ0.18～0.25mで、走行方向はN-40°-Wである。遺物は出土しなかった。

第5号溝跡（第246、248、256図）

B、C区のQ-11、R-11、12グリッドを北西から南東方向に延びる。北西側は調査区域外に延びる。断面形態は皿形で、規模は検出された範囲で幅3.20m、長さ12.40m、深さ0.20～1.10mで、走行方向はN-65°-Wである。遺物は第256図に示した鎧蓮弁の青磁碗、非口クロのかわらけ、陶器擂鉢、瓦質陶器焙烙、底部に環状の焼き台痕のある灰釉陶器皿、硯、土錘が出土した。

第6号溝跡（第246～249、256図）

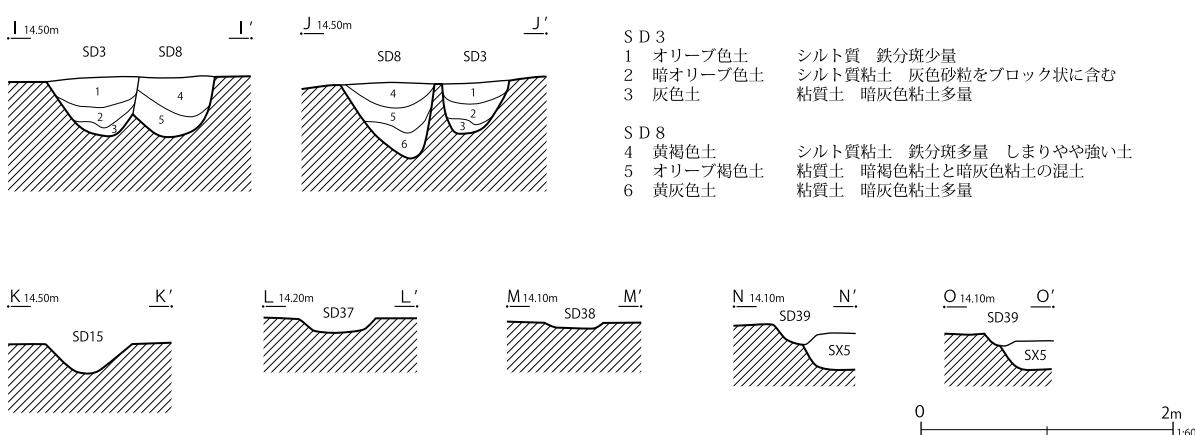
B、C区P-11、12、Q-12、13、R-13、14グリッドを南北方向に延びる。第1、16号住居跡、第10号土壙を壊している。断面形態は逆台形で、規模は幅1.00～2.80m、長さ40.00m、深さ0.38～1.28mである。走行方向はN-46°-WからN-57°-Wである。遺物は第256図に示した陶器壺・鉢、青磁碗が出土した。

第7号溝跡（第246、248図）

B区P、Q-11グリッドを東西方向に延びる。第4号住居跡、第4号溝跡を壊す。第1号溝跡と重複する。断面形態はU字形である。規模は幅1.10～13.0m、長さ5.50m、深さ0.50～0.73mで、走行方向はN-52°-Wである。遺物は出土しなかった。

第8号溝跡（第243、245、246、248図）

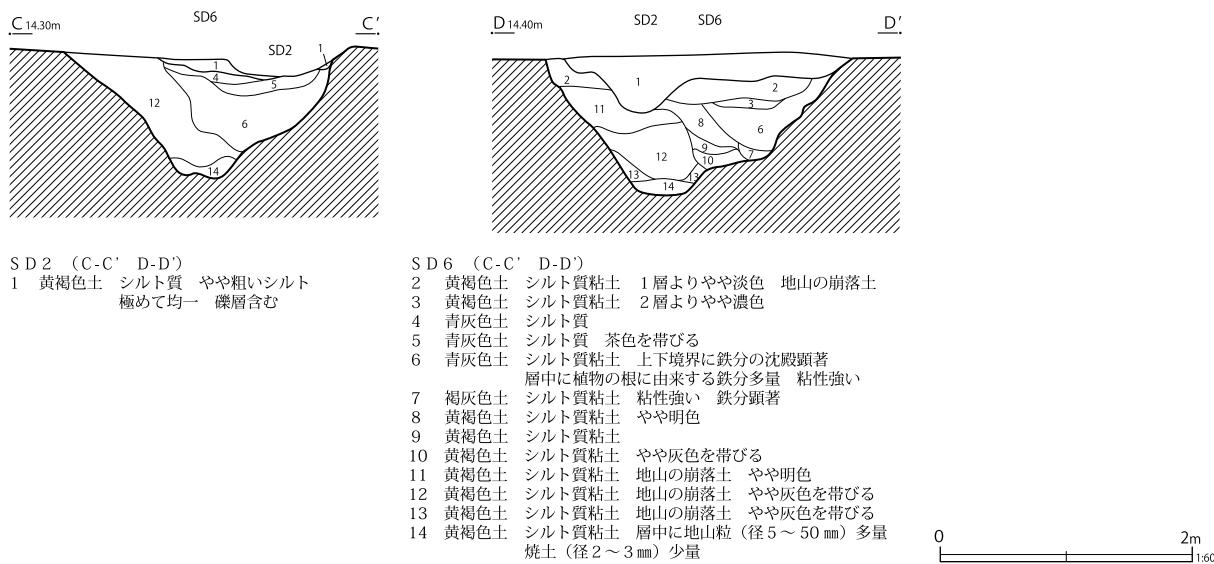
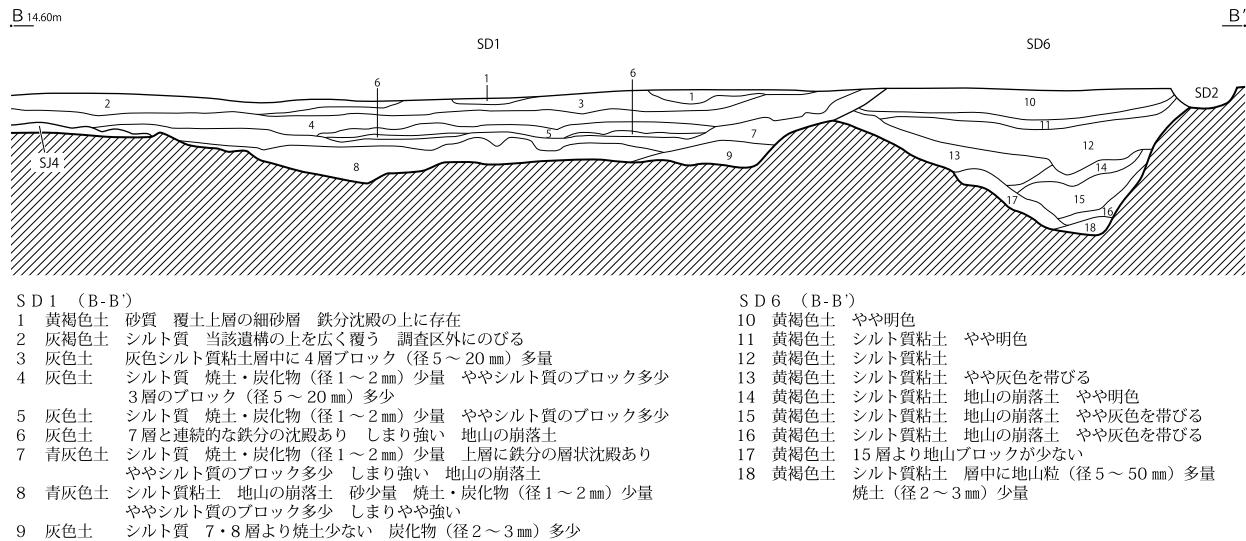
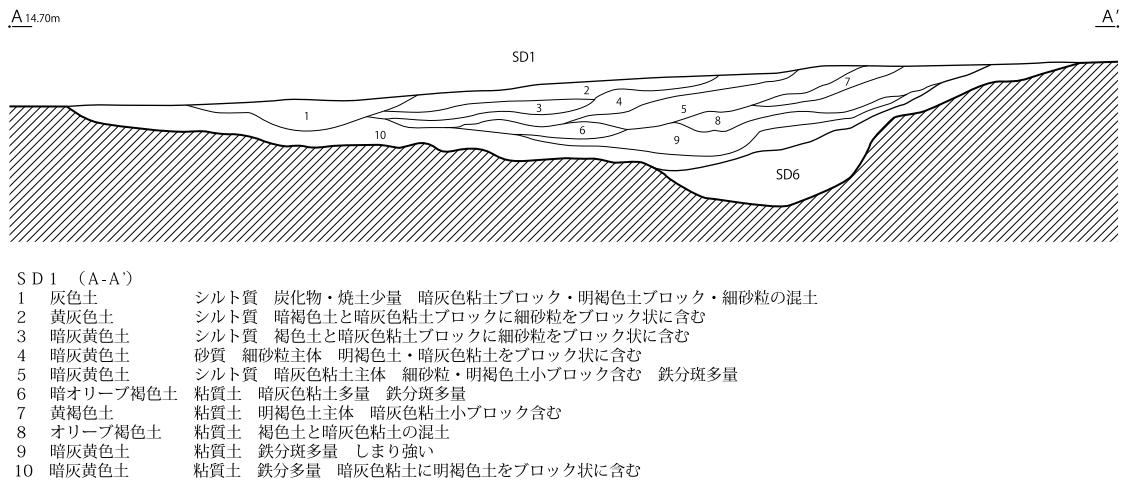
B区M～O-11、O、P-12、P-13グリッドを南北方向に延びる。第5号住居跡、第14、15号溝跡、第484～487号土壙を壊し、第3号溝跡に壊される。北側と南東側は調査区域外に延びる。覆土にはシルト質の粘土層が堆積し、暗褐色粘土と暗灰色粘土を含んでいる。断面形態はU字形で、規模は幅0.40～0.90m、長さ38.20m、深さ0.45～0.60mである。走行方向はN-45°-Wである。遺物は出土しなかった。



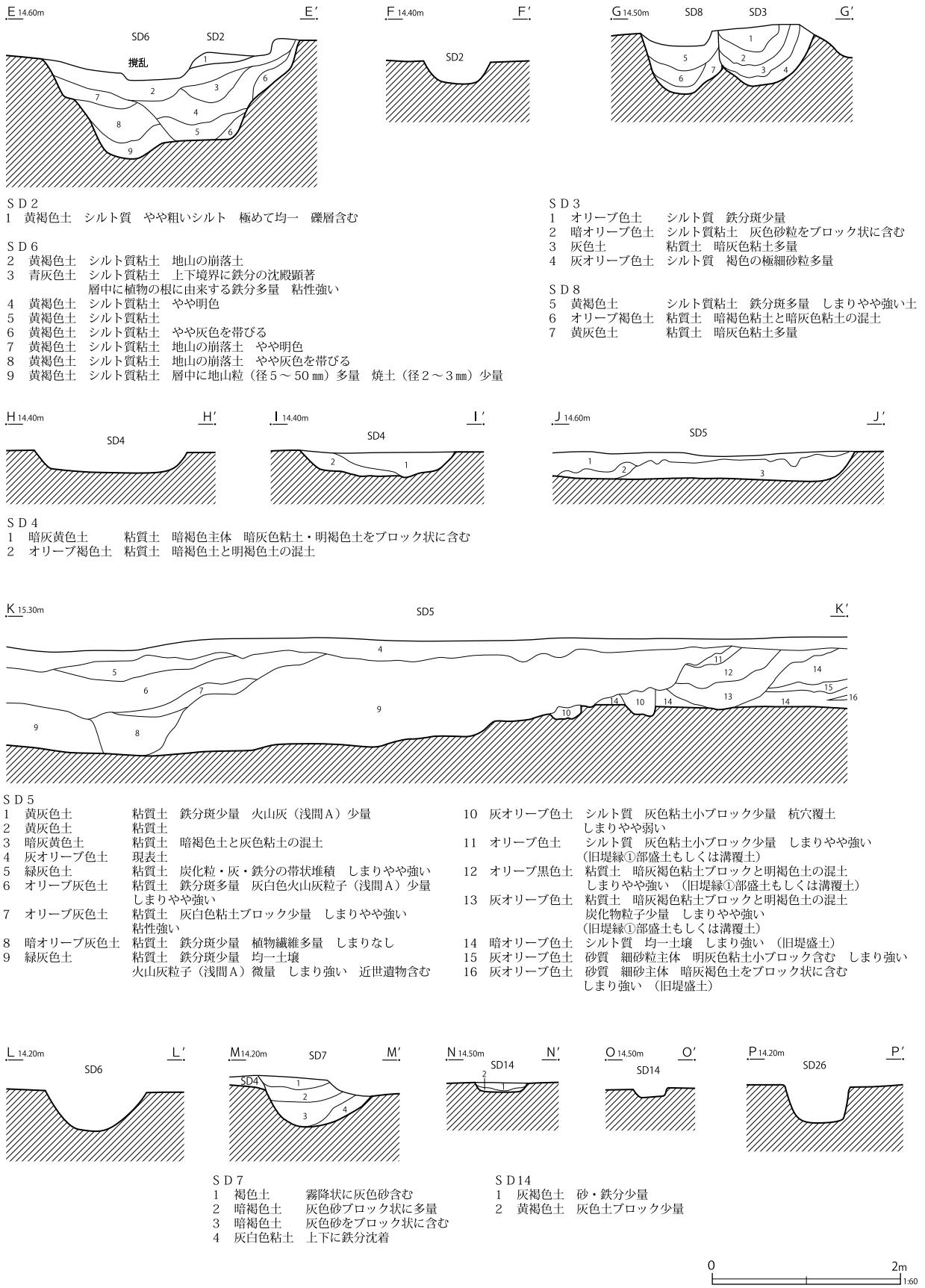
第245図 溝跡(8)



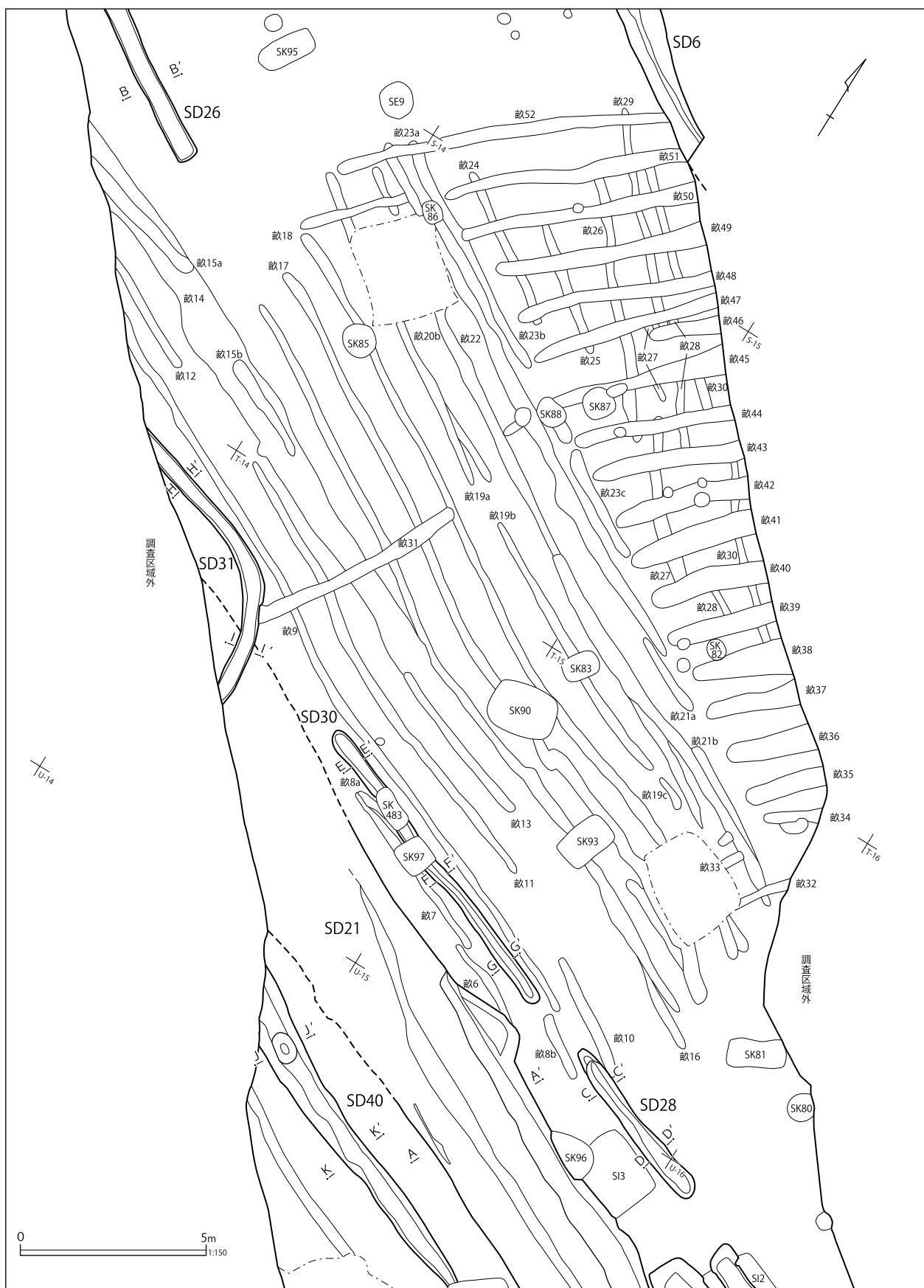
第246図 溝跡(9)



第247図 溝跡(10)



第248図 溝跡(11)



第249図 溝跡(12)

第9号溝跡（第243、244、256図）

B区M～O-9グリッドを南西から北西方向に延びる。第1号溝跡の西側に位置する。第13号土壙と重複するが新旧関係は不明である。また、第1号溝跡の上面に堆積する旧堤防の盛土を壊している。南北方向に延びる溝跡の両端が西側に屈曲し、調査区域外に延びる。断面形は逆三角形で、規模は幅0.75～1.02m、長さ18.20m、深さ0.52～0.93mである。走行方向はN-21°-Wである。遺物は第256図12の石錘が出土した。

第10号溝跡（第238、240、242、257図）

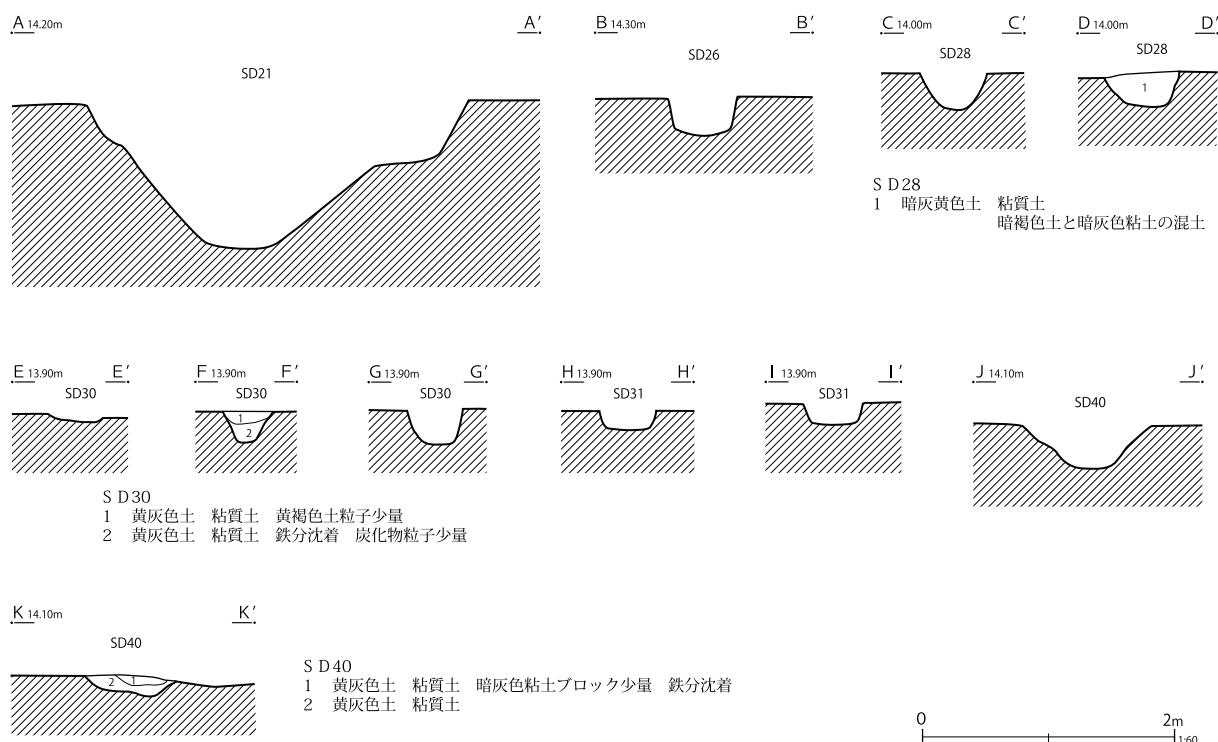
B区I～K-8グリッドを南北方向に延びる。第6、8号住居跡を壊し、第1、2号溝跡と重複している。西側の第13号溝跡とほぼ並行して延びる。断面形はU字形で、規模は幅0.80～1.30m、長さ28.70m、深さ0.58～0.86mである。走行方向はN-11°-Wである。遺物は第257図に示した瀬戸・美濃碗、瓦質陶器火鉢が出土した。

第11号溝跡（第240、242、257図）

B区J～L-8、9グリッドを南北方向に延びる。第1、2、12号溝跡、第7、8号性格不明遺構を壊す。西側の第10、13号溝跡はほぼ並行して延びる。断面形は逆三角形で、規模は幅0.75～1.40m、長さ32.50m、深さ0.52～0.95mである。走行方向はN-4°-Wである。遺物は第257図に示した信楽土瓶蓋、瀬戸・美濃鉢、常滑産擂鉢、瓦質土瓶火鉢、石製硯が出土した。

第12号溝跡（第240～242、257図）

B区M-8、J～M-9グリッドを緩いS字を描いて南北方向に延びる。南端は第11号溝跡と合流している。第1、2号溝跡を壊す。第11号溝跡に壊される。断面形は逆三角形で、規模は幅0.60～1.40m、長さ26.50m、深さ0.53～0.82mである。走行方向はN-11°-EからN-40°-Eである。遺物は第257図に示した瓦質陶器火鉢、陶器皿等が出土した。



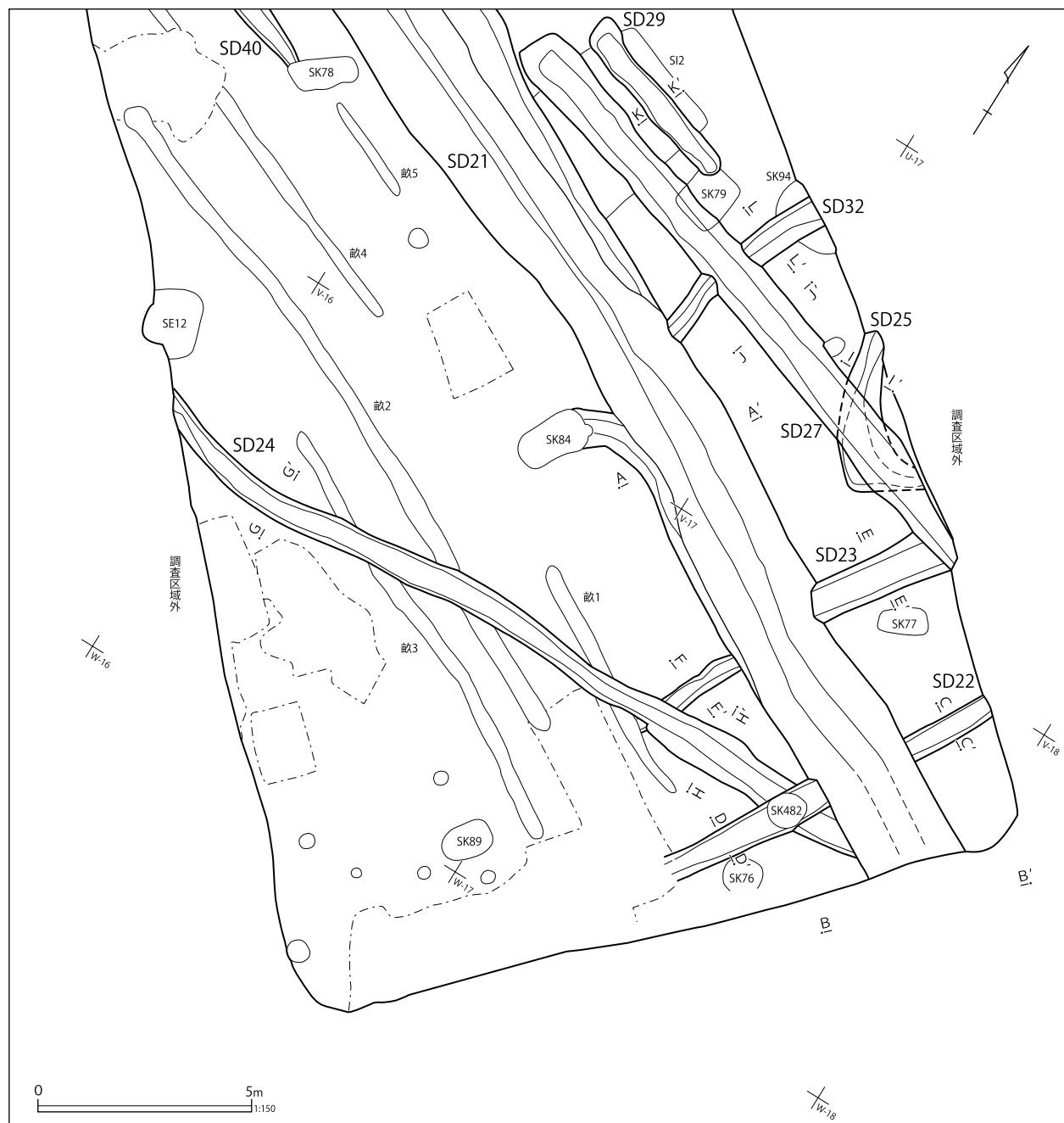
第250図 溝跡(13)

第13号溝跡（第238～240、242、257図）

B区H-7、H～L-8グリッドを南北方向に延びる。断面形はU字形で、規模は幅0.72～1.40m、長さ43.80m、深さ0.23～0.46mである。走行方向はN-10°-Wである。遺物は第257図に示した信楽土瓶蓋、肥前蓋等が出土した。

第14号溝跡（第246、248図）

B区P-12グリッドを東西方向に延びる。第2、3号住居跡、第2、8号溝跡と重複している。断面形は皿形で、規模は幅0.28～0.75m、長さ6.25m、深さ0.05～0.09mである。走行方向はN-35°-Eである。遺物は出土しなかった。



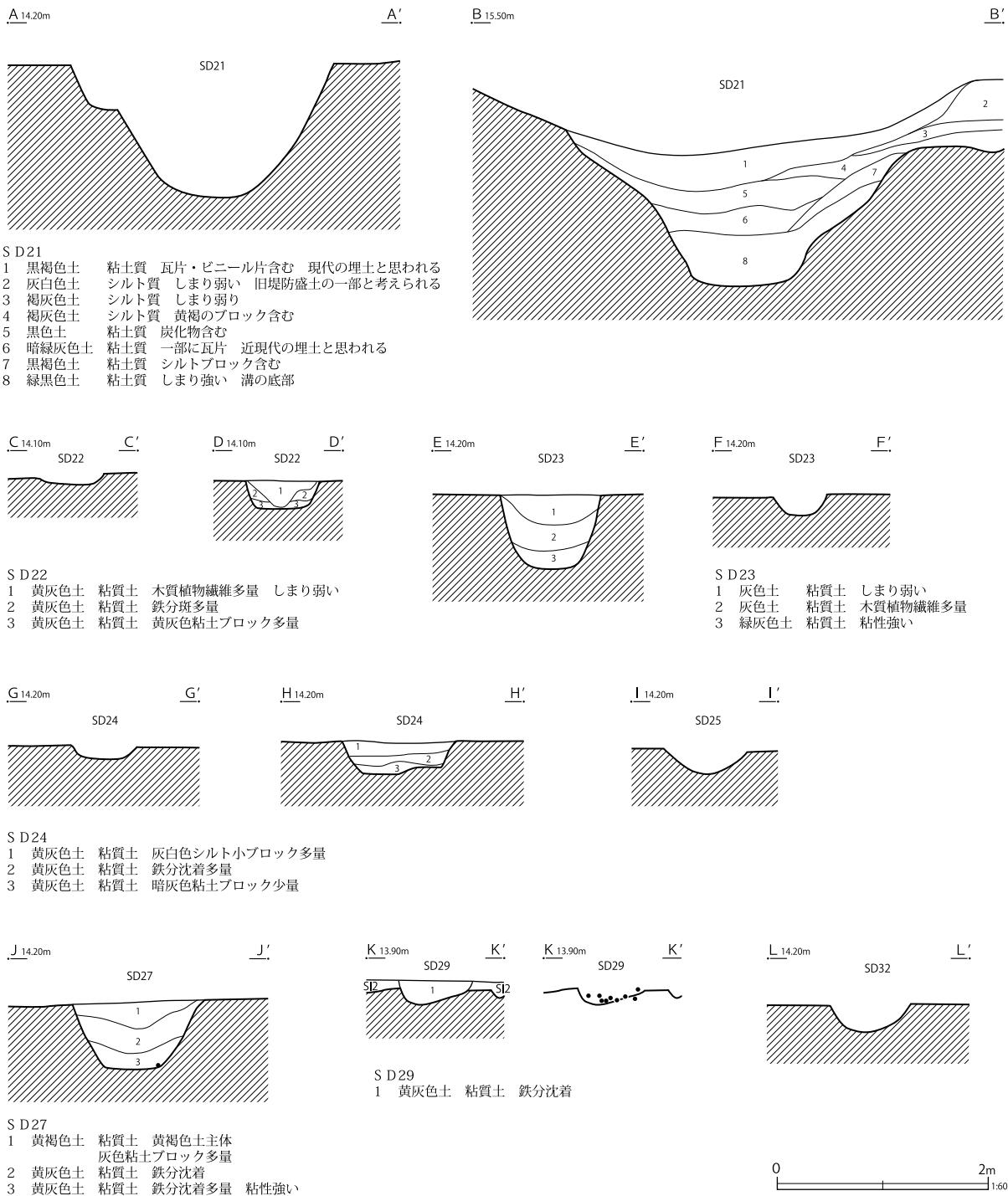
第251図 溝跡(14)

第15号溝跡 (第243、245図)

B区O-12グリッドを東西方向に延びる。第3号溝跡と重複している。断面形はU字形で、規模は幅0.50~0.60m、長さ1.25m、深さ0.22~0.38mである。走行方向はN-61°-Eである。

第16号溝跡 (第238、239図)

A区I-7グリッドを南北方向に延びる。第1号溝跡と重複する。断面形は皿形で、規模は幅0.15~1.80m、長さ6.40m、深さ0.12~0.22mである。走行方向はN-11°-Wである。



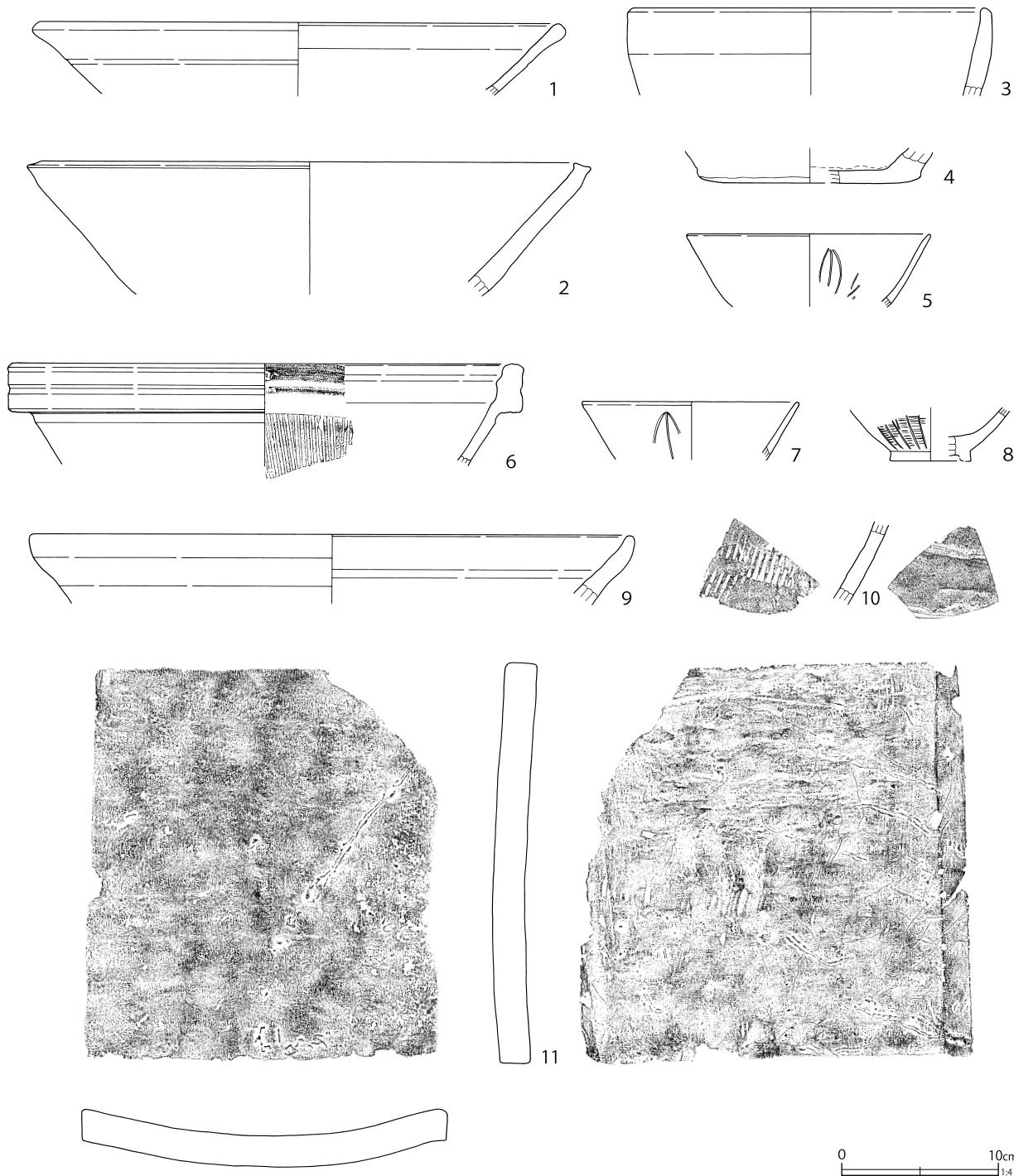
第252図 溝跡(15)

第17号溝跡（第238～240、242図）

A区I、J-7グリッドを南北方向に延びる。断面形は逆台形で、規模は幅0.30～1.55m、長さ15.30m、深さ0.20～0.85mである。走行方向はN-22°-Wである。

第18号溝跡（第240、242図）

A区L-8グリッドを南北方向に延びる。東端は確認できなかった。断面形は皿形で、規模は幅0.55～0.58m、長さ1.9m、深さ0.05～0.07mである。走行方向はN-44°-Eである。



第253図 第1号溝跡出土遺物(1)

第19号溝跡（第240、242図）

A区L-7、8グリッドを南北方向に延びる。南側は調査区域外に延びる。断面形は皿形で、規模は幅0.26～0.32m、長さ2.45m、深さ0.03～0.05mである。走行方向はN-30°-Eである。

第20号溝跡（第240、242図）

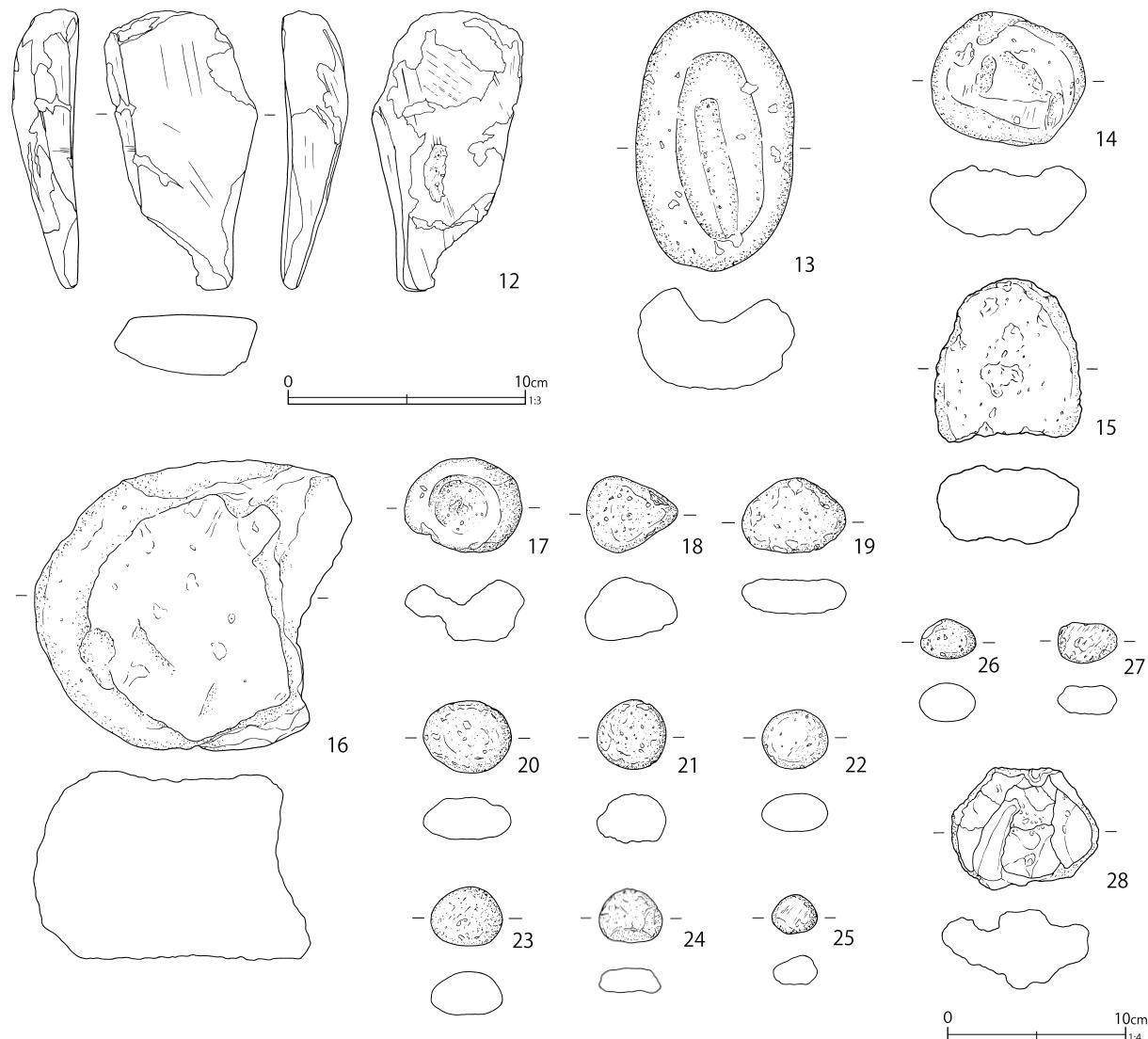
A区L-7グリッドを東西方向に延びる。西側は調査区域外に延びる。断面形は皿形で、規模は幅0.32～0.42m、長さ2.95m、深さ0.06～0.08mである。走行方向はN-70°-Wである。

第21号溝跡（第249～252、258、259図）

C区T～V-14～17グリッドを南北方向に弧を

描いて延びる。古墳時代の第2、3号竪穴状遺構を壊し、第84号土壙に壊され、第96号土壙を壊している。また、東西方向に延びている第22、23、32号溝跡と直交し壊している。本溝跡の西側には第40号溝跡が並走し、東側に途切れながらも連続すると考えられる第28、29、30号溝跡が検出されている。さらに、並走する掘り込みの深い第27号溝跡も検出されている。断面形は逆台形で、規模は幅2.10～3.25m、長さ43.70m、深さ1.10～1.30mである。走行方向はN-60°-Wである。

第252図B-B'の断面観察では、第1層（現代の堆積層）の下に第2～4層の旧堤防跡の盛土が



第254図 第1号溝跡出土遺物(2)

第68表 第1号溝跡出土遺物観察表（第253、254図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	陶器	鉢	(33.0)	[4.6]	—	EIK	5	良好	灰	瀬戸・美濃	85-5
2	陶器	鉢	(34.0)	[8.5]	—	K	10	良好	にぶい赤褐	常滑 K7G K-L8G	83-1
3	陶器	鉢	(22.4)	[5.5]	—	EIK	5	良好	灰褐		85-4
4	陶器	甕	—	[2.2]	14.0	AEI	25	普通	にぶい褐	常滑	
5	青磁	碗	(15.4)	[4.6]	—	IK	5	良好	灰白	内面蓮弁 M9G	85-1
6	陶器	擂鉢	(31.6)	[6.5]	—	HI	5	良好	赤褐	江戸系 18c ~ 19c 常滑 K9G	
7	青磁	碗	(13.8)	[3.7]	—	K	5	良好	灰白	外面鎧蓮弁 P10G	85-2
8	青磁	碗	—	[3.4]	(5.0)	IK	15	良好	灰白	外面鎧蓮弁 O10G	85-3
9	瓦質陶器	片口鉢	(38.0)	[4.4]	—	CEHIJ	破片	普通	黄灰	P11G	
10	陶器	甕	—	[5.2]	—	IK	破片	良好	灰	瀬戸・美濃	
11	瓦	平瓦	長25.6×短23.3cm 厚さ1.9~2.0cm		—	IK	95	普通	灰白		84-11
12	石製品	砥石	長さ 11.7 cm 幅 5.9 cm 厚さ 2.6 cm 重さ 167.6g				泥岩 K-L8G				85-6
13	軽石		長さ 14.6 cm 幅 8.7 cm 厚さ 5.4 cm 重さ 297.7g								
14	軽石		長さ 7.5 cm 幅 8.7 cm 厚さ 3.8 cm 重さ 118.0g								
15	角閃石安山岩礫		長さ 8.2 cm 幅 8.6 cm 厚さ 4.3 cm 重さ 210.5 g								
16	角閃石安山岩礫		長さ 16.3 cm 幅 17.6 cm 厚さ 10.6 cm 重さ 2620.0g								
17	軽石		長さ 5.2 cm 幅 6.6 cm 厚さ 3.3 cm 重さ 43.8g								
18	軽石		長さ 4.2 cm 幅 5.1 cm 厚さ 3.5 cm 重さ 20.0g								
19	軽石		長さ 4.2 cm 幅 5.8 cm 厚さ 1.8 cm 重さ 14.1g								
20	軽石		長さ 4.0 cm 幅 5.0 cm 厚さ 2.3 cm 重さ 23.8g								
21	角閃石安山岩礫		長さ 3.8 cm 幅 3.9 cm 厚さ 2.6 cm 重さ 25.7g								
22	角閃石安山岩礫		長さ 3.2 cm 幅 3.6 cm 厚さ 2.1 cm 重さ 26.0g								
23	角閃石安山岩礫		長さ 3.2 cm 幅 3.9 cm 厚さ 2.3 cm 重さ 16.2g								
24	軽石		長さ 3.0 cm 幅 3.5 cm 厚さ 1.2 cm 重さ 5.3g								
25	軽石		長さ 2.1 cm 幅 2.5 cm 厚さ 1.7 cm 重さ 4.0g								
26	軽石		長さ 2.2 cm 幅 3.1 cm 厚さ 2.1 cm 重さ 8.0g								
27	軽石		長さ 2.2 cm 幅 3.3 cm 厚さ 1.5 cm 重さ 4.6g								
28	鉄滓	鍛冶滓	長さ 5.1 cm 幅 6.1 cm 厚さ 3.3 cm 重さ 135.5g				椀形鍛冶滓				

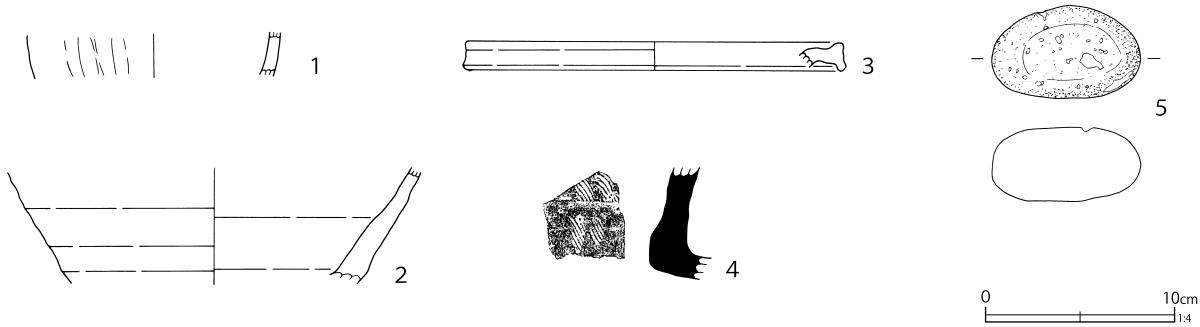
崩落して、本溝跡に流れ込んだことがわかる。また、第7層は本溝の覆土堆積層である第5、6層と第8層に挟まれて堆積していることから、第8層の粘土質の緑黒色土が埋まった後に、盛土の一部が崩れ、第5、6層が埋まり、その後再び第2～4層にあたる盛土が流れ込んだと見られる。第6層の暗緑灰色土には近世の瓦片が伴うことから、築堤の盛土形成時に掘られたもので、盛土の裾を巡る排水溝の可能性が高い。

遺物は第258、259図に示した瀬戸碗、肥前碗、志野皿、瀬戸・美濃香炉、擂鉢、火鉢、在地の軒丸瓦、瓦質陶器焙烙、砥石等が出土した。また、

18は一円黄銅貨、19は黒漆塗の木器椀、20は赤漆塗の木器椀である。時期は18世紀末頃に開削され、最近になって埋まつたものと考えられる。

第22号溝跡（第251、252図）

C区V-17グリッドを東西方向に延びる。調査区の南東端で検出され、第21号溝跡、第482号土壙に壊されている。北西側3mには本溝跡と同じ規模の第23号溝跡が並走しているが、第23号溝跡は掘り込みが深く、本溝跡は浅い。覆土は暗褐色のシルト質粘土で覆われている。断面形は皿形で、規模は幅0.60～0.80m、長さ8.20m、深さ0.09～0.28mである。走行方向はN-30°-Eである。



第255図 第2号溝跡出土遺物

第69表 第2号溝跡出土遺物観察表（第255図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	青磁	碗	—	[1.8]	—	HK	5	良好	灰白		
2	陶器	擂鉢	—	[6.0]	—	DEHIK	10	普通	灰		
3	陶器	甕	(20.2)	[2.0]	—	IK	10	良好	灰	M9G	
4	須恵器	甕	—	[6.1]	—	EHIK	10	良好	灰	K8G	
5	軽石		長さ 4.8 cm 幅 7.9 cm 厚さ 3.9 cm 重さ 71.3g								

第23号溝跡（第251、252、260図）

C区U、V-17グリッドを東西方向に延びる。南北方向に延びる第21、24、27号溝跡と重複している。また、南東側には3mの間隔を置いて第22号溝跡が並走して検出されている。断面形はU字形で、規模は幅0.46~1.10m、長さ8.55m、深さ0.20~0.70mである。走行方向はN-30°-Eである。

遺物は第260図に示したクロム青磁碗、益子呉須絵土瓶が出土した。時期は19世紀後半から20世紀である。

第24号溝跡（第251、252図）

C区のV-15~17グリッドを北西から南東方向に延びる。第21、22号溝跡と重複している。第23号溝跡を壊している。第482号土壤、1~3号畠跡と重複している。北西側は調査区域外に延びている。東側は第21号溝跡に壊されているが、調査区域外に延びていると考えられる。断面形は逆台形で、掘り込みは浅い。規模は幅0.50~1.10m、長さ22.30m、深さ0.15~0.40mである。走行方向はN-89°-Wである。覆土は黄灰色の粘質土で覆われていた。遺物は出土しなかった。

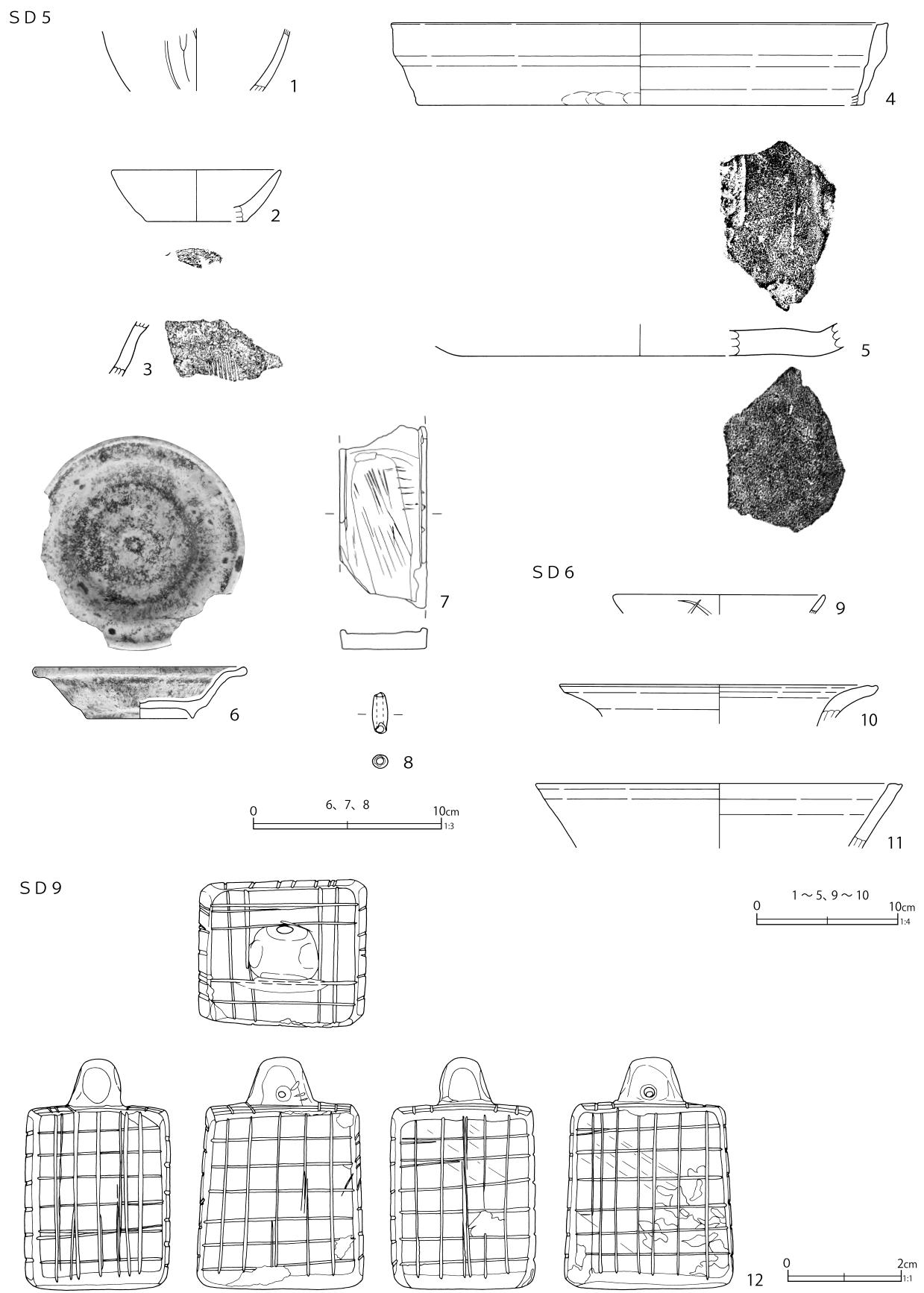
第25号溝跡（第251、252図）

C区U-17グリッドを南北から東西方向に延びる。第27号溝跡に壊されている。検出された溝跡はコーナー部分でほぼ直角に屈曲している。溝跡の両端は東側の調査区域外に延びる。他の溝跡と方向性に隔たりがあり、第22、23、32号溝跡と同様に東西に延びる溝跡として存在したと考えられるが、いずれの断面形状も異なっている。本溝跡の断面形は皿形である。規模は幅0.70~1.20m、長さ4.35m、深さ0.11~0.28mである。走行方向はN-30°-Wである。遺物は出土しなかった。

第26号溝跡（第246、248~250、260図）

C区R-12、S-12、13グリッドを北西から南東方向に延びる。北西側は調査区域外に延び、南東側は途中で途切れている。壁は垂直に掘り込まれ底面も平坦で、断面形は箱形である。規模は幅0.54~0.75m、長さ9.70m、深さ0.28~0.37mである。走行方向はN-56°-Wである。

遺物は第260図に示した肥前くらわんか碗、巴文の小型軒丸瓦が出土した。時期は18世紀後半である。



第256図 第5、6、9号溝跡出土遺物

第70表 第5、6、9号溝跡出土遺物観察表（第256図）

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	SD5	青磁	碗	—	[4.6]	—	I	5	良好	灰白	外面鎬蓮弁	
2	SD5	かわらけ	皿	(11.8)	3.6	(7.0)	CHIK	30	普通	にぶい橙	非ロクロ	
3	SD5	陶器	擂鉢	—	[3.8]	—	HIK	10	普通	黄灰	R12G	
4	SD5	瓦質陶器	焙烙	(35.0)	5.9	(31.6)	CIJ	破片	普通	黄灰	R12G	
5	SD5	瓦質陶器	甕	—	[2.2]	(25.6)	ACEHIK	20	普通	褐	P12G	
6	SD5	陶器	皿	10.9	2.7	5.6	I	90	良好	灰白	灰釉 折縁皿 16c末 底部環状焼台痕	83-2
7	SD5	石製品	硯	縦 [9.6] cm 横 4.6 cm 厚さ 0.9 cm 重さ 67.4g				硯 砥石転用				
8	SD5	土製品	土錘	長さ 2.1 × 長径 0.8 × 孔径 0.35 cm 重さ 0.9g				80	普通	灰白	龍泉窯 外面蓮弁	85-7
9	SD6	青磁	碗	(14.7)	[1.4]	—	IK	5	良好	灰	常滑 C区 SD1R14G	85-9
10	SD6	陶器	壺	(22.4)	[2.9]	—	EHIK	5	良好	灰白	瀬戸 馬骨周辺	85-8
11	SD6	陶器	鉢	(26.0)	[4.6]	—	I	破片	良好	灰褐		
12	SD9	石製品	石錘	長短刃 3.0 × 2.6 cm 器高 4.1 cm 孔径 0.3 cm 重さ 51.6g 残存 100%				棹秤の権				83-5

第27号溝跡（第251、252図）

C区U-16、17グリッドを南北方向に延びる。古墳時代の第2号竪穴状遺構を壊す。第23、25、32号溝跡と重複する。溝跡は北西側で第21号溝跡の手前で途切れる。また、南東側は調査区域外へと続いている。断面形は逆台形である。溝跡に堆積した覆土は、灰色粘土ブロックを多量に含む。規模は幅0.90~1.20m、長さ14.70m、深さ0.40~0.70mである。走行方向はN-72°-Wである。

第28号溝跡（第249、250図）

C区T-15、U-15、16グリッドを南北方向に延びる。断面形はU字形で、規模は幅0.40~0.62m、長さ4.90m、深さ0.28~0.30mである。走行方向はN-71°-Wである。

第29号溝跡（第251、252図）

C区U-16グリッドを南北方向に延びる。第2号竪穴状遺構を壊す。断面形は皿形で、規模は幅0.56~0.70m、長さ4.40m、深さ0.19~0.22mである。走行方向はN-70°-Wである。

第30号溝跡（第249、250図）

C区T-14、15グリッドを南北方向に延びる。第97、483号土壙、8号畝と重複している。断面形はU字形で、規模は幅0.32~0.50m、長さ9.10m、深さ0.10~0.29mである。走行方向はN-64°-Wである。

第31号溝跡（第249、250図）

C区T-13、14グリッドを西から南方向に弧を描いて延びる。31号畝と重複している。断面形は皿形で、規模は幅0.50~0.60m、長さ8.00m、深さ0.16~0.20mである。走行方向はN-74°-WからN-20°-Wである。

第32号溝跡（第251、252図）

C区U-16グリッドを東西方向に延びる。第21、27号溝跡と重複している。断面形はU字形で、規模は幅0.50~0.70m、長さ3.80m、深さ0.16~0.27mである。走行方向はN-15°-Eである。

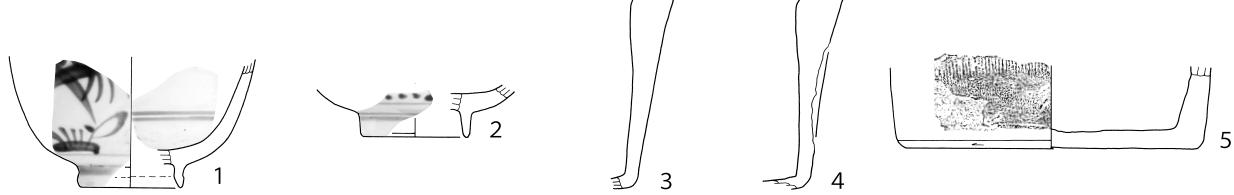
第33号溝跡（第238~242図）

A区H~J-7、I~L-8グリッドを南北方向に延びる。第1、13号溝跡、第20号井戸跡を壊している。断面形はU字形で、規模は幅0.70~1.30m、長さ43.8m、深さ0.28~0.45mである。走行方向はN-13°-Eである。

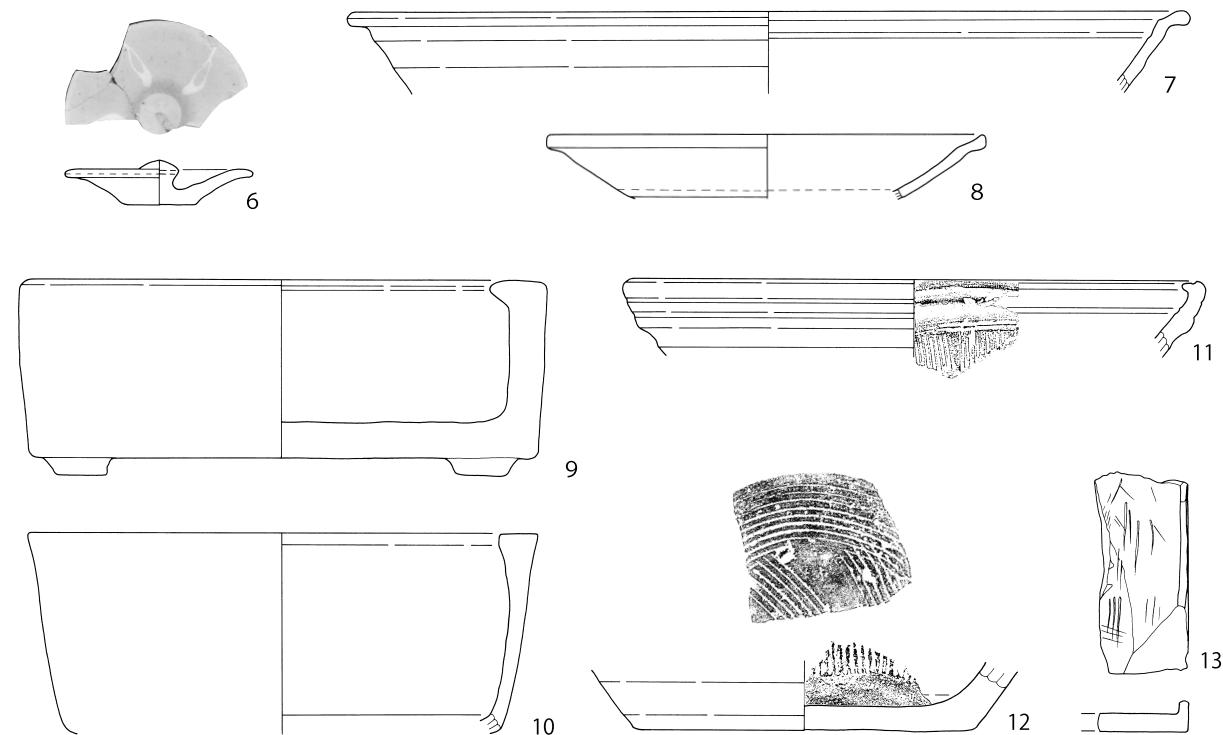
第34号溝跡（第238、239、260図）

A区H~J-6、I-7グリッドを東西方向に延びる。北側に第35号溝跡が検出されている。南西側は調査区域外に延びる。北側は調査区中央付近で途切れている。断面形はU字形で、規模は幅0.90~1.85m、長さ14.50m、深さ0.45~0.70mである。走行方向はN-48°-Eである。遺物は、第260図に示した瀬戸・美濃産の鉢が出土した。

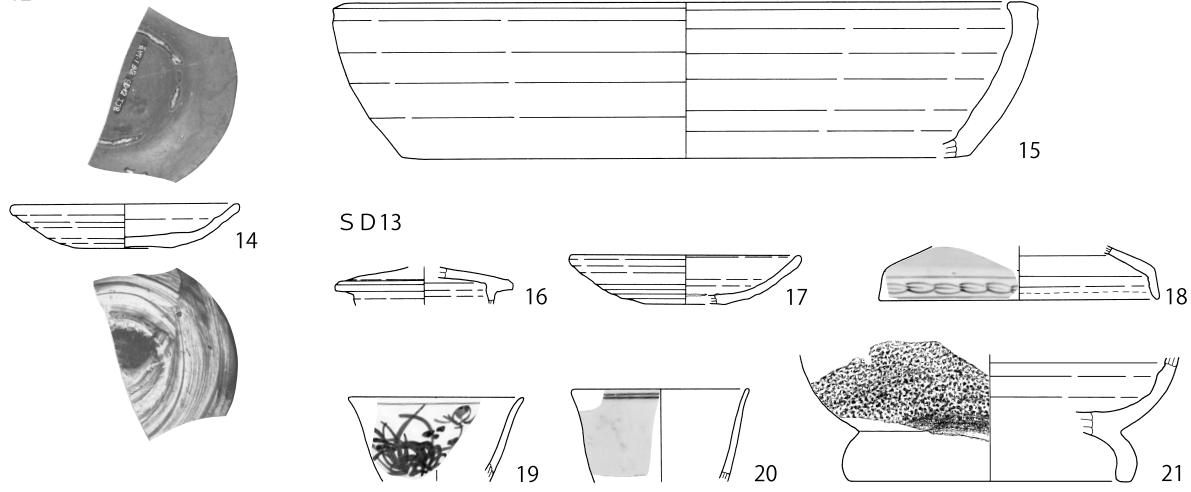
SD10



SD11



SD12



1, 2, 6, 13, 14, 16~20 0 10cm 3~5, 7~12, 15, 21 0 10cm
1.3 1.4

第257図 第10～13号溝跡出土遺物

第71表 第10～13号溝跡出土遺物観察表（第257図）

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	SD10	磁器	碗	—	[5.1]	(4.0)	G	20	良好	灰白	瀬戸・美濃 19c 前半～中頃 内外面染付	85-11
2	SD10	陶器	塊	—	[2.1]	(4.0)	K	20	良好	灰白	瀬戸・美濃 19c 前半～中頃 外面染付 J8G	85-10
3	SD10	瓦質陶器	火鉢	—	10.2	—	ACEIJ	破片	普通	褐灰	J6G	
4	SD10	瓦質陶器	火鉢	—	[10.3]	—	ACEHIJK	10	普通	にぶい黄橙	K8G	
5	SD10	瓦質陶器	火鉢	—	[4.3]	(15.3)	CEHIK	40	不良	褐灰	J8G	
6	SD11	陶器	蓋	(7.4)	1.8	(3.0)	IK	50	良好	灰白	信楽 土瓶蓋 19c 前半	85-13
7	SD11	陶器	鉢	(44.0)	[4.3]	—	H	5	普通	淡黄	瀬戸・美濃 笠原鉢 17c L9G	85-14
8	SD11	陶器	鉢	(22.9)	[3.4]	—	IK	10	良好	灰	折縁鉢 17c 後半	85-15
9	SD11	瓦質陶器	火鉢	27.0	10.3	24.0	EHIK	90	普通	灰	K9G	83-3
10	SD11	瓦質陶器	火鉢	(27.0)	[10.5]	(23.0)	ACEHI	25	普通	褐灰	K9G	
11	SD11	陶器	擂鉢	(30.0)	[4.1]	—	EIK	5	良好	赤褐	常滑 L9G	85-17
12	SD11	陶器	擂鉢	—	[3.6]	(18.0)	EHIK	20	普通	赤	常滑	83-4
13	SD11	石製品	硯	縦 7.9 cm 横 [3.7] cm 厚さ 0.7 cm 重さ 49.9g						K9G		85-16
14	SD12	陶器	皿	(9.0)	1.7	(3.6)	AB	35	普通	灰黄	瀬戸・美濃 18c 末～19c 前半 鉄釉 I・J8G	85-12
15	SD12	瓦質陶器	火鉢	(36.0)	[8.2]	(30.0)	ACHIK	5	普通	灰	信楽 土瓶蓋 19c 前半 外面施釉 I8G	
16	SD13	陶器	蓋	—	[1.4]	—	AG	20	良好	灰白	瀬戸・美濃 18c 末～19c 前半 鉄釉 I8G	85-18
17	SD13	陶器	皿	(9.0)	[1.9]	(3.2)	EI	15	良好	灰白	瀬戸・美濃 18c 末～19c 前半 鉄釉 I8G	85-20
18	SD13	陶器	蓋	(11.0)	[2.1]	—	BG	15	普通	灰白	肥前 19c 前半 J8G	85-19
19	SD13	陶器	塊	(6.8)	[3.3]	—	B	25	普通	明青灰	瀬戸 19c 前半～中頃 反端小型塊 I-J8G	85-21
20	SD13	磁器	碗	(7.0)	[3.7]	—	K	20	良好	灰白	瀬戸・美濃 19c 中頃 反端小型碗 I8G	85-22
21	SD13	瓦質陶器	火鉢	—	[6.6]	(15.0)	IK	50	普通	青黒	養蚕火鉢 19c 中頃 I-J8G J9G	

第35号溝跡（第238、239図）

A区G-6、7、H-5、6グリッドを東西方向に延びる。北側に第36号溝跡が並走する。第29号住居跡のカマドの一部を壊している。断面形は皿形で、規模は幅0.40～0.70m、長さ17.8m、深さ0.08～0.17mである。走行方向はN-46°-Eである。

第36号溝跡（第238、239図）

A区G-6グリッドを東西方向に延びる。南側2.5mに第35号溝跡が、更に12m離れて第34号溝跡が並走する。断面形はU字形で、規模は幅0.62～0.96m、長さ8.20m、深さ0.20～0.23mである。走行方向はN-50°-Eである。

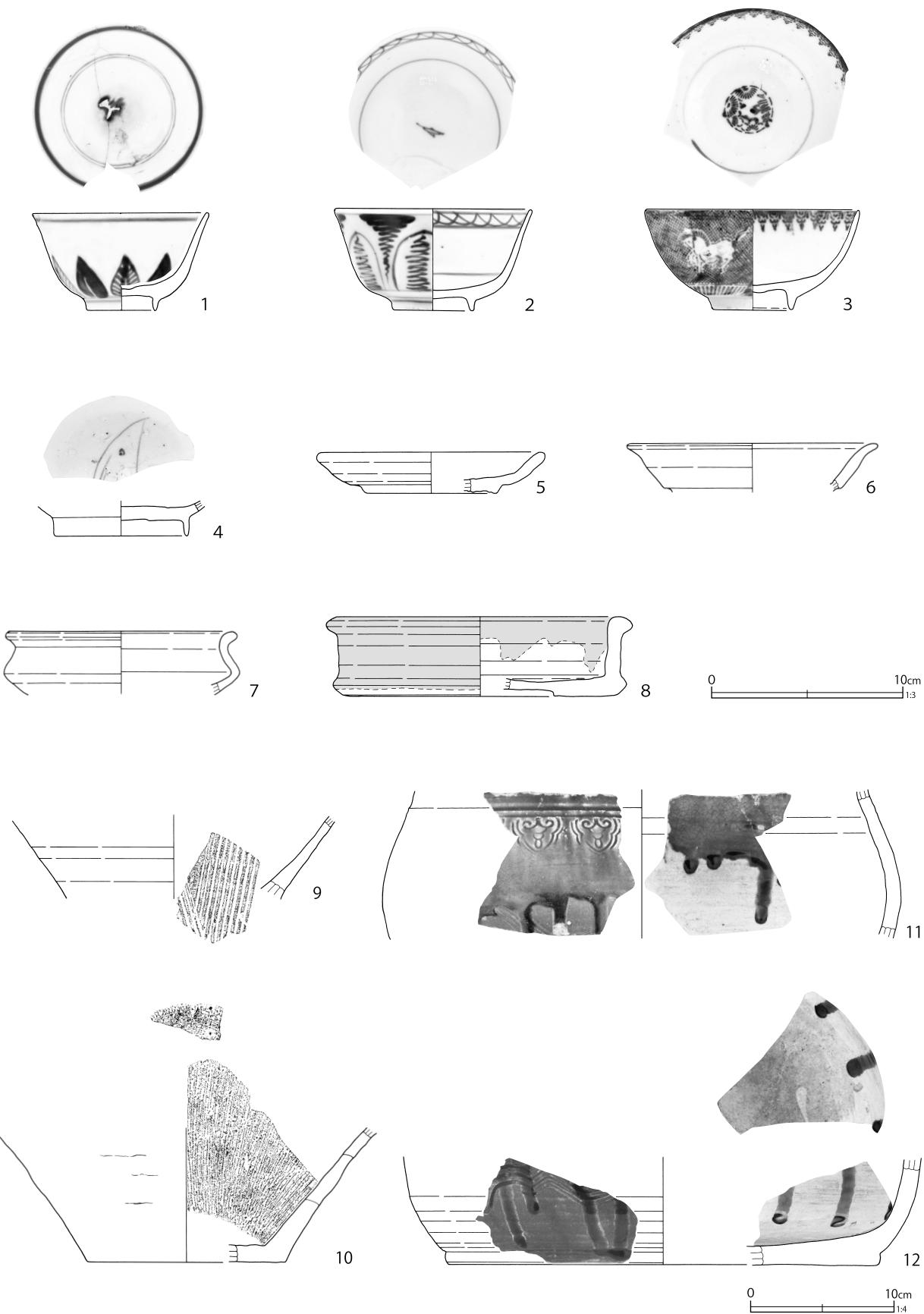
第37号溝跡（第243、245図）

B区M-10グリッドを東西方向に延びる。第2、

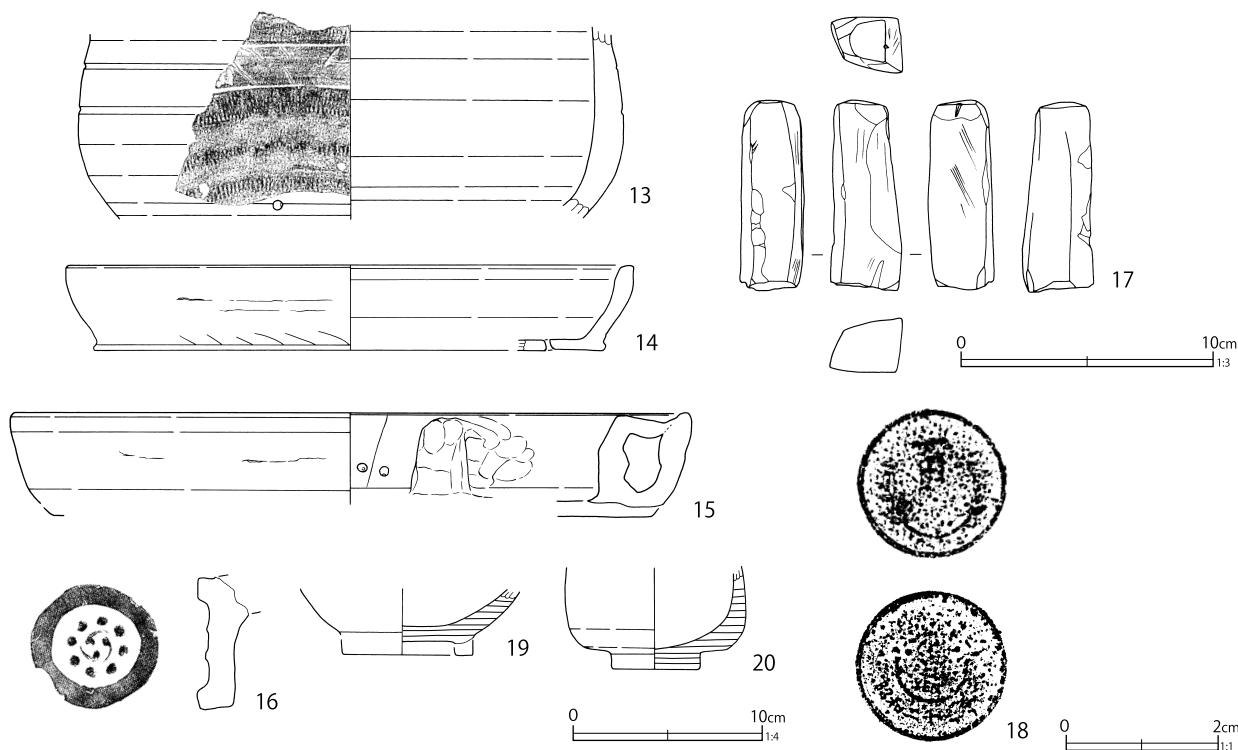
3号溝跡に挟まれた位置で両溝と直交方向に重複しているが規模は小さい。本溝跡の南側には、性格不明遺構が重なり合うように検出されている。断面形は皿形で、掘り込みはやや深い。規模は幅0.36～0.60m、長さ7.65m、深さ0.70～0.21mである。走行方向はN-55°-Eである。

第38号溝跡（第243、245図）

B区N-10グリッドを東西方向に延びる。第1、2号溝跡に挟まれた位置で、第1号溝跡、第17号土壙と直交方向で重複しているが、両溝より規模は小さい。断面形は皿形で、掘り込みは非常に浅い。規模は幅0.23～0.45m、長さ7.60m、深さ0.04～0.10mである。走行方向はN-50°-Eである。



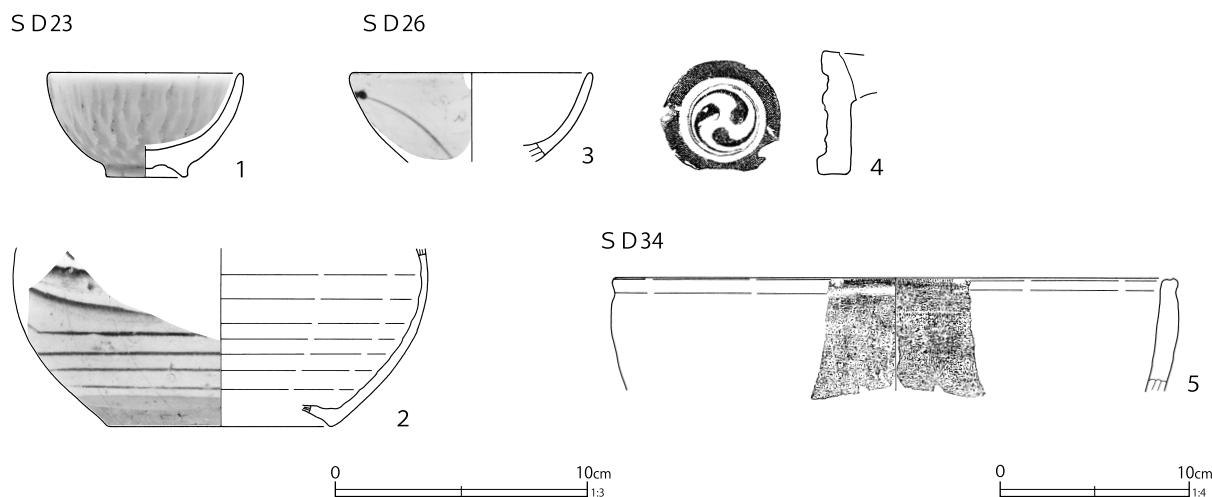
第258図 第21号溝跡出土遺物(1)



第259図 第21号溝跡出土遺物(2)

第72表 第21号溝跡出土遺物観察表(第258、259図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	磁器	碗	9.0	5.0	3.5	K	95	良好	灰白	瀬戸 19c 前半 U15G	83-8
2	磁器	碗	(10.0)	[5.2]	4.0	K	30	良好	灰白	瀬戸 蓮弁文	83-9
3	磁器	碗	(11.0)	5.2	4.0	I	70	良好	灰白	瀬戸 19c 中頃	83-10
4	磁器	碗	—	[1.8]	(6.8)	K	50	良好	灰白	肥前 18c 末 見込みにトチン痕 蛇の目四高台 V15G	86-1
5	陶器	皿	(11.4)	2.1	(6.8)	IK	40	良好	灰白	志野 17c 前半	86-2
6	陶器	皿	(12.6)	[2.5]	—	IK	15	普通	褐灰	瀬戸・美濃 17c 前半	86-5
7	陶器	香炉	(11.6)	[3.3]	—	BG	10	良好	灰白	瀬戸・美濃 17c 内外面全面施釉 U15G	86-6
8	陶器	香炉	(14.8)	4.1	(14.2)	BG	25	良好	灰白	瀬戸・美濃 18c 前半 内面煤付着	83-11
9	陶器	擂鉢	—	[5.8]	—	IK	5	普通	灰黄	瀬戸・美濃 U15G	
10	陶器	擂鉢	—	[9.4]	(14.0)	EIK	20	普通	黄灰	信楽 17c	83-12
11	陶器	火鉢	—	[10.3]	—	IK	10	良好	灰白	T14G	83-13
12	陶器	鉢	—	[7.5]	(30.0)	I	10	普通	灰白	内外面施釉	
13	陶器	火鉢	—	[9.9]	—	AI	10	普通	暗灰	18c ~ 19c	83-14
14	瓦質陶器	焙烙	(29.6)	4.5	(26.8)	CI	10	普通	褐灰	底部補修孔あり U15G	
15	瓦質陶器	焙烙	(36.0)	[4.8]	—	EHIK	20	普通	黒褐	体部補修孔あり V15G	83-15
16	瓦	軒丸瓦	径 7.0 × 厚さ 1.9 cm		CIK	80	普通	灰			
17	石製品	砥石	長さ 7.5 cm 幅 2.8 cm 厚さ 2.1 cm 重さ 75.5g							86-4	
18	銭貨		径 2.0 cm 厚さ 0.14 cm 重さ 2.8g						一円黄銅貨(昭和二十五年)		
19	木製品	椀	—	[2.9]	—	—	75	—	黒	内外面黒漆	88-2
20	木製品	椀	—	[9.2]	4.6	—	60	—	赤	内外面赤漆	88-3



第260図 第23、26、34号溝跡出土遺物

第73表 第23、26、34号溝跡出土遺物観察表（第260図）

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	SD23	磁器	碗	7.6	4.1	3.3	IK	90	良好	灰白	クロム青磁 20c U17G	83-6
2	SD23	磁器	土瓶	—	[7.0]	(9.0)	HIK	30	良好	黄灰	吳須絵土瓶(益子) 19c 前半 ～中頃 V17G	83-7
3	SD26	磁器	碗	(9.4)	[3.5]	—	K	15	良好	灰白	肥前 くらわんか手 18c 後半	86-3
4	SD26	瓦	軒丸瓦	径 6.5 × 厚さ 1.7 cm			HIK	80	普通	灰	巴文 R-S-12-13G	86-7
5	SD34	陶器	鉢	(29.5)	[6.0]	—	EHIK	5	良好	灰	瀬戸・美濃	

第39号溝跡（第243、245図）

B区O-10、11グリッドを東西方向に延びる。第1、2号溝跡に挟まれた位置で重複している。第5号不明遺構を壊している。断面形は逆台形で、掘り込みは浅い。規模は幅0.22～0.36m、長さ4.70m、深さ0.03～0.09mである。走行方向はN-55°-Eである。

第40号溝跡（第249～251図）

C区U-14、15グリッドを南北方向に延びる。北西側は調査区域外に延び、南東側は第78号土壙と重複し、途切れている。断面形は皿形で、掘り込みは浅い。規模は幅0.34～1.10m、長さ9.80m、深さ0.04～0.12mである。走行方向はN-60°-Wである。

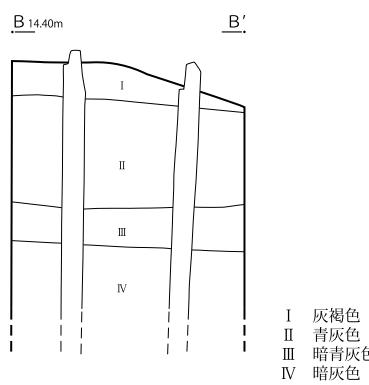
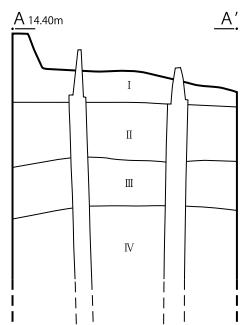
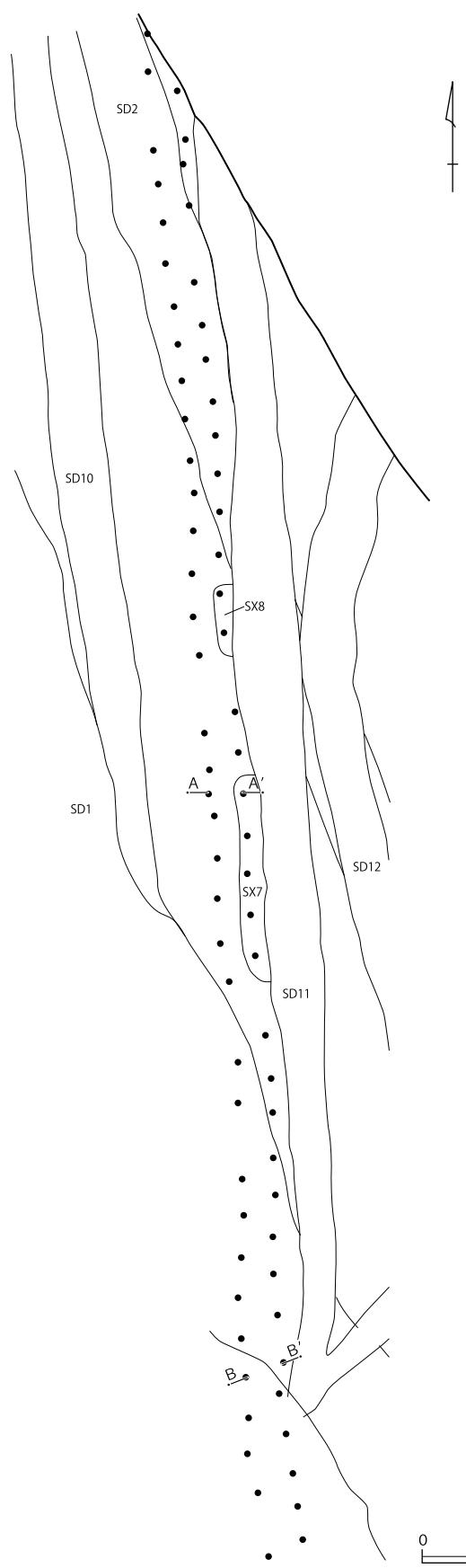
（3）杭列

第1号杭列（第261図）

B区I～M-8、9グリッドを南北方向に延びる。第10、11号溝跡に挟まれ、平行に延びている。北側及び南側は調査区域外に延びている。杭は、二列に第11号溝跡の西側縁を並走して打設されており、第11号溝跡とはほとんど一体化している。規模は長さ28.70m、杭二列の間隔は0.58m、杭間の距離は1.8mである。走行方向はN-11°-Wである。

杭は、青灰色系粘土の深さまで打ち込まれている。杭の残存する長さは約2m程度であった。

遺物は出土していないが、第10、11号溝跡より後の構築であると考えられ、築堤や洪水時の修復に伴う盛土の土留め杭と考えられる。



I	灰褐色
II	青灰色
III	暗青灰色
IV	暗灰色

第261図 第1号杭列

(4) 井戸跡

近世の井戸跡は、12基検出された。検出された範囲は調査区の中央付近で、地山のローム土が高まりを持つ位置である。出土遺物から、時期は18世紀から19世紀にかけての所産と考えられる。

第2号井戸跡（第262図）

B区K-8グリッドに位置する。第6号住居跡を壊している。井戸跡縁辺には木杭の柵列が井戸を壊して打ち込まれていた。平面形態は円形で、掘り方は上半が広く掘られているが、下半は狭く掘り込んでいた。規模は上径1.05×0.98m、下径0.28×0.20m、深さ1.02mである。

第3号井戸跡（第262、264図）

A区J、K-7グリッドに位置する。西側は攪乱を受けている。残存したのは東側半分である。平面形態は円形と推定される。規模は上径2.07×1.99m、下径1.16×1.10m、深さは1.80mまでの掘削に留めた。断面観察では、覆土中に地山壁の崩落土が堆積していた。本来は小型と考えられる。遺物は第264図に示した青磁碗、陶器片口鉢、瀬戸・美濃甕が出土した。

第4号井戸跡（第262、264図）

A区K-6、7グリッドに位置する。東側は攪乱を受けている。残存したのは西側半分である。平面形態は円形と推定される。規模は上径2.35×2.30m、下径1.56×1.35m、深さは1.70mの掘削に留めた。断面観察では、覆土中に地山壁の崩落土が堆積していた。本来は小型と考えられる。遺物は第264図に示した砥石に転用された常滑鉢、陶器鉢、曲物の底板等が出土した。

第5号井戸跡（第262図）

A区K-7グリッドに位置する。北側は攪乱を受けている。残存したのは南側半分である。平面形態は円形と推定される。規模は上径1.50×1.46m、下径0.33×0.32m、深さ1.38mである。

第6号井戸跡（第262図）

A区J-6グリッドに位置する。平面形態は円

形で、断面形は円筒形の素掘りである。規模は上径1.23×1.15m、下径0.96×0.64m、深さ2.30mである。遺物は陶器破片が出土した。

第8号井戸跡（第263図）

A区L、M-8グリッドに位置する。平面形態は円形で、断面形は円筒形である。規模は上径1.23×1.15m、下径1.05×0.98m、深さは湧水が著しいため1.13mまでの掘削に留めた。

第9号井戸跡（第263、264図）

C区R、S-13グリッドに位置する。平面形態は円形で、断面形は円筒形の素掘りである。規模は上径0.93×0.88m、下径0.39×0.32m、深さ1.62mである。遺物は第264図9、10に示した在地産の焙烙が出土した。

第10号井戸跡（第263、265図）

C区R-12グリッドに位置する。平面形態は円形で、断面形は漏斗状である。規模は上径1.82×1.62m、下径0.34×0.25m、深さ1.88mである。遺物は第265図に示した瀬戸・美濃碗、志野皿、在地産の焙烙、擂鉢等が出土した。

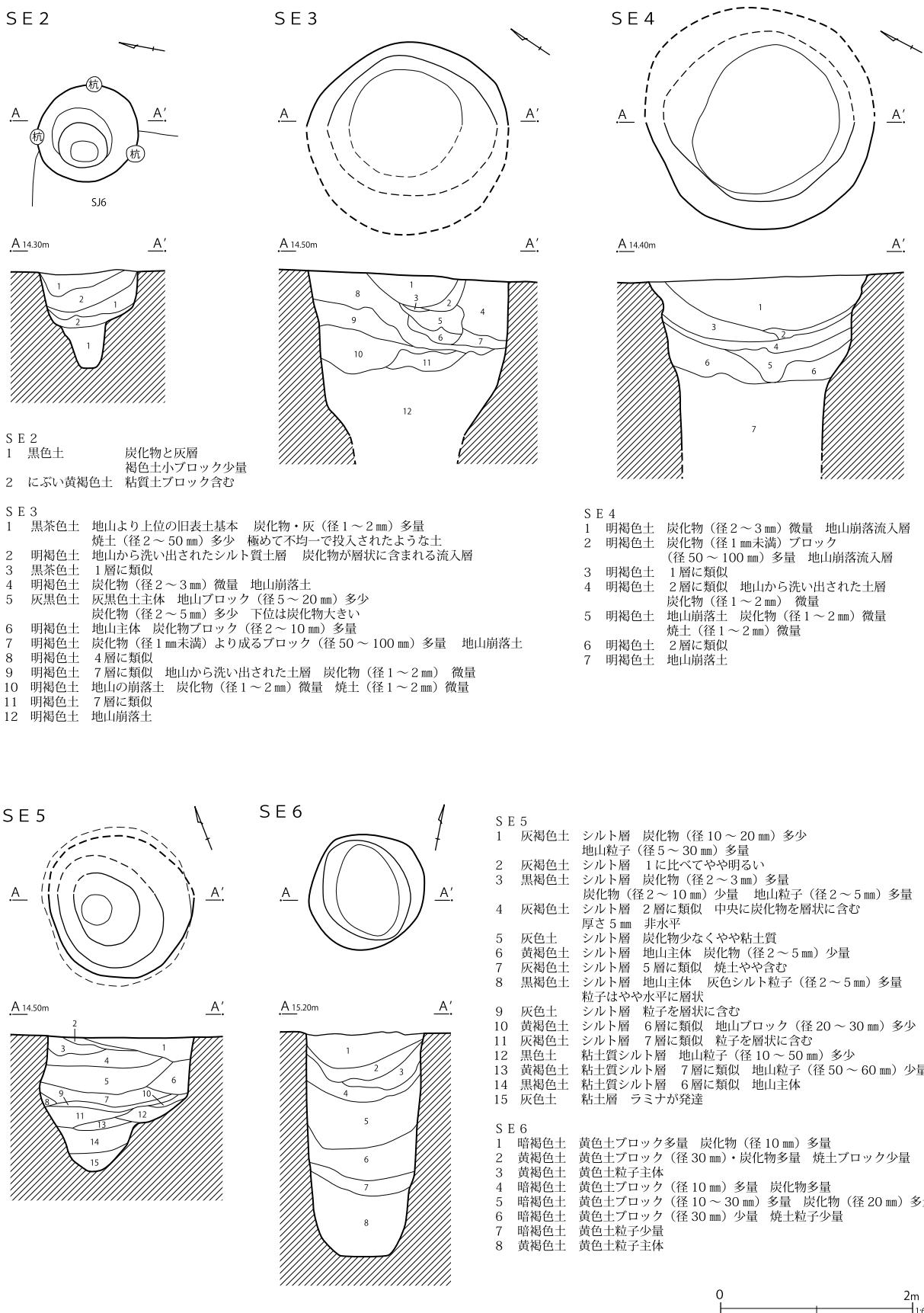
第11号井戸跡（第263図）

C区R-12グリッドに位置する。平面形態は円形で、断面形は円筒形である。規模は上径1.00×0.83m、検出された範囲で下径0.61×0.59m、深さは湧水のため1.22mまでの掘削に留めた。遺物は陶器皿、碗等が出土した。

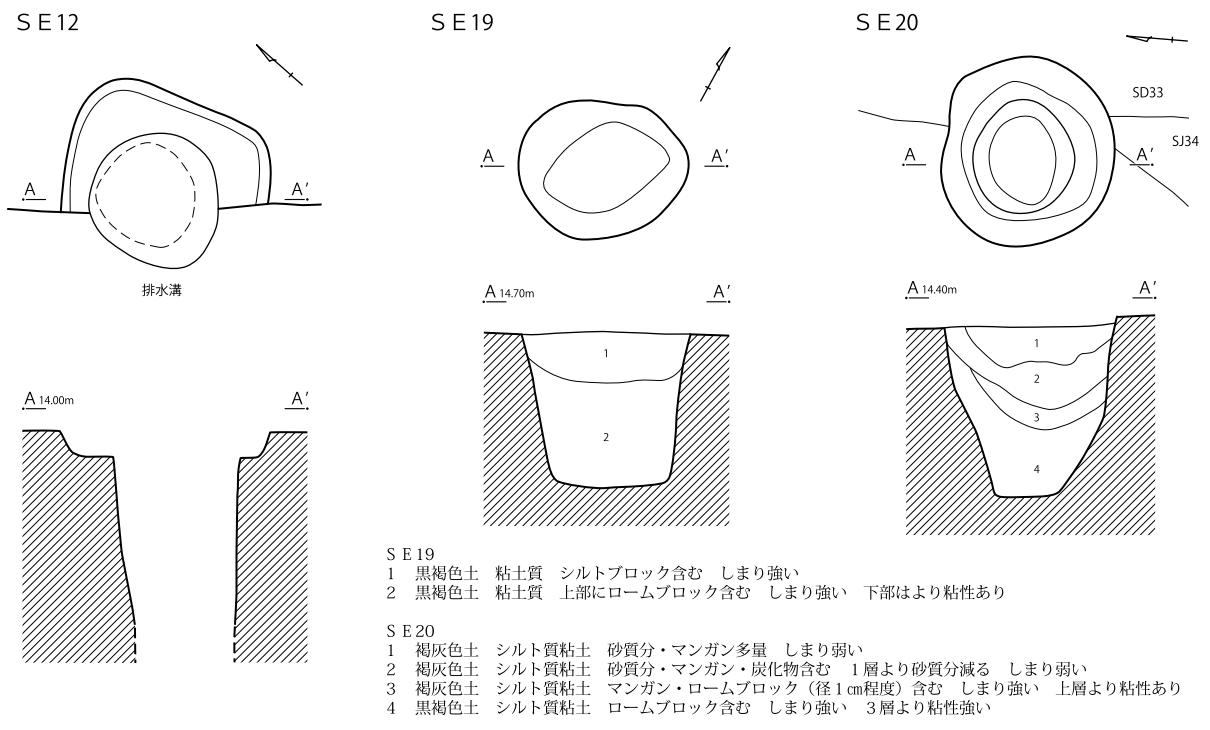
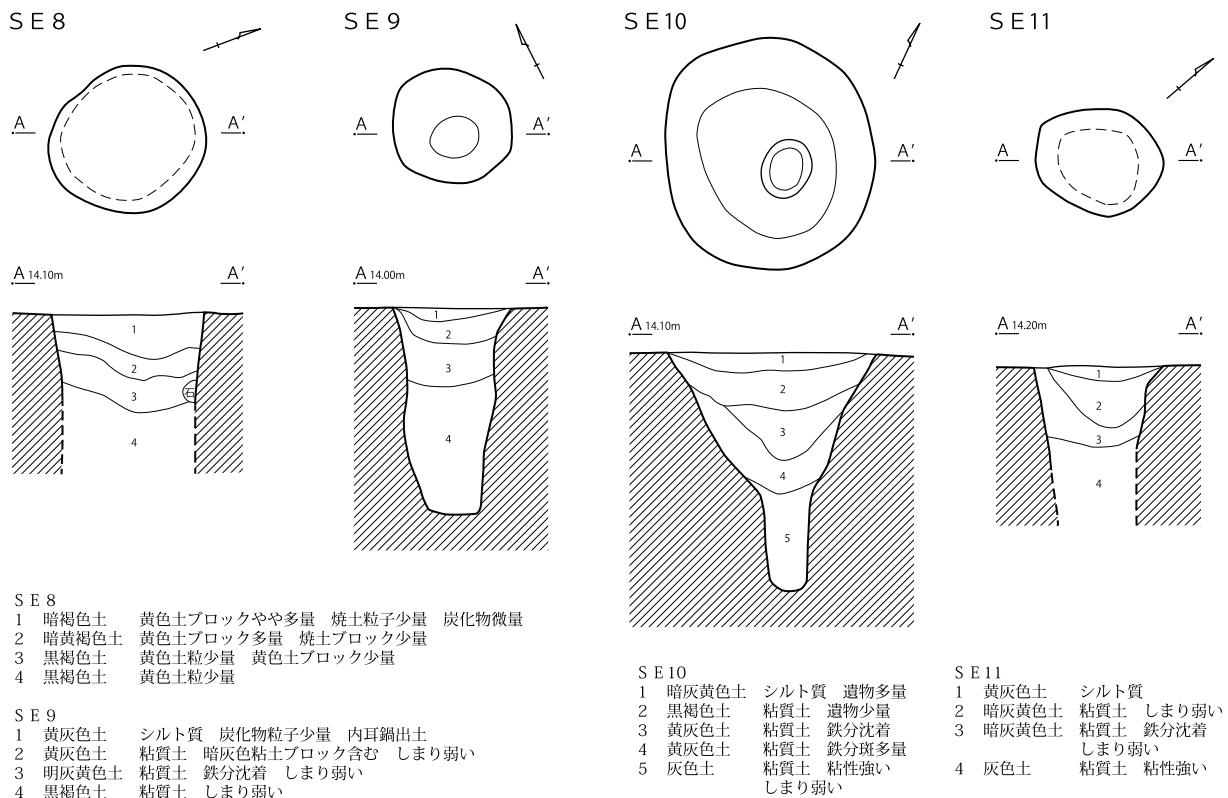
第12号井戸跡（第263、265図）

C区V-15グリッドに位置する。西側は調査区域外に延びる。平面形態は円形で、断面形は円筒形である。井戸跡の上面には方形の掘り込みがある。規模は、検出された範囲で上径1.62×1.44m、下径0.82×0.73m、深さは湧水のため1.48mまでの掘削に留めた。

遺物は第265図に示した肥前半筒碗・広東碗、信楽灰釉碗・灯明皿、瀬戸・美濃ケズリ出し高台皿等が出土した。



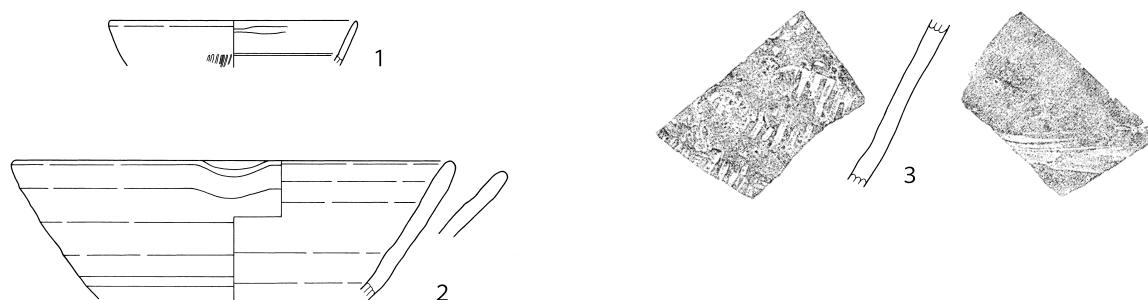
第262図 井戸跡(1)



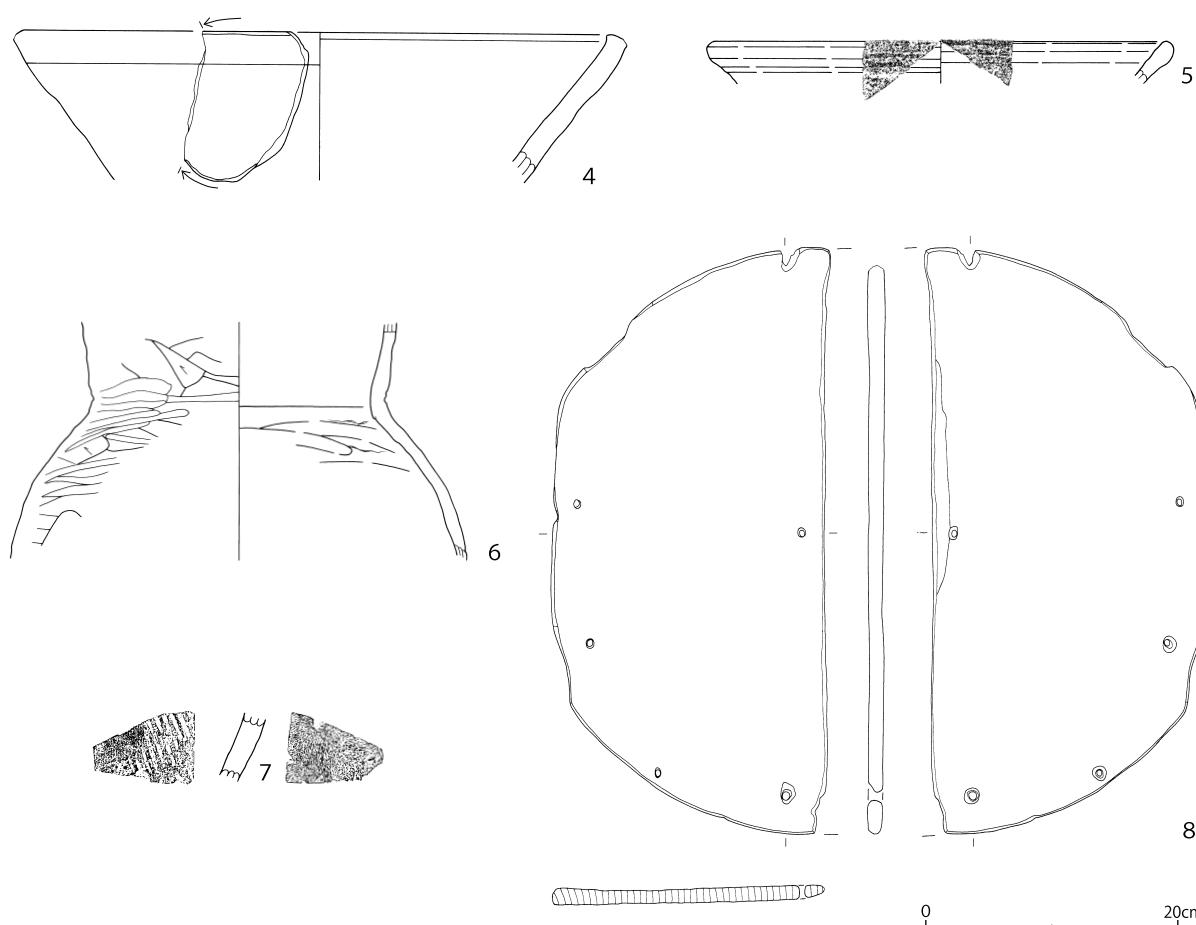
0 2m 1:60

第263図 井戸跡(2)

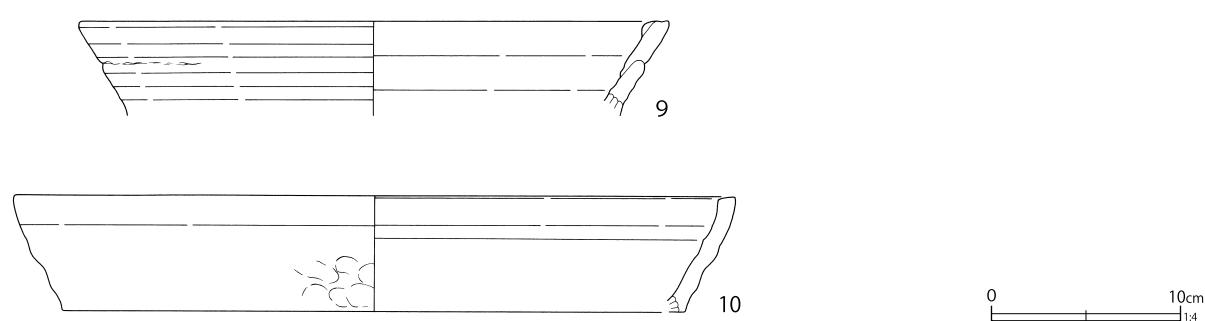
SE 3



SE 4

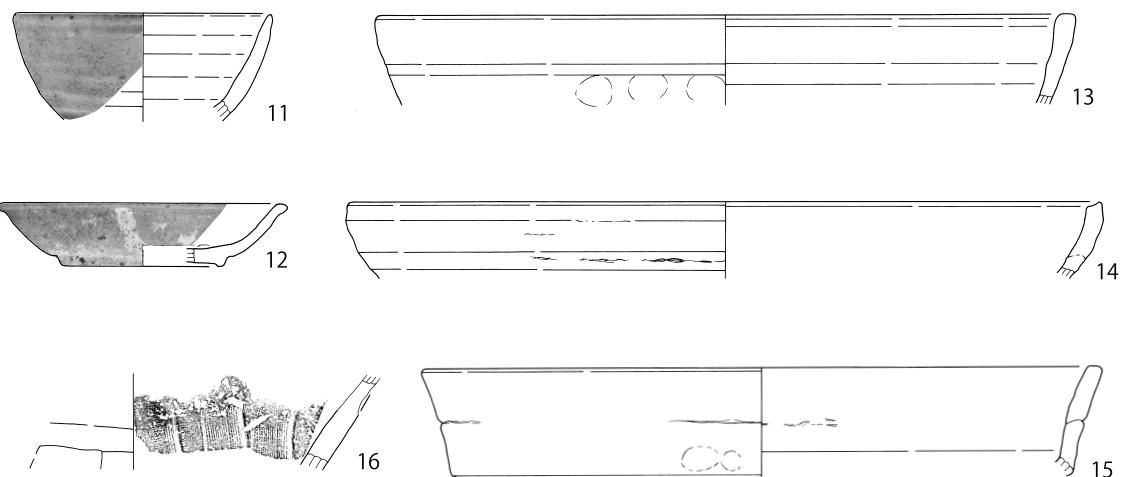


SE 9

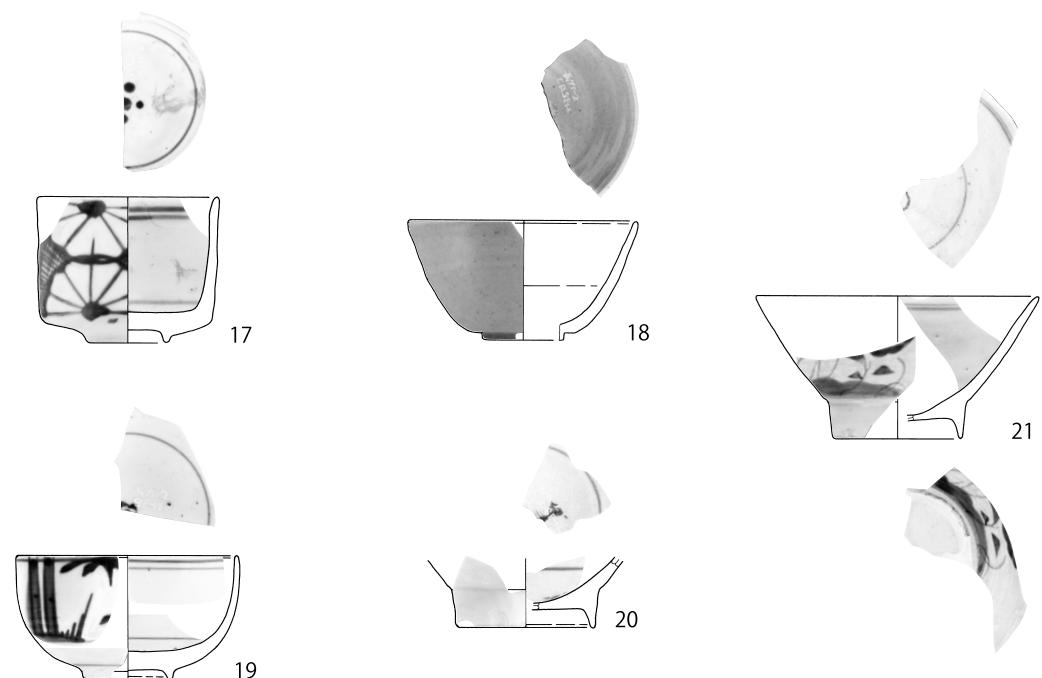


第264図 井戸跡出土遺物(1)

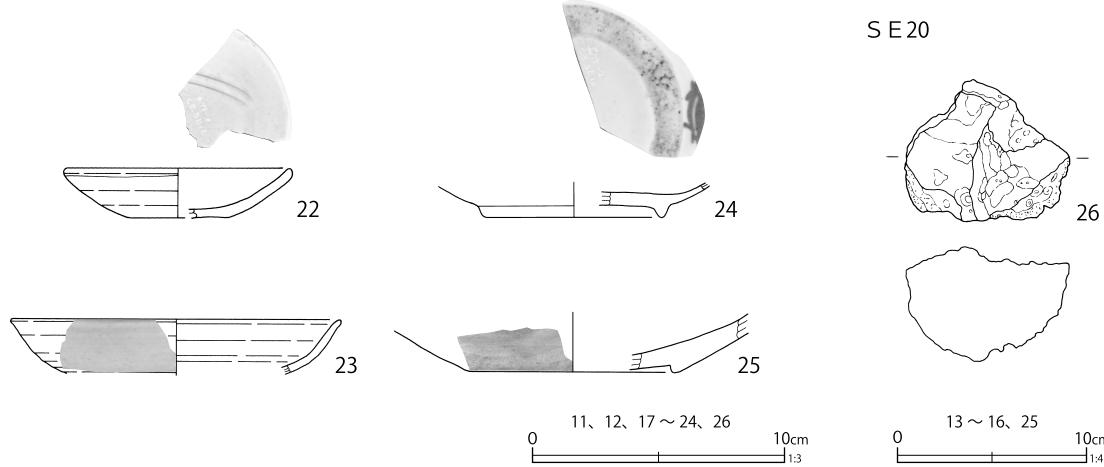
SE 10



SE 12



SE 20



第265図 井戸跡出土遺物(2)

第74表 井戸跡出土遺物観察表（第264、265図）

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	SE3	青磁	碗	(13.0)	[2.4]	—	I	5	良好	灰白	内外面施釉	82-11
2	SE3	陶器	片口鉢	(23.0)	[7.4]	—	EIJK	15	普通	褐灰	瀬戸・美濃	
3	SE3	陶器	甕	—	[9.0]	—	EHIK	5	良好	黄灰	瀬戸・美濃 中世	
4	SE4	陶器	鉢	(31.2)	[7.9]	—	CEI	5	普通	褐	常滑 砥石転用使用痕	
5	SE4	陶器	鉢	(24.0)	[2.2]	—	EIK	5	良好	灰	常滑 中世	
6	SE4	土師器	壺	—	[12.6]	—	AHIK	15	普通	橙		
7	SE4	陶器	甕	—	[3.8]	—	EHIK	5	良好	黄灰	常滑 中世	
8	SE4	木製品	底板	直径 46.6 cm 幅 (21.7 cm) 厚さ 1.4 cm						柾目	88-1	
9	SE9	瓦質陶器	焙烙	(31.0)	[5.0]	—	AI	5	普通	灰褐	在地	86-8
10	SE9	瓦質陶器	焙烙	(38.0)	6.1	(32.8)	ABCHI	5	普通	褐灰	在地	
11	SE10	陶器	塊	(10.0)	[4.3]	—	IK	30	良好	灰白	瀬戸・美濃 17c 前半	
12	SE10	陶器	皿	(11.0)	[2.5]	(6.4)	EI	25	良好	灰白	志野 17c 前半 内面重ね焼き高台跡	
13	SE10	瓦質陶器	焙烙	(36.6)	[4.7]	—	ACDHIK	5	普通	灰褐	在地	
14	SE10	瓦質陶器	焙烙	(40.0)	[4.0]	—	CEHIK	10	普通	黒褐	在地	
15	SE10	瓦質陶器	焙烙	(35.4)	[5.8]	—	ACHK	5	普通	にぶい黄 橙	在地	
16	SE10	瓦質陶器	擂鉢	—	[4.8]	—	ACHIHK	15	普通	褐灰	在地	
17	SE12	磁器	碗	(7.2)	5.7	(3.2)	BG	35	普通	灰白	肥前 半筒碗 18c 末～19c 前 葉	82-15
18	SE12	陶器	塊	(9.0)	[4.7]	(3.2)	K	20	良好	灰白	信楽 19c 前半 灰釉	86-10
19	SE12	磁器	碗	(8.6)	4.8	(3.4)	K	20	良好	灰白	肥前 丸碗 18c 末～19c 前半	86-11
20	SE12	磁器	碗	—	[2.8]	(5.4)	BG	20	良好	灰白	肥前 広東碗 19c 前半	86-12
21	SE12	磁器	碗	(11.2)	5.6	(5.0)	K	15	良好	灰白	肥前 広東碗 19c 前半	86-13
22	SE12	陶器	皿	(8.8)	[2.0]	(4.0)	HI	20	普通	灰白	信楽 灯明皿 19c 前半 内面施 釉 貫入	86-14
23	SE12	白磁	皿	(13.0)	[2.1]	—	K	5	良好	灰白	中国製か	86-15
24	SE12	陶器	皿	—	[1.4]	(7.0)	K	30	良好	灰白	肥前 18c 前半 内面重ね焼き 高台跡	86-16
25	SE12	陶器	皿	—	[3.1]	(11.1)	EHIK	10	良好	灰白	瀬戸・美濃 18c 前半 ケズリ 出し高台	
26	SE20	鉄滓	鍛冶滓	長さ 5.7 cm 幅 6.5 cm 厚さ 4.5 cm 重さ 177.2g						椀形鍛冶滓		

第19号井戸跡（第263図）

A区D-4グリッドに位置する。平面形は橢円、断面形は円筒である。規模は上径1.33×1.10m、下径0.85×0.61m、深さ1.23mである。

第20号井戸跡（第263、265図）

A区K-8グリッドに位置する。第33号溝跡に壊されている。平面形態は円形で、断面形は円垂形で下半が狭くなる。規模は上径1.50×1.33m、下径0.70×0.53m、深さ1.34mである。遺物は、第265図に示した椀形鍛冶滓が出土した。

(5) 性格不明遺構

性格不明遺構は7基検出された。

第1号性格不明遺構（第266、268図）

B区N、O-10、11グリッドに位置する。平面形態は不整円形である。規模は長軸長5.82m、短軸長5.44m、深さ0.12～0.62mである。長軸方位はN-82°-Wである。遺物は鉄製釘が出土した。

第2号性格不明遺構（第267図）

B区N-10グリッドに位置する。第3号性格不明遺構によって壊されている。平面形態は不整形

である。規模は確認した範囲で長軸長4.94m、短軸長4.38m、深さ0.06~0.18mである。長軸方位はN-28°-Wである。遺物は出土しなかった。

第3号性格不明遺構（第267、268図）

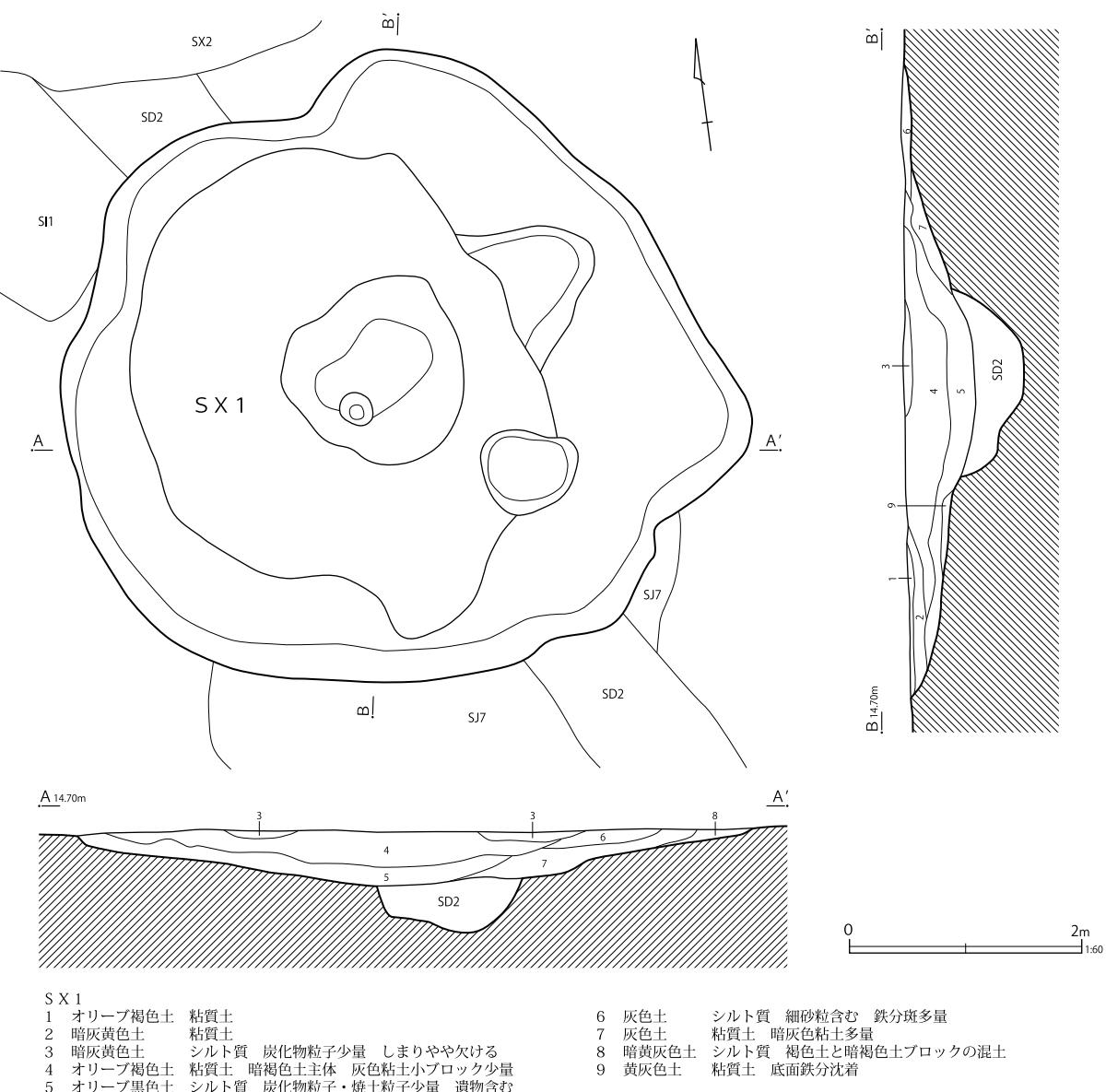
B区M、N-10グリッドに位置する。第2号性格不明遺構を壊している。平面形態は不整楕円形である。規模は長軸長6.25m、短軸長4.08m、深さ0.18~0.27mである。長軸方位はN-1°-Eである。遺物は覆土中から鉄製釘が出土した。

第5号性格不明遺構（第269図）

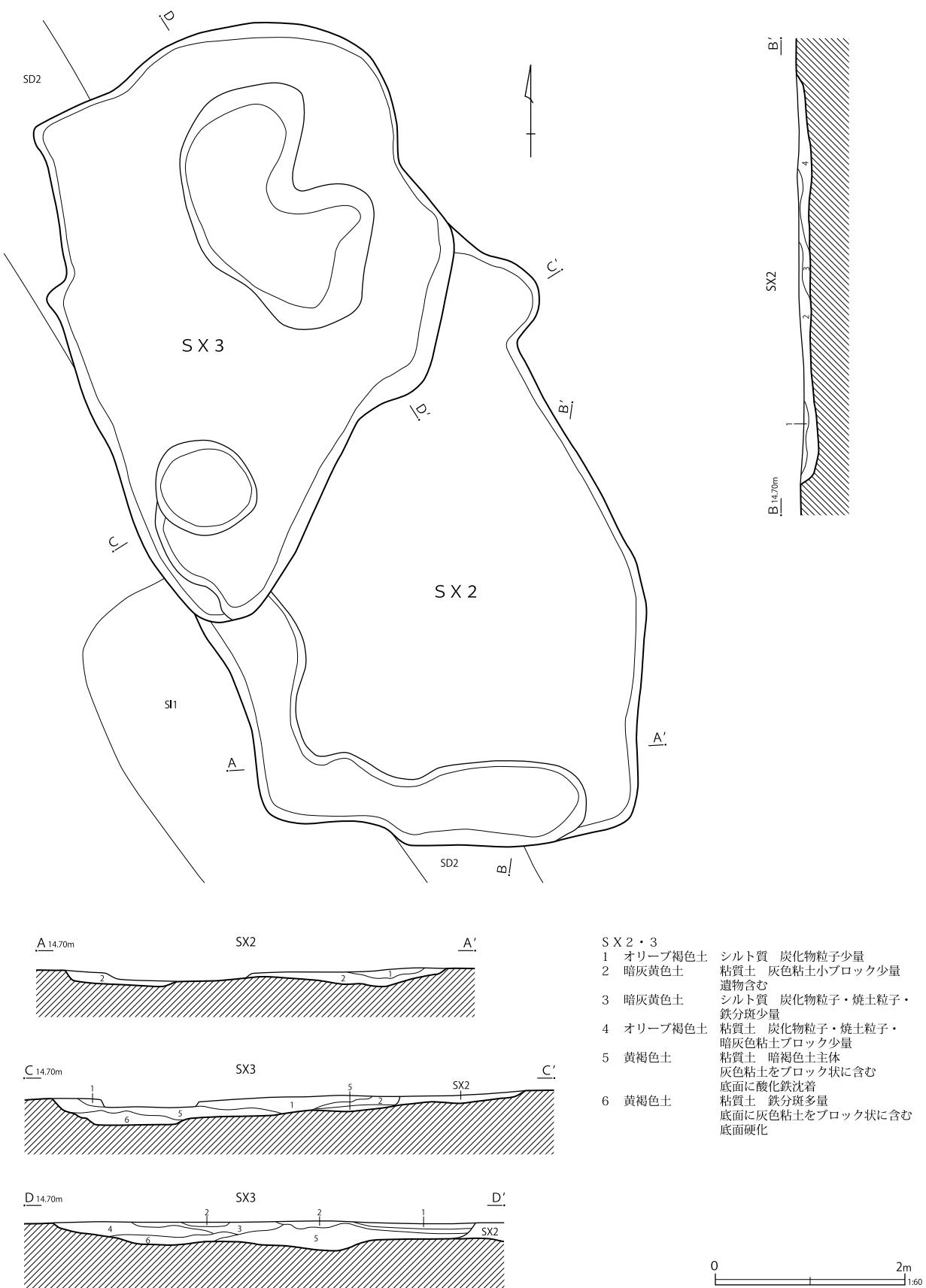
B区O-11グリッドに位置する。平面形態は楕円形である。規模は長軸長3.63m、短軸長3.00m、深さ0.18~0.32mである。長軸方位はN-31°-Wである。遺物は出土しなかった。

第6号性格不明遺構（第270図）

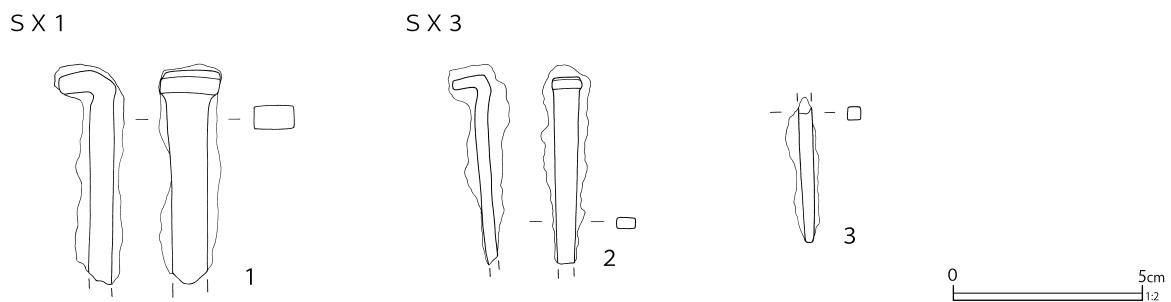
A区E-3グリッドに位置する。第184号土壌と重複している。新旧関係は不明である。搅乱によって壊されているため、平面形態は不明である。



第266図 第1号性格不明遺構



第267図 第2、3号性格不明遺構

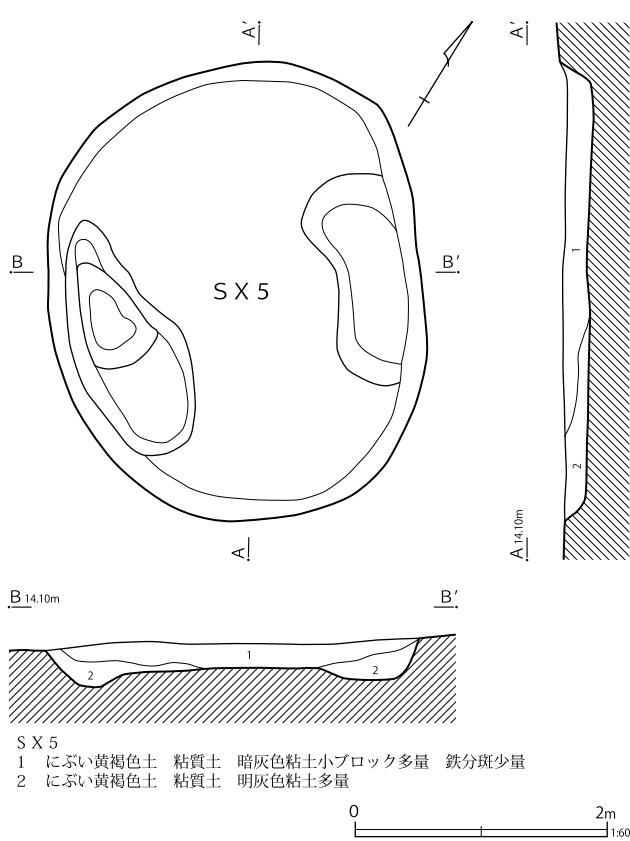


第268図 性格不明遺構出土遺物

第75表 性格不明遺構出土遺物観察表（第268図）

番号	遺構	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	図版
1	SX1	鉄製品	釘	[5.6]	1.1	0.6	29.0		87-4
2	SX3	鉄製品	釘	[4.9]	0.5	0.3	6.9		87-5
3	SX3	鉄製品	釘	[3.7]	0.4	0.4	2.0		

規模は長軸長6.20m、短軸長2.86m、深さ0.19
~0.23mである。長軸方位はN-45° -Eである。
遺物は出土しなかった。



第269図 第5号性格不明遺構

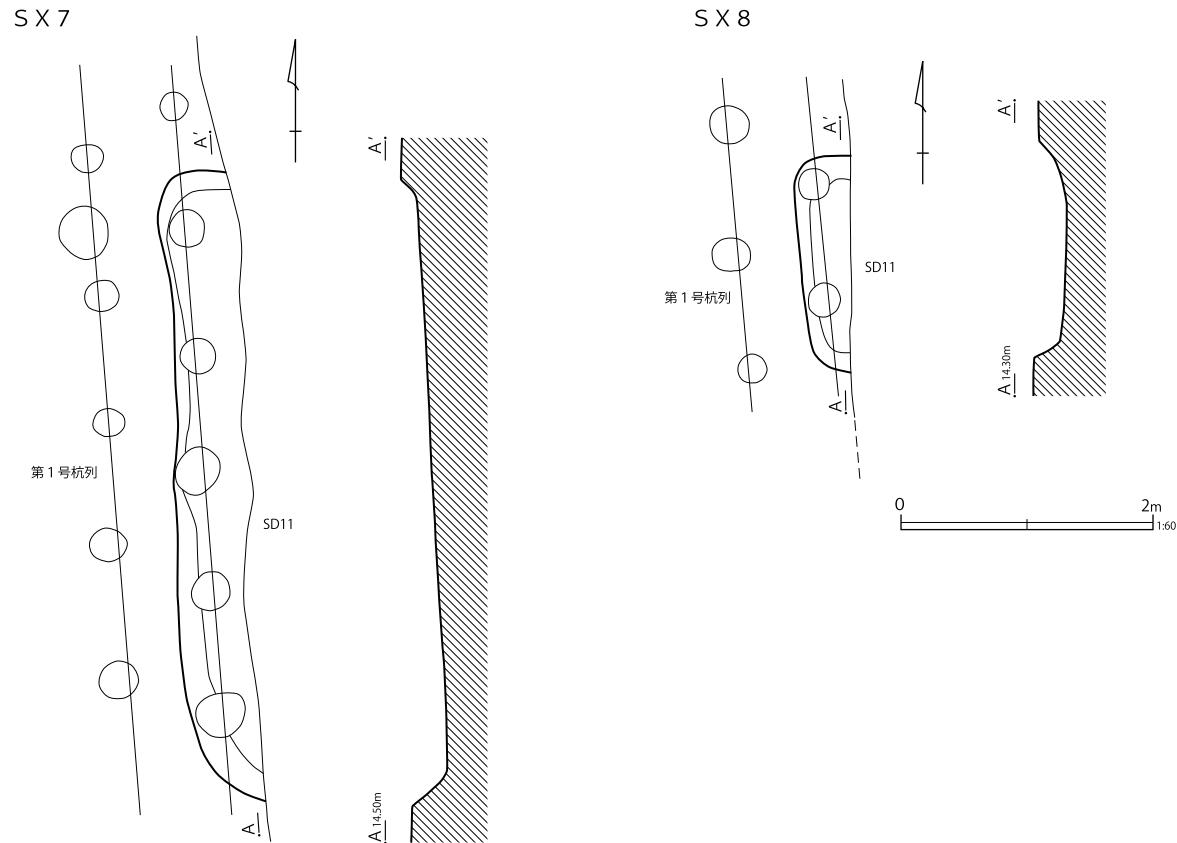
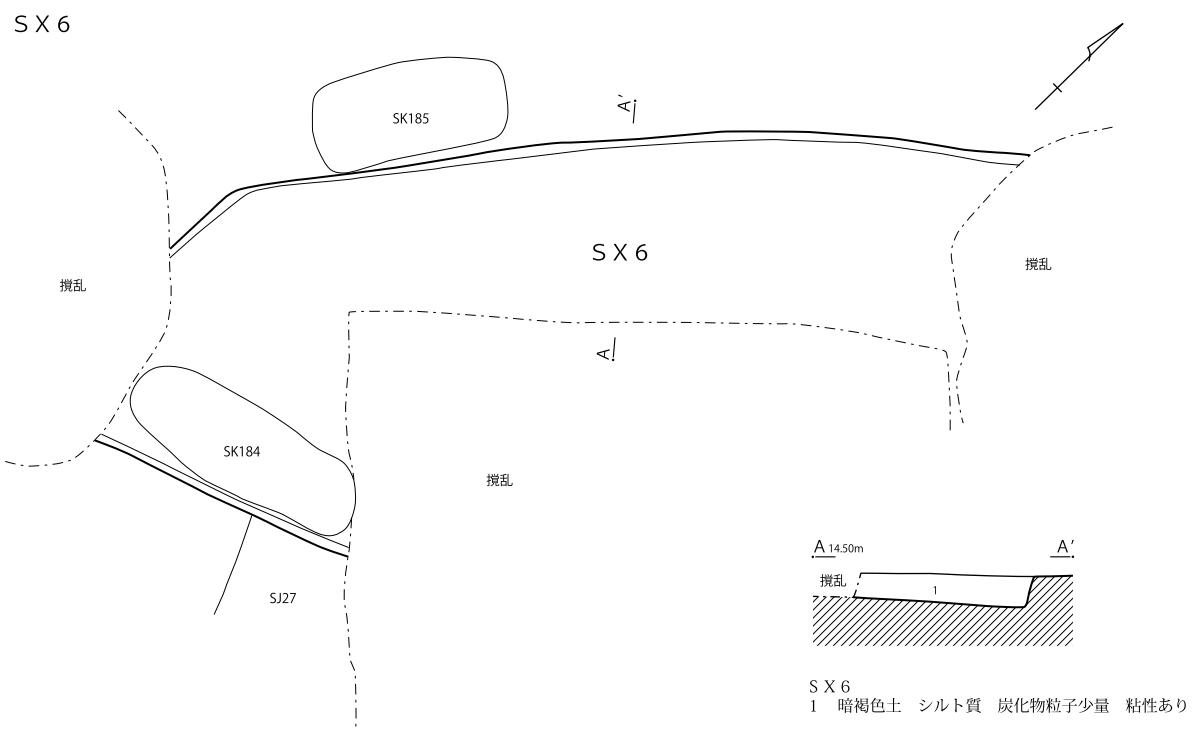
第7号性格不明遺構（第270図）

B区K-8グリッドに位置する。第1号杭列と重複している。南北にかけて第11号溝跡によって壊されているため、平面形態は不明であるが、西壁が直線的に延び、北西及び南西コーナー部を検出したことから方形もしくは長方形と想定される。規模は長軸長5.28m、短軸長0.63m、深さ0.13~0.29mである。長軸方位はN-3° -Wである。

第8号性格不明遺構（第270図）

B区K-8グリッドに位置する。第1号杭列と重複している。南北にかけて第11号溝跡によって壊されているため、平面形態は不明であるが西壁が直線的に延び、北西及び南西コーナー部が検出されたことから、方形もしくは長方形と想定される。規模は長軸長1.72m、短軸長0.41m、深さ0.22mである。長軸方位はN-2° -Wである。

遺構は、築堤に関連し昭和期に打たれた第1号杭列と、平行する近世の第11号溝跡に壊されていることから、それ以前のものと判断することができる。

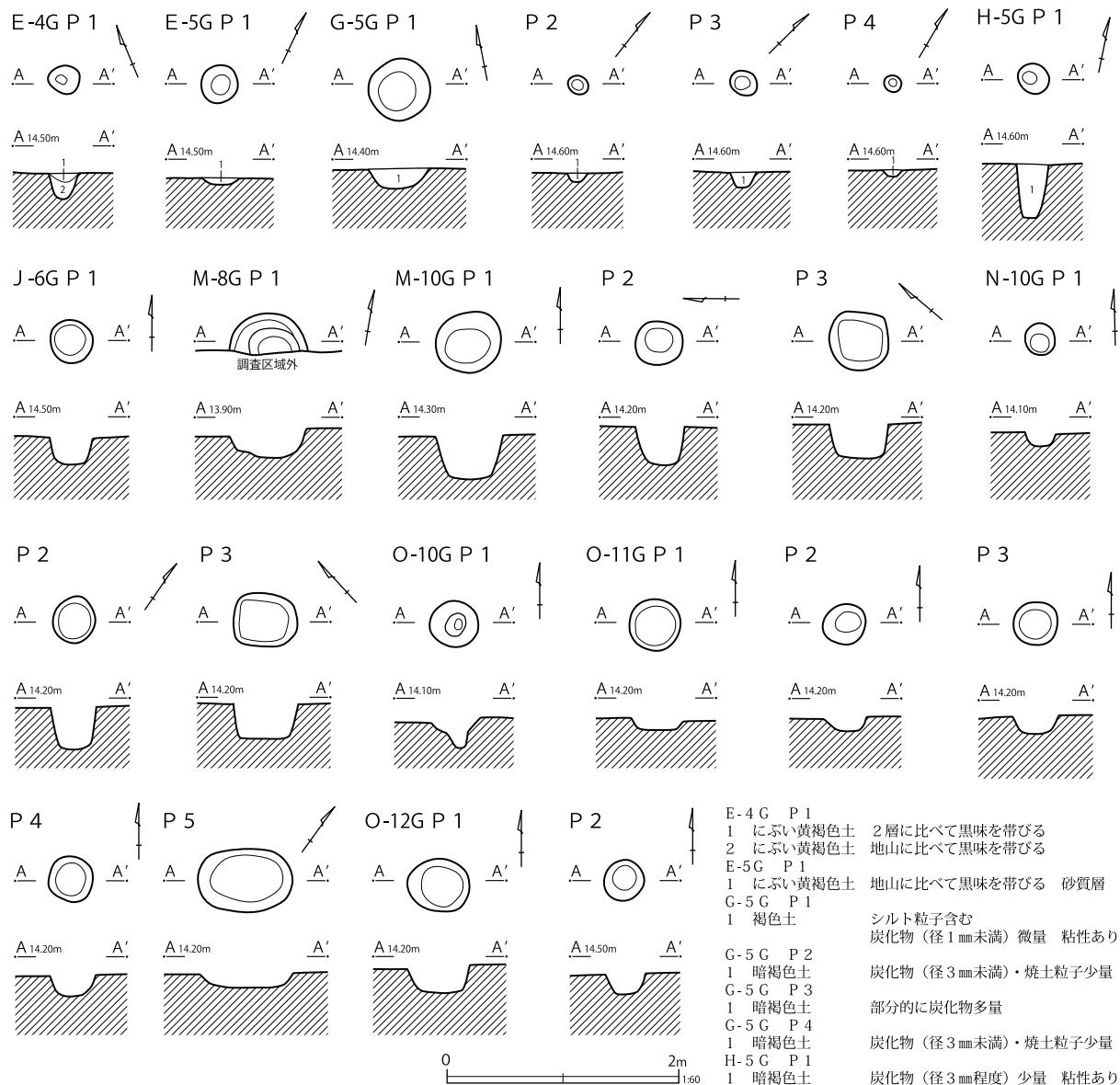


第270図 第6、7、8号性格不明遺構

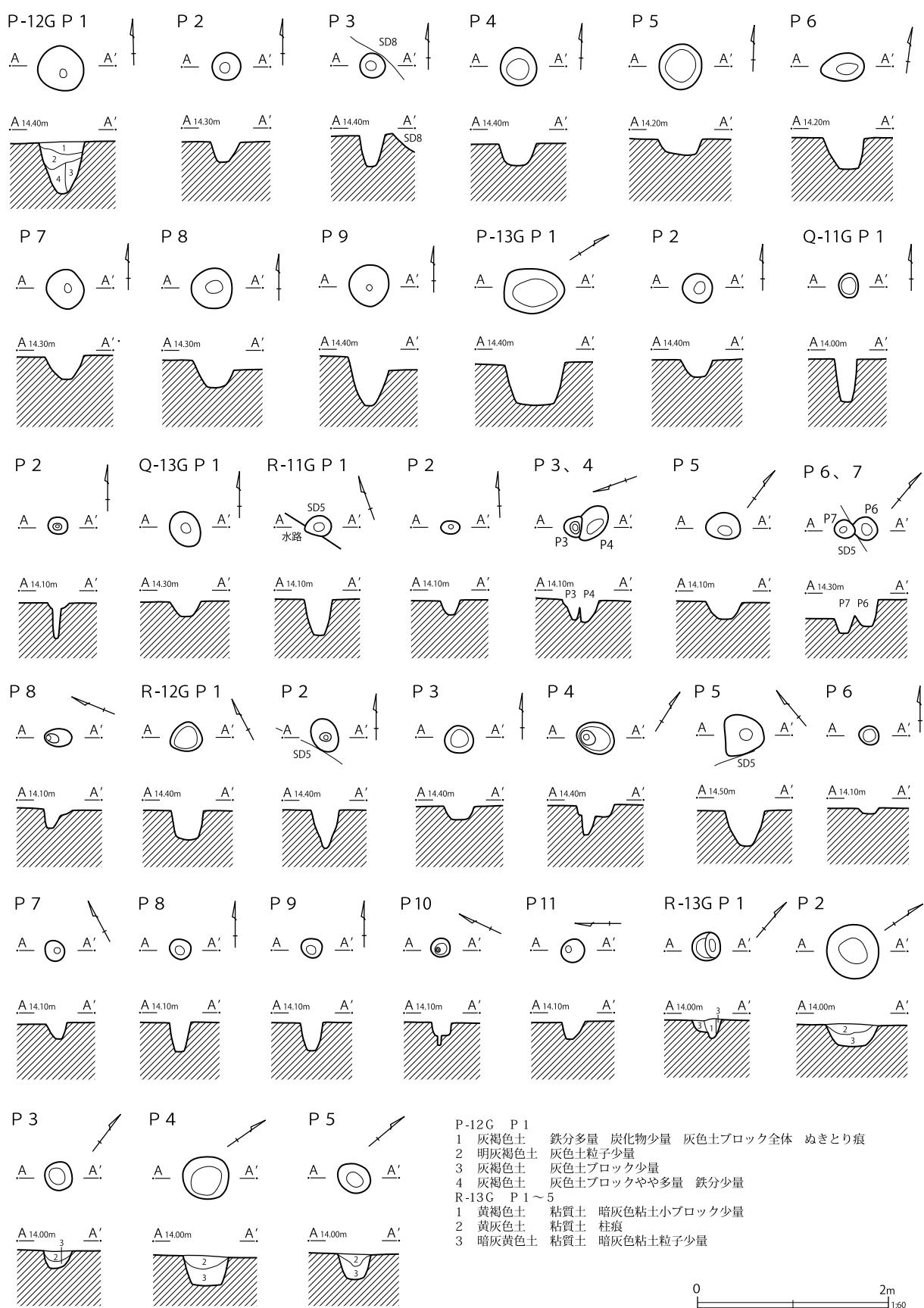
(6) ピット (第271~274図)

調査区からは、形態や規模、機能や用途が様々なピットが83基検出された。井戸跡や溝跡、土壙等様々な生活痕跡があることから、ピットも建物跡や柵列、単一の柱穴として掘られた人為的痕跡であると捉えられる。ピットには円形、隅丸方形、楕円形等の形態が見られた。また、断面形態には円柱形、台形、皿形等がある。深さも様々で、覆土はにぶい黄褐色土、褐色土、暗褐色土等が堆積していた。

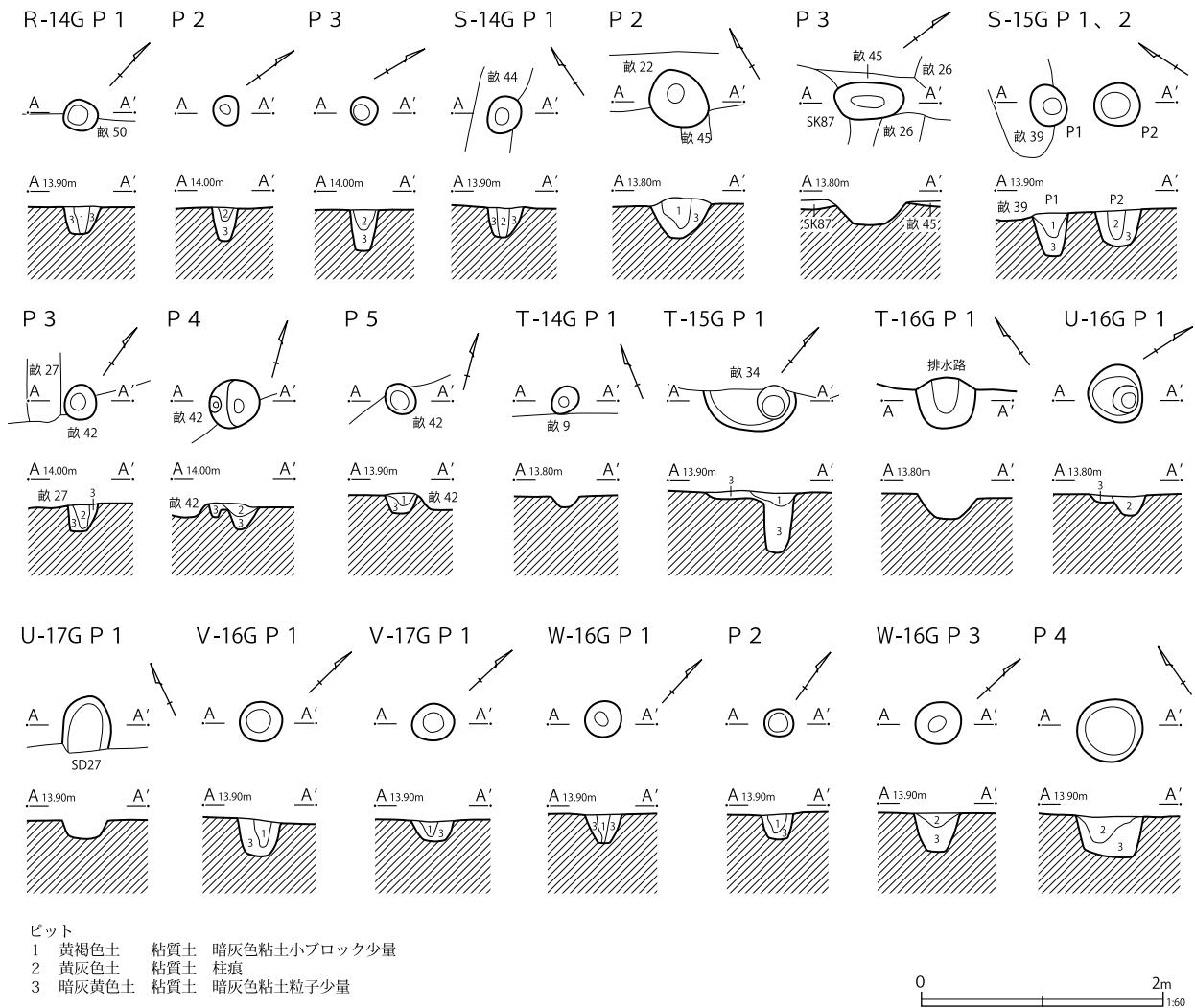
ピットが多く検出された範囲は調査区中央のO、P-11、12グリッドと南側のR-11、12、13グリッド周辺である。特に、P-12グリッド及びR-11~13グリッドでは柱穴と見られる形態のピットが検出された。これらの範囲には、建物跡があった可能性があるが、柱穴の並びや等間隔の柱間を据えることができず、規模や形態を特定することはできなかった。遺物はS-14グリッドP1から砥石が出土した。



第271図 ピット(1)



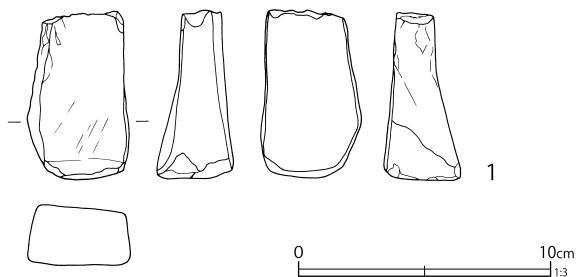
第272図 ピット(2)



第273図 ピット(3)

砥石は、泥岩製の石材で中央部分で欠損し、半分程度が残存していた。扁平な石材を利用し、四面あるうちの二側面を利用している。このため両側面のみ摩耗が著しく、特に中央部分を使用していることから、薄く磨り減っている。残存する大きさは、長さ6.6cm、幅4.0cm、厚さ4.0cmである。石材の幅広部分を使用している。この時代では、主に農具の鎌や鋤等、鉄製品の砥出しに使用していたと考えられる。他にピットからは出土遺物が

なく正確な時期は不明であるが、検出面から判断して中近世とした。



第274図 ピット出土遺物

第76表 ピット出土遺物観察表(第274図)

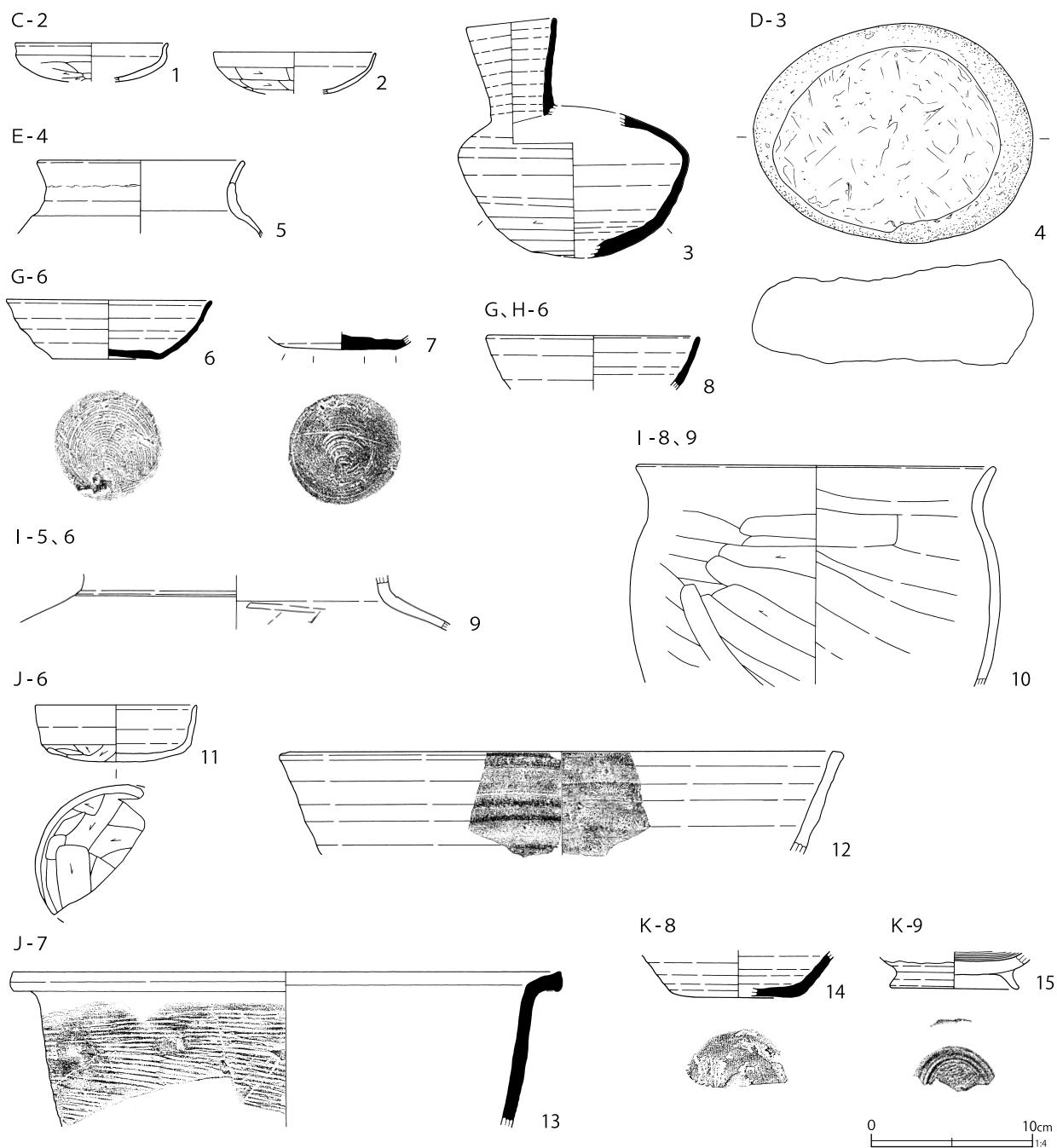
番号	遺構	種別	器種	大きさ	備考・出土位置	図版
1	S14G P1	石製品	砥石	長さ 6.6 cm 幅 4.0 cm 厚さ 2.4 cm 重さ 86.3g	泥岩	84-14

4. グリッド出土遺物

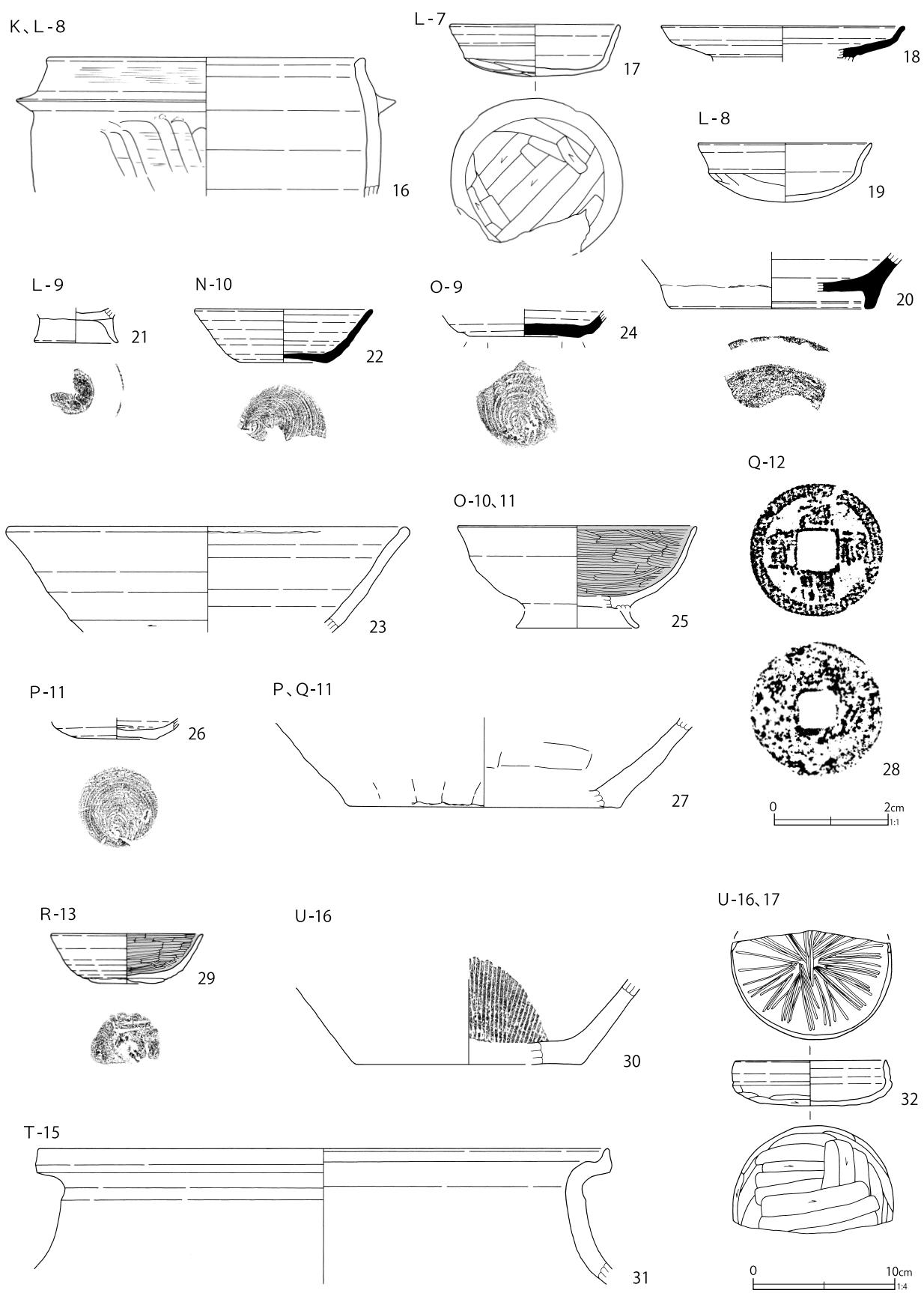
長竹遺跡の調査では、遺構確認時や遺構の帰属が不明瞭な遺物について、グリッド単位で取り上げた。出土遺物のうち、図化したものを第275～277図に示した。

古墳時代から奈良・平安時代の遺物では、1、2は北武藏型壺である。口径が10.0cm以下で小型のタイプである。体部外面はいずれも口縁部直下ま

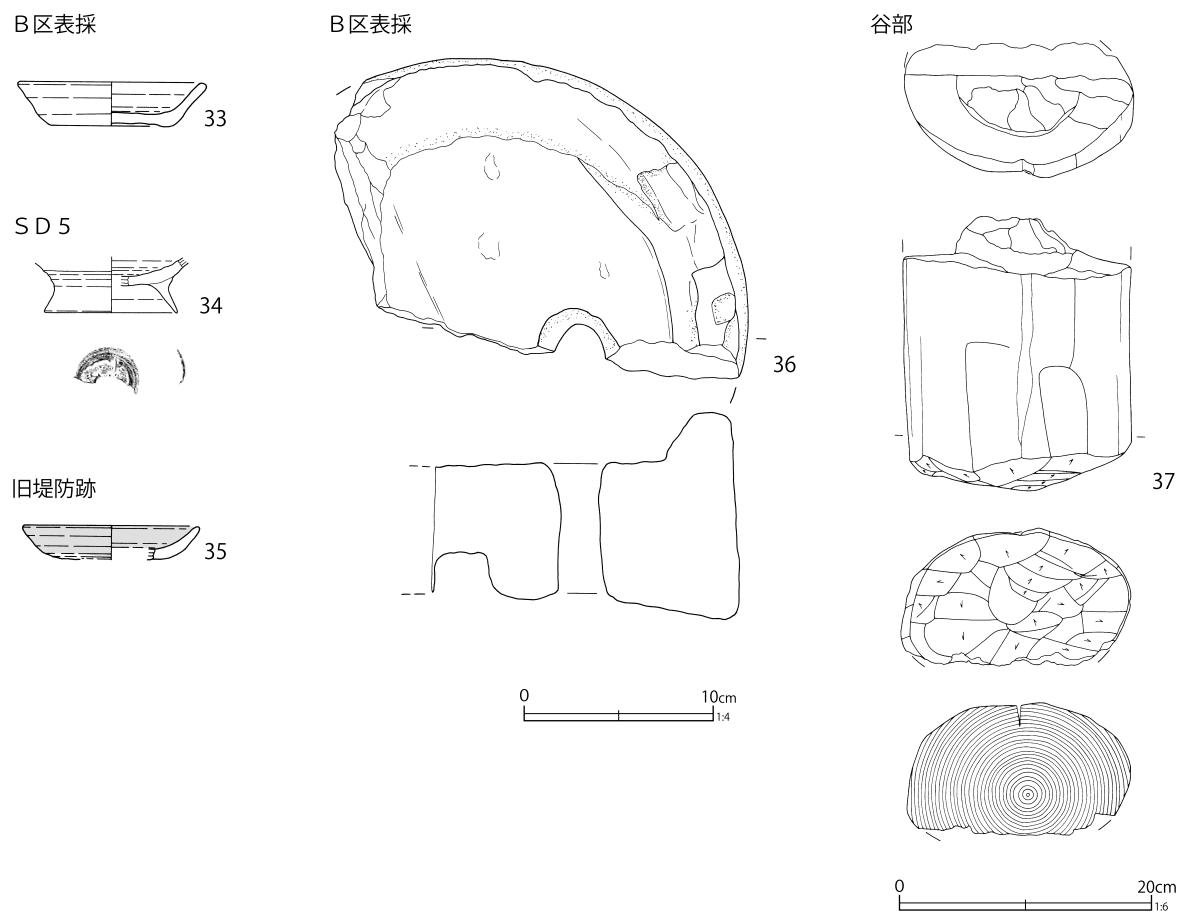
でヘラケズリが施されていることから、7世紀第3四半期に位置づけられる。3は須恵器平瓶である。外面上半部には自然釉がかかっている。丁寧なロクロ成形で、肩部の張りが強く袋部分が大きい。外面底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリを施している。秋間産の可能性がある。7世紀後半か。5は武藏型の小型台付甕の口縁部破片で



第275図 グリッド出土遺物(1)



第276図 グリッド出土遺物(2)



第277図 グリッド出土遺物(3)

ある。器壁も薄く胎土に赤色粒子を含むことから北武藏地域の製品である。6～8は胎土に白色針状物質が含まれることから南北企産の須恵器坏である。6は器壁薄く底部外面糸切り離しのままで、推定口径12.9cmである。9世紀第1四半期と推定される。7は底部のみの破片である。外周回転ヘラケズリを施し、中央部に「一」のヘラ描きが見られる。9は北武藏地域の土師器甕で、口径が大きく胴部が丸く張るタイプである。10は在地の土師器甕である。11は模倣坏で、推定口径10.0cmと小型である。口縁部のヨコナデによりわずかに稜を作り出している。7世紀前半と考えられる。13は胴部に叩きを施した須恵器の甕である。14は器壁が厚く底部ヘラ切りのままの常陸産の坏である。15、25は内面黒色処理が施される高台付塊である。

17は有段口縁坏である。19は模倣坏である。いずれも古墳時代後期6世紀末葉段階である。22、24は須恵器坏である。いずれも群馬産と見られる。24は底部外面、糸切り後手持ちのヘラケズリが施されている。26はロクロ土師器坏の底部破片である。硬質でしまりのある焼成となっている。29は小型の内黒土器である。32は坏蓋模倣の土師器坏である。口縁部ヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面に放射状の暗文を施している。器壁の薄い丁寧な作りである。

中近世の遺物では、12は常滑焼擂鉢である。23は常滑焼片口鉢である。胎土に大粒の石英粒子が混在している。27は常滑焼甕底部の破片である。30は常滑焼擂鉢の破片である。内定面は滑らかで体部に擂目が刻まれている。31は常滑焼大甕の口

第77表 グリッド出土遺物観察表（第275～277図）

番号	グリッド	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	C-2G	土師器	壺	(9.5)	[2.3]	—	CHI	15	普通	橙	北武藏型壺	
2	C-2G	土師器	壺	(10.0)	[2.5]	—	ACIK	30	普通	橙	北武藏型壺	
3	C-2G	須恵器	平瓶	5.5	(14.8)	—	IK	50	良好	灰白	秋間産	84-9
4	D-3G	石		長さ 13.5 cm 幅 17.5 cm 厚さ 6.5 cm 重さ 1240.0g								88-4
5	E-4G	土師器	小型台付甕	(12.6)	[4.8]	—	ABCEHI	20	普通	橙		
6	G-6G	須恵器	壺	(12.9)	3.6	6.9	IJK	45	普通	灰	南北企産 A 区 N トレンチ	84-1
7	G-6G	須恵器	壺	—	[1.1]	6.6	EIJK	95	良好	灰オリーブ	南北企産 底部外面ヘラ描き [一] SD36	
8	G・H-6G	須恵器	壺	(13.0)	[3.1]	—	IJK	5	良好	黄灰	南北企産 SJ29	
9	I-5・6G	土師器	甕	—	[3.6]	—	CEHIK	10	普通	橙	SJ22	
10	I-8・9G	土師器	甕	(22.0)	[13.5]	—	CEHIK	15	普通	明赤褐	砂粒多し B 区 トレンチ 16	
11	J-6G	土師器	壺	(10.0)	3.5	—	AI	35	普通	明赤褐	模倣壺 SJ10	84-5
12	J-6G	陶器	擂鉢	(33.9)	[6.3]	—	IK	5	普通	灰白	SJ10	
13	J-7G	須恵器	甕	(34.0)	[9.5]	—	EI	15	良好	褐灰	平行叩き A 区 D トレンチ	84-10
14	K-8G	須恵器	壺	—	[2.9]	(8.0)	IJK	20	普通	黄灰	ヘラ起こし SJ8	
15	K-9G	ロクロ土師器	高台付塊	—	[2.3]	(7.8)	AIK	40	普通	にぶい黄橙	SD1K9G 内黒	
16	K・L-8G	瓦質陶器	羽釜	(22.0)	[9.9]	—	AIK	10	普通	灰白	SD1K・L8G	86-19
17	L-8G	土師器	壺	11.8	3.7	—	ACI	80	良好	にぶい褐	有段口縁壺	84-2
18	L-7G	須恵器	高盤	(17.0)	[2.5]	—	AEI	10	普通	灰	茨城産	
19	L-8G	土師器	壺	(12.2)	4.1	—	CHIK	25	普通	橙	模倣壺	84-6
20	L-8G	須恵器	壺	—	[4.0]	(14.6)	EHIK	15	普通	灰	SJ34	
21	L-9G	ロクロ土師器	高台付塊	—	[2.5]	(5.6)	CHI	40	普通	橙	SD1L9G	
22	N-10G	須恵器	壺	(12.4)	3.7	(6.2)	AIK	35	良好	灰	群馬産 B 区 トレンチ 7	84-3
23	N-10G	瓦質陶器	鉢	(28.0)	[7.5]	—	AEI	10	良好	黄灰	在地	86-20
24	O-9G	須恵器	壺	—	[1.9]	(7.9)	HIK	30	良好	灰白	群馬産 SD9	
25	O-10・11G	ロクロ土師器	高台付塊	(16.6)	[5.8]	—	AEGI	20	良好	にぶい橙	内黒	84-7
26	P-11G	ロクロ土師器	壺	—	[1.5]	5.6	CIK	100	普通	にぶい褐	SD1P11G	
27	P・Q-11G	陶器	甕	—	[6.5]	(19.5)	EHIK	20	良好	にぶい赤褐	常滑 SJ4 No. 13	
28	Q-12G	古銭		径 2.40 cm 厚さ 0.18 cm 重さ 3.3g								
29	R-13G	ロクロ土師器	壺	(10.4)	3.5	5.4	AHIK	60	普通	にぶい黄橙	内黒 底部粘土版 SD1R13G	84-4
30	U-16G	陶器	擂鉢	—	[6.0]	(16.0)	AEI	10	良好	にぶい赤褐	常滑	86-22
31	T-15G	陶器	甕	(40.0)	[9.5]	—	I	5	良好	褐灰	常滑	86-21
32	U-16・17G	土師器	壺	10.6	3.2	—	AHK	55	普通	浅黄橙	模倣壺 内面放射状暗文 SD27 No. 1	84-13
33	B 区表採	かわらけ	皿	9.6	2.3	6.5	AHIK	60	良好	にぶい橙		84-8
34	SD5	ロクロ土師器	高台付塊	—	[2.9]	(14.1)	ACHIK	40	普通	にぶい赤褐	SD5	
35	旧堤防	陶器	皿	(6.8)	[1.3]	—		10	良好	灰白	瀬戸 103 層 灰釉	
36	B 区表採	石製品	石臼	直径 28.0 cm 厚さ 11.0 cm 重さ 4650.0g								88-5
37	谷部	木製品	柱材か	長さ 21.5 cm 幅 17.9 cm 厚さ 10.3 cm						芯持材		88-6

縁部破片である。口唇部は断面三角状になり、上方突出している。33はかわらけである。35は瀬戸

の灰釉小皿である。36は直径28cmの石臼である。37は木製の杭の一部である。

5. 旧堤防跡

C区から堤防跡が検出された。

測量の結果、旧堤防の最高位は標高18.20m、盛土の下端は15.20m前後であった。したがって、盛土部分の高さは3m以上4m未満である。

断面観察を中心とした調査を進めるのに際して、以下の点に留意した。

①天明3（1783）年の浅間山噴火で降下した浅間A軽石（As-A、以下A軽石と略す）が確認できるか。

②A軽石が確認された場合、この旧堤防の構築時期が、A軽石降下以前か以後か。

③旧堤防の構築行為（積み増し）が何回行われたか。

まずA軽石については、A、B、B2、C層において確認された。特にC層では、A軽石のいわゆる純層を確認した。しかし、この堆積が噴火に起因する軽石降下によるものか、あるいは河川氾濫に伴う堆積かについては、特定するにいたらなかった。またA、B、B2層、特にB層下部では酸化鉄の堆積が見られたことから、土壤中に水分の流れが想定でき、水田土壤の可能性が考えられた。A軽石はこれらの層に混入する形で確認された。この2ないし3層からは、A軽石降下後に一定期間水田が営まれた可能性が考えられ、河川氾濫による流入も想定された。

次に旧堤防の構築時期であるが、先に触れたA層の直上の106層より人為的に積み上げた（盛土）痕跡が窺える。このことから旧堤防の構築は、天明3年の浅間山噴火後、一定期間水田（A、B、B2層）が営まれた後に、堤防の構築が開始されたと想定した。

最後に、堤防の構築回数であるが、今回の調査では、3回の築堤の可能性を想定した。これは、各層の土色特徴からも窺うことができた。

3回の堤防構築を想定した場合の、土層との対比は以下の通りである。

第1期構築層・・・101～106層

第2期構築層・・・201～217層

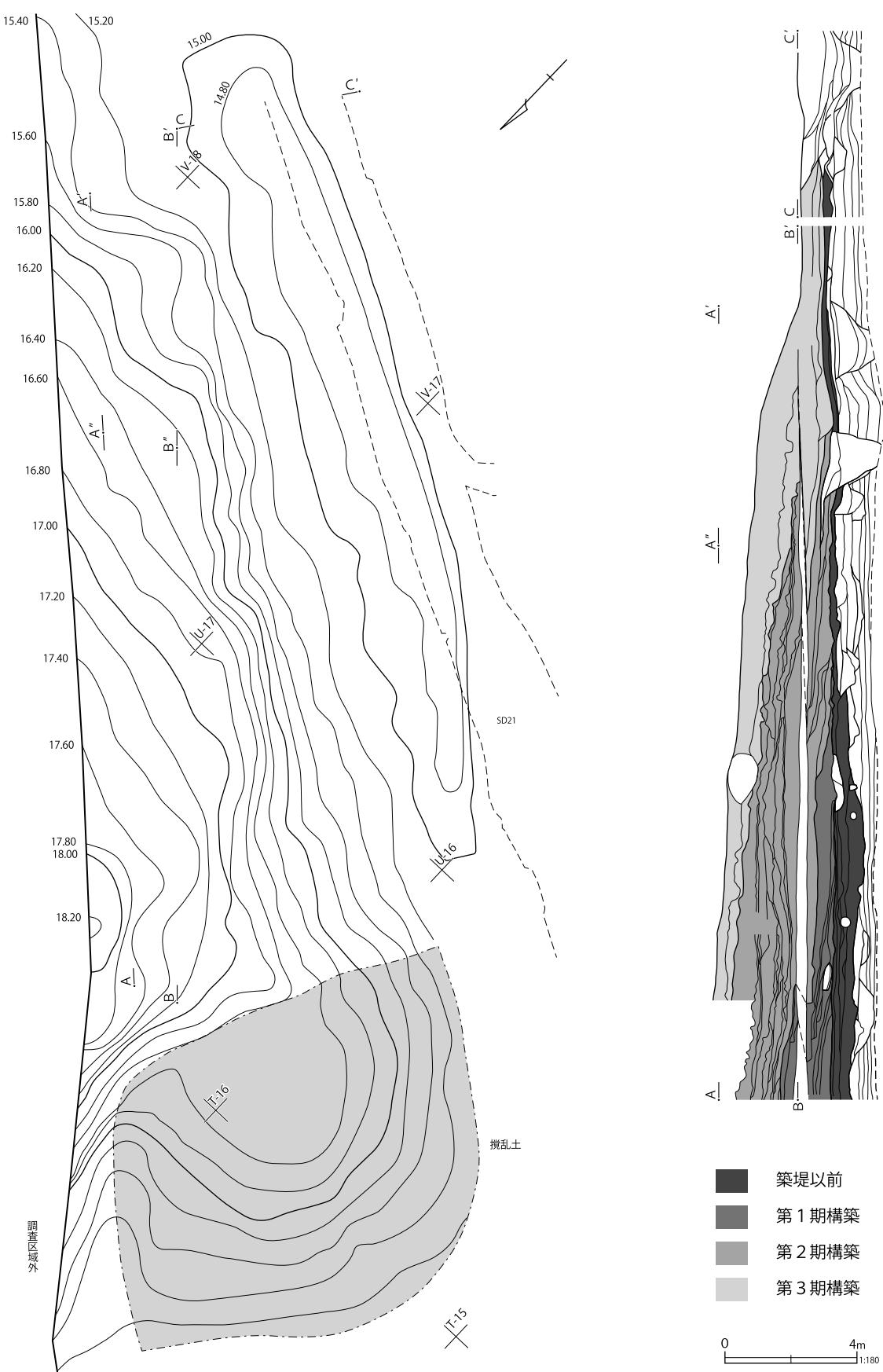
第3期構築層・・・301～304層

遺構の特徴からは、堤防が構築された際に、盛土部の端に堤防から染み出る水分を排出するため掘削されたと思われる溝の存在があげられる。今回の調査では、第1期構築時に伴い遺構a3、b3が、第2期構築時に遺構a8、b8、c8が、第3期構築時にSD21が、開削されたと考えられ、これらの溝の痕跡が3つの遺構として断面上に確認できた。また、階段状の盛土行為も確認した。これは、盛土が崩落するのを防ぐためのものと考えられるが、断面上には、積み上げた土をほぼ直角に切り落とし、階段状に積み上げた形跡を見ることができた。遺物は第103層から、瀬戸灰釉皿が出土した（第277図35）。

以上が今回の堤防跡調査の成果である。

今回の調査では、旧堤防の一部の観察に留まった。これは、旧堤防の中心部分が、現堤防中に存在するか、あるいは現堤防によって破壊された可能性があるためである。今回の所見は、あくまでも本調査区内の堤防跡による成果であり、旧堤防跡の中心部分においては、構築が浅間A軽石降下以前から行われていた可能性も充分に考えられる。構築時期については、以下のとおり想定した。第1期の構築は天明3年浅間山噴火以降、特にA、B、B2層の水田土壤にA軽石が含まれることから、噴火後に一定期間水田が営まれた後に、構築が開始された。なお、天明3年の浅間山噴火後、天明6（1786）年に当地域を襲った水害の記録（羽生市1971）が残されている。そのため、今回「一定期間水田が営まれた」と表記したが、その期間を天明6年頃までの数年間と想定できる。

第2期の構築は近世後期から近代にかけてである。第3期の構築はA区で旧堤防の構築に伴う杭列を確認し、昭和初期頃を想定した。



第278図 旧堤防跡(1)



第279図 旧堤防跡(2)

VI 自然科学分析

1. 長竹遺跡における放射性炭素年代

(1) 測定対象試料

長竹遺跡は、埼玉県加須市大越702-1他に所在する。測定対象試料は、第13号住居跡床面出土炭化材 (No.1 : IAAA-103244)、第11号住居跡床面出土炭化材 (No.2 : IAAA-103245)、集落のある台地脇に形成されたピート層出土木片 (No.3 : IAAA-103246)、種子 (No.4 : IAAA-103247) の合計4点である (表1)。第13号住居跡からは安行1式土器、第11号住居跡からは安行3a～3b式土器が出土し、ピート層では試料2点より下位から安行式土器が出土している。

(2) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/? (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(3) 測定方法

3MVタンデム加速器 (NEC Pelletron 9SDH-2) をベースとした14C-AMS専用装置を使用し、14Cの計数、13C濃度 (13C/12C)、14C濃度 (14C/12C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(4) 測定方法

- 1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 2) 14C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- 3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい (14Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (14Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- 4) 曆年較正年代とは、年代が既知の試料の14C

濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化等を補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

(5) 測定方法

試料の¹⁴C年代は、第13号住居跡床面出土炭化材No.1が $2990 \pm 30\text{ yrBP}$ 、第11号住居跡床面出土炭化材No.2が $2780 \pm 30\text{ yrBP}$ 、集落のある台地脇に形成されたピート層出土木片No.3が $2520 \pm 30\text{ yrBP}$ 、種子No.4が $2420 \pm 30\text{ yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、No.1が $1291 \sim 1132\text{ cal BC}$ の間に4つの範囲、No.2が $977 \sim 898\text{ cal BC}$ の範囲、No.3が $771 \sim 557\text{ cal BC}$ の間に4つの範囲、No.4が $518 \sim 409\text{ cal BC}$ の範囲で示される。

No.1が測定された第13号住居跡からは安行1式土器、No.2が測定された第11号住居跡からは安行3a～3b式土器が各々出土しており、類例の検討成果 (小林2006、工藤他2007、小林2009) を参照すると、これら2点の年代値は出土土器の型式に対して若干新しいと見られる。この遺跡における遺構、遺物の埋没状態や変遷過程の検証、類例の吟味等が必要となる。また、ピート層出土のNo.3とNo.4の間には若干年代差が認められ、No.3は縄文時代晚期後半頃、No.4は縄文時代晩期末から弥生時代への移行期頃に相当する年代値である。これらの下位から安行式土器が出土していることとは矛盾しない。

試料の炭素含有率はすべて50%を超える、化学処理、測定上の問題は認められない。

引用・参考文献

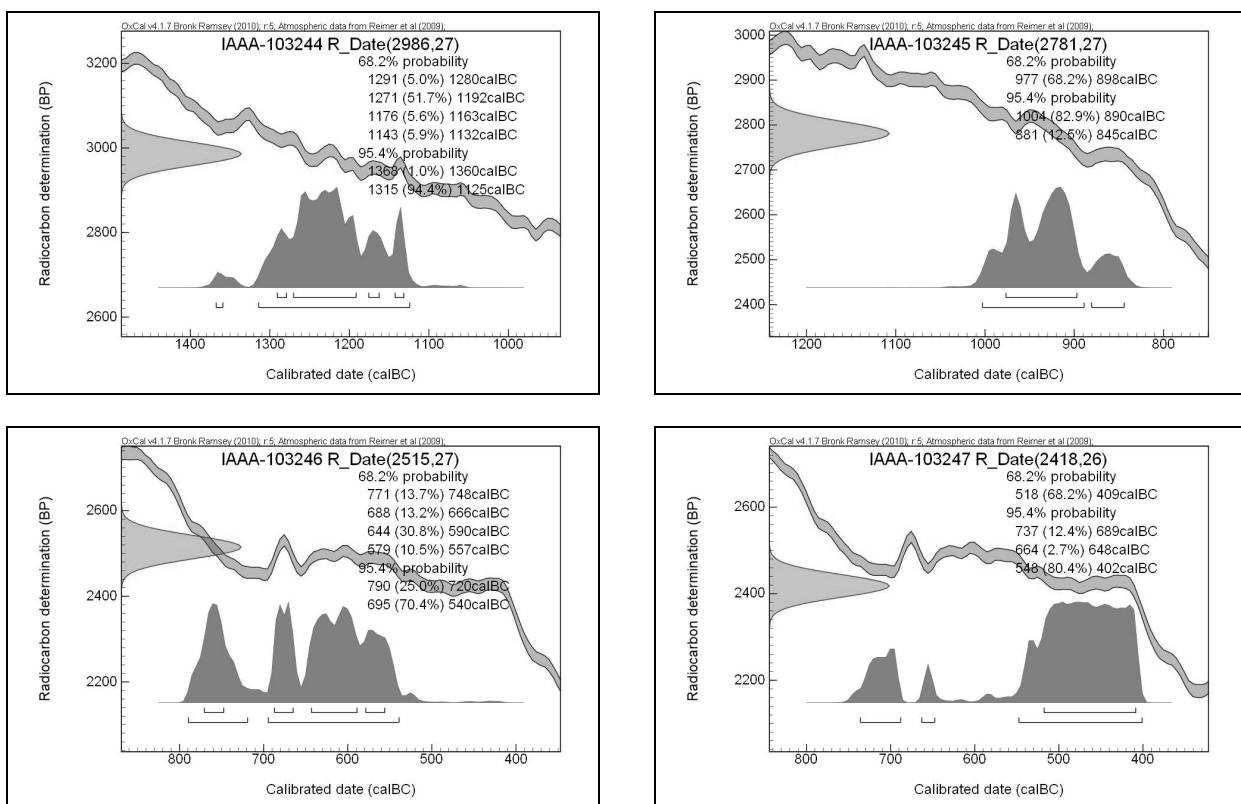
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19 (3) , pp.355-363
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1) , pp.337-360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 yearscal BP, Radiocarbon 51 (4) , pp.1111-1150
小林謙一 2006 「関東地方縄紋時代後期の実年代」『考古学と自然科学』54 pp.13-33
工藤雄一郎・小林謙一・坂本稔・松崎浩之 2007 「東京都下宅部遺跡における¹⁴C年代研究 一縄文時代後期から晩期の土器付着炭化物と漆を例としてー」『考古学研究』53 (4) pp.56-76
小林謙一 2009 「近畿地方以東の地域への拡散」『新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代』雄山閣 pp.55-82

第78表 試料の諸元と補正年代

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC (%)
IAAA-103244	No.1(13-3)	第13号住居跡床面	炭化材	AAA	-25.19 ± 0.50	2,990 ± 30	68.95 ± 0.24
IAAA-103245	No.2(11-375)	第11号住居跡床面	炭化材	AAA	-25.59 ± 0.38	2,780 ± 30	70.73 ± 0.24
IAAA-103246	No.3	台地脇の低地部のピート層	木片	AAA	-26.39 ± 0.49	2,520 ± 30	73.12 ± 0.25
IAAA-103247	No.4	台地脇の低地部のピート層	種子	AAA	-27.58 ± 0.40	2,420 ± 30	74.00 ± 0.25

第79表 未補正年代

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-103244	2,990 ± 30	68.92 ± 0.23	2,986 ± 27	1291calBC - 1280calBC (5.0%) 1271calBC - 1192calBC (51.7%) 1176calBC - 1163calBC (5.6%) 1143calBC - 1132calBC (5.9%)	1368calBC - 1360calBC (1.0%) 1315calBC - 1125calBC (94.4%)
IAAA-103245	2,790 ± 30	70.65 ± 0.23	2,781 ± 27	977calBC - 898calBC (68.2%)	1004calBC - 890calBC (82.9%) 881calBC - 845calBC (12.5%)
IAAA-103246	2,540 ± 30	72.91 ± 0.23	2,515 ± 27	771calBC - 748calBC (13.7%) 688calBC - 666calBC (13.2%) 644calBC - 590calBC (30.8%) 579calBC - 557calBC (10.5%)	790calBC - 720calBC (25.0%) 695calBC - 540calBC (70.4%)
IAAA-103247	2,460 ± 30	73.61 ± 0.24	2,418 ± 26	518calBC - 409calBC (68.2%)	737calBC - 689calBC (12.4%) 664calBC - 648calBC (2.7%) 548calBC - 402calBC (80.4%)



第281図 暦年較正年代グラフ

VII 調査のまとめ

今回の報告は、現在も調査が続く長竹遺跡の発掘成果のうち、平成22、23年度に実施した第1、2次調査の成果をまとめたものである。具体的にはA区からC区の古墳時代以降と、B区南半とC区における縄文時代の遺構と遺物を報告した。

長竹遺跡の調査は、加須低地域の埋没台地に立地する縄文遺跡では初めての本格的調査であると

ともに、氾濫原と化した古墳時代以降の土地利用についても各時代で興味ある成果を得ることができた。縄文、そして古墳時代以降とともに、別地点の報告を後日行う予定であるため、遺跡全体のまとめはそちらに持ち越すが、ここでは、四つの時代に分けて今回報告の対象地内で得られた成果の意義や問題点等について簡単にふれておきたい。

1. 縄文時代の様相

加須低地下の埋没台地を対象とした縄文時代の調査では、関東造盆地運動や利根川水系の浸食や氾濫により、把握の手立てが限られてきた縄文時代の様相が明らかとなった。特に、B区からC区にかけて出土した土器は、早期前葉から晩期中葉に至るまで断続的に多くの型式が認められ、他の地域や台地間の様相を対比する上では恰好の資料となると思われる。

長竹遺跡で出土した縄文土器は、勝坂系が出土しなかった他は、基本的には久喜市以南の大宮台地で周知されている時期的な盛衰や土器組成、胎土の質感と変わらなかった。この中で遺構が残されたのは、早期後葉条痕文系、中期後半加曽利E系、そして後期から晩期の安行系を主体とする各時期である。

このうち条痕文系期は、C区に土壙群が形成されていた（第282図）。第130号土壙で焼土の断片が確認できたものの、大宮台地で盛んな長楕円土壙の一端に炉床が残る典型的な炉穴ではなく、土壙の規模や形態も様々であり、特に分布の中央に大型土壙が集まっている。

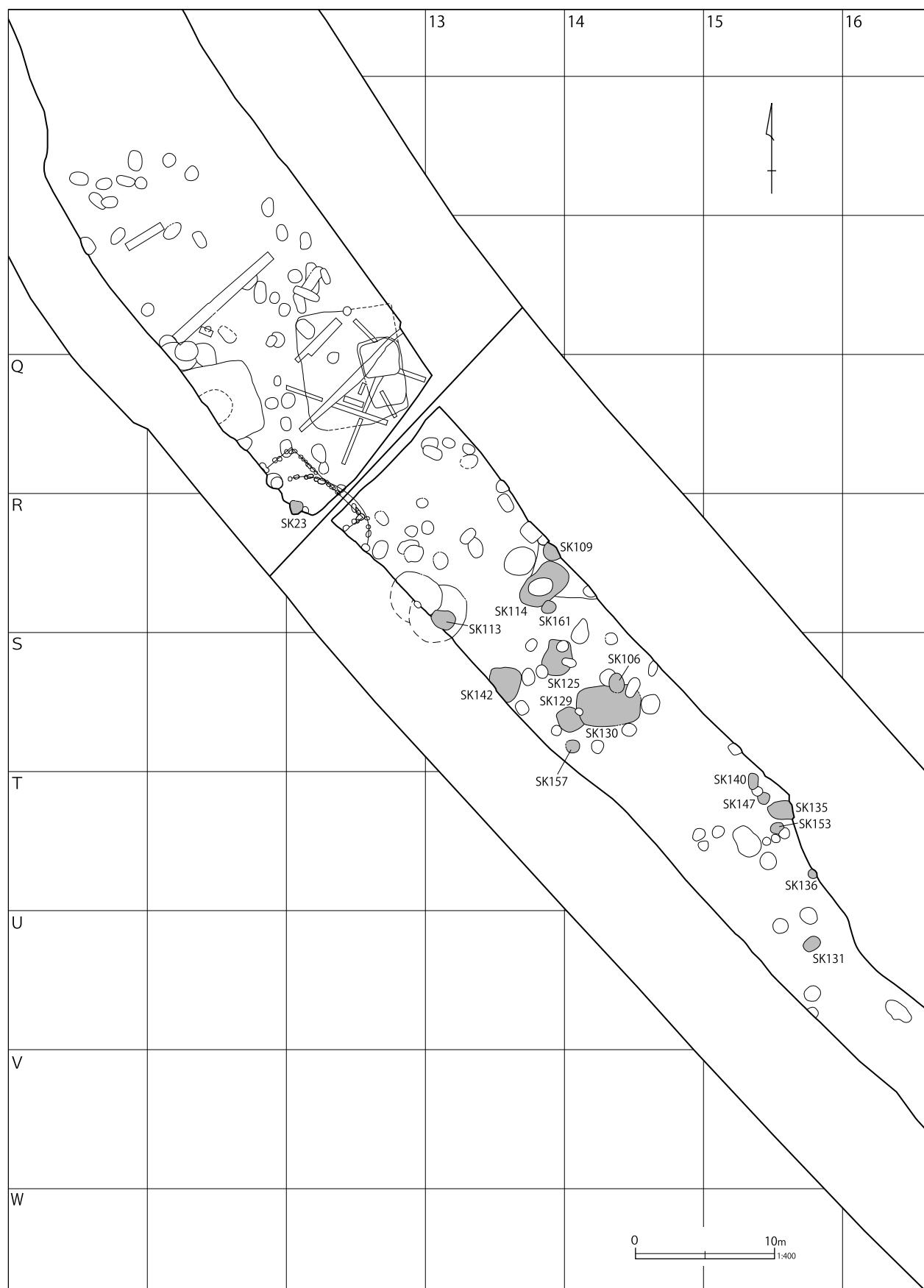
炉穴より土壙が多く形成される条痕文系期の遺構群は深谷市白草遺跡で見つかっている（川口1993）。同遺跡では斜面地にいくつかの土壙群が形成されており、このうち2箇所で炉跡を有する

長方形竪穴の周囲に円形の土壙が環状に分布する様相が見てとれる。また、白草遺跡ほどの規模は存在しないが、埼玉県北西部を中心とする同期の内陸部集落でも、炉穴は小規模・少数で、土壙の比率が高い。第130号等の大型土壙が中央に集中する傾向がある長竹遺跡も、白草例に似た内陸的な遺構種と分布であった可能性が考えられる。

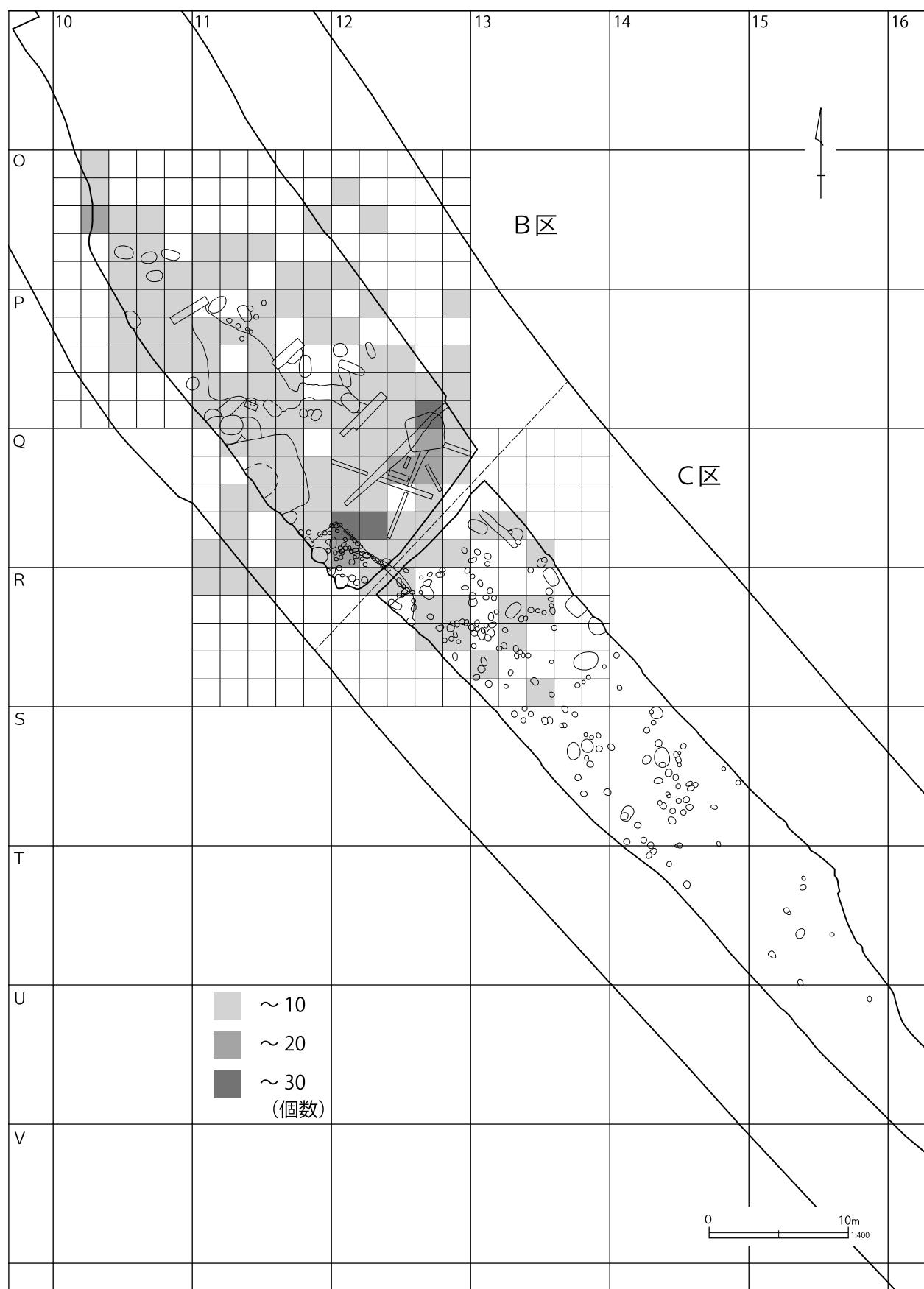
一方、中期後半では2軒の住居跡と土壙を発見した。この期の遺構は掘り込みが浅く、単独の炉跡や埋甕に加えて柱穴の集中等が混じる遺構分布となるのが大宮台地での相場である。今回の調査では後晩期の柱穴群とも重なるため、個々には特定できず、集落の様相を確定できなかった。何本かの柱穴はこの期に属すると考えられる。

これに対し、遺構・遺物ともに縄文時代のなかで最も大きな成果が得られたのは後期から晩期にまたがる安行系期である。第283図にこの期の土器分布を示したが、北はB区の中央に東側から湾入する河川の浸食谷、南はC区の北側が限界となる。より広い範囲で調査が可能であった上層面の溝跡や排水溝で発見されたこの期の土器も加味すると、分布は東西に広がり、なかでもB区南端の住居跡群辺りに集中することがわかる。

さらに、C区での分布は図から受ける印象以上に薄く、現地では出土が突然途絶える感覚をもつ



第282図 繩文時代早期土壙分布図



第283図 グリッド出土縄文時代後晩期土器分布図

た。この傾向は土砂の移動か廃棄場所の限定を反映していると考えられる。とはいものの、形成された包含層は薄く、大規模な盛土作業の痕跡はない。

以上から、B区南の包含層は幅20m程度の帯状で、東から湾入する浸食谷を縁取るように分布し、土砂移動の可能性はあるものの、大きな高まりとはならずA区側の環状盛土遺構に接続すると想像できる。当然ながら、両者は同一の集落に帰し、一体の活動の中で残されたはずである。だが、両者の間には、集落内での位置づけを反映すると考えられる幾つかの違いが認められる。

例えは、B区側では豊穴を掘り込む住居跡が造営されているが、環状盛土遺構内ではこれまで30を超える住居跡（建物跡）を調査したものの、明確な豊穴は見つかっていない。また、B区の住居跡の構築期は、おおよそ安行2から3b式期、その他の遺物を含めても安行1から3c式期の時期幅であり、後期後半から晩期半ばまで続いた環状盛土遺構の形成期のなかでも限られた時期に展開したことがわかる。

遺物に関しても、B区側では土偶・石棒等の祭祀関連遺物が環状盛土遺構側に比して少ない。とくに注口土器の少なさは際だっており、図示しなかった小片を含めても20点に満たない出土量しかない。

つまりB区側は、より暮らしに身近な施設が時期を限って計画的に配された可能性がある。そしてその時期は、環状盛土遺構内で巨大な焼土敷住居跡が盛んに構築された晩期初頭に重なり、盛土側では大量の祭祀遺物が行事に費やされていたのである。

2. 古墳時代の様相

古墳時代では、住居跡4軒と豊穴状遺構2基、その周辺に広がる畝状遺構がA・C区で各々検出された。

環状盛土遺構とその外周部が合わせて調査された例は、小山市寺野東遺跡（初山他1997）が挙げられるのみである。同遺跡では堀之内式期から晩期中葉にかけての盛土形成期における周縁部の様相、特に水場等、低位部での土地利用が大略判明している（江原2005）。

発見された遺構の種類こそ異なるが、長竹遺跡でも大規模な調査によって両者の同時把握が可能となった。大規模な環状盛土遺構に接する盛土を伴わぬ住居跡群の存在は、後期中葉に一般化する盛土形成の手法が後期後葉以降、さらに晩期初頭に至り大きく変質した可能性を示すものである。また、住居跡（建物跡）における豊穴の有無と盛土の関係性についても一考をうながす結果となつた。

このように、B区側での成果は、今後報告される北側の環状盛土遺構域には質量ともに及ばないかも知れない。だが、寺野東遺跡における環状盛土遺構の認識以来積み重ねられている縄文時代後晩期集落の再検討、特に環状部からそれた外周部の様態を示す貴重な調査例となることは間違いないだろう。

さて、今回報告した後晩期遺物の中で特筆すべきものは犬形土製品である（第127図）。顔立ちは簡素ながら、耳、尻尾の作りや身体のひねり加減等は表現豊かに作られている。犬形土製品の出土例は全国でも数少なく、関東では栃木市藤岡神社遺跡、鹿沼市宝性寺西遺跡、千葉県吉見台遺跡等が代表的な例である。埼玉県内では志木市西原大塚遺跡で古墳時代初頭の犬形土製品が出土しているが、縄文時代のものは確認できておらず、初めての出土例となった。

このうちA区の畝状遺構は、畝間溝に流入した遺物から、6世紀後半～7世紀前半に耕作された畝跡と推定できる。さらに畝間溝の方向の違いや

重複状況から、細かな先後を認めることも可能である。

古墳時代にまで遡る畠地の発見は、埼玉県東部では初めてである。また、古墳時代の畝状遺構が検出された遺跡は、本庄市今井条里遺跡、深谷市清水上遺跡、熊谷市北島遺跡、同市一本木前遺跡等、県北西部の氾濫原に立地する少数が挙げられるのみである。これら四遺跡の畝状遺構は、ほとんどが古墳時代でも前期における生産跡と推定されている。

このうち今井条里遺跡では条里水田の西側で南北方向に軸をとり、長さ10.8mで幅9.8mの範囲に広がる小規模なものが単独で造られている。また、清水上遺跡では10群の畝状遺構が検出され、等高線に平行、直交するものの2方向が把握されている。長さ10~20mの畝状遺構が37mにわたって並ぶものが最大で、古墳時代前期の溝跡と直交するように接している。

北島遺跡では第17・19・20・21地点で畝状遺構が検出された。第17地点では4群が検出されており、軸は北東一南西方向、北西一南東方向で、単独もしくは直交している。溝長5mで幅5mの範囲に広がる群が最小、長さ10mで幅35mの範囲にわたるのが最大で、後者の規模が主体を占める。

第19地点ではあわせて6群検出されている。軸は北東一南西、北西一南東の2方向で、10mの長さで幅11mに広がる群が最小、溝長25mで幅35mの範囲に広がる群が最大である。また、第20地点では微高地で畝状遺構が直交して検出されている。北東一南西方向の畝状遺構の上に、北西一南東方向が重なる。調査範囲が狭いため全容は不明だが、溝の長さ25mで幅30mの範囲に広がっている。さらに、第21地点では北東一南西、北西一南東方向の二方向の畝状遺構が直交する。調査区が狭いため、全体の規模は不明である。

一方、一本木前遺跡では北東一南西、北西一南東方向の畝状遺構が単独もしくは直交している。

溝の長さ10mで幅10mの範囲に広がる群が主体で、集落内に点在している。古墳時代前、後期の遺物が少量出土しているが、時期は不確定である。

これら諸遺跡の畝状遺構の特徴をまとめると次のようになる。

清水上遺跡、北島遺跡第20地点等では、水はけを考慮してか、遺跡の中でもより高い位置に耕作地が広がると報告されている。また、今井条里遺跡では水田の畦畔と同じ軸方向となり、清水上遺跡では溝跡の方向と直角に接している等、他の遺構の影響下、あるいは連動して設置されるものがある。

耕作上の効率面からすれば当然かも知れないが、畝状遺構の軸方向は遺跡内で同じに作られる傾向にある。また、北東一南西、もしくは北西一南東方向で、方位に沿わず、基本的には單一方向で終始することが多い。北島遺跡等の格子目状の重複は、地味の劣化を補う畝の一新であろう。

規模については、畝状遺構の長さは10m前後が主体で、20~25m前後の長い畝状遺構も存在する。範囲は10mと小規模で点在する型、30~37mと大規模に広がる型の2種がある。畝状遺構と広がりの偏差は、敷地の環境だけでなく、作物の種類にも影響されているよう。

以上のように、畠地が造られる地点や畝の方向は、作物の種類や耕し易い場所、地形傾斜等、営農手法的な面のみならず、他の遺構の占地方向や村落内の水路・通路の筋に影響されて決定されていると考えられる。

長竹遺跡の畝状遺構は古墳時代後期の例だが、営農手法や他遺構との関係で見渡すと、A区では下位に埋没している環状盛土遺構の高まりを利用し、住居跡よりも高い位置に耕地が設けられている。台地起源の土質である盛土の傾斜をたどるように畝状遺構が掘削されており、粘質の氾濫土に覆われている周囲と比べると水はけは抜群である。これに対し、C区の畝状遺構は堅穴状遺構を取り

囲むように配置されている。

軸方向については、他の遺構に制限を受けないA区では、盛土の傾斜方向を第一に考慮したと考えることもできる。また、C区は南に向かう緩やかな傾斜を考慮したともとれるが、調査区の幅が狭く、他の制約が働いたかは判断できない。

畝状遺構の範囲は、A区B地点では溝の長さ12.0m前後で幅15.5m以上の範囲に広がり、斜面に直交している。北に接するA地点と同一と考えれば畠の範囲は40m以上になる。C地点では長さ11～19m前後の畝状遺構が幅24m以上の範囲に広がり、さらに10m×10m、17m×9m以上の範囲に分けられる。C区A地点は、軸が変化する位置を畝状遺構の境目と考えると、長さ10m以上と20m以上の範囲の畠が二枚あることになる。

調査区が狭長なため広い範囲での展開を想像するに不安も伴うが、確認できた範囲で判断すると、A区の環状盛土遺構に沿った畝状遺構は大規模なもので、その範囲は40m以上に及ぶ。この他はA、C区それぞれに10m×10m程度の小規模な畠が近接または重複して点在していたようである。

A区の畝状遺構は、環状盛土遺構の傾斜を活かして耕されている（第148図）。これは、古墳時代

後期にはまだ環状盛土遺構が氾濫土で埋もれていなかったことを証明している。対して、その後の奈良・平安時代の遺構確認面は平坦と化していた。つまり、盛土は奈良時代を前に完全に没したことになる。余録ではあるが、A区の畝状遺構は、長竹遺跡の環状盛土遺構が奇跡的に完存した歴史的な過程を示す傍証ともなり得るのである。

この他、古墳時代後期では調査区の中央部に6世紀後半から7世紀前半の住居跡4軒が造られた。これらは、軸方向から二分され、同時期には各1軒、合わせて2軒が並んでいたと考えられる。また、調査区南部では6世紀末と古墳時代後期の竪穴状遺構2基が造られている。これらの周囲には前述した畝状遺構が広がっていた。

この時代は一般的に生産性が高く、古墳等も数多く造られる時期である。長竹遺跡のB区でも埴輪片が出土しており、至近に古墳が築造されていた可能性が強く、南に現存する古墳とともに大越古墳群を形成していたようである。その築造を支えた集落も、主に遺跡の南側にあると推定される。これに対し、長竹遺跡の地点は、作付け地に囲まれた居住空間が点在する外縁部の集落景観が広がっていたと推定できる。

3. 奈良・平安時代の様相

今回報告する奈良・平安時代の遺構は、住居跡26軒、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構2基である。これらの具体的な構築時期は8世紀中葉から10世紀後半にまで及ぶ。住居跡の時期別内訳は、8世紀中葉2軒（SJ9b,31）、8世紀後半3軒（SJ9a,10,33）、9世紀前半2軒（SJ4,28）、9世紀後半5軒（SJ5,7,26,30,32）、10世紀前半8軒（SJ1,2,19,21,22,24,25,29）、10世紀後半2軒（SJ3,20）であり、各半世紀は一桁の軒数であるものの、調査区が狭小であることを考慮すれば、周囲に数倍の遺構が隠されていると見なせよう。

このなかで、8、9世紀と10世紀では遺構確認

面が異なることから、洪水の影響等で集落が一旦途絶えたと想定される。だが、それにもかかわらず住居跡の密度に大きな変化はない。そしてもう一つ、周辺各地からの盛んな土器搬入も変わらず続けられている。

長竹遺跡は武藏、下総、下野、上野が接する地域にあるとともに、鬼怒・渡良瀬・利根の三大川がもっとも近づく陸橋の狭幅部にもあたる。三川を紡ぐ現利根川筋に沿った物資の移動は古く縄文時代から盛んであったことが上毛城への浮島・興津系土器や製塩土器の搬入状況から想像できる。

似たような様態はすでに利根川対岸の飯積遺跡

で明らかとなっている。同遺跡は5世紀から8世紀を中心に10世紀後半まで続く大集落跡で、群馬東部、埼玉北部、埼玉南部、千葉北部、茨城西部、新治、栃木南部、佐野周辺の8地域から土師器を中心とした土器が搬入されたことが報告されている（田中2007）。

長竹遺跡の古代集落は遺物量に恵まれず、原生産地を列挙することはできても、飯積遺跡のように時期的な搬入比の変化をたどることは難しい。出土した須恵器の産地は、武藏の末野、南比企、東金子、常陸の新治、下総の三和、下野の三毳等がある。また、ロクロ土師器は三和、三毳が主体であった。

これらを時期別に見ると、8世紀中葉から後半では南比企、東金子、三毳、新治産須恵器が出土し、土師器の北武藏型壺、武藏型甕が共伴する。9世紀前半では南比企、東金子、三毳、新治産須恵器が引き続き出土するが、土師器の出土は少なくなる。9世紀後半では東金子、末野、三毳、三和産須恵器とロクロ土師器、常陸型甕が出土する。10世紀前半では、三毳、三和、下総産須恵器が出土する。さらに、10世紀後半でも同様の傾向が見られ、非ロクロの羽釜が出土する。

このように長竹遺跡の古代集落は、陸路や水路などを利用して周辺各地から土器の供給が行われていたと考えられる。前述したように土器供給の

在り方は、9世紀後半を境にして大きく変化する。この地域では、9世紀後半から10世紀にかけて、これまで供膳具の主体を占めていた南比企、東金子、新治、三毳産須恵器の供給量が大きく減少し、それに替わって三毳、茨城西部産のロクロ土師器が主体を占めるようになる。また、煮沸具も武藏型甕から常総型甕へと大きく交替する。。

こうした土器供給の在り方は、地域社会における政治的な支配領域と密接な関わりが窺われる。特に、律令制下における国レベルの須恵器生産とその供給範囲は、国を超えて、どのように広がりをもつのか、土師器、ロクロ土師器を含め今後の検討課題である。

一方、今回の調査で発見した10世紀代の集落は、埼玉県内でも報告例が少なく、深谷市大寄遺跡、本庄市大久保山遺跡等少数が知られるのみである。大寄遺跡は10世紀代の住居跡が約200軒検出された大規模な集落であるが、その他は少数が散在する類型がもっぱらである。利根川対岸の飯積遺跡も10世紀まで集落は続くものの、退潮著しい。

長竹遺跡では、今回報告した10世紀前半8軒、後半2軒の他に、現在調査中のD区で20軒以上の住居跡が確認されており、この期としては稀に見る大規模な集落跡へと成長しつつある。遺構の占地や構造、遺物の内容等も含め、あらためて後日の報告で分析を加えたい。

4. 中近世の様相

中近世の遺構ではB区からC区にかけて弧状に並走する溝跡群、A区とB区の境に集中する井戸跡群等が発見され、利根川旧堤防跡の断面調査も実施した。

このうち旧堤防跡は、かつてB・C区の大半を覆っていた旧堤防のうち昭和20年代の堤防直線化で取り残された部分が払い下げられ、その一部が遺存していたものである。堤の中心は新堤下に埋もれたため、堤防の起源を直接に証明することは

できない。しかし、断面観察の結果、3段階に及ぶ堤防拡幅の工事単位を把握することができた。

堤防拡幅の最終工程は、天明三（1783）年浅間山噴火で飛來したA軽石が沈殿した、水田跡を覆う土盛りである。浅間山の天明大噴火は、その噴出物により吾妻川や利根川の河床を埋めつくし、北関東の全川に水害をもたらした。噴火以降、利根川沿いでは洪水が頻発し、破堤、修築が繰り返されている。

長竹遺跡のような下流域で浅間A軽石が沈殿する水田跡が荒れることなく長く残る可能性は低い。したがって、水田上の土盛りは、まさに噴火の二次災害を未然に防ぐために急ぎ行われた補強工事と見なすことができよう。これは、この土盛りに伴う法尻溝として掘削された第21号溝跡の下層出土遺物（18世紀末）とも整合する。

この大規模拡幅に先立つ2回の拡幅については工事の年代を特定できなかった。しかし、拡幅の際にそれぞれ法尻に溝が掘削される工法の共通を観察することができた。逆に、その後の旧堤防は細かな修復がなされるものの、大規模な拡幅は行われず、第21号溝の上層は屋敷堀の一部として発掘調査直前まで開口していた。その延長は、C区北側からB区にかけての調査区西側に沿い、A・B区の境を経て現堤防下へと潜り込む。

最終的な堤防幅を示す第21号溝跡とその推定径路の東には、同心円状に並走する溝跡群が発見できた。旧堤防の断面観察結果を援用すると、これらは堤防の法尻溝であり、内側=東側ほどに掘削期が遡り、堤防の芯に近づくことになる。A・B区の境界では幾つかの時期的逆転があるものの、B区中央部の溝跡は、東ほど掘削期が古くなり、

室町期にまで遡り、その時期の堤防の存在を間接的に裏付けることとなる。

利根川旧堤防の調査は、3kmほど下流の利根川旧堰堤跡について、加須市教育委員会（加須市教育委員会社会教育課1993）と当事業団が調査を実施しており、前者ではB区で検出した昭和初期の法尻補強跡と同じ施設構造物が見つかっている。しかし、元和7年（1621）に浅間川（古利根川筋）流路を締め切った堰堤跡であるため、これを遡る堤防下の遺構は存在しなかった。

近年、例えば甲州の信玄堤等、室町・戦国に遡る現存堤防の調査がいくつか行われている。これに対し、利根川沿岸では近世初頭の瀬替え以前の明らかな痕跡が発掘調査によって確認された例はない。

『吾妻鏡』には建久5年（1194）や寛喜4年（1232）の条に太田荘（さいたま市岩槻区から久喜市あたり）における築堤や「樽沼堤」（現熊谷市？）の破堤に関する記事があり、利根川水系でも鎌倉時代から部分的な治水が行われていたことがわかる。室町期の堤防の存在を裏付ける今回の発見は、利根川治水史の中で等閑視してきた中世期の築堤について、注意を喚起する成果となるだろう。

引用・参考文献

- 新井房夫編 1993 『火山灰考古学』 古今書院
新屋雅明 1991 「大宮台地における縄文時代後期末から晩期初頭の土器群について」『埼玉考古学論集』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
新屋雅明 1996 「埼葛地域の安行3c式」『埼葛地域文化の研究』埼葛地区文化財担当者会
岩田明広 1998 『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集
江原 英 2005 「寺野東遺跡の調査と環状盛土遺構」「環状盛土遺構」研究の到達点 予稿集
「番場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」実行委員会
大熊 孝 1981 「近世初頭の河川改修と浅間山噴火の影響」『アーバンクボタ』No.19 株式会社クボタ
大塚達朗 1995 「安行3a式土器型式構造論基礎考」『縄文時代』第6号 縄文時代文化研究会
大屋道則 1994 『清水上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集
柿沼修平 2004 「千葉県吉見台遺跡の動物形土製品」『考古学ジャーナル』No.515 ニューサイエンス社
角田祥子 2000 「土製耳飾り 観察の視点」『東国史論』第15号 群馬考古学研究会
加須市教育委員会社会教育課編 1993 『利根川旧堰堤跡』加須市文化財調査報告書第4集
加須市郷土史編纂委員会編 1969 『加須市の郷土史』

- 加須市史編さん室編 1984『加須市史 資料編I 原始・古代・中世・近世』
- 川口 潤 1993『白草遺跡I・北篠場遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集
- 栗原文藏 1970「羽生市発戸遺跡の土面」『埼玉考古』第8号 埼玉考古学会
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2013『自然災害と考古学』 上毛新聞社事業局出版部
- 埼玉県立さきたま資料館編『利根川の水運』歴史の道調査報告書第10集 埼玉県教育委員会
- 寺社下博 2003『一本木前遺跡IV』埼玉県熊谷市教育委員会
- 寺社下博 2004『一本木前遺跡V』埼玉県熊谷市教育委員会
- 嶋村英之 2008『萩原遺跡 第2・3・6・7次調査』騎西町遺跡調査会報告書第3集
- 鈴木加津子 1987『安行3a式形成過程の一考察』『埼玉の考古学』 新人物往来社
- 鈴木加津子 1999「第5回 繩文セミナー発表記録—繩文晚期の諸問題 南関東」
『繩文土器論集—繩文セミナー10周年記念論文集—』繩文セミナーの会
- 鈴木孝之・岩瀬謙・加藤隆則 2007『飯積遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第334集
- 鈴木正博・鈴木加津子 1982「安行3b式研究の序」『土曜考古』第5号 土曜考古学研究会
- 鈴木正博・鈴木加津子 1983「安行式遺跡解題(1)」『土曜考古』第7号 土曜考古学研究会
- 閔 俊明 2010『浅間山大噴火の爪跡 天明三年浅間災害遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」075 新泉社
- 宅間清公 2005『北島遺跡XI』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第303集
- 田中広明 2007『飯積遺跡I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第333集
- 田中広明 2007『飯積遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第334集
- 手塚達弥 2001『藤岡神社遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第197集
栃木県教育委員会 とちぎ生涯学習財團
- 中村耕作編 2013『縄文時代異形土器集成図譜I』國學院大學文学部考古学研究室
- 日本考古学協会 2000『シンポジウム「はたけの考古学」』日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第1集
- 蜂屋孝之 2006「手燭形土製品考」『先史考古学研究』第10号 先史考古学会
- 初山孝行・青柳平人・谷中隆・江原英・猪瀬美奈子・井上武 1997『寺野東遺跡V』
栃木県埋蔵文化財調査報告書第200集
- 羽生市 1971『羽生市史』上巻
- 馬場小室山遺跡研究会編 2007『「環状盛土遺構」研究の現段階』
- 古谷 渉 2002「安行式粗成土器編年試論—条線文系土器群の成立—」『土曜考古』第27号 土曜考古学会
- 古谷 渉 2004「安行式粗成土器編年試論—紐線文系及び条線文系土器群における口縁部製作法の成立と展開」
『縄文時代』第15号 縄文時代文化研究会
- 堀口万吉 1981「関東平野中央部における歴史時代の沈降運動と低地の形成」『アーバンクボタ』No.19
株式会社クボタ
- 町田 洋・新井房夫 2003『新編 火山灰アトラス』—[日本列島とその周辺]— 東京大学出版会
- 松田 哲 2002『一本木前遺跡III』埼玉県熊谷市教育委員会
- 宮村 忠 1981「利根川治水の成立過程とその特徴」『アーバンクボタ』No.19 株式会社クボタ
- 矢野文明 1993「安行式紐線文土器の口縁部技法について—特に「中妻技法」を中心として—」
『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- 山内清男 1941『日本先史土器図譜』第一部XI集 先史考古学会
- 山内利秋 2002「試論: 晩期安行式、前葉から中葉への論説史—安行3b式・3c式と姥山II式系土器群に関する—」『考古学資料館紀要』第18輯 國學院大學考古学資料館
- 山田仁和 1992「安行3b式土器における二者—晩期安行式紐線文土器から—」『栃木県考古学会誌』第14集
- 山田仁和 2003「関東地方北部における縄文時代晩期中葉土器群について」『栃木県考古学会誌』第24集
- 吉田稔・富田和夫・久保田睦子 2004『北島遺跡VII』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第291集